

被爆地広島の復興過程における 新聞人と報道に関する調査研究

財団法人三菱財団人文科学研究助成（平成 19 年度）

研究成果報告書

平成 21 年 3 月

研究代表者 小池 聖一

（広島大学文書館長）

被爆地広島の復興過程における 新聞人と報道に関する調査研究

財団法人三菱財団人文科学研究助成（平成 19 年度）

研究成果報告書

平成 21 年 3 月

研究代表者 小池 聖一

（広島大学文書館長）

はじめに

世界最初の被爆地広島において報道は、占領下、プレスコードにより大きく制限されたものであった。このため、独立後、それまでの鬱屈が爆発するように、地元・中国新聞の記者たちは、被爆者援護活動や原水禁運動の報道等へのめりこんでいった。

なかでも、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』に登場する金井利博氏（故人、後に中国新聞論説主幹）は、その挫折感を若い記者たちにも伝えのちに「金井学校」とも呼ばれる一群の記者達を育てた。このなかには、後に広島市長となる平岡敬氏や、原爆小頭症の子供たちを援護する「きのこ会」の事務局長をつとめた大牟田稔氏（故人、中国新聞論説主幹、広島平和文化センター理事長）等がいた。

こうした金井利博氏を中心とする記者群の取り組みで特に注目されるのが、昭和40年に彼らが行った一連の原爆報道である。「ヒロシマ20年」と題して行われたこの企画報道は非常に高い評価を受け、中国新聞社は同年、新聞界最高の栄誉である新聞協会賞を受賞することとなった。このできごとは、他紙における原爆問題の取材のありかたに大きな影響を与えたといわれている。

本研究は、一次史料（金井利博、平岡敬、大牟田稔三者の関係文書〈広島大学文書館所蔵〉を中心に、新たな史料の発掘も行う）に基づき、被爆地広島の復興過程と被爆者そして報道の関係について、その実態と意義を明確化することを目的とした。

本研究において、原爆報道と新聞人の関わりを基本的に明らかにすることができたと考えている。しかし、整理、利用した史料は、全体像の解明には未だ不十分なことも実感できた。

さらに、本研究を進め、関係者の間で議論を進めるにつれて明らかになった課題も少なくない。このうち今後の研究を展開する上で重要になってくるのが、①広島と長崎の原爆報道の違いや、原爆と東京大空襲など他の戦災報道との比較、②戦後日本における平和思想の解明、等であろう。

①については、研究計画段階で実施を予定していたが、物理的な制約から断念せざるをえなかったが、「ヒロシマ」における普遍性と、その特殊性を明らかにするためにも欠かせない作業と考えている。②については、所収の各論説において多角的に被爆報道の背景にある平和思想について言及したが、上記の①同様、戦後日本のなかで位置づけるにあたっては、課題となる点が多い。これらの点については、他日を期したい。

それでも、本報告書は、今日にいたるまでの原爆報道を対象とする唯一の総合的研究であり、また、掲載した大牟田稔関係文書の「沖縄被爆者」「きのこ会」関係資料目録も初めて明らかになるものである。

平成21年3月

研究代表・広島大学文書館長

小池 聖一

目次

論説

1. 中国新聞・中国新聞社の戦前と戦後 小池 聖一 1
2. 歪められた原爆報道—占領期における連合国側記者の活動を中心に—
. 繁沢 敦子 11
3. 金井利博の思想と行動 富沢 佐一 29
4. `表現者、としてのジャーナリスト～ヒロシマと大牟田稔の関わり
. 大牟田 聡 41
5. 広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター所蔵原爆被ばく関連新聞切り
抜き記事の概要 川野 徳幸 53
6. 韓国人・朝鮮人被爆者問題と新聞報道—昭和40年から平成2年までを中心に—
. 石田 雅春 60

附録

- (1) 「きのこ会」関係史料目録（大牟田稔関係文書） 72
(解題 小宮山道夫)
- (2) 沖縄被爆者関係史料目録（大牟田稔関係文書） 120
(解題 小池聖一)
- (3) 韓国人・朝鮮人被爆者問題関係新聞記事一覧目録（平岡敬関係文書）
(作成 石田雅春) 127

中国新聞・中国新聞社の戦前と戦後

小池 聖一

はじめに

戦中期の統制下、地方新聞社は、一県一紙の政策により、発行部数をのぼし、さらに共販制度の採用により、安定的な経営を獲得した。一方で、事前検閲と紙の配給により、頁数は、削減の一途をたどっていった。すなわち、地方新聞社において社長以下の経営陣は、統制下、安定した経営環境を享受し、記者は「書けない」ことに大きな不満をもったのである。これに対して、戦後・占領期、GHQ（連合国総司令部）・占領軍によって与えられた民主化・「言論の自由」のもと、新聞は、紙幅も増えたことで「書けない」という不満が随分と解消された。反対に経営体としての新聞社は、占領政策であった民主化との関係から不安定化した。GHQによってもたらされた「言論の自由」は、戦争との関係・すなわち戦争責任の問題を新聞社経営陣にも該当させたためである⁽¹⁾。

戦前と戦後の連続と不連続という観点から、新聞社・報道機関をみれば、同盟通信社を例外として、多くの新聞社が連続して存在した。しかし、経営の主体という観点では、ゆらぎが生じた。また、経営の安定という点でも、当初から保証されたものではなかったのである。一方、新聞および記者の立場からみれば、与えられたとはいえ「言論の自由」が限定的にでも認められたことは、戦前との断絶を意味していた。しかし、地方の新聞・記者にとっても事前と事後の違いはあるものの「検閲」は⁽²⁾、戦前・戦後を連続して存在したのであった。

本報告書が対象とする中国新聞も、上記のような地方紙一般と同じような足跡をたどったが、1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分の原子爆弾投下によって壊滅的な打撃を受けたため、戦後の歩みも他の新聞社とは違うものとなった。

分析に入る前に、まず、中国新聞について概観しておくこととする。中国新聞は、広島県を中心に、山口県、島根県、岡山県の一部で発行、販売されている地方・準ブロック紙である。創刊は、1892年（明治25年）5月5日に日刊「中國」として発行され（編集人は創設者の一人、山本三朗）、1908年（明治41年）、紙齢が5,000号を機に題字を「中國新聞」と改め、今日に至っている。

中国新聞は、30%以上の株式を保有する筆頭株主としてRCC（中国放送）を傘下に置き、政治・経済および広島を中心とした文化・スポーツ・イベント（ひろしまフラワーフェスティバル等）に大きな影響力を有する総合メディア機関である。

記事の中心は、広島県・広島市であり、企業・経済では、自動車・マツダに関する記事が詳しいとの定評がある。だが、それ以上に、本報告書の中心である原爆および平和に関する記事については、現在、2008年、ボーン・上田記念国際記者賞（1995年（平成7年））および日本記者クラブ賞（2003年）を受賞した田城明（中国新聞社特別論説委員）を中心としたヒロシマ平和メディアセンターを中国新聞社内に設置するほど全社あげて取り組んでいる点に特色がある（これ以外でも、暴力団追放キャンペーン（広島は暴力団の抗争が激しかった）が有名であった）。最近では、2008年9月1日の福田康夫首相による退陣表明記者会見において、立花隆も評価したとされる福田首相の「他人事のようにというふうにあなたはおっしゃったけれども、私は自分自身を客観的に見る事ができるんです。あなたと違うんです」との流行語大賞にもノミネートされた発言（福田康夫氏が辞退）を引き出したのも、「総理の会見が国民からは他人事のように聞こえる」と質問した中国新聞社の記者であった。

今日、新聞は、メディア王としての地位を失いつつあるが⁽³⁾、本報告書で対象とする戦後・占領期において報道の信頼性および報道の速報性でも、当時の国民にとってラジオと並ぶ唯一のマスメディアとして機能

する絶対的なメディアの王であった。しかし、メディア王としての立場は、戦前・戦後を通じてどのように維持・確立され、その内実がいかなるものであったのだろうか。本稿の目的は、中国新聞・中国新聞社における戦前・戦後の連続と非連続を明らかにする。

なお、中国新聞・中国新聞社については、メディアとしての中国新聞と経営主体である中国新聞社を分けて考察する。

1. 中国新聞・中国新聞社の「戦前」と「原爆」

(1) 中国新聞・中国新聞社の「戦前」

中国新聞は、戦時期に発展した新聞である。特に顕著となるのが、初代社長の山本三朗の死後、副社長であった養嗣子の山本実一が第二代社長に就任してからであった。東京帝国大学農科大学出身の山本実一社長は、1916年（大正5年）、中国新聞社に入社、1918年、副社長に就任して、現業部門を担当し、紙面の刷新、社内機構の整備、設備の改善等、中国新聞社の近代化をすすめた。社長就任後は、日本新聞協会理事、日本新聞聯盟監事、日本新聞会常任評議員などを兼任した。後に、公職追放の理由となったが、1940年（昭和15年）、大政翼賛会広島県支部が設置されると顧問常務委員となり、1942年、大政翼賛会広島県支部協会議長となっている⁽⁴⁾。

山本実一社長のもとで中国新聞は、広島経済圏である岩国から、柳井、徳山、さらに、1933年から防府へと、西の山口県に販売網を拡大していった。一県一紙体制となって廃刊となったが、中国防長新聞を発刊していた。さらに、呉市と海軍呉鎮守府を対象とする「呉新聞」も傘下に有していた（呉新聞も呉市の地方紙を統合したもの）。1935年10月26日には、経営難に陥っていたライバル紙・芸備日日新聞社を吸収して勢力を拡大したのであった。中国新聞社は、1936年5月14日、航空部を新設。新聞自体も同年10月1日からは、朝夕刊14ページ建て（朝刊8ページ、昼刊2ページ、夕刊4ページ）に拡大したのであった。

この間、山本実一社長は、基本的に前社長の幹部を引き継ぎつつ、1936年4月に理事制を、1939年4月から論説委員制を導入した。1940年10月5日には、主査制を導入、営業局を業務局に改称し、理事の下に参事と副参事の特別身分制を新設し、大幅な人事異動を行った。1943年4月1日には文化局を新設し、実一の長男、山本利が初代局長に就任している。

中国新聞の販路が拡大した理由は、熱心な戦争報道にもあった。1931年の満州事変では、紙幅を増やし、日曜にも夕刊を発行するなどして戦況を伝え、第五師団の一部が天津・北平（北京）に出動すると軍事記者とカメラマンを特派している。さらに、1940年、中国新聞社は、陸軍報道部および広島の篠原部隊の支援をえて特設映画班を編成。第五師団の北部仏印進駐を撮影し、「郷土部隊仏印進駐譜」として公開。また、全国に向けて、ラジオ中継を行い、新世紀映画社「仏印進駐」として配給している。その後も第五師団の行動とともに記者を特派したのであった。

この間、新聞用紙の配給が日中戦争開始時より削減され、12ページ建てとなり（朝刊8ページ、夕刊4ページ）、1940年8月7日には、朝刊6ページ・夕刊4ページの10ページ建てに、1941年7月1日からは、朝刊4ページ・夕刊4ページの8ページ建てとなった。同年10月8日から週二回2ページとなった夕刊は、1944年3月6日に全国一斉に廃止となった。1944年11月1日からは、さらに、朝刊2ページ、週14ページに圧縮されたのであった。言論統制の存在は、記者にとって苦痛であった。記者には、掲載禁止事項とその解釈をしめす極秘の通達がたびたび配布された。このため1942年3月から、取材研究会が開かれ、錬成会が1943年5月から恒常的に開かれた。

一方、中国新聞の発行部数は、増えつづけ、1916年に公称4万部（実数は、3万4千～5千部）となった。その後、昭和初期、発行部数は増えなかったものの、日本新聞聯盟の結成に伴う、1941年12月1日の新聞

共同販売組合結成時には、10万7千～8千部と倍増した。この間、1936年段階で1200社あったとされる新聞社は、一県一紙体制のもと、1942年10月1日段階で54紙に統合されたのであった。中国新聞社は、このうちの2紙を有していたのである。そして、1944年4月21日からは、持分合同によって、地方紙一本に統合されて一県一紙が実現した。これにより、中国新聞社の発行部数は、38万部に膨れ上がったのである。

すなわち、中国新聞社にとっての戦前・戦中期とは、一県一紙のもとライバルを持たず競争も存在しないなかで、ブロック紙として販売地域と発行部数を伸ばし、安定的な事業拡大をおこなった時期であった。この中心は、二代目社長の山本実一であった。山本実一は、中国新聞社の近代化に尽力しつつ、戦争の拡大とともに中国新聞の販路を拡大していった。中国新聞社経営の安定・拡大は、オーナー山本実一・山本家の中国新聞社に対する発言力の強化をも意味した。同時に、中国新聞社経営の安定は、戦時下を反映して言論統制が強化され、新聞用紙の配給削減にともなう紙幅の減少という中国新聞が縮小する対価ともいえるものであった。

(2) 被爆による壊滅

世界最初の被爆地広島において、その投下された1945年8月6日午前8時15分は、広島に住む者の時計を止まらせた。そして、時計が止まった時点で、広島市内に本社をかまえていた中国新聞社も例外ではなかった⁽⁵⁾。

1945年(昭和20年)に入ると、5月15日の東京支局に始まり、次々に、中国新聞社は、支局を空襲によって失っていった。7月1日の夜、呉市は、二時間にわたる波状攻撃の対象となり、B29戦略爆撃機から投下された焼夷弾によって呉新聞社も消失した。呉新聞は8月1日から休刊となった。この間、中国新聞社では、資材と輪転機の疎開と、防衛対策を準備していたが、後者は原爆の前で全く無力であった。

被爆した当時の中国新聞社本社は、爆心地から約1,500メートルの地点にあり、「爆発と同時に窓ガラスが全部吹き飛び、新館の外装タイルがはげて四散した。社員のひとは爆風にあおられて二階から落下した。視界は塵埃と飛散物でしばらくの間、真っ暗となった。間もなく四階倉庫にあった薬品類が発火したものとみえ、燃えながら壁を伝って落ちるものが四辺を明るくした」という状況であった⁽⁶⁾。

出勤途上や、本社社屋内で亡くなった者は、幹部・中堅社員合計107名にのぼり、残存社員の多くも重軽傷を負った。社屋は、外壁のみをとどめるにすぎず、輪転機を含めた設備機材もことごとく焼失した。中国新聞社は、温品に疎開していた輪転機一台と付属資材からはじめなければならなかった。原爆により、中国新聞社も壊滅的な打撃を受けたのである。

このような時のため、あらかじめ避難場所が指定されていたものの、社員があつまったのは、広島県府中町の山本実一社長邸であった。本社機能は、府中町の山本社長宅に移ることとなったのであった。

原爆投下二日後に中国新聞は、再刊したが、印刷は島根新聞社、朝日・毎日新聞関西本社および福岡日日新聞社等での代行印刷であった。中国新聞が自社印刷できるよう、中国新聞社にとって社の再建がなによりも重要なこととなった。

温品の輪転機一台と付属資材により、中国新聞社での印刷は、戦後となった8月31日付新聞から再開された。しかし、中国地方一帯を襲った枕崎台風のため、中国新聞社の復興作業も、一から出直しをせまられた。結局、広島市内の本社にもどり、改めて再建をはじめ、自社で発刊したのは、11月3日付の新聞からであった。

2. 中国新聞と中国新聞社の「戦後」

(1) 戦後の中国新聞

1945年8月15日の「終戦」報道を行った中国新聞は、代行印刷であった。中国新聞社は、前記のように

原爆による壊滅状態からの再建途上にあった。

しかし、「終戦」による戦後は、日本の各新聞に、大きな変化を与えた。それは、連合国総司令部（GHQ）による、戦前・戦中における言論統制関係諸法令の廃止という「与えられた言論の自由」であり、「民主化」のためとされる新たな言論統制であった。

後者の言論統制とは、具体的に、1945年9月19日の「日本の新聞に対する編集基準（プレス・コード）」にともない施行されたGHQによる検閲である。しかし、東京五紙と違い、中国新聞に対するGHQの検閲は、掲載禁止事項が通達される事後検閲であった。事前検閲であった戦時中と違い、「占領軍の場合はプレス・コードをポンとよこしただけで案外大らかだった。ただし幅の広い解釈ができるということは、そのすれすれのところがかみにくく。結局、ちょっと控え目にするしか方法がなかった」程度のものであった⁽⁷⁾。むしろ、当時の編集局長糸川成辰などは「公然としての検閲はなく、私のところへは具体的には何も言ってこなかった。占領軍の任務遂行、政治上の意味を除いたら、プレス・コードのいう客観報道、早く正しく、真実の報道は新聞の常識といえる。アメリカの新聞の持っているルール、事実をよく確かめてからよりよく報道する姿勢には学ぶところも多かった。私個人の気持ちでは、非常に自由な新聞を作れると思い、プレス・コード遵守の方針でやっていた」としていた⁽⁸⁾。一方、「夕刊ひろしま」にいた松江澄は、次のように検閲について述べている。

（前略）僕は当時、「時事解説」を頼まれてNHKに行きました。彼ら（GHQ）はあこまで出張して来ているんですよ。そして事前検閲なんです。僕が東洋工業のストライキについて触れたらね、これ消せと言うんです。声だから事前に消さないとしようがないんですよ。ところが新聞社は事後検閲ですからね。この事後検閲が本当は一番恐ろしいんですよ。自粛しなきゃならんのです。下手したら、後こっぴどくやられる。（検閲で）新聞に白い穴が開くと、占領軍が検閲しているのが分かるでしょ。だから事後検閲です。事後検閲は事前検閲より厳しいものが来るから、必要以上に自粛するんですよ。（後略）⁽⁹⁾

基本的に、事後検閲は、戦中期の編集局査閲班での経験を持っていた中国新聞社幹部にとって楽なものであった。この点、戦後に入社した松江の認識とは違って当然だろう。さらにいえば、戦前の経験をもつ者にとっては、「自粛」という行為も日常的ですらあった。1947年頃の中国新聞は「プレス・コードに基づき、民主新聞の作成を精神とす」との編集方針のもと⁽¹⁰⁾、渉外部長を通じて検閲情報を仕入れ、記事審査室をへて、編集幹部にまわる「自粛」システムも完備していたのである。

また、当該期、極東国際軍事裁判により、戦争犯罪と戦争責任が、マスコミにも波及していった。この状況を、中国新聞社、『中国新聞六十五年史』では、「戦争責任を痛感した新聞界では、率先して首脳部が退陣し、機構の改革と人事を刷新して、真に平和民主国家の言論報道機関としての面目をあらため、その使命達成に進むべき道を明らかにし、民主化の風潮を助長したのである」と述べていた⁽¹¹⁾。六十五年史の内容は、以下で明らかにするように全く実態を反映させたものでなかった。

これに対して、同じ中国新聞社の八十年史では、つぎのように書かれていた。

（前略）新聞界全体としては、戦後、東久邇宮首相が述べた「全国民総ざんげすることが、わが国再建の一步であり、わが国団結の第一歩であると信ずる」（昭和二十年八月二十八日）という“一億総ざんげ”の同調者から、「国民の名」による戦争責任の追及者へ変身することによって、新聞自身の意図がどうあろうと、あらゆる責任からすり抜けたのである。本紙においては肝心の新聞が発行できないこともあって、そのあたりはあいまいなまま推移した。ただ新聞人として、表面的には再び言論・報道の自由がよみがえったことを率直に喜んだ（後略）⁽¹²⁾

と分析されており、結果、「戦争中の言論弾圧からの解放は、新聞人にとって言論・報道の完全な自由がよみがえったように感じられたのである。とくに、この自由は、ジャーナリストみずからの努力によって獲得したものではないだけに、それを守る責任は国民全体であるといった論調となり、新聞が国民に対して感

すべき責任の問題は素通りとなった」としている⁽¹³⁾。

そのうえで、昭和21年1月1日の社説を引用したうえで、「民主国家建設の希望を表明することに急で、みずからの過去を不問に付している。それは日本人の責任の構造が上下のピラミッド型で、責任を感じるのは常に上の者に対してであることに由来する。したがって戦争中の「挺身殉忠ノ大義ニ徹スベシ」という天皇に対する責任感が、戦後は占領軍に対するものに変っただけともいえる。だからこそ、占領軍の政策にみられた検閲制度を軸とする言論統制の実態は見過ごされ、与えられた言論・報道の自由を謳歌したのである」としたのであった⁽¹⁴⁾。

以上のように、多くの中国新聞記者は、原爆による惨禍からの復興が何よりも重要だと考えていた。同時にGHQによって与えられた「言論の自由」を謳歌し、自らに戦争責任が自らにふりかかるという認識はなかった。記者は、戦前よりもましな事後検閲のもとで与えられた表現の自由に浸っていたのであった。

(2) 中国新聞社の戦後

中国新聞社では、戦中期に夕刊を休刊しており、戦後、新聞用紙の配給割り当てが終戦時の実績であったため、夕刊を出せなかった。当初、GHQは、言論の自由を一県一紙のもと、体制翼賛であった既存紙に対して、新興紙を育成する自由化の方向を模索した。このため、中国新聞社では、1946年6月1日、有限会社夕刊ひろしま新聞社を創設し、「夕刊ひろしま」を創刊した。同社は、中国新聞社から出向させた社員が中核となり、印刷も中国新聞社で行うという実質的な子会社であった。この「夕刊ひろしま」は、部数を当初の3万部から5万数千部へと伸ばし、新聞用紙の確保にも大きな役割を担ったが、組合が強力であった。「夕刊ひろしま」について組合活動の中心であった松江澄は「中国新聞社に比べラジカルだった。人数は少ないし結束しやすいし」⁽¹⁵⁾、「編集（内容）は、なんかも自由で、私が共闘委員長をしていた日鋼争議でも、夕刊を議事録の代わりに配ったんですから」⁽¹⁶⁾、と述べるようなものであった。なお、この「夕刊ひろしま」に対して、中国新聞社経営陣は、人件費の高騰・広告費収入難による赤字化と中国新聞の朝夕刊一本建て発行体制整備のため⁽¹⁷⁾、1948年12月1日に社名を有限会社夕刊中国に、新聞紙名も「夕刊中国」とした。そして、1949年10月1日に「夕刊中国新聞」として紙名を再変更したうえで、1952年10月1日、朝夕刊セット制の開始とともに、廃刊・中国新聞社が吸収している。

GHQによる民主化は、公職追放という形でも現れた。オーナーであった山本実一は、社長職を辞し、朝日新聞同様「社主」となった。かわって、山本実一と同じ養子の山本正房（山本三朗の妻クニ前夫の子で、山本籍に入る。実一・妻の信子の弟）が、社代表となった（後に山本正房も一時、公職追放の対象となった）。

1947年1月4日、公職追放令の範囲が拡大され、山本実一がその適用を受け、社を辞したのにもない、1月21日、経営陣を一新し、会社組織も合名会社から有限会社とした。一方で、同日、合名会社は合資会社として残し、山本家が新聞用紙などの資材管理を継続して行った（山本実一・正房・クニが株を保有）。すなわち、中国新聞社を有限会社とすることで責任範囲を限定し、その一方で、新聞社本来の資産である社屋、機械等を合資会社が保有し、それを有限会社中国新聞社に貸すという経営形態をつくったのである。これにより、中国新聞社に対する山本家の影響力は依然として強力なものであった。有限会社となった中国新聞社の役員は、次のようなものであった。

代表取締役は、築藤軯一と藤田忠一であった。築藤は、1940年10月5日に、理事・業務局長となって以来の幹部職員であった。一方の藤田は戦前・写真部長で、戦後、1945年11月1日には資材部長兼輸送部長、1947年3月段階・印刷部長（常務取締役）からの抜擢であった。残りの取締役も、山本正房（戦前副社長、戦後社代表）、糸川成辰（戦前・調査部長、戦後・編集局長）、陰山稔（戦前・編集局長、戦後・主筆、論説顧問）の三人は、それぞれ戦前からの幹部職員であった。福岡喜義（戦後文化部長・普及部部长）および監査役の芥川寿夫（戦後、整理部長）、山根久吉（戦前・戦後工務局次長）も、戦後の幹部職員とはいえ、山本実

一体制下の幹部職員である。唯一の例外といえるのは、八木護（戦後工務局活版部員）であるが、勤続20年以上のベテラン職員であった。しかし、実一の子である山本朗（第四代中国新聞社社長）は、有限会社時代の中国新聞社を「ものすごい民主化ですね。ほんと言え、経営者不在だよ」としている⁽¹⁸⁾。

さらに、1947年11月15日、有限会社中国新聞社は、休刊中であった呉新聞社を吸収合併し、株式会社中国新聞社となり、役員も次のように改選した。

代表取締役・築藤鞆一、取締役・山本正房、笠井明士（呉新聞社専務・中国新聞社呉支局長）、藤田忠一、糸川成辰、熊野英坤（山口支社長）、山本朗（実一・次男、総務局長）、監査役・脇本武雄（戦後・総務局局長次長）、立花義孝

上記に見られる中国新聞社役員の特徴は、各局選出の職場代表という意味合いを有するとともに、現場の責任者を兼務していたことである。さらに、同年12月1日の機構改革でも、代表取締役の築藤鞆一が依然として業務局長であり、取締役・山本正房が総務局長、常務取締役の笠井明士が呉支社長で労務担当、常務取締役の藤田忠一が印刷局長、常務取締役の糸川成辰は編集局長兼論説委員、熊野英坤が山口支社長、山本朗が審議室委員長兼論説委員であった。監査役も脇本武雄が常任監査役、立花義孝は東京支局長であった。すなわち、山本実一が公職追放の間、基本的に幹部職員で固められた役員は、現業部門を統括する立場にもあったのである。それは、経営者を不在にし、あたかも、山本実一前社長が戻ってくるのを待っているようなものであった。しかし、実一の子である山本朗（第四代中国新聞社社長）は、次のように述べていた。

（前略）一ぺん追放になって復帰してくるについちゃあ、みんないろいろあるのよねえ。もう自分らが、こうやったり、ああやったりしやうというところへ、またあの人が帰ってこんでもええじゃないかというの、みんなにあるような気がする。一生懸命復帰を考えとったのは私一人じゃったんかなあ、と思うのね。（後略）⁽¹⁹⁾

さらに、広島商工会議所の幹部、財界人などが、新聞社内部の者と呼応して中国新聞社を買収するという噂もあり、必ずしも山本実一の社長復帰が簡単にいったものではないと山本朗は証言している⁽²⁰⁾。しかし、後述するように、組合活動が下火になるとともに、1950年に入り、追放解除となった山本実一は、同年11月3日の株主総会で代表取締役社長に復帰した。この時の役員は、次のようなものであった。

1950年11月3日の役員は、下記のようなものであった。

代表取締役社長・山本実一、専務取締役・山本正房、常務取締役・築藤鞆一、常務取締役・笠井明士、常務取締役・糸川成辰、取締役・藤田忠一、熊野英坤、山本朗、立花義孝、監査役・脇本武雄
中国新聞社は、戦前の山本実一社長・山本正房副社長という体制に戻ったのである。

この間、従業員組合が、1946年2月3日に結成された。組合は、編集局次長の加藤新一を組合長に、笠井明士（呉支社長）、卜部清隆（文化部長）を副組合長とし、祝辞を山本実一社長が述べる存在であった。5月26日に、従業員組合を解散しても全国組織である日本新聞通信（放送）労働組合（新聞単一）に加入し、中国新聞社支部となった。その後、7月7日に規約を改正して、局長・局次長を組合員から除外したが、10月5日の「新聞ゼネスト」、1947年2月1日の「2・1ゼネスト」にも不参加を決定していた。1947年1月4日、公職追放令の範囲が拡大され、山本実一が公職追放となると、組合の性格は変わり、合資会社が所蔵していた新聞用紙の所有権をめぐる対立し、軍政部にも8月に訴状を出している（結局、結論をえないままとなった）。組合側は、合資会社の中国新聞社に対する影響力を、「公器たる新聞を個人的利益追求の手段としてしかみておらず、民主化は不可能に近い状態」であるとして山本家の影響力排除を目的の一つとしたのであった⁽²¹⁾。1948年1月20日の臨時大会で、組合側は、組合員から本社部長以上、支社長・支局長を除外するとともに、生産闘争委員会を設置し、経営参加主義を取り入れ、実働6時間を獲得している。この経営参加方式は、人事に関与するもので新規採用は築藤代表取締役と組合の上野（千秋）委員長が並んで行

うものであった。さらに、年末の越年資金要求闘争では、1948年12月17日から無期限ストを行い、会社側が全面的に要求を受け入れている⁽²²⁾。しかし、この過程で、「部長一人ひとりに対して「お前は組合の敵か、味方か」と吊るし上げしてね。あれが部長たちを敵に回してしまった」⁽²³⁾。それでも、1949年3月19日には、中国新聞、夕刊広島、同第一の三支部が統一し、全日本新聞労働組合(全新聞)広島支部を結成したのであった。労使関係の再逆転ともいべき転機が訪れたのは、日鋼争議であった。発端は、ドッチ・ラインの導入により、米軍の賠償指定工場でもあった広島の日鋼製鋼所が、1949年6月2日、従業員2085名中、622名を解雇したことにはじまる。同年6月11日、これに対して、労働組合は、ストに突入。6月15日には、大量解雇事件に抗議する労組側と警察が衝突するという争議へと発展した。結局、この日鋼争議は、7月8日に第二組合が結成されて労組側が分裂。労組側の敗北で、7月25日に妥結した。

全新聞広島支部委員長であり、広島県労協委員長・共同闘争委員長として日鋼争議を指導していた松江澄委員長は、8月5日に同事件の証人として参加した参議院考査委員会の喚問において偽証罪で告発・起訴された。これにより、中国新聞社から休職処分とされ、中国新聞社における組合活動も分裂の方向に舵を切ることとなった。日鋼争議の敗北は、世論の批判をうけ、中国新聞社内でも、部長級を中心とする職制との対立が激化した。1949年11月11日、「夕刊ひろしま」の11人に対して解雇通告がなされ、職場集会でも解雇が認められ、実施された。さらに、松江等共産党主導の組合活動に対して批判的な新しい組合結成の動きも表面化した。結局、組合は分裂し、1950年1月11日に中国新聞労働組合が成立し、36対1で全新聞を脱退したのであった。そして、同年8月4日、松江元委員長等21名にレッドパージの通告がなされたことで、組合組織も弱体化したのであった⁽²⁴⁾。この過程で、審議室をつくって組合対策の中心にいた山本朗は、1948年末の労使妥結後の状況について次のように感想している。

(前略) 実は、その後ずうっとそういう調子になるかなと思った。そしたら、そうでもないもんですね。われわれも、もう腹の座ったようなところができるし、組合のほうも、何だかそこまでやったら会社も潰れるんじゃないかと思ったんかどうかわかりませんが、以後は、組合の言いなりだろうと思ってたら、違うんですね。今度は、何だかちょっと遠慮したような交渉になって、だんだん元に戻っていききましたね。面白いもんですね。(後略)⁽²⁵⁾

そして、呉の中国軍政部や、1950年4月には、GHQの意見を聞きに上京するなど、占領政策の転換を感じていた山本朗は、レッドパージについて「心おどるをおぼえた」というようなことを書いているんですが、「ああ、とうとう来たな」という感じでね」と述べている⁽²⁶⁾。レッドパージとともに、組合による民主化としての「山本資本追放」、中国新聞社に対する戦争責任追及の動きも終息することとなったのである。

おわりに

「中国新聞」をメディア媒体としての中国新聞と、その経営主体である中国新聞社に分けて分析を試みた。

中国新聞の戦前は、紙幅と言論統制・事前検閲によってペンが折られた時期であった。一方、戦後は、紙幅の復活と「夕刊ひろしま」の発行によって、限定されたものではあったが、「言論の自由」を謳歌したのであった。その意味で、戦前と戦後は大きく異なるものであったのである。

これに対して、中国新聞社にとっての戦前は、山本実一社長のもとで近代化をすすめて事業を拡張し、販路を拡大して、山本家の経営体制を確固たるものとしていった。しかし、戦後は、「民主化」によって当初、一県一紙という戦前の政策は踏襲されず、経営陣の「戦争責任」を問題にする方向性ももっていた。

主に中央で展開されたこのような動きに対応して、中国新聞社でも、経営陣を刷新し、中国新聞社の形態を合名会社から、有限会社・株式会社へと変えていった。しかし、その実、山本実一が公職追放となったあと、山本家の合名会社は、合資会社として中国新聞社の資材を管理し、また、大株主として、山本家の支配力を

維持したのであった。

これに対して、「民主化」は、戦後つくられた組合によって推進された。組合は、給与の引き上げと、実働6時間を獲得し、経営参画を行うまでになった。しかし、拠点の「夕刊ひろしま」の経営悪化、家族主義を標榜していた中国新聞社内職制と激しい対立を起こしたことに対する反発⁽²⁷⁾、日鋼争議の敗北と、占領政策の転換等により、組合の分裂を招いていった。最終的にはレッドパージによって、組合活動自体が低調となっていったのである。

結果として朝日新聞社の村山家、河北新報社の一力家、信濃毎日新聞社の小坂家同様、中国新聞社の山本家も、オーナー・パブリッシャーとして戦前・戦後を連続して維持された。中国新聞社の経営を山本家の観点からみれば、

(前略) やっぱり親父が追放解除になって、いろいろいきさつはあるにしても、社会に復帰した、その辺で本当に戦後は終わったというかね、というような気が非常にしておるんですけどね (後略)⁽²⁸⁾

と山本朗が述べたように、山本家の中国新聞社にとっての戦後は、占領からサンフランシスコ講和による国家として独立よりも、短く、そして早く終わったのである。

しかし、戦後、山本実一の家族主義がそのまま通じるわけもなかった。中国新聞と中国新聞社の乖離は、戦前との連続・非連続を通じて広がる可能性があった。この点は、両者が共通する体験・原爆体験によって再構築される必要があった。中国新聞・中国新聞社にとって、核被爆問題を通じて、中国新聞と山本家・中国新聞社を結びつける者として山本家の姻戚である金井利博の存在は⁽²⁹⁾、その意味で大きかったのである⁽³⁰⁾。

注記

- (1) 今西光男著『占領期の朝日新聞と戦争責任 村山長挙と緒方竹虎』朝日選書、2008年。
- (2) モニカ・ブラウ著『検閲 1945-1949 一禁じられた原爆報道一』(時事通信社、1988年) および、岩崎文人代表『GHQ占領下時代のCCD(民間検閲支隊)による検閲に関する研究』(課題番号17520116)・平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、2008年3月、を参照。
- (3) 現在、新聞というマスメディアをとりまく状況は、著しく厳しい。まず、第一に、若者層の活字離れによる、販売収入の減少が挙げられる。さらに、少子高齢化にともなう人口減少、新聞情報の電子化にともなう購読者減少、販売システムを支える宅配システムが担当者不足で崩壊の危機にあることなど、販売量が上昇する可能性はほとんどないといってよいだろう。実際、購読者は、50歳以上の高年齢層が主軸となっていることでもあきらかである。第二に、第一にともない広告収入が大幅に減少したことである。現在、新聞には、自社広告(広告料が入らない)が目立つようになっている。つまり、第一の状況は、広告主にとって新聞に広告を掲載する意義を喪失させているのである。反対に、広告効果という点でネット広告が拡大している。さらに、新聞側が発表する販売部数と実売数の間には、押し紙といった新聞社と代理店との特殊関係があるため、大きく乖離しているのが実情である。このような押し紙の存在は、広告主からは、無駄な広告量を支払っているといっても過言ではない。第三に、将来、福祉目的税的に消費税率がアップすれば価格が維持できないだけでなく、さらに多くの購読者が減少するであろう。他の出版事業からも批判され、現在のような大部数・高普及率を支えている再販制度が崩壊すれば、購読者を維持することは困難であろう。さらに、現在のテレビのような電波規制に依存しているシステムが崩壊し、欧米並みに多チャンネルとなり、テレビが多様な情報を発信するようになれば、新聞のみならず、メディア業界そのものの再編がおきるであろう。さらに、保護されてきた株式譲渡制度が緩和されれば、寡占的な情報網も維持できなくなると考えられる(「特集 新聞没落」『週刊ダイヤモンド』第4196号、2007年9月22日、「特集 新聞・テレビ複合不況」『週刊ダイヤモンド』第4256号、2008年12月6日、を参照)。

- (4) 山本実一は、政治的野心などなく、終始一貫新聞事業に専心したとされる。翼賛会の広島県支部協会議長に就任したのも、「時の知事故宮村才一郎氏が『これが引受けられないくらいなら、新聞社の社長も無理だろう』などといういや味タップリなすすめ文句で、強引に接衝した結果、さすがの社長も時が時だけに止むなく主義を翻し、わずか一年だけ勤められた」結果であるとされる（松浦寛次「山本社長の挿話」『山本実一追悼録』中国新聞社、1958年、118頁）。
- (5) 大佐古一郎「ヒロシマ記者の靴のあと」『文藝春秋』1953年8月号、を参照。
- (6) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、158頁。
- (7) 当時の「夕刊 ひろしま」編集局長内田一郎談話。中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、175頁。
- (8) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、176頁。
- (9) 中国新聞労働組合50年史編集委員会編『中国新聞労働組合50年史』1997年、87頁。
- (10) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、319頁。
- (11) 社史編纂委員会編『中国新聞六十五年史』昭和31年、中国新聞社、248頁。
- (12) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、316頁。
- (13) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、317頁。
- (14) 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年、318頁。『中国新聞六十五年史』に比べ、『中国新聞八十年史』は、記者の戦争責任を問う視点を有している。しかし、新聞社の戦争責任については捨象されている。
- (15) 中国新聞労働組合50年史編集委員会編『中国新聞労働組合50年史』1997年、73頁。
- (16) 中国新聞労働組合50年史編集委員会編『中国新聞労働組合50年史』1997年、69頁。
- (17) 山本朗は、この「夕刊ひろしま」について「まったく経営者不在のような新聞社になっちゃって、当時本社が八千六百円ベースのところ、夕刊は一万四千元ベースで、「中国新聞」よりよっぽど給料水準が高いんですよ。そして借入金は何百円かあった」と述べている（「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年31頁）。
- (18) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年29頁。
- (19) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年29頁。
- (20) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年35頁。この情報は、山本正房が聞き込んだ話であり、「直情径行」の山本正房の思い込みかもしれないが（山本正房「ふるい思い出」『山本実一追悼録』中国新聞社、1958年、89頁）、山本朗は本当にあった話だろうとしている。
- (21) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年29頁。
- (22) 松江澄が共産党に入党したのは、この時であった（松江澄「私の昭和思想史（12）」『労研通信』No.59、1989年6月20日、13頁、松江澄関係文書）。
- (23) 中国新聞労働組合50年史編集委員会編『中国新聞労働組合50年史』1997年、84頁。
- (24) 新聞各社のレッドページは、人数的には朝日新聞社が104名と群を抜いているが、従業員数の約2%で、レッドページ全体の平均値である。これに対して、中央紙では、日本経済新聞（約3.7%）、共同通信社（約2.7%）が目立つくらいで、読売新聞は、平均値を下回る約1.5%である。これに対して、地方紙では、夕刊京都新聞の13.8%（解雇者総数11名）を筆頭に、中国新聞社も約4.7%と平均値の倍以上となっている（昭和32年8月「レッド・ページの経過並に関係資料」日本経営者団体連盟事務局、大牟田稔関係文書）。
- (25) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年32頁。
- (26) 「山本朗」『別冊新聞研究－聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年39頁。

- (27) 山本実一による家族主義については、山本実一「私の家族主義」『山本実一追悼録』(中国新聞社、1958年)を参照。
- (28) 「山本朗」『別冊新聞研究—聴きとりでつづる新聞史』第32号、1996年40頁。
- (29) 金井利博の妹・信子は山本朗の妻で、長女・ゆみ子は、山本利の長男一隆の妻である。
- (30) 組合の立場からも、金井利博は、「前保(照二・全日本新聞労働組合(全新聞)広島支部副書記長)この前も松江さんと話したんだけど、金井さんのことね、この人は山本家の親戚だけど。金井さんは労働運動があれだけ高揚している中で、妨害はしないけれど、反対発言を公然とやられましたね。普通だったら言えないような状態ですけど。反対もしたけど本当に良心的な人でね。仕事では原爆の問題を丹念にね。」「松江 いい男だったね。」とする存在であった。

【参考文献】

- 朝日新聞社レッドパージ証言録刊行委員会編『一九五〇年七月二十八日 朝日新聞社のレッドパージ証言録』晩聲社、1981年
- 新井直之著『新聞戦後史』勁草書房、1979年
- 有山輝雄著『占領期メディア史研究』柏書房、1996年
- 井川充雄「第10章 敗戦とメディア」有山輝雄他編『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社、2004年
- 細川隆元著『実録朝日新聞』中央公論社、1958年
- 松浦総三著『占領下の言論弾圧』現代ジャーナリズム出版会、1969年
- 山本武利著『占領期メディア分析』法政大学出版会、1996年
- 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞六十五年史』中国新聞社、1956年
- 中国新聞社史編纂委員会編『中国新聞八十年史』中国新聞社、1972年
- 中国新聞社史編さん室編『中国新聞百年史』中国新聞社、1992年
- 中国新聞労働組合50年史編集委員会編『中国新聞労働組合50年史』1997年

歪められた原爆報道—占領期における連合国側記者の活動を中心に—

繁沢 敦子

はじめに

戦後63年が過ぎ、被爆者の平均年齢は75歳を超えた⁽¹⁾。被爆地の悲願である核兵器の廃絶は、全人類が繁栄のうちに共存するためには、国際社会が一丸となって取り組まなくてはならない目標だと言える。しかし、核の保有が国際政治上の影響力と同義のように語られる神話が存在し、原爆投下が戦争終結を早めたとする論調が戦勝国で強い中であっては、聴きいれられにくい願いでもあった⁽²⁾。

それでも、戦争の当事者が減り、客観的に歴史を振り返ることのできる世代が増え、状況は少しずつではあるが、変化しているように見受けられる。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件の後には、米本土への核攻撃の可能性への危機感から被爆地に対する関心が高まった⁽³⁾。

ヒロシマ、ナガサキの惨状が理解されにくいのは、それが未曾有の規模であったからだけではない。本来なら迅速に伝えられるべき被害の実態が、検閲や自己規制で伝えられなかった。その背景には、戦後の連合国軍総司令部（GHQ）による検閲があり、それ以前には自国政府による報道統制があった。

占領下のGHQによる検閲については、すでに野心的な先行研究が多く行われている⁽⁴⁾。実は筆者もこのテーマについては語り尽くされてきたのではないかと最近まで考えていた。しかし、最近あらたに見つけた資料や最新の研究に触れるにつけ、まだ分かっていない事実が残っていると信じるようになった。

最近見つけた資料とは、2003年に発見された米 *Chicago Daily News* のジョージ・ウェラー記者の「幻の潜入ルポ」のことである⁽⁵⁾。1945年9月に連合国軍記者として初めて長崎入りし取材しながら、新聞に掲載されることなかった原稿。GHQに送った原稿の複写を著者が持ち帰り、保管していたが、いつしか所在を見失っていたところを著者の死後、遺族が発見したという⁽⁶⁾。GHQ側に渡った原本ではないなど、必ずしも「幻の」という表現が正しいとはいえない。しかし、その2万5000語に上る大作は、従軍記者に対する米軍の検閲制度と、それに真っ向から対決するジャーナリストの姿を浮かび上がらせているという意味で貴重な資料である⁽⁷⁾。

従来、占領軍のプレスコードは日本のメディアのみに適用され、外国人特派員は対象外と考えられていた⁽⁸⁾。しかし、前掲書の内容を見た時、また、以下に論じる占領期の海外の原爆報道を振り返った時、そこには限りなく検閲に近い実態が見え隠れする。

第2次世界大戦中、全米で実施されていた米検閲局の活動は、終戦と同時に終了した⁽⁹⁾。しかし、海外で活動した従軍記者については必ずしもそれは当てはまらなかった。彼らは戦時中から検閲局ではなく、軍部による検閲の下にあり⁽¹⁰⁾、彼らを検閲した米軍は、連合国軍の構成員として日本に移動した後も、彼らを縛り続けたからだ⁽¹¹⁾。そして、米国で彼らの原稿を受け取る新聞社側にも、戦時中の自主検閲と同様の行動を取り続けた形跡があった⁽¹²⁾。

果たして本当に検閲と言えるものが占領下の日本で、国外の報道機関に対しても実施されていたのだろうか。そうであれば、だれが、どのような目的で、そしてどのような基準で行っていたのか。筆者の力量不足で残念ながら、今回はこうした問いに明快な答えを出すには至っていない。これについては今後の課題としたい。しかし、それが戦中から脈々と続いてきた下地に支えられた動きであり、戦後偶発的に行われるようになったものではないであろうことは、察するに余りある。

奇しくも、この数年の間に米国内の戦時検閲制度について、あるいは被曝の実相を隠匿する米国政府の政策について書かれた著書が相次いで刊行されている⁽¹³⁾。本稿では、こうした研究も併せて検討し、連合国側の被爆地報道の内容と矛盾、そこから浮かび上がる疑問点を明らかにしてみたい。

西側記者による取材の足跡

日本が敗戦し、連合軍とともに230人以上の連合国側報道関係者が日本に入国してきたとき、ある者はかつての敵国首都の荒廃ぶりを見ようと、ある者は東条英機元首相に会いたいと、またある者は「東京ローズ」を捜し出そうと考えていた⁽¹⁴⁾。ある者は原子爆弾の効果を自分の目で確かめたいと考えていたが、この頃マッカーサーはすでに被爆地への報道陣の立ち入りを禁じていた⁽¹⁵⁾。

そうした中、*New York Times* 紙のウィリアム・H・ローレンス記者ら何人かは、軍の報道官を説得して広島、長崎に自分たちを一番乗りさせる約束を取り付けていた⁽¹⁶⁾。しかし、そうした「特権」に預かれなかった者が希望を叶えるためには、連合国軍最高司令官の命令に背く必要があった⁽¹⁷⁾。そして二人が実際に行動に移した。一人はオーストラリア人で英 *Daily Express* 紙特派員のウィルフレッド・バーチェット記者、もう一人が *Chicago Daily News* 紙のウェラー記者である。

・バーチェット

果たして「一番乗り」の栄冠を勝ち取ったのは、1945年9月3日に広島入りしたバーチェットとなった⁽¹⁸⁾。バーチェットは1911年メルボルン生まれ。旅行会社員など様々な職業に就いたが、ある時旅行先のヨーロッパでドイツ人の妻と出会い、その後滞在したドイツで目にしたナチスドイツの現状を書いたのをきっかけにフリーランスのライターとなった。以来、*Daily Express* 紙の重慶特派員を経てアメリカ海軍担当の従軍記者となっていた⁽¹⁹⁾。

8月下旬、横須賀に到着したバーチェットは、一刻も早く広島におもむくことしか念頭になかった⁽²⁰⁾。西側の特派員が降伏文書調印式のため、東京湾に停泊していた戦艦ミズーリ号に向かった9月2日、バーチェットは一人、東京から列車に乗り込んだ。20時間後の翌日未明に広島に到着した後⁽²¹⁾、同盟通信広島支社編集部長の中村敏記者らを頼りに取材し、その日のうちに原稿を書き上げた。被爆者を収容していた広島通信局の焼けビルでは、「鬼気せまる様相をした火傷者が、じっと彼を睨み、罵声を浴びせかけた」。その後京都に向かったバーチェットのために中村記者が「大変苦勞して」同盟の東京本社に電話で送ったその記事は、同5日付で「原爆病」の大見出しとともに *Daily Express* 紙一面に掲載された⁽²²⁾。

バーチェットの記事は、「広島では、最初の原子爆弾が都市を破壊し世界を驚かせた30日後も、人々は、かの惨禍によってケガを受けていない人でも『原爆病』としか言いようのない未知の原因によって、いまだに不可解かつ悲惨にも亡くなり続けている」と放射能の影響をつづっている。そして、「広島は爆撃された都市には見えない。まるで巨大なスチームローラーが通り過ぎて、押しつぶされてしまったかのようだ。私はこれらの事実を、世界への警告になることを願い、可能な限り冷静に書き記しておこうと思う」と続けた⁽²³⁾。

・統合参謀本部による派遣記者

バーチェットが広島を訪れたと同じ9月3日、別の連合軍側報道関係者約30人が広島入りした⁽²⁴⁾。*New York Times* 紙のローレンス記者ら、米国の統合参謀本部が派遣した一行である。ローレンスのほか、*New York Herald Tribune* 紙のホーマー・ビガート記者や AP、UP といった通信社、NBC、CBS、ABC の各局、*Life*、*Time* 両誌の記者らがいた⁽²⁵⁾。一行は市内を見学した後、広島の記者団と一問一答を行った⁽²⁶⁾。広島について彼らが書いた原稿の中で筆者が入手できたのはビガートとローレンスのものだけであるが、両記事ともに同5日付でそれぞれの新聞に掲載されている⁽²⁷⁾。なお、一行は広島でバーチェットと遭遇しており、この一行とバーチェットが広島入りした時刻の差は数時間だったと考えられる。新聞掲載の早さも、イギリスとアメリカ（東海岸）の時差に過ぎないことになる。

ローレンスの記事には「広島は世界で最も破壊された町」という大見出しが躍る。小見出しも「4平方マ

イルが焼け野原／日々 100 人の死亡を報告／米国人への憎しみ露わ」と端的である。冒頭で「破壊され、瓦礫と化した広島—そこでは宇宙そのものの力を破壊剤として利用した秘密兵器が 8 月 6 日に初めて使われた—では、いまだに原子爆弾によって日々平均 100 人の日本人が殺されている」と報告した。そして「路上にはいまだに死臭が漂い、マスクをつけた死者の家族や親族が瓦礫の中、遺体や遺品を探し回って」いること、「ワルシャワやスターリングラードを上回る、世界で最も破壊された町」であることをつづっている⁽²⁸⁾。

また、日本人の医者「原爆の閃光で生じた火傷や原爆が原因のその他の病状に対し手の施しようがない」という話や、「原爆の長期的影響で投下当日に市内にいた者はすべて死ぬだろう」と話す人がいたことも紹介。「ヨーロッパと太平洋で戦争特派員をしたが、これほどの死と破壊の光景は見たことがない。原爆が投下された町の中心に立つと息を飲まずにはおれない」と衝撃を隠さない⁽²⁹⁾。

ビガートも記事冒頭で「広島では世界で初めての原子爆弾の投下から 4 週間経ってなお、日本人の医者が治療不能であるらしい火傷や感染で日々平均 100 人が死んでいる」と指摘した。軍用機が着陸した呉で一行を出迎えた日本海軍関係者の話として、「原爆の強い閃光で眠りから覚めた」ことや、広島が燃え続けていたため、救護しようにも「6 時間は市内に入れなかった」という体験談を紹介している⁽³⁰⁾。

ビガートは車で広島に移動する道すがら移り変わる風景を書きとめ、川で隔たれた広島を中心部について「川の東側は爆撃されたヨーロッパのほかの町と変わらないが、それを越えると真っ黒な木の幹と鉄筋コンクリートの建物の残骸がまれに立つだけの、何もない殺伐としたすさまじい廃墟」と描写した。また、被爆者の治療に従事する医者「被爆後、市内に定住した人々の間で白血球が破壊され、白血病のような症状を発症する者が多く、患者は脱毛したり食欲不振であったり、吐血したりしている」という話を引用している⁽³¹⁾。

ローレンスはナブラスカ州リンカーン生まれ。同州立大に入学した後、地元紙の記者となり、大学中退した。その後 AP、UP を経て *New York Times* 紙に移った⁽³²⁾。ビガートはペンシルベニア州ハウリー生まれ。ニューヨーク市立大ジャーナリズム学科に入学し、*New York Herald Tribune* 紙で使い走りを行った。大学を中退した後も使い走りを行っていたが、数年後に記者として働くチャンスを与えられ、才覚を現し、従軍記者としてヨーロッパ戦線で活動した⁽³³⁾。

両者とも「放射能」という言葉は使っていないものの、「長期的影響」や「治療不能の病」という表現で原爆症の特徴を捉え、その症状を列記している⁽³⁴⁾。ほぼ客観的な論調を貫いているが、ローレンスの方は「これがアメリカの物理学と科学の天才が戦争中、B-29 といった航空機や原爆の開発を通して成し遂げたことの最終的な証である。我が国の攻撃と防衛を維持し、性能を磨く必要を疑う者を説得するために必要な決定的証拠となるだろう。そうなれば広島は宿命がインディアナポリスやワシントン、デトロイト、ニューヨークで繰り返される可能性は小さくなる」と一段落を、原爆投下を肯定する私見に費やしている⁽³⁵⁾。

・ウェラー

さて、GHQ に逆らったもう一人の記者、ウェラーももう一つの被爆地、長崎への一番乗りを果たしていた。ウェラーはボストンで生まれ、ハーバード大学を卒業後、*New York Times* 紙の契約記者となり、その後 *Chicago Daily News* 紙の特派員として太平洋戦争取材した。日本軍の攻撃を受けている潜水艦の中で盲腸の手術を行った米兵士の話で 1943 年にピューリッツァー賞を受賞している⁽³⁶⁾。

9 月 4 日に厚木から西日本で当時唯一、立ち入りを許されていた鹿児島県鹿屋に向けて出発した。鹿屋航空基地に到着後、舟と鉄道を乗り継いで 9 月 6 日午後、長崎に到着した⁽³⁷⁾。鹿屋からは不法な旅で、記者であることを隠すために「米陸軍大佐」と身分を偽り、現地の日本軍から宿舎や自動車などの供与を受けて同 10 日まで長崎市内に滞在した⁽³⁸⁾。この間、軍用機で広島の後長崎入りした統合参謀本部のジャーナリスト一行とも遭遇している⁽³⁹⁾。ウェラーは 9 月 20 日まで、福岡県大牟田市などの収容所に収容されていた連合軍捕虜取材し、その後再び長崎市内に戻り、取材を行っていたが、足を負傷し、同 26 日に海軍の病院

船でグアムに送られた⁽⁴⁰⁾。

ウェラーがその間に執筆した大量の原稿を数行にまとめることは難しい。著書を内容別に分類すると、8割が連合軍捕虜あるいは兵士の話で、1割が被爆地の状況、残りの1割が1967年に出版されたある選集に寄稿した被爆地取材の回想録といった具合である⁽⁴¹⁾。9月6日から9日にかけてウェラーは8本の原稿を書いているが、最初の5本については、建物や地形上の被害についての描写がほとんどである。オランダ人とイギリス人の捕虜8人が亡くなったこと、日本軍の発表として死者1万9741人、行方不明1927人、重傷4万93人という数を挙げてはいるが、人的悲惨の描写が始まるのは初めて病院を訪れた8日の夜書かれた原稿からである。オランダ人医師が呼ぶところの得体の知れない「X病」で毎日人が死んでいること、白血球、赤血球の減少や下痢、腸内の大量出血といった症状があること、医師も手に負えないと話している様子を記している⁽⁴²⁾。

ローレンス同様、ウェラーも自国による原爆投下を肯定した。9月8日午前1時現在の原稿冒頭には、「原子爆弾は無差別攻撃用の武器に分類できるが、長崎での使用状況は選択的で適正であり、このような巨大な武力のものとしてはきわめて慈悲深いものと言える」と記した⁽⁴³⁾。ウェラーの頭には日本軍による連合軍捕虜の扱いがあった。回顧録では、「哀れには思った。だが、良心の呵責は感じなかった。日本の軍部がその重荷を取り除いてくれていた」と述べている⁽⁴⁴⁾。

ウェラーがGHQの検閲官に送ったこの長い原稿のうち、紙面に掲載されたのは原爆とは全く関係のない、二人の米兵の古い冒険談だけだった⁽⁴⁵⁾。それ以外は陽の目を見ることはなく、ウェラー自身はマッカーサーに「抹殺」されたと信じていた⁽⁴⁶⁾。

・レスリー・ナカシマ

バーチェットやウェラー、ビガート、ローレンスらが被爆地への一番乗り競争にしのぎを削っていた頃に先立つ1945年8月31日の*New York Times*紙に「消えた広島」と題する被爆地のルポが掲載された⁽⁴⁷⁾。筆者のレスリー・ナカシマはハワイ生まれの日系2世で、ハワイの邦字紙『日布時事』、*Honolulu Star Bulletin*紙記者を経て1934年に来日した。その後ナカシマは*Japan Times*紙を経て米通信社UP東京支局の記者になったが、日米開戦で同支局が閉鎖となり同盟通信社に転職していた。広島を訪れたのは被爆16日後の8月22日。当時同市仁保町（現、南区）で一人暮らしをしていた母親の安否を確認するためだった。原稿はUPから配信された⁽⁴⁸⁾。

ナカシマの記事は「広島は8月6日朝に巨大な空の要さいから投下された一発の原子爆弾により壊滅した」と切り出し、「人口30万だった街には、完全な形の建物は一つとしてない」と続けた。また、「死者は10万人に達したとみられ、原爆の紫外線によるやけどで今も毎日死者が出ている」と原爆症についても記した。ナカシマの母は無事だったが、近くにある学校は野戦病院となり、「犠牲者の多くは判別がつかない。この病院だけで毎日2、3人が死んでいる」と収容されている被爆者の状態をつづった⁽⁴⁹⁾。

海外に初めて被爆地の惨状を伝えたのが、バーチェットではなく、このナカシマであるとの指摘もある⁽⁵⁰⁾。しかし、バーチェットによる報道を第1号として論ずることが相変わらず多いのには⁽⁵¹⁾、当時の日系人が置かれていた立場が関係していると思われる。ナカシマは同盟通信に入社するために不本意に米国籍を捨て、日本国籍を取得していた⁽⁵²⁾。終戦後はUP東京支局に復帰し、自分は米国人であるという意識を忘れなかった。しかし、米国籍の復帰は死ぬまで認められなかった⁽⁵³⁾。

ナカシマが広島原稿を書いた際、日本の報道機関に対するGHQの検閲はまだ始まっていなかった⁽⁵⁴⁾。同盟から世界に打電することもできたはずだ。しかし、それをせずに米国の通信社を通じて打電したのは、自らが本来属していたはずの西側メディアに自らの存在感を示したいという記者魂ではなかったか。早い段階で被爆地に入ることができたのは、日本国籍を有しているが故だったが、そのことは連合軍側ジャーナリ

ストの活動として認められないことにつながったのではないだろうか。第2次大戦中、在米の日系人は米国民でありながら強制収容されたが、日本にいたナカシマも、日系人であるが故の不条理に直面していたことになる。

しかし、日本から英語で初めて海外に発信したのはナカシマだったと言って間違いないだろう。先行研究や著述においても、バーチェットについて「西側の」あるいは「連合国側として」という但し書きをつけているものもあり⁽⁵⁵⁾、ナカシマの存在が全く知られなかったわけではないと思われる。1945年9月2日、東京湾に停泊していた戦艦ミズーリで行われた降伏文書の調印式を取材した従軍記者の間でもナカシマの記事は話題になったようだ⁽⁵⁶⁾。

ナカシマの原稿は *New York Times* 紙のほか、*Honolulu Star Bulletin* 紙や *Chicago Daily News* 紙などにも掲載された。しかし、東京からの打電が8月27日でありながら、*New York Times* 紙では掲載が同31日、*Honolulu Star Bulletin* 紙と *Chicago Daily News* 紙では同30日と時間を要したのは、UPを經由したためだろうか⁽⁵⁷⁾。それとも、別の理由があったのだろうか。これについては次項で検討する。

ちなみに、ナカシマは「東京ローズ」をめぐる報道競争でも一役を果たす。ラジオ東京のアナウンサーだったアイバ・ダキノは戦後、反逆罪で起訴され、有罪判決を受けるが、東京ローズの正体をスクープしたいと考えていた米国人記者に彼女を紹介したのがナカシマであり、彼らに請われてアイバが唯一人の「東京ローズ」であるとの契約書に署名した場にもナカシマは立ち会っていた⁽⁵⁸⁾。

報道に対する米政府の対応

さて、京都で捕虜収容所を訪問し⁽⁵⁹⁾、東京に戻ったバーチェットを迎えたものは、GHQによる彼の報道の否定だった⁽⁶⁰⁾。東京帝国ホテルで1945年9月12日開催された連合国の海外特派員向け記者会見で⁽⁶¹⁾、マンハッタン計画の副責任者のトマス・ファーレル准将は「原爆の影響でこれ以上死ぬ者が出ることはないだろう」と述べた⁽⁶²⁾。

会場に遅れて姿を現したバーチェットが、放射能の影響で被爆地では今でも多くの人が苦しみ、亡くなっていることを指摘すると、ファーレルは「広島に原子放射能があり得たということは不可能だ。爆弾は空中の高いところで爆発するように仕込まれてあった。もし、いま現に死んでいるものがあるとすれば、それはそのとき受けた被害のため以外にない」と答えた。バーチェットがなお食い下がると、ファーレルは「君は日本の宣伝の犠牲になったのではないかね」と言って腰をおろし、質問には答えないうまま記者会見を終了した⁽⁶³⁾。

New York Times のローレンス記者は、この記者会見の様子を次のように記している。「ファーレル准将は、秘密兵器の爆発力は発明者が予見するよりも大きかったとしながら、それが廃墟となった町に危険な残留放射能を生み出したり、爆発時に毒ガスを作り出したりしたことは断固として否定した」⁽⁶⁴⁾。

公にするには問題があり過ぎると考えられた原爆の秘密の側面の中でも、放射能はおそらく最も問題となるものだった⁽⁶⁵⁾。1943年5月12日に発足した「放射能毒性小委員会」は、放射性物質を「毒 (poisons)」として認識しており、ごく少量の放射能でも人体に深刻な影響を及ぼすことを把握していた⁽⁶⁶⁾。1917年には、時計の文字盤に塗るラジウム入り夜光塗料に被曝したニュージャージー州の女工の話が米国内の新聞で大きく報道され、賠償金の請求問題に発展していた⁽⁶⁷⁾。ビヴァリー・アン・ディープ・キーヴァーは、これら「ラジウム・ガールズ」の話をもマンハッタン計画の責任者たちも知っていたと指摘する。というのも、この事件がマンハッタン計画とその後の原子力産業従事者の健康基準を設定するための医学研究の必要性を呼び起こしたからだという⁽⁶⁸⁾。

当時同盟通信は原爆投下を「野蛮な政府だけが為しうる行為」としてアメリカを非難する海外放送を行っ

ていた。また、日本政府はヨーロッパの公館を通じて、原爆投下を国際法違反の非人道犯罪として海外に喧伝し、少しでも有利な占領政策を引き出すカードにしようとしていた⁽⁶⁹⁾。こうした訴えを退けるためには、放射能の影響は否定されなくてはならなかった⁽⁷⁰⁾。ファーレルの記者会見の内容は世界中に打電され、被爆者はいないことになり、放置される結果を招いた⁽⁷¹⁾。

ところで、ローレンスが「ファーレル会見」について書いた原稿には編集側の手が加えられていた。「現地ではクレーターや建物の燃焼以外の理由による土壌の過熱は起きていない。低空爆破だったニューメキシコの実験で起こったような土壌や器材の溶解もない」という AP 通信の配信からの一段落が挿入されたのである⁽⁷²⁾。

1945年7月17日のトリニティ実験では爆発によってクレーターが生じ、そこでは高い放射能が計測されていた。ロバート・オッペンハイマーらロスアラモス研究所の科学者は、爆発で放出される中性子が土中のナトリウムなどの原子と反応し放射化されることを考慮していなかった⁽⁷³⁾。オッペンハイマーは「地上数千フィートの高度で爆発させれば火球の影響は最小化でき、放射性汚染が地上に到達するとは考えられない」と信じていた⁽⁷⁴⁾。新聞社の編集は、こうした科学者の理論を拠り所にする政府の見解を反映している。

新聞社による同様の作為は、ほかのケースにも見られる。たとえばナカシマの原稿に対しても、*New York Times* 紙は大きく手を加えた。原文にあった「西日本の小都市への激しい空襲にもかかわらず」という文言や、「海軍基地がある近くの呉は幾度も激しい空襲の標的になっていたにもかかわらず、広島市民はなぜ狙われないのかを不思議に思っていた」という一文をはじめ、原稿の随所で削除が行われている⁽⁷⁵⁾。削除された文字数は原稿全体の延べ約4割に上る⁽⁷⁶⁾。また、原文にはない「米国の科学者たちは、原爆は破壊した地域に長期に影響を与えない、という」という文言が加えられていた⁽⁷⁷⁾。

これは検閲の結果だったのだろうか。それとも、米国の新聞社は8月15日の検閲規定廃止以降も⁽⁷⁸⁾、自主規制を組織的に続けていたのだろうか。バーチェットが執筆し、イギリスの *Daily Express* 紙一面に掲載された記事についても、同紙が無料で各国の新聞社に転載を認めたにもかかわらず、アメリカで取り上げる新聞社はなかったという⁽⁷⁹⁾。トルーマン大統領は1945年9月14日、米国の編集者や放送者、国民に対し、検閲を強いるものではないとしながらも、国益のために陸軍省と協議するまでは原子爆弾の秘密を差し控えるよう自制を要請していた⁽⁸⁰⁾。

それでは8月16日以降の一ヶ月間の報道には、どのような力が働いていたのだろうか。ここで第2次世界大戦中、米国で実施された検閲制度と、占領期日本における検閲制度を振り返ってみたい。

米国の戦時検閲と対日占領期の検閲政策

日本が真珠湾攻撃を行った直後の1941年12月19日、米政府に検閲局が開設された。その役割は、機密の軍事情報が敵にわたることを防ぐ目的で新聞や放送、郵便物の検閲を行うことだったが、国内においては強制ではなく、メディア自体による自主規制の形で運営された。元 AP 通信編集長のパイロン・プライス局長が、強制検閲にした場合に予想される不利益は利益を上回ると考えていたからである。メディアの協力をあおぐその穏やかな手法は、第一次世界大戦時の広報委員会（クリール委員会）による露骨な情報管理とは対照をなすものだったという⁽⁸¹⁾。

検閲局の所管は国内2700の日刊新聞、1万1000の週刊新聞、7000の雑誌、5000の定期刊行物、1万4000の商業・産業広報誌、9000の社報・会報のほか、900のラジオ局にわたった。「兵員の位置・移動に関する情報」「艦船の移動情報」など、報道を避けるべきとする項目を定めた「戦時実務規定」に則った自主検閲を求め、多い時で1万3000人以上の職員が記事や放送内容を監視、審査した⁽⁸²⁾。1945年8月15日に閉鎖するまでに「故意に」違反した例はほとんどなく、当事者であるジャーナリスト、統制する側の軍の指導者、政府の職員とも、

国内検閲についてはうまく運営されたと考えたという⁽⁸³⁾。

一方、占領下日本に対するメディア政策の立案は、米国の対日戦後政策の検討が始められた1942年8月頃に遡る⁽⁸⁴⁾。太平洋地域における検閲計画が統合参謀本部で進められ、1944年11月には占領地域で実施する民間検閲の根拠となる命令書「太平洋アジア地域における民間情報の検閲 (JCS873/3)」が発布された。この間フィリピンの米南西太平洋陸軍総司令部で民間検閲にあたる「民間検閲支隊 (CCD)」が発足し、これが終戦後日本に移転され、「言論及新聞ノ自由ニ関スル覚書」が通告された1945年9月10日、業務を開始した⁽⁸⁵⁾。

しかし、当初は検閲要員不足もあって同盟通信から連合軍批判報道が流れるなど問題が相次ぎ、9月19日にはより具体的な「日本新聞規則ニ関スル覚書」が通告された⁽⁸⁶⁾。10条からなるもので、いわゆる「プレスコード」とは、この覚書を指す。その趣旨は「連合軍最高司令官は日本に言論の自由を確立せんが為茲に日本出版法を発布す。本出版法は言論を拘束するものに非ず寧ろ日本の諸刊行物に対し言論の自由に関し其の責任と意義とを育成せんとするを目的とす」と謳っていた⁽⁸⁷⁾。

検閲をより実効性あるものにするために策定されたものであったが、実際にはその内容は明確さに欠け、「禁止したいどんな記事についてもどんな理由でもつけることができ」た。それは、GHQ 諜報部長のエリオット・ソープ准将が「公共の安寧を妨げる情報とは曖昧な定義であるが、しかもなおこの定義は検閲違反を犯した一切の出版社と放送局の取締を可能」にすると洞察したとおり、「融通無碍」の代物だった⁽⁸⁸⁾。

こうした検閲がどういった結果を引き起こしたかについては先行研究が詳しい⁽⁸⁹⁾。一方、放送が47年8月、事前検閲から事後検閲に移行したのをはじめ、11月1日には書籍が、12月15日には雑誌が、48年7月25日には全国主要新聞が事後検閲に移行した⁽⁹⁰⁾。そして49年10月31日の CCD 解散で4年2カ月続いた検閲は終わりを告げた⁽⁹¹⁾。

それにしても、こうした占領期の日本における検閲制度に、米検閲局の政策や手法は何らかの形で反映されたのだろうか。山本武利は「アメリカは日本をメディア先進国とみなし、アメリカの国内の戦時下でのメディア統制の大枠が、そのまま日本に適用できると考えた」という⁽⁹²⁾。

これについては、今後さらなる調査・分析が必要だが、明らかなのは、占領期の検閲政策を検討する必要が出てきた際に、検閲局長のバイロン・プライスがそうした課題へのワシントン中枢部の関心を喚起し続けたことである⁽⁹³⁾。たとえばプライスは1943年6月、陸軍長官のヘンリー・スチムソンあてに書簡を送り、将来占領されるべき各地域での検閲の実施方法と所管機関、機関相互の責任分担を早急に検討するよう求めた。また、1944年8、9の各月には、検閲の問題を議論するために国務、陸海軍の3省ならびに検閲局による会議を開催することを提案する書簡を参謀第2部のビッセル少将、統合参謀本部議長のウィリアム・レーヒ海軍大将に送っている⁽⁹⁴⁾。

日本における現地採用を開始する以前の検閲員の育成や確保についても不明な点は多いが、CCD の中には検閲局での勤務経験を有する者がいたようである。江藤によると、1944年5月に陸軍省の高官からマッカーサーあてに出された公信の中に「現に陸軍部内には合衆国検閲局に配属されて経験を積んだ将校が在職し、マッカーサーの指揮下に転属可能である」としていた⁽⁹⁵⁾。また、1945年4月20日に策定された「日本における民間検閲基本計画」第一稿では、当時フィリピンにあった CCD の現有人員としての検閲局員数を20人としている⁽⁹⁶⁾。江藤はまた、日本の CCD の機構が米検閲局のそれに準拠していたと指摘している⁽⁹⁷⁾。

さてここで、原爆開発の段階における米検閲局の役割を見てみることにしよう。

米科学研究開発局 (OSRD) のヴァネヴァー・ブッシュ局長は、マンハッタン計画が本格化しつつあった1943年2月、軍事的な原子力研究に関する報道すべてを、検閲規定の条項下に置くよう提案した。テネシー州オークリッジなど、全米各地に展開された関連施設の建設に伴い、原爆開発計画に関する情報管理は早急に取り組みなくてはならない問題になっていた⁽⁹⁸⁾。プライスら検閲局の職員とマンハッタン計画のレス

リー・グローブス将軍は、マスコミに怪しまれることなく、情報の流出を防ぐ方法を検討した。そして、関連施設の建設に対してより、原子力研究に注意を引くための通知を全米の編集者と放送者に出すことで合意した⁽⁹⁹⁾。

1943年6月28日に送付された通知には、「次のような軍事實験に関するいかなる情報も、掲載ないし放送しないよう要請する」として、「原子の粉碎、原子力、原子エネルギー、核分裂、原子分解、あるいはそれらに相当するものの製造および利用」と書かれていた。通知の中には同様に掲載・放送禁止のものとして、「元素あるいはその化合物」が挙げられていたが、ウラニウムの重要性をごまかすため、無害な元素の名前と一緒に並べると言う手の込みようであった⁽¹⁰⁰⁾。

プライスはニューメキシコ州での核実験の際に、爆発後に取材が集中する可能性を考え、即座に配布できる発表資料の必要性を示唆してもいる。グローブスは、マンハッタン計画の公式歴史家、*New York Times* 紙の科学記者のウィリアム・L・ローレンスに、爆発だけで無損害の場合から、大爆発によって多数の死者が出た場合まで、四つの事態を想定したプレスリリースを準備するよう指示した⁽¹⁰¹⁾。

1945年7月16日に実際に実験が行われた時、四つのプレスリリースのうち一つが予定通り発表され、それは弾薬集積場の爆発事故であったとされた⁽¹⁰²⁾。一部のジャーナリストはしかし、その発表に満足せず、目撃者に取材を始めた。検閲局が各通信社のワシントン DC の事務所に電話し、原稿を公表する前に査読に出すよう求めた結果、南西部では報道されたが、東海岸の新聞社で取り上げることはなかったという⁽¹⁰³⁾。

検閲か、自己規制か

米国ではファーレルの公式声明以来、原爆の残虐性を示唆する報道は見られなくなっていた⁽¹⁰⁴⁾。

ウィリアム・H・ローレンスによるファーレル会見の記事が出る前日、*New York Times* 紙は7月に核実験が行われたニューメキシコでは残留放射能がほとんど残っていないとする記事を掲載した⁽¹⁰⁵⁾。執筆者はウィリアム・L・ローレンス⁽¹⁰⁶⁾。1945年4月から、マンハッタン計画の公式歴史家として *New York Times* 紙記者兼任のまま陸軍省に雇われていた⁽¹⁰⁷⁾。

グローブスは9月9日、ローレンス含む約30人の報道陣をトリニティ実験の現場に案内し、日本による放射能被害の「プロパガンダ」を否定した⁽¹⁰⁸⁾。ローレンスは原稿で「原爆による死亡の原因は爆風と高熱、それによる火災であることは明らか」とし、「日本人はいまだに米国が不正に勝利したかのような印象を作り出そうとしている」と陸軍省の言い分に追従した⁽¹⁰⁹⁾。

ローレンスは1988年、リトアニア生まれ、17歳の時にロシア軍の徴兵を逃れるためにドイツに不法入国し、その後渡米した。ハーバード大卒業後、*New York World* 紙を経て *New York Times* 紙に科学記者として採用されていた⁽¹¹⁰⁾。ローレンスは記者としては唯一人、トリニティ実験の見学を許され、長崎への原爆投下に同行した⁽¹¹¹⁾。そして原爆開発の経緯とそれに伴う技術的革新への科学者らの功績をつづった原稿を9月26日から10月9日まで、10回にわたって *New York Times* 紙に連載し⁽¹¹²⁾、これによって2回目のピューリッツァー賞を受賞した。

リフソンらはローレンスが原爆の放射能の問題を知っていたはずだと指摘する。核実験に立ち会った彼は、その後原爆が周囲にどんな影響を及ぼしたかを知っていたはずだという⁽¹¹³⁾。しかし、ローレンスは放射能を否定する以外に言及することはなく、*New York Times* 紙も、彼の原稿が政府の広報文であることを知りながら、無料で全国各紙に記事を配信した⁽¹¹⁴⁾。一方、この間に米国民の関心は、核の国際管理や平和利用の問題に向けられていく⁽¹¹⁵⁾。1946年7月には南太平洋での核実験が開始されたが、直接的に人的被害をさらけ出すことはなかった⁽¹¹⁶⁾。

その約一か月後の1946年8月31日、米国のニューススタンドでは、*New Yorker* 誌を求めて人々が列を

作った。この日の誌面には漫画や町の話題といったいつもの売り物のコーナーがなく、同誌の歴史上初めて68ページの全誌面がジョン・ハーシーの「ヒロシマ」で埋められていた⁽¹¹⁷⁾。

6人の男女の被爆前後からその後の暮らしをたどった人間ドラマ。冷静な筆致である日、キノコ雲の下で何が起こったかを再現していた。同誌は発売当日に30万部を売り尽くし、その後約百の新聞が転載したほか、ラジオでも放送された。間もなく書籍化され、十数カ国で翻訳出版された⁽¹¹⁸⁾。

ハーシーは中国・天津で米国人宣教師の両親の元に生まれ、エール大学とケンブリッジ大学大学院を卒業後、作家シンクレア・ルイスの秘書を経て*Time*誌の記者になった⁽¹¹⁹⁾。46年5月に広島を訪問、被爆者30数人を取材した。原稿では原爆症の問題を取り上げているほか、投下した米国人に対する市民の恨みにもじませた⁽¹²⁰⁾。

それがGHQの検閲を逃れたとされるのは、ハーシーが米国に帰国してから執筆を始めたためらしい。もっともブラウによると、CCDは日本の報道機関のみを検閲できる立場にあった⁽¹²¹⁾。そのため、1946年11月に英字新聞『ニッポン・タイムズ』がCCDに日本で発行する許可を求めた時、要請書は検閲措置なしに返却された⁽¹²²⁾。

いつしか、『ヒロシマ』の日本語訳が出版されないのはGHQの検閲のためだという話が広がり、1948年4月、日本のジャーナリストたちが進歩的な在日米国人記者に訴え、それを知ったアメリカ著作者連盟からマッカーサーに対して抗議が行われた⁽¹²³⁾。しかし、これについてマッカーサーは、禁止は事実ではなく、その証拠に、アメリカの文献は検閲されないと回答していた⁽¹²⁴⁾。一方、袖井はこの点について以下のような当事者の談話を確認している。

「日本語訳の出版元である法政大学出版局の相島敏夫出版局長によると、『そのような事実はなかった』という。相島の記憶では、『どこの出版社もはれものにさわるようにしてGHQに許可を申請しなかったのだが、申請したらすると出たので逆にこっちがびっくりした』ということである（筆者への直話）⁽¹²⁵⁾。」

確かに日本の編集者による自己規制はあったと言われる⁽¹²⁶⁾。それは戦前・戦中の報道統制と無縁ではなかった。これについて有山は次のように述べている。

「（日本のマスメディアは）大勢としては従順に検閲を受け入れ、それに適応することに腐心していた。無論、検閲を受けることによって心理的に傷ついたことは間違いない。しかし、言論の自由をたてとして検閲批判の声をあげることはなかった。与えられた自由も、課せられた統制も、そのまま新しい洋服に着替えるように従順に受け入れた。⁽¹²⁷⁾」

さて、ここで話を米統合参謀本部が被爆地に派遣した報道関係者の一人、*New York Times*紙のウィリアム・H・ローレンス記者に戻したい。上記「ファーレル声明」を受けて、ファーレルの主張をそのまま記事にしたことから、ローレンスの論調がこの時から急変したとの指摘もある⁽¹²⁸⁾。しかし、そうした変化は長崎を取材して彼が書いた、その前の原稿ですでに現われていたと言う方が正しい。

9月10日付で同紙1面に掲載された記事でローレンスは、数日前に自身が記していた原爆の長期的影響を、日本の宣伝だとして終始過小評価した。記事ではまず、8人の連合軍捕虜が長崎原爆で死亡したことを伝えているが、その情報を日本側が明らかにしたことは「破壊力の強い兵器の使用についてアメリカを辱めることを計算した見え透いたプロパガンダ」と指摘。「原爆は疑いもなく恐ろしいものだが、日本側はアメリカ人に冷血な日本人の残虐性を忘れさせ、同情を買うためにその影響を誇張している」と述べた⁽¹²⁹⁾。

1万5000人の負傷者は今後死んでしまうだろうとした警察官の話についても「多く見積もり過ぎている」と批判。また、「日本の当局者が今後70年間、被爆地は居住不可能かもしれないという噂を流し続けている」ことに、「広島、長崎両市で何千人という人が症状もなく被爆地域で暮らしている」と反論した。被爆した教会についても、「そこに弾薬が保管されていた」という連合軍捕虜の話を紹介している⁽¹³⁰⁾。

「死と破壊の光景に息を飲んだ」広島ルポの掲載から5日。米政府の代弁とも思える論調に彼を走らせた

のは何だったのだろう。あるいは、以前からそうであったのが、広島ではあまりの惨状に例外を作ってしまったのか。その謎のカギの一つは、プレスツアーに同行した米軍の広報官が握っていた。

ローレンスらの一行を引率したのは陸軍航空隊のジョン・マクラリー大佐である。エール大学卒業後、*Daily Miller* 紙などの記者を務めた後に陸軍航空隊に入隊し、広報官となった。戦後は *New York Herald Tribune* 紙のコラムニストやラジオ番組のホストを務めたほか、政治戦略家としての顔を持ち、1952年の大統領選にドワイト・アイゼンハワーを担ぎ出した立役者であったことで知られる。59年にはニクソン副大統領とフルシチョフ・ソ連書記長の有名な「キッチン・ディベイト」を演出した⁽¹³¹⁾。

マクラリーは何年も経ってから、彼が引率した報道陣の一行に対し、広島から長崎に向かう航空機の中で「見たことを書かないよう」助言したことを明らかにした。米国人は『我々がここでやったことを知るに堪えない』と思ったのが理由だという⁽¹³²⁾。

ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』については、「私が決して明らかにしてこなかった最も忌々しい話だった。私はその話を隠ぺいしたが、ジョン・ハーシーは暴露した。それが広報マンとジャーナリストの違いだ⁽¹³³⁾」と述べた。

一行はほかの駐日特派員と異なり、GHQによる検閲の対象外だった⁽¹³⁴⁾。その結果かどうか、ローレンスやビガートは広島原稿では人的悲惨を率直に描いていた。しかし、戦時中の検閲局の語りを熟知していたジャーナリストたちにとってみれば、マクラリーの「助言」が意味するところはあまりにも明白だったに違いない⁽¹³⁵⁾。

ハーシーの『ヒロシマ』から約3か月後、マサチューセッツ工科大学学長で原爆の使用に関するトルーマンへの諮問機関「暫定委員会」委員の一人だったカール・T・コンプトンによる「もしも原爆が使われていなかったら」とする論文が *The Atlantic Monthly* 誌に掲載された⁽¹³⁶⁾。1947年2月にはヘンリー・スチムソン陸軍長官が *Harper's Magazine* 誌に「原爆投下の決断」とする論文を寄せた⁽¹³⁷⁾。

両者とも、「原爆が投下されていなければ、戦争が長引き、さらに多数の死者が出ていただろう」と指摘。特にスチムソンは「地上戦になっていれば、100万人以上の米兵が殺された可能性があった」として原爆投下を正当化した。被爆50年の1995年に米国立スミソニアン博物館が計画した原爆展をめぐる、アメリカ側から出てきた議論はまさに、スチムソン長官が行った主張を反映していた⁽¹³⁸⁾。

ハーシーの『ヒロシマ』は1999年には、20世紀で最も影響のあったアメリカのジャーナリズム作品のトップに選ばれた⁽¹³⁹⁾。それは核の脅威が高まるたびに、あらたに脚光を浴びる著書ではあったが、脅威を押し返す運動を盛りたてる方向にはほとんど動かなかった⁽¹⁴⁰⁾。

ポイヤーは、ハーシーの『ヒロシマ』をめぐる様々な評論や反応を基に、次のように分析している。

「多くの米国人にとって、それを読む行為自体が、複雑かつ緊張した彼らの心理から解放させてくれるものだった。ヒロシマ、ナガサキの人々に何が起こったかについて向き合わせるものであったと同時に、それについて文字通り終止符を打つことを可能にさせるものだった⁽¹⁴¹⁾。」

一方、日本国内で大衆向けに原爆被害が公表されるのは1952年8月6日号の『アサヒグラフ』まで待たなければならなかった⁽¹⁴²⁾。GHQによる戦後の検閲の影響について、ブラウは次のように指摘している。

「・・・日本人も、アメリカ人も、それにほかの国の人々も、すべてが、まとまりのない情報の断片を与えられていただけであった。原子爆弾にかんする事実については、散り散りばらばらな断片が世にだされた。しかし、なんら整理がなされず、全体像は示されなかった。なにごとにつけても、全体像を組み立てるのはむずかしいものである。しかし、こと原子爆弾にかんしては、かなり正確な像を形成しえたはずの一側面があったが、それはアメリカの検閲があったために、実際には形成されなかった⁽¹⁴³⁾。」

む す び

20世紀は戦争の世紀であり、軍事力の革新と大きさが競われた時代であった。そして、それはすでに、スウィーニの著書が示すとおり、情報戦の時代でもあったことが分かる。

しかし、これまで見てきたように米国で戦後直後、特に放射能を中心とする原子爆弾の情報をどのようにして組織的に操作してきたかについては、まだ不明な点が多い。それは、米国が核抑止に依存している以上は機密であり続けるのかもしれない。

上述したケースは、いずれも条件が異なり、その検閲、あるいは情報操作のアプローチも様々である。だが、どのように、何を基準に行っていたかを理解するには、さらなる資料と裏付けが必要となるだろう。

しかし検閲は、たとえ「検閲」という名称で呼ばれていなくても、事実上あったというべきだろう。ある米国のジャーナリストは以下のように実態を報告している。

「敗戦国に対する検閲の実施については、少なくとも理論上は正当化する何らかの理由を見つけることができる。というのも、治安を乱す可能性がまだあるからだ。しかし、米国人までもが真実を知る機会を拒まれるというのは理解しがたい。

あまりにも多くのニュースが情報源で差し止められており、米国の大衆はそのほんのおこぼれにしかありついていない。テレタイプから送られてくる重要な記事に上級司令部からの差し止め命令が見つからない日はない⁽¹⁴⁴⁾。」

その目的については、すでに触れた、日本国内における日本人に対する検閲のそれと同じであるだろうことは想像できる。つまり、ブラウが言うように、一つは合衆国の安全保障のためであり、もう一つは合衆国批判を恐れたからのことである。米国はその原子爆弾の投下が非人道的ないし野蛮であったという印象を与えることを極端に恐れていた。米国が悪者になってしまうと、日本人に戦争に対する罪悪感を起こさせる障害になるということもあった⁽¹⁴⁵⁾。

こうした話はしかし、米国内でもほとんど語られてこなかったように見受けられる。自由を標ぼうする国にあって、その理念と逆行する行為として触れられたくない問題だったと言えるのではないか。それが「第4の権力」として民主主義の監視役を担うべきメディアの世界の話であるならなおさらである。

江藤は、『閉された言語空間』の中で、「(米国の検閲によって)自分たちがそのなかで呼吸しているはずの言語空間が、奇妙に閉され、かつ奇妙に拘束され」、それは「現在もなお起りつづけている」と指摘している⁽¹⁴⁶⁾。

それは江藤がその問題を提起して四半世紀以上経った今もなお、私たちに突きつけられた問いであると同時に、米国に対して問うた課題であると言える。

注

- (1) 厚生労働省によると、全国の被爆者数は2008年3月末現在、24万3692人で、前年同期より8142人減少。平均年齢は前年同期より0.55歳上がって75.14歳となった。
- (2) これを象徴する出来事に、米国立スミソニアン航空宇宙博物館で計画された95年の原爆展をめぐる論争がある。M. ハーウィット（山岡清二監訳、渡会和子・原純夫訳）『拒絶された原爆展』（みすず書房、1997年）参照。
- (3) 拙稿『『縮小する』広島、忘れ去られる戦争』『世界』756号、2006年9月228-235頁。
- (4) 占領期時代の検閲については、有山輝雄『占領期メディア史研究—自由と統制・1945年』（柏書房、1996年）、山本武利『占領期メディア分析』（法政大学出版局、1996年）、江藤淳『閉された言語空間』（文春文庫、1994年）、William J. Coughlin, *The Conquered Press: The MacArthur Era in*

- Japanese Journalism*, Palo Alto, CA: Pacific Books, 1952; Marlene J. Mayo, “Civil Censorship and Media Control in Early Occupied Japan,” Robert Wolfe, ed., *Americans as Proconsuls: United States Military Government in Germany and Japan 1944-1952*, Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 1984. 原爆報道／文学の検閲についてはモニカ・ブラウ（立花誠逸訳）『検閲 1945-1949—禁じられた原爆報道』（時事通信社、1988年）、堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、1995年）など。
- (5) 「長崎原爆：米記者のルポ原稿、60年ぶり発見」『毎日新聞』2005年6月17日。この報道で國枝すみれ記者は2005年度のボーン上田賞を受賞している。原稿の存在は米国の歴史家の間では伝説となっていた。Paul Boyer, *By the Bomb's Early Light*, Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 1985, p. 187; Robert J. Lifton and Greg Mitchell, *Hiroshima in America: A Half Century of Denial*, New York: Avon Books, 1996, p. 50
- (6) 「長崎原爆：米記者のルポ原稿、60年ぶり発見」『毎日新聞』2005年6月17日。
- (7) 原稿は息子アンソニーによって書籍化された。George Weller and Anthony Weller, ed., *First into Nagasaki: The Censored Eyewitness Dispatches on Post-Atomic Japan and Its Prisoners of War*, New York: Crown Pub 2006, 邦訳は小西紀嗣訳『ナガサキ昭和20年夏』（毎日新聞社、2007年）
- (8) 山本、前掲、p. 519; 江藤、前掲、259頁; Coughlinを除き注4に掲げた先行研究は、日本のメディア、あるいは個人に対する検閲を対象としている。
- (9) マイケル・スウィーニィ『米国のメディアと戦時検閲』（法政大学出版局、2004年）282-283頁。検閲制度は1945年8月15日に終了したが、検閲局自体は11月15日まで存在した。
- (10) スウィーニィ、前掲; 111頁; 有山、前掲、145頁; ウェラーも自分の記事の出版が差し止められた例を挙げている。ウェラー、前掲、33-34頁。
- (11) ウェラー、前掲、33頁。
- (12) 本稿「報道に対する米政府の対応」参照。
- (13) スウィーニィ、前掲、高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛』（凱風社、2008年）など。
- (14) ドウス昌代『東京ローズ』（文芸春秋、1990年）22-23頁。
- (15) Lifton and Mitchell, op. cit., p. 47; ウェラー、前掲、31-33頁。
- (16) Peter H. Wyden, *Day One*, New York: Simon & Schuster, 1984, p. 319; W. H. Lawrence, “Visit to Hiroshima Proves It World's Most-Damaged city,” *The New York Times*, Aug. 5, 1945, pp. 1 & 4.
- (17) ボイヤーによると、「慎重に選抜されたグループ」だった。Boyer, op. cit., p. 187.
- (18) Boyer, op. cit., p. 187; M. Susan Lindee, *Suffering Made Real*, Chicago, IL: University of Chicago Press, 1994, p. 11; 中村敏「曼珠沙華—原子雲の下の広島」『秘録大東亜戦史／原爆国内編』（富士書苑、1953年）309頁など。
- (19) ウェルフレッド・バーチェット（新庄哲夫、石坂欣二訳）『広島・板門店・ハノイ』（河出書房新社、1972年）151-152頁。
- (20) 同上
- (21) W. バーチェット「二十六年目のヒロシマ」『世界』第309号、1971年8月、245頁。
- (22) 中村、前掲、309-310頁。
- (23) Burchett, “Atomic Plague,” *Daily Express*, Sep. 5, 1945, p. 1
- (24) Lawrence, op. cit. pp. 1 & 4; Homer Bigart, “A Month After the Atom Bomb: Hiroshima Still Can't Believe It,” *New York Herald Tribune*, Sep. 5, 1945. Reprinted in: Samuel Hynes, et al. eds., *Reporting World War II: American Journalism 1938-1946*, New York: The Library of America, 1995, pp. 675-680.

ビガートの原稿は単行本への再録版のため、*New York Herald Tribune* 紙で掲載された頁は不明。

- (25) ウェラー、前掲、222-227 頁。
- (26) 大佐古一郎『広島昭和二十年』（中央公論社、1975 年）224 頁；Bigart, op.cit., 680; Lawrence, op.cit., pp. 1 & 4.
- (27) Bigart, op. cit., p. 680; Lawrence, op. cit., pp. 1 & 4.
- (28) Lawrence, op. cit., pp. 1 & 4.
- (29) *Ibid.*
- (30) Bigart, op. cit., p. 676.
- (31) *Id.*, p. 679.
- (32) “William H. Lawrence, 56, Dies; National Editor of A.B.C. News,” *New York Times*, March 3, 1972.
- (33) “Homer Bigart, Acclaimed Reporter, Dies,” *New York Times*, April 17, 1991.
- (34) Bigart, op. cit., pp.675-680; Lawrence, op. cit., pp. 1 & 4.
- (35) Lawrence, op. cit., pp. 1 & 4.
- (36) 「長崎原爆：米記者のルポ原稿、60 年ぶり発見」『毎日新聞』
- (37) ウェラー、前掲、39 頁。
- (38) *Id.*, 34-39 頁。
- (39) *Id.*, 45-46 頁。
- (40) *Id.*, 163 頁。
- (41) *Id.*, 内容を基に、筆者がページ数から分析。
- (42) *Id.*, 50-65 頁。
- (43) *Id.*, 53 頁。
- (44) *Id.*, 32 頁。
- (45) *Id.*, 140 頁。
- (46) *Id.*, 233 頁。
- (47) Nakashima, “Hiroshima Gone, Newsman Finds,” *The New York Times*, p. 4.
- (48) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日、7-9 日。
- (49) Nakashima, “Hiroshima Gone, Newsman Finds,” *The New York Times*; 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日。引用した日本語訳は中国新聞から。
- (50) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日。なお同新聞は、Foreign Correspondents Club of Japan, Charles Pomeroy, ed., *Foreign Correspondents in Japan—Reporting a half century of upheaval: From 1945 to the Present*, Rutland, VT/Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing, 1998, に拠っている。
- (51) 注 18 参照。それ以降のものでは、Amy Goodman and David Goodman, *The Exception to the Rulers: Exposing Oily Politicians, War Profiteers, and the Media that Love Them*, New York: Hyperion Books 2004, pp. 293-295; Beverly Ann Deepe Kever, *News Zero: The New York Times and the Bomb*, Monroe, ME: Common Courage Press, 2004, p. 76 など。一方、ナカシマを取り上げているものは、筆者の知る限り、注 51 以外はない。
- (52) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 8 日。
- (53) *Id.*, 2000 年 10 月 11 日。
- (54) 検閲は正式には GHQ が「言論及新聞ノ自由ニ関スル覚書」を發布した 1945 年 9 月 10 日に始まった。それでも発足したばかりの GHQ は人手不足でしばらくの間本格的に始めることができなかつた。

め、その間何の拘束も受けずに取材と発信を続ける同盟通信に対してアメリカ人記者から不満が噴出し、GHQ 広報官に対して抗議が行われた。有山、前掲、126-129 頁；ブラウ、前掲、24 頁。

- (55) 注 18 参照。
- (56) “Gentlemen of Japan,” *TIME*, Sept. 10, 1945, p. 58.
- (57) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日。
- (58) ドウス、前掲、35 頁、42-47 頁。なお、アイバは 77 年、特赦を与えられた。
- (59) バーチェット「二十六年目のヒロシマ」『世界』309 号、246-247 頁。バーチェットによると、逃亡したオーストラリア兵捕虜に京都駅で出会い、占領軍が日本に上陸していることを収容所の捕虜に説明してほしいと頼まれたという。
- (60) Wyden、前掲、324-325 頁；ウィルフレッド・バーチェット（成田良雄、文京洙訳）『広島 TODAY』（連合出版、1983 年）、27 頁。
- (61) ボイヤーによると被爆地へのプレスツアー同様、この記者会見も「選ばれたジャーナリストのグループ」を対象にしたものだった。Boyer, op. cit., p. 187.
- (62) Wyden, op. cit., pp. 324-325; バーチェット、前掲、27-28 頁。
- (63) *Ibid.*
- (64) “No Radioactivity in Hiroshima Ruin,” *New York Times*, Sep. 13, 1945, Page 4.
- (65) Lifton and Mitchell, op. cit., p. 44.
- (66) 高橋、前掲、57 頁。
- (67) Deepe Kever, op. cit., p. 49-50
- (68) *Id.*, p. 51
- (69) Mayo, op. cit., pp. 293-295; ブラウ、前掲、190-192 頁。
- (70) 高橋、前掲、59 頁。
- (71) 堀場清子『原爆 表現と検閲—日本人はどう対応したか』（朝日選書、1995 年）68 頁。
- (72) “No Radioactivity in Hiroshima Ruin,” *The New York Times*, Sep. 13, 1945, Page 4.
- (73) キャサリン・コーフィールド（友清裕昭訳）『被曝の世紀—放射線の時代に起こったこと』（朝日新聞社、1990 年）、92 頁。
- (74) Robert J. Maddox, *Weapons for Victory—The Hiroshima Decision Fifty Years Later*, Columbia, MO: University of Missouri Press, 1995, p. 152
- (75) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日。ナカシマの原稿の全文と *The New York Times* に掲載された記事を対比させている。日本語訳は中国新聞から。
- (76) 筆者による分析。
- (77) 「ヒロシマ打電第 1 号」『中国新聞』2000 年 10 月 5 日。
- (78) スウィーニィ、前掲、283 頁。
- (79) ウェラー、前掲、224 頁。
- (80) 高橋、前掲、54 頁；ブラウ、前掲、161-162 頁。
- (81) スウィーニィ、前掲、10-22 頁。
- (82) 江藤、前掲、78 頁。
- (83) スウィーニィ、前掲、6 頁、10 頁。
- (84) 有山、前掲、10-12 頁。
- (85) *Id.*, 41-45 頁、66-68 頁。
- (86) *Id.*, 126-129 頁、167-171 頁。放送に関しては「日本ラジオ規則ニ関スル覚書」（ラジオコード、9 月 22 日）。

- (87) 江藤、前掲、192-194 頁。江藤は “press code” を「日本出版法」と訳した。
- (88) Id., 195-197 頁
- (89) 注 4 参照。
- (90) 堀場は一見検閲の緩みと受け取れる事後検閲への移行が、メディア内部でのより厳しい自己規制へとつながっていったと指摘する。『原爆 表現と検閲』97-100 頁。堀場はまた、それが米ソ間の冷戦や、朝鮮・中国と二つの社会主義国家の出現による、反共への占領政策への転換を示すものだったとも指摘している。『禁じられた原爆体験』10 頁。
- (91) 山本、前掲、291-332 頁； Mayo, op. cit., pp. 312-314. 米国による占領下日本の検閲に対しては、戦中の政策立案時からその目的と矛盾するという指摘があった。そうした声は戦後、外部からの批判とあいまって高まり、CCD の廃止につながったという。
- (92) 山本、前掲、252 頁。
- (93) 有山、前掲、41 頁； 江藤、前掲、42 頁。
- (94) 江藤、前掲、27-29 頁、42-46 頁。
- (95) 江藤、前掲、37-38 頁。
- (96) 江藤、前掲、133 頁。
- (97) 江藤、前掲、224 頁。
- (98) スウィーニィ、前掲、267-269 頁。
- (99) スウィーニィ、前掲、269 頁。
- (100) スウィーニィ、前掲、269-270 頁。
- (101) スウィーニィ、前掲、276-277 頁； Deepe Kever, op. cit., p. 54.
- (102) スウィーニィ、前掲、276 頁。
- (103) スウィーニィ、前掲、277 頁； Deepe Kever, op. cit., p. 56.
- (104) 高橋、前掲、98 頁。
- (105) “U.S. Atom Bomb Site Belies Tokyo Tales,” *New York Times*, Sep. 12, 1945, p.1.
- (106) William L. Laurence。先述のウィリアム・H・ローレンスではない。*New York Times* 紙社内では、二人を区別するために「原爆ビル」「ノン原爆ビル」と呼んだ。
- (107) W・L・ローレンス（崎川範行訳）『○の暁』（創元社、1950年）8-11 頁； Deepe Kever, op. cit., pp. 40-41.
- (108) Lifton and Mitchell, op. cit., pp. 51-52; “U.S. Atom Bomb Site Belies Tokyo Tales,” *New York Times*, Sep. 12, 1945, p.1.
- (109) “U.S. Atom Bomb Site Belies Tokyo Tales,” *New York Times*, Sep. 12, 1945, p.1.
- (110) Lifton and Mitchell, op. cit., p. 21; Deepe Kever, op. cit., p. 45
- (111) Ibid.; W・L・ローレンス、前掲、13 頁。
- (112) 最初の記事は “Drama of the Atomic bomb Found Climax in July 16 Test,” *New York Times*
- (113) Lifton and Mitchell, op. cit., p. 52; Deepe Kever, op. cit., pp. 56-57
- (114) Deepe Kever, op. cit., p. 57
- (115) Boyer, op. cit., pp. 49-58
- (116) 7月1日のエイブル実験は標的から逸れてしまったことや標的艦艇のうち2隻しか即座に沈没させなかったことから、期待外れという声が上がった。7月25日のベーカー実験は爆発の規模も大きく、放射能降下物も多量に降らせた。しかし、その場で人が亡くなることなく、リフトンらはそれを「最大の歪曲」をもたらしたと指摘している。Lifton and Mitchell, op. cit., p. 83-86

- (117) Lifton and Mitchell, op. cit., p. 86
- (118) ジョン・ハーシー (石川欣一、谷本清、明田川融訳) 『ヒロシマ増補版』 (法政大学出版局、2003年) pp. 211-212; Brendan Gibbon and Alexa Gutheil, *SparkNote on Hiroshima*, New York: Spark Publishing, 2002, p.1.
- (119) Hynes, op. cit., pp. 816-817
- (120) ハーシー、前掲、87-88頁、92頁、97-99頁、114頁。
- (121) ブラウ、前掲、148-149頁。
- (122) CCDはハーシーのルポには、原子爆弾の使用が「不当に残酷」であったという印象を与えかねない多くの文章が含まれているという意見であったが、CIEに意見を求めたところ、『ニッポン・タイムズ』がNew Yorkerと協定を結ぶことは対敵国通商法違反になると判断したという。ブラウ、前掲、148-149頁。
- (123) ブラウ、前掲、149-150頁; 袖井林二郎「原爆報道」『講座・コミュニケーション5 事件と報道』(研究社、1972年) 221頁。
- (124) ブラウ、前掲、149-150頁。
- (125) 袖井、前掲、221頁。
- (126) 堀場、『原爆 表現と検閲』、97-100頁。
- (127) 有山、前掲、231頁
- (128) Goodman, Amy and David Goodman, op. cit.; 堀場清子、『原爆 表現と検閲』、68頁。堀場は椎名麻紗枝の『原爆犯罪』(大月書店、1985年)に拠っている。
- (129) “Atom Bomb Killed Nagasaki Captives,” *New York Times*, Sep. 10, 1945, p. 1 & 5.
- (130) Ibid.
- (131) “Tex McCrary Dies at 92; Public Relations Man Who Helped Create Talk-Show Format,” *New York Times*, July 30, 2003
- (132) *Ibid.*
- (133) *Ibid.*
- (134) ウェラー、前掲、46頁。ここで一行は、各地域の司令官の許可は必要ないとしているが、同時に独自の検閲官がいるとも語っている。
- (135) ダグラス・ボイドらは、日本人の意識改革のための啓蒙・宣伝活動のために45年9月に設立された民間情報教育局(CIE)の米軍人が、指示を出す時に「これは命令ではなく、個人的助言なのだが…」と切り出すことが決まり文句だったと指摘している。Douglas A. Boyd and Catherine A. Luther, “American Occupation Control over Broadcasting in Japan, 1945-1952,” *Journal of Communication*, 47 (2) : 1997, p. 47
- (136) Karl T. Compton, “If The Atomic Bomb Had Not Been Used,” *The Atlantic Monthly*, 178 (12) : 1946, pp. 54-56
- (137) Henry Stimson, “The Decision to Drop the Bomb,” *Harper’s Magazine*, February 1947. Reprinted in: Bird, Kai and Lawrence Lifschultz, eds., *Hiroshima’s Shadow*, Stony Creek, CT: Pamphleteer’s Press, 1998, pp. 197-210.
- (138) ハーウィット、前掲、556頁。
- (139) “MEDIA; Journalism’s Greatest Hits: Two Lists of a Century’s Top Stories,” *New York Times*, March 1, 1999,
- (140) Boyer, op. cit., p. 209.

- (141) *Ibid.*
- (142) 高橋、前掲、111 頁。
- (143) ブラウ、前掲、211-212 頁。
- (144) Paul Vincent Miller, “Censorship in Japan,” *The Commonweal*, 46 (2) : 1947, pp. 36
- (145) ブラウ、前掲、182 頁。
- (146) 江藤のこうした意見に対しては、戦前戦中の国内の情報統制について言及していないとして批判する声もある。山本、前掲、554-558 頁。

参考文献

<日本語文献>

- 朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』（朝日新聞出版、2008 年）
- 有山輝雄『占領期メディア史研究—自由と統制・1945 年』（柏書房、1996 年）
- ウェラー、ジョージ（小西紀嗣訳）『ナガサキ昭和 20 年夏』（毎日新聞社、2007 年）
- 江藤淳『閉された言語空間』（文春文庫、1994 年）
- 大佐古一郎『広島昭和二十年』（中央公論社、1975 年）
- 栗原貞子『黒い卵—占領下検閲と反戦・原爆詩歌集』（人文書院、1983 年）
- コーフィールド、キャサリン（友清裕昭訳）『被曝の世紀—放射線の時代に起こったこと』（朝日新聞社、1990 年）
- 笹本征男『米軍占領下の原爆調査—原爆加害国になった日本』（新幹社、1995 年）。
- ジュノー、マルセル（丸山幹正訳）『ドクター・ジュノーの戦い—エチオピアの毒ガスからヒロシマの原爆まで 増補版』（勁草書房、1991 年）
- スウィーニィ、マイケル（土屋礼子、松永寛明訳）『米国のメディアと戦時検閲』（法政大学出版局、2004 年）
- 袖井林二郎「原爆報道」『講座・コミュニケーション5 事件と報道』（研究社、1972 年）
- 袖井林二郎『反核のアメリカ』（潮出版社、1982 年）
- 高橋博子『封印されたヒロシマ・ナガサキ—核実験と民間防衛』（凱風社、2008 年）
- 竹山昭子『戦争と放送—史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』（社会思想社、1994 年）
- 田村吉雄編『秘録大東亜戦史／原爆国内編』（富士書苑、1953 年）
- ドウス昌代『東京ローズ』（文芸春秋、1990 年）
- ハーウィット、マーティン（山岡清二監訳、渡会和子・原純夫訳）『拒絶された原爆展』（みすず書房、1997 年）
- ハーシー、ジョン（石川欣一、谷本清、明田川融訳）『ヒロシマ増補版』（法政大学出版局、2003 年）
- バーチェット、ウィルフレッド（成田良雄、文京洙訳）『広島 TODAY』（連合出版、1983 年）
- バーチェット、ウィルフレッド（新庄哲夫、石坂欣二訳）『広島・板門店・ハノイ』（河出書房新社、1972 年）
- 藤原帰一『戦争を記憶する—広島・ホロコーストと現在』（講談社現代新書、2001 年）
- ブラウ、モニカ（立花誠逸訳）『検閲：禁じられた原爆報道』（時事通信社、1988 年）
- 堀場清子『原爆 表現と検閲—日本人はどう対応したか』（朝日選書、1995 年）
- 堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、1995 年）
- 森重昭『原爆で死んだ米兵秘史』（光人社、2008 年）
- 山本武利『占領期メディア分析』（法政大学出版局、1996 年）
- ローレンス、ウィリアム・L（崎川範行訳）『〇の暁—原子爆弾の発明・製造・決戦の記録』（創元社、1950 年）
- 『中国新聞』
- 『毎日新聞』
- 『世界』

<英語文献>

- Boyd, Douglas A. and Catherine A. Luther, 1997, "American Occupation Control over Broadcasting in Japan, 1945-1952," *Journal of Communication*, 47 (2) : pp. 39-59
- Boyer, Paul, 1985, *By the bomb's Early Light*, Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press
- Gibbon, Brendan and Gutheil, Alexa, 2002, *SparkNote on Hiroshima*, New York: Spark Publishing
- Compton, Karl T., 1946, "If the Atomic Bomb Had Not Been Used," *The Atlantic Monthly*, 178 (12) : pp. 54-56
- Deepe Kever, Beverly Ann, 2004, *News Zero: The New York Times and the Bomb*, Monroe, ME: Common Courage Press
- Goodman, Amy and David Goodman, 2004, *The Exception to the Rulers: Exposing Oily Politicians, War Profiteers, and the Media that Love Them*, New York: Hyperion Books
- Hynes, Samuel, et al. eds., 1995, *Reporting World War II: American Journalism 1938-1946*, New York: The Library of America
- Lifton, Robert J. and Greg Mitchell, *Hiroshima in America: A Half Century of Denial*, New York: Avon Books
- Lindee, M. Susan, 1994, *Suffering Made Real*, Chicago, IL: University of Chicago Press
- MacArthur, Douglas, 2001, *Reminiscences*, Annapolis, MD: Naval Institute Press
- Maddox, Robert J., 1995, *Weapons for Victory*, Columbia, MO: University of Missouri Press
- Mayo, Marlene J., 1984, "Civil Censorship and Media Control in Early Occupied Japan," Wolfe, Robert, ed., *Americans as Proconsuls: United States Military Government in Germany and Japan 1944-1952*, Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, pp.263-320
- Miller, Paul Vincent, 1947, "Censorship in Japan," *The Commonweal*, 46 (2) : pp. 35-38
- Stimson, Henry, 1947, "The Decision to Drop the Bomb," *Harper's Magazine*, February 1947. Reprinted in: Bird, Kai and Lawrence Lifschultz, eds., 1998, *Hiroshima's Shadow*, Stony Creek, CT: Pamphleteer's Press, 197-210.
- Wyden, Peter H., 1984, *Day One*, New York: Simon & Schuster
- TIME*
- The New York Times*
- The New Yorker*

金井利博の思想と行動

富沢 佐一

はじめに

「原爆は威力として知られたか。人間的悲惨として知られたか」と、痛烈な問いかけをしたことで知られる金井利博は、戦後27年余り在籍した中国新聞社で記者として、あるいは論説委員として、広島に投下された原爆の悲惨さを告発し続けた。キャンペーン記事や社説などを紙面で展開しただけでなく、国家の責任において原爆被害の実態調査を行うべきとの考えに基づく「原水爆被災白書」作りを提唱し、自らも被災資料収集の先頭に立った。さらに、活動を通じて積み重ねた思考を体系化し『核権力—ヒロシマの告発』⁽¹⁾を著した。

金井の思想と行動、強烈な個性は原爆報道に携わった若い記者らに大きな影響を与え、「金井学校」と呼ばれたように一群の記者を育てた。その中の平岡敬や大牟田稔らが大きな役割を果たした昭和40(1965)年の「ヒロシマ20年」の記事は、新聞界の最高の栄誉である日本新聞協会賞を受賞するなど高い評価を得て、その後の中国新聞社の原爆報道の原点となった。「原水爆被災白書」の提唱は運動として広がり、要望書を政府に提出するまでの高まりを見せたほか、原爆資料返還運動や広島への復元調査運動など多くの副産物を生んだ。

一方で金井は記者として、あるいは支援者として地方文化の向上に深く関わり、中国山地や瀬戸内海の取材の先駆けとなるなど多方面に影響を残した。地方文化、中国山地、瀬戸内海、原爆など多岐にわたるテーマを次々に追い、時に記者の枠を踏み越えた金井だが、その行動は「地域社会の、あるいは地域住民の復権を目ざした点で一貫して」⁽²⁾おり、地域の問題と向き合って思考を重ね普遍的なテーマに昇華したのであった。この章では金井のジャーナリストとしての行動と思想の形成、展開、その影響について概略を述べる。

1. 思想の芽生え

金井は大正3(1914)年1月1日⁽³⁾、広島県双三郡三次町、現在の三次市に、金井英一郎、トキ⁽⁴⁾夫妻の長男として生まれた。金井家は代々酒造業を営む旧家であり大地主であって、古くは農具、鉄瓶など武器以外の鉄製品の原料である「商鉄」の間屋もしていた⁽⁵⁾。英一郎は後に三次町長を務めた⁽⁶⁾。金井の下には3人の妹があり1人は早世したが、末の妹信子は後、中国新聞社の社長、会長として同社を飛躍的に発展させた山本朗に嫁いだ。この姻戚関係が、金井のジャーナリストとしての人生を大きく決定づけることになった。

トキは現在の岡山県高梁市の素封家、赤木家に生まれた。鋭い感性と明晰な頭脳を備えて幼少の頃から教養を積み、小説を雑誌「白樺」に投稿したことから作家、武者小路実篤らとの交流が生まれた。家から逃避するように宮崎県の「新しき村」を訪ねたこともある。歌誌「くれなる」に参加し、短歌は一時歌人、斎藤茂吉の指導を受けた。昭和11(1936)年には、金井ら家族を連れ奈良市に住んでいた作家、志賀直哉を訪ねている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。婦人会やPTAの活動に積極的に取り組み「三次でもっとも畏敬された女性」⁽⁹⁾であった。

作家、山代巴は、代表作「荷車の歌」を三次地方で取材して書いた際、トキから激励や助言を受け「(トキの)保護の下ではじめて書くことができた」と振り返っている⁽¹⁰⁾。トキは政治的な党派とは無縁だったが、30(1955)年の第1回原水爆禁止世界大会に向け山代らが署名、募金運動をした際には「情熱的な励まし」を送った⁽¹¹⁾。彼女はまた小林和作、太田忠らの画家を支援するなど、後の金井の行動と類似点が多い⁽¹²⁾。金井がトキから哲学・文学への志向や平和問題への関心をはじめ多大な影響を受けたことがうかがえる。

金井は広島県立三次中学校、広島高等学校文科甲類、九州帝国大学法文学部経済科と進み⁽¹³⁾、14(1939)

年9月、東京朝日新聞社に入社して編集局に配属されたが、同年11月、徴兵検査で甲種合格となり、入営のため退社した⁽¹⁴⁾。入営後は陸軍戦車第6連隊、第10師団司令部を経て関東軍に所属し、同軍建設団司令部の主計中尉として満州で終戦を迎えた。20年10月から1年2カ月余りソ連軍によって抑留され、復員したのは22年1月であった⁽¹⁵⁾。抑留中は辛酸をなめた⁽¹⁶⁾。

このような時代と環境の中で成長した金井は、生きる意味を絶えず問い続ける哲学青年であり、出征したら死ぬかもしれないと考えて「自分の生命、およびその消滅の理論的な意味」を80枚の論文にまとめたこともあった⁽¹⁷⁾。九州帝国大学法文学部会誌では、近代西欧文化を「日本精神」によって吸収、克服すべきであると述べ⁽¹⁸⁾、復員した翌年の随筆では、生産手段を媒介とする人間関係と表現手段を媒介とする人間関係を対置して論じ、人間の持つ表現への情熱をたたえる⁽¹⁹⁾など、思考は文化的なものへと傾斜していった。

2. 文芸活動の支援

昭和22(1947)年4月、金井は中国新聞社へ入社した⁽²⁰⁾。関係者の証言を総合すると金井は家業を継ぐことを期待されていたが、自身は朝日新聞社へ戻りたい意向だったといわれる。しかし、三次町出身で、金井の父英一郎と極めて親しい関係にあった野村秀雄(後NHK会長)は既に昭和21年4月、朝日新聞社社長を最後に同社を退社していた。さらに、金井が満州で知り合った小川満津子(みつこ)を妻として連れて帰ったことなどの事情も絡み、中国新聞社記者として生きる道を選んだと考えられる。同社では当初出版部へ、翌年2月には社会部へ配属された。当時わが国の出版界は、国民が心の渇きを癒そうとするように本が売れて活況を呈しており、広島でも次々に雑誌が創刊された⁽²¹⁾。同社も前年5月、中国文化連盟発行『中国文化』に次ぐ早い時期に雑誌『月刊中国』を創刊した。金井は記者としての取材の傍ら、文学を志望する若い世代とよく集まり、『月刊中国』への執筆を勧めた⁽²²⁾。「無名の青年たちの鋭い感性と向き合うのが無上の楽しみでもあった」⁽²³⁾。

その後中央の出版社が地方で攻勢を強める中、広島の雑誌は24年ごろから相次いで姿を消し、『月刊中国』も同年5月、『読物中国』と改題した後、翌年3月に廃刊した⁽²⁴⁾。金井は『読物中国』を純文芸誌に切り替えようと作家、阿川弘之らとも連絡をとって計画を進めたが、実現しなかった⁽²⁵⁾。そこで金井は方向を変え自ら奔走、24年4月に広島ペンクラブを発足させた。事務局を中国新聞社に置いて自身が連絡係を務めた⁽²⁶⁾。

同クラブは文化人の親睦を図るのを目的としていたが、翌25年4月、日本ペンクラブの「広島の会」が川端康成会長も来広して開かれた時には共同して「世界平和擁護のためペンマンとして努力を果たす」との宣言を発表した⁽²⁷⁾。金井が、クラブの活動として原爆関係資料の収集に乗り出したのもこの頃だった。これは後に、原爆被災資料広島研究会を生み出す先駆けとなった。

26年3月、原爆文学の傑作「夏の花」で知られる作家、原民喜が鉄道自殺を遂げた。朝鮮戦争がきっかけで第3次世界大戦が起こるかもしれないという危機感が動機との見方が強かった⁽²⁸⁾。死後まもなく彼の詩碑を作る話が持ち上がり、広島ペンクラブは日本ペンクラブなどとともに同年11月、彼の生誕地に近い広島城内に設置した。金井はこの時も詩碑建設広島委員会の事務局を中国新聞社で引き受け、広島高等師範学校⁽²⁹⁾在学中の後の作家、梶山季之らとともに実務をこなした⁽³⁰⁾。

原の自殺を報じた同年3月15日付の中国新聞には、彼の詩「永遠のみどり」の全文が筆跡をそのまま写真製版にして印刷されている。金井が前年、新聞に掲載したいからと原に手紙で要望していたものだった⁽³¹⁾。原の詩碑建立の計画を報じた記事は夕刊2面のトップで、遺書「若き友へ」の全文や建設委員会の会合風景など写真2枚を添える破格の扱いだった⁽³²⁾。

金井は27年2月学芸部に移り、32年11月次長、34年1月部長となって38年3月まで通算11年余り同部に在籍した⁽³³⁾。ここで金井は文芸活動への支援を存分に行った。まだ週刊誌のトップ屋だった梶山季之に、

初の新聞連載を勧めたのもその一つだった。彼の志が小説にあることを知っていて、「郷土が産んだ頼山陽を小説に書いてみませんか」と再三再四勧めた⁽³⁴⁾。小説「雲耶山耶」は35年1月11日から180回中国新聞に連載された。

歌人、近藤芳美に「中国歌壇」の選者を依頼したのも学芸部時代だった。26年頃、広島で開かれた近藤らの歌会と講演会に金井が顔を出し、話しているうち広島高等学校の同期生同士であることが分かった。その後は、会えば徹夜で語り明かし、広島市南区比治山の陸軍墓地を訪れて二人で墓石の文字を読んだこともあった⁽³⁵⁾。近藤の選歌は28年8月から始まった。朝日新聞の選者になる2年前である。以来、近藤は平成16(2004)年9月まで、マスコミでは異例の50年余にわたり中国歌壇の選者を務めた。

学芸部に在籍した時代にも、金井は記者として自ら取材、執筆しただけでなく、地元の文化人や若者たちと積極的に交わり、才能を認めた人には寄稿を勧めて「発表の場」を提供した。原稿にはほとんど口出しをしなかった。梶山に連載小説を依頼した時には「好きなように勝手に書いてください。面白くなくても構わないから」と述べた⁽³⁶⁾。作家、小久保均は「金井さんは何度も原稿を書かせてくれました。一度も修正されたという記憶はありません」と振り返っている⁽³⁷⁾。「原爆文学論争」に紙面を提供したのもこの頃である⁽³⁸⁾。

中国新聞学芸部は地元の人々や帰省した文化人らが入り出す広島のサロンの観を呈した⁽³⁹⁾。金井の面倒見のよさがもたらしたものである。後に金井の葬儀の際、梶山は弔辞で「戦後の広島の文化を育てたのは、金井さん、あなたです」と述べたが⁽⁴⁰⁾、金井は広島の文化の中心にいたといえる。それは、同時に金井自身も育てた。後に平岡敬が、金井の下で「『人間』の側から核兵器の問題をみていこうという視点が見えた」⁽⁴¹⁾と書いているが、金井もまた原爆を「人間」の側から見る視点を文化人から得たと考えられる。⁽⁴²⁾

3. 地域へ

金井が交流した多くの人々の中で、彼が最も影響を受けたのが民俗学者、宮本常一と山代巴であったことは自他ともに認めている。宮本は民俗調査で全国を歩き、山代は農村を歩いて婦人運動と取り組みつつ作品を生み出した。それまで広島の文化運動を担った人々は、いずれ東京へ出て行くことを目指した「東京向き」であり、金井自身もそうだった。これに対し、「(日本人の大多数を占める)地方の民衆の本当の言葉を抜き出す力を持っていた」⁽⁴³⁾宮本や山代⁽⁴⁴⁾に、腰を据えて地域へ向かう方向を学んだのであった。

昭和28(1953)年、宮本が中学生向けに著した『日本の村』に金井が感動し紙面1頁を使って紹介したところ、広島を通り掛かった宮本が広島駅で途中下車して金井に電話、駆け付けた金井がインタビューしたのが出会いだった⁽⁴⁵⁾。宮本に啓発された金井は30年、中国山地に取材し「たたら」の歴史を12回連載した。生家が商鉄を扱っていたこともあったろう。記事は地元の鉄・鋳物業者が、読み捨てにするには惜しいとスポンサーになり『鉄のロマンス』⁽⁴⁶⁾として出版されて、鉄の研究グループ結成の契機になった⁽⁴⁷⁾。

この縁で宮本は31年、中国新聞夕刊に「中国風土記」を161回連載、これは『風土記日本』全8巻の出版に発展した。翌年、宮本や金井らの懇談の中から瀬戸内海を現地ルポする構想が膨らみ、同年末から34年にかけて朝刊に特別取材班による「瀬戸内海」が353回連載された。金井も一部を執筆した⁽⁴⁸⁾。この企画で中国新聞社は初めて日本新聞協会賞に輝いた。以後、同社は「中国山地」(41、42年)など地域ルポの長期連載を次々に展開した。また、「瀬戸内海」の特別取材班方式は37年の「ヒロシマの証言」に受け継がれ、同40年の「ヒロシマ20年」につながった。

山代と金井との交流を示す具体的な記述は、公刊物にはほとんど見当たらない。日本共産党員としての活動歴が長い山代が、金井に迷惑をかけまいと思ったのでは—というのが、原爆小頭症の問題を掘り起こした元中国放送記者、秋信利彦の見解である⁽⁴⁹⁾。山代と金井の母トキとの交際が二人の友情の背景にあったのは、金井自身が認めている⁽⁵⁰⁾。二人の出会いは「山代さんが広島に住んでいた頃、取材で家を探して行った」と

金井は述べているので⁽⁵¹⁾、27年から翌年にかけてであろう。

そのころ、山代は詩人、峠三吉らと被爆者の詩集『原子雲の下より』⁽⁵²⁾や被爆者の手記集『原爆に生きて』⁽⁵³⁾を編集していた。金井が次第に原爆問題に傾斜していった時期と重なる⁽⁵⁴⁾。27年は対日講和条約が発効し、原爆報道を規制していたプレスコードが効力を失った年である。13年後の40年、山代が編集して20年目の被爆者のルポ『この世界の片隅で』⁽⁵⁵⁾を出版した際には、金井が地元の執筆者の根回しをし、発会式やその後の会合の多くも金井邸でやるなど大きな支援をしたが⁽⁵⁶⁾、あくまで裏方に徹した。

4. 原爆問題の展開

昭和27(1952)年8月6日号の『アサヒグラフ』は「原爆被害の初公開」特集号と題し、広島・長崎の被害者の悲惨な写真多数を掲載した。プレスコードによってそれまで公開されたことのない写真の数々は、日本中に衝撃を与えた⁽⁵⁷⁾。金井はこの時号泣したとの証言もある⁽⁵⁸⁾。広島の最大の課題が原爆であるにもかかわらず、広島のマスコミ人として先を越された悔しさであった。「講和条約まで、私も視野が狭いせい、原爆症で一人、また一人と死んでいる事実には気がつかなかった」と、金井は回想している⁽⁵⁹⁾。

金井は広島への原爆投下を満州で聞いた⁽⁶⁰⁾。肉親に被害者はいなかったが、金井の最初の妻、鈴子⁽⁶¹⁾の叔父で養父でもあった岡田寿吉は長崎被爆時、同市の市長をしており、妻と二人の娘が自宅で即死した。岡田は市長を辞任した後に消息を絶ち、7年8カ月後の31年、近郊の山中で自殺しているのが発見された⁽⁶²⁾。金井にとっても衝撃的な事件だった。金井の母、トキが三次へ逃れてきた被爆者の介護に当たったことも、金井は重く受け止めていた⁽⁶³⁾。

中国新聞社に入社した頃、プレスコードによって原爆被害の実態や悲惨さを伝える記事は皆無に近かった。同社の基本的な論調も「広島の復興」にあった。そのような中で金井は、本来の書物好きもあって早くから原爆文献の収集に着手し、やがて前述のように広島ペンクラブの事業として収集を続けた。27年10月、金井は署名入りの連載記事「原爆の記録」(上・中・下)で原爆文献を紹介し「後世への戒めとして原爆の記録を集めて残す」重要性を指摘している⁽⁶⁴⁾。原爆文献の連載特集は翌年1回⁽⁶⁵⁾、30年に2回⁽⁶⁶⁾と繰り返した。

これらの記事で金井は、原爆を「落とされた側」の文献だけではなく「落とした側」の文献も重視。イギリスの物理学者P・ブラケットの著『恐怖・戦争・爆弾』などを引用しつつ、広島への原爆投下が、米兵の犠牲を最小限度に抑えるという表向きの理由からではなく、既に始まっていた東西冷戦の中でソ連に先手を打つためであった、などの主張を展開した。金井が翻訳書を含む膨大な書物をあさり、原爆が広島に投下された経緯や意味に迫ろうとしたのがよく分かる。

一方、「落とされた側」の広島が人類に与えることができるのは、「落とされた現実」の報告とそれに基づく忠告であるとし、被爆直後からの文芸や出版活動の歴史を検証しつつ、原爆文献を一般の人が広く利用できる所がないとも指摘している。22年、プレスコード下の広島で被爆の惨状を短歌に詠んだ歌集『さんげ』を、死刑になるかもしれないと思いつつ、密かに150部出版した正田篠枝を大きく取り上げたのもこのシリーズだった。

29年3月にビキニ環礁で、第5福竜丸が死の灰を浴びた事件は、またたく間に初の全国的な原水爆禁止運動に広がった。金井が、事件の前と後とで新聞に原爆の2文字が現れる回数がどう変わったか調べたところ、事件以前は週一回平均だったのが事件以後は1600回になった—と、歴史学者、今堀誠二は書いている⁽⁶⁷⁾。マスコミの原爆報道はビキニ事件を契機に一気に増えたのである。金井が早くから丹念に新聞を切り抜いて、今堀らに資料を積極的に提供していた事実をも物語る記述である。

5. 原水爆被災白書作りの提唱

金井が学芸部へ異動した昭和27(1952)年以後、原爆問題に関する署名入りの記事や、彼が司会を務める座談会の記事が目立つ。翌年の「羽ばたく原爆の魔神」と題する2回連載の記事⁽⁶⁸⁾では海外の出版物を引用しつつ、アメリカで国家と独占企業が合体した原子兵器産業が、既に10万人を雇用するほど巨大化している事実などを紹介し、人類の上に原水爆が新たな魔神として君臨する体制を裸にしなければならない—と述べている。ここには、後の『核権力』の思想の萌芽が見られる。

同じ年に金井は、被爆直後の広島で医学調査をした都筑正男東京大学名誉教授を囲む座談会「原爆と医学」を4回にわたって連載した。ここでは、原爆傷害の原因を分析した論文の中の活字多数が検閲によって伏せ字にされ、都筑が公職追放されるなど、占領下における原爆研究の抑圧について具体的事実を聞き出している⁽⁶⁹⁾。この記事を読んだ広島出身の作家、大田洋子は金井に「『原爆と医学』は画期的で他の大新聞には出来ないことと存じます。作家として何らかのことをする決意を新たにいたしました」との手紙を送ってきた⁽⁷⁰⁾。

33年8月4日の朝刊には「いつ出る原爆白書」の見出しで、1頁の大半におよぶ座談会の記事が載った。当時広島大学教授だった今堀誠二をはじめ倫理学の森滝市郎、物理学の佐久間澄ら各分野の8人が出席。23年頃、「一軒一軒を丹念に復元してゆく調査」をやろうとしたが占領軍によるタブーのため中止した事実や、被害者の正確な数すら把握されていないなどの問題が出され「科学的総合研究によって“原爆白書”をつくり、世界に発表することが“ヒロシマを繰り返させない”ための被爆国の義務—と結論付けている⁽⁷¹⁾。

これより先、7月31日付夕刊「時評」欄では「“原爆白書”がない！」と題し①被爆者全体の動態調査がないため診療・援護対策が遅れている②この種の調査は昭和25年の国勢調査に付帯させたことがあるだけだ③医学的調査に社会的な動態調査を合わせ行ってこそ世界に告知する“原爆白書”になる、と主張した。座談会とセットで展開されており、原爆問題の核心を探り当てた意気込みがうかがえる。金井は32年1月から論説委員を兼務、38年3月からは論説委員専任になり⁽⁷²⁾、社説などでこの考えをしばしば展開した⁽⁷³⁾。

白書作成の考え方自体はこれより先、31年に広島大学教授、久保良敏が被爆者の調査資料をまとめ日本被爆者団体協議会の大会に提出したのがきっかけとなって、32年8月、原水爆禁止日本協議会の第3回原水爆禁止世界大会広島大会で提起された⁽⁷⁴⁾。同協議会はその後、国による被爆者実態調査の呼び水にするため、36年7月に石井金一郎、伊東壮ら科学者を中心とした9人の執筆による『原水爆被害白書』⁽⁷⁵⁾を刊行した。

39年8月5日、広島市で開かれた原水爆被災三県連絡会議主催「文化人・学者部会」で、金井は「原水爆被害白書を国連へ提出の件」と題する提案をした。「原爆は威力として知られたか。人間的悲惨として知られたか」で始まるこの提案で金井は、「原水爆は人間的悲惨の極みとしてはいまだ知られていない」として、全国に散在する人々も含めた全被爆者の生活と健康の実態調査を日本政府が行い、公式の「原水爆被災白書」を作成して国連機関を通じ世界へアピールすべきだと訴えた⁽⁷⁶⁾。

原爆の人間的悲惨が国際的に知られていない主な理由として、20年秋の米軍側原爆災害調査団が「放射能の影響によって死ぬべきものは既に死に絶え、残存放射能による影響は認められない」と発表して後、広島、長崎の真相を報道することがプレスコードによって禁止されていたことなどを挙げる。政府による公式の白書を求めたのは、日本の平和運動が分裂し政党系列化している現状ではこの方法しか日本国民全体の声として受け止めてもらえないからとしている⁽⁷⁷⁾。前年の原水爆禁止運動の分裂に対する痛烈な批判である⁽⁷⁸⁾。

6. 白書運動の広がり

金井がこの提案を行った時、作家、大江健三郎は雑誌『世界』に連載を書くため会議を取材していた。若

い記者から、広島的一般庶民は原水爆体制について怒りをいだいているようではないじゃないか—との質問が出た⁽⁷⁹⁾。「生真面目な維新の下級武士といった印象」で報告を続けていた金井は涙ぐまばかりに激高して「庶民にも怒りはあるが、それを表わす方法に迷っているのではないか？われわれもそれに迷っているのではないのでしょうか？」と答えた、大江は『ヒロシマ・ノート』⁽⁸⁰⁾に記している。

大江は、金井の怒りに「この19年間、忍耐しつづけたものの総量をうかがわせるにたる激高」をみて、金井のことを「被爆して死んだ者たちの声において語ることを願っているジャーナリスト」と表現した。そして、人間回復の拠点を広島に求めた旅の締めくくりに、金井や広島原爆病院院長、重藤文夫ら「真に広島的人なる人々にめぐりあった」とし、「僕は原水爆被災白書の運動に参加する。…僕がもっとも正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したいと考えるのである」と書いた⁽⁸¹⁾。

金井の提案を受け、今堀誠二ら広島、山口両大学の研究者らで作る平和問題研究グループ談話会が立ち上がった。①40年の国勢調査で死没者も含め原爆被災者の実態調査を行う②科学の総力を尽くして被災白書を作成する③国際的な原水爆被害の科学研究をするよう政府から国連に提案する—などを提唱し⁽⁸²⁾、翌40年8月には佐藤栄作首相に原爆被災白書作成を求める要望書を手渡した。元東京大学学長、茅誠司らの世界平和アピール7人委員会をはじめ著名人もこれを支持し、要望書に連署した⁽⁸³⁾。

談話会の活動は同年12月、茅を委員長とし各界の著名人が参加した原爆被災白書推進委員会の結成に発展⁽⁸⁴⁾、原水爆被災白書をすすめる市民の会（糸川成辰会長）の協力もあって41年6月、政府に「要望書」を提出した。金井は委員に名を連ね要望書執筆に加わった。大江も加入した。終戦直後の災害調査が冷戦のあおりで中止となり「人類が被爆の経験を生かし得なかったことは痛恨のきわみ」であり「白書によって原爆の実態を世界に知らせ、人類を核戦争の危険から救い出すことが日本国民の使命である」と訴えている⁽⁸⁵⁾。

日本学術会議も運動を全面的に支持し、42年、原子力特別委員会の中に原爆被災資料小委員会を設けて、政府に資料の収集保存を訴えた⁽⁸⁶⁾。このような高まりの中、40年11月、厚生省は全国の被爆生存者を対象とした調査を初めて実施した。広島大学原爆放射能医学研究所は42年6月から爆心地復元調査を行い、これを拡大する形で広島市は44年4月、原爆被災全体像調査を開始した。これはその後、さまざまな行政施策に受け継がれた。

42年10月、ウ・タント国連事務総長の協力で国連科学委員会編「核兵器使用の影響と核兵器の開発をおこなう諸国の安全保障と経済的諸影響に関する報告書」が発表された。今堀は白書運動の成果と指摘する⁽⁸⁷⁾。原爆爆心地復元運動や原爆ドーム保存運動などへの影響も指摘されている。金井は一方で、政府が腰を上げるまで待てないと43年2月、原爆被災資料広島研究会を結成。手記や文学、記事、遺物、遺品などあらゆる資料の集大成を目指し、軍人恩給を注ぎ込んで『原爆被災資料総目録』第1－3集を5年間で刊行した⁽⁸⁸⁾。

このような、運動のさまざまな広がりにも関わらず、政府の消極的な姿勢を変えて「原爆被災白書」を出させることはできなかった。しかし、広島女学院大学教授、宇吹暁は、原爆被災白書運動について「原水爆禁止運動の掲げた諸課題の中の原爆被害にかかわる課題が、運動体以外の担い手によって従来の枠組みを超えて展開された運動であった。それは『被爆体験』を国民的な体験として定着させてゆく役割を果たした」と総括している⁽⁸⁹⁾。

7. 金井学校

平岡敬が社内の異動で学芸部に移ったのは昭和35（1960）年だった。27年に入社以来、第一整理部において取材活動と縁がなかった平岡だが、西ドイツの雑誌の紹介記事を書いて学芸部に持ち込んだことなどを部長の金井が評価し、引っ張ったのである。金井は平岡に「原爆担当」を命じた⁽⁹⁰⁾⁽⁹¹⁾。28年に入社した大牟

田稔は、文芸活動を通じて金井とは早くから親しい関係にあった。38年に取材部門の東京支社編集部へ異動となり、原爆取材も始めたが、平岡とともに金井の情熱や執念に大きな影響を受けた。

39年7月、本土復帰前の沖縄で広島・長崎被爆者連盟が結成された。沖縄における被爆者の存在に衝撃を受けた大牟田は沖縄を訪れ、ルポを11回連載した⁽⁹²⁾。平岡は40年春、見知らぬ韓国の人から救いを求める手紙を受け取ったのがきっかけで韓国の被爆者の存在に気付き、私費で訪問して取材した。貧しさと社会的な無関心の中で、見捨てられたのも同然の人たちだった。やはり、ルポを10回の連載記事にまとめ、その一部は加筆して雑誌『世界』に発表した。大牟田は被爆小頭症の問題にも関わった。

被爆20年目の40年夏、1頁全てを使った特集記事「ヒロシマ20年」が朝刊に30回連載された。報道部記者が被爆者にインタビューした「世界にこの声を」、平岡が平和への取り組みをまとめた「炎の系譜」など3本で構成し、大牟田も協力取材に当たった。他に例のないこの企画はその年日本新聞協会賞を受賞した。これに平岡、大牟田の韓国、沖縄ルポなどを加え、2人が中心となって編集した広島の記録シリーズ3冊⁽⁹³⁾が41年、未来社から出版され、毎日出版文化賞を受賞した。未来社を紹介したのは宮本常一だった⁽⁹⁴⁾。

本の「あとがき」で編集局長、森脇幸次は「私たちは被爆者をまず人間としてみることから出発したい」と書いた。金井と共通する視点である。同社社報での対談で平岡が「賞をもらおうが、本ができようが“原爆”の問題は少しも解決したことにはならない」と言うと、大牟田は「これからもますます執念をもって原爆の問題を追求し続けてゆかねばならないということだ」と述べた⁽⁹⁵⁾。その言葉通り同社は原爆問題の企画を毎年展開。60年にも「ヒロシマ40年」が新聞協会賞を受賞するなど、他紙を圧倒する原爆報道を展開した。

金井が資料収集の拠点として借り上げていた広島市中区中島町のマンションには、平和問題を志す若者ら多くの人々が入り出した。その一人、田城明は中国新聞社に入社後、独学で英語をマスターし、やがて記者に採用されて、海外を中心に広く核問題取材した。原発事故などによる世界の放射線被爆者を追った「世界のヒバクシャ」のメンバーとして平成2（1990）年、新聞協会賞を受賞し、米国の政策決定者や物理学者へのインタビューシリーズでボーン・上田記念国際賞を受賞するなど、マスコミ関係の賞を総ざらいした⁽⁹⁶⁾。

いつの頃からか金井と、その影響を受けた記者たちは「金井学校」と呼ばれるようになった。平岡、大牟田はもちろん、「ヒロシマ20年」に携わった永田守男、渡辺忠信らを総称する言葉と考えられる。金井は社外の人々にも分け隔てなく接してきただけに、秋信利彦や梶山季之らも含めて呼ばれることがあり、児童文学者、中島竜美や小久保など、自ら金井学校の「生徒」と考えている人は多い。田城も自らの仕事を、金井の延長線上にあると認めている⁽⁹⁷⁾。

平岡は平成3年、広島市長に当選し2期8年務めた。大牟田を平和文化センター理事長に迎え、そこを中心に積極的な平和行政を展開、アジアへの謝罪を盛り込んだ平和宣言やハーグ国際司法裁判所での核兵器の違法性の主張などは、市の平和への姿勢を大きく進めた。平岡は金井に関して、「私が教えられたのは、広島に生きる記者としての目のすえ方と、執拗なまでの対象へのくいさがりであった。（その後も）原爆問題への関心は薄らぐことはなかった」と回想する⁽⁹⁸⁾。

8. 核権力

昭和45（1970）年6月、金井は三省堂から『核権力—ヒロシマの告発』を出版した。平岡、大牟田らから強く勧められ、3年がかりで執筆した労作である。広島における人間的悲慘を根底に据え、怨念を込めて核権力の構造をえぐり出すとともに、核廃絶への道を探ろうとした本であり、世界に訴えうる強固な理論の構築を目指して長年思考し、独特の論理を積み重ねてきた彼の到達点を示している。出版されると大きな反響を呼び起こした。

同書で金井は、原爆被爆が人災であるという明快な認識から、人災をもたらしたものの本質を凝視する。

それは、核兵器を開発し、核戦力を展開、行使する国家権力、すなわち核権力であり、それは人間そのものの力であると見抜く。そして、日本の「官」がアメリカの核抑止力に依存する形で核権力につながっていて広島、長崎の体験の上に立脚していないため、世界史的な戦災でありながら被爆した「民」の実態さえ本格的に調査されていないと告発する。

一方、被爆者は原爆の巨大な力によって大量に殺傷されたばかりか、人体への影響を事前に検証することなく投下され、放射線による後遺症で持続する拷問のように「緩慢殺人」の残忍さの中に置かれた。しかも、「官尊民卑」の補償体系の中で、調査、補償、救済の対象からも長く放置されていたとする。さらに、既成団体の平和運動を、年に1、2度の大衆動員行事に終わり、いつまでたっても「出発点」でうろろうするばかりだが、被爆者を集める行事よりも被爆者を訪ねる日常活動をすべきではないかと批判している。

同書ではさらに、核兵器が超大型の攻撃力であるため、攻撃目標が「敵性」の人民だけしかいない「一枚岩」の場合は使用できるが、相手国の中に味方が入り乱れた「まだら」状態になると使用できなくなる。つまり、東西の冷戦体制の中で、それぞれの国の若者が反体制運動をおこし、相手側と連帯する動きが盛んになれば、核兵器を使用できない状況が世界的に広がってくるのではないかといった、独特の考え方を随所で展開している。

同書は初刷 6000 部を発行したほか、1983 年、「核戦争の危機を訴える文学者の声明」が企画した『日本の原爆文学』⑨「大江健三郎／金井利博」に、1999 年には中島竜美編『日本原爆論大系』第 3 巻「原爆被害は国境を越える」に収録された。前者の解説で大江は『核権力』について、「究極のところでは、人間とは何か、が問題として提出され、それに対する解答が試みられています。広い意味での文学のカテゴリーにいれることのできる作品です」と述べている。

『核権力』の最終章の末尾近くで金井は、次のように述べる。「広島・長崎の原爆被爆体験だけでなく、戦災とは何かということをも日本の火攻め空襲全体について、…沖縄の戦災の延長について、また日本軍が中国本土の民衆や米・英の捕虜に加えた惨害について、またそれらをベトナムの戦争難民や、欧州でのユダヤ人虐殺や都市じゅうたん爆撃による住民被害と比較することについて…もっと私たちが明らかにする運動と研究活動のまとまりがあってよいと思う」。金井は既に次のテーマ、難民に向かっていった。

昭和 38（1963）年 3 月に専任の論説委員になった金井は 45 年 3 月、論説副主幹、46 年 2 月、主幹となった。44 年 3 月から 47 年 8 月までは社史編纂室長を兼務、『中国新聞 80 年史』を担当した⁽⁹⁹⁾。執筆陣の中に平岡がいた。彼は太平洋戦争中の新聞に目を通すうち、大本営発表のままに読者を扇動した新聞の戦争責任を書くべきだと考え金井に相談した。何度かの議論を経て金井は「過ちを犯したことは恥ずかしいが、それを隠そうとするのはもっとはずかしいことだ」と言って、前例のない戦争責任の記述を認めた⁽¹⁰⁰⁾。

47 年 2 月、金井は病に倒れた。すい臓がんだった。広島大学付属病院で 2 度にわたる手術を受けるなど、入退院を繰り返す生活となったが、以後も時々入社して社説を執筆するなど、意欲は衰えなかった⁽¹⁰¹⁾。48 年 7 月には 3 日連載という異例の社説を執筆した。ベトナム戦争やアラブなどの難民と広島、長崎の被爆者との比較研究や総合研究の必要性を説き、平和運動の担い手が「願いを志し、行う過程において救われるのは世間である前に、まず人間としての自己自身である」とも指摘した⁽¹⁰²⁾。

同年 11 月 9 日付で広島に国連難民研究・教育センターを設置するよう提案した社説が最後となった。この年、金井を見舞った大江健三郎は、その時の様子を『状況へ』に書いた。「（金井は）過去から現在につづく原爆難民を、現在から未来に伸びてゆかざるをえぬ公害難民にかさねて積極的に日本人の原点としてとらえなおそうと『難民諸相の総合研究』を主張してやまないのである」⁽¹⁰³⁾。金井はたえまなく大江に語り続けて倦むことがなかった。翌 49 年 6 月 16 日、金井は死去した。60 歳だった⁽¹⁰⁴⁾。

おわりに

「原水爆被災白書」運動をはじめとする金井の取り組みの数々は、その後の運動や行政施策、新聞報道に大きな影響を与えた。金井は戦後の広島でまず地域文化と向き合い、宮本常一や山代巴との交流から農村問題や民俗学へ視野を広げ、さらに、ビキニ被曝事件、第1回原水爆禁止世界大会と続く流れの中で原爆問題に傾斜した。

自らを「ワンテーマ主義」と呼んだように⁽¹⁰⁵⁾、一つのテーマを憑かれたように追求したが、それは膨大な読書量に基づき学問の領域と日常的な現実とを独特の論理で結ぶ作業であり、その中から、次のテーマを見出していった。彼の執念と情熱、強烈な個性のなせる技であった。と同時に、彼が中国新聞の経営者と姻戚関係にあったから可能であった面も否定できない⁽¹⁰⁶⁾。ただし、彼はその関係をおくびにも出さなかったと伝えられる⁽¹⁰⁷⁾。

彼は自ら被災資料の収集運動や文芸活動の事務局を引き受けるなど、取材者の枠をしばしば踏み越えた。新聞記者が取材対象に深くかかわってはならない—との原則には、難しい問題が付きまとう。しかし、金井は権力者と厳しく対峙し、民衆の側から報道する姿勢を貫いた。党派から一定の距離を置き、地域文化を育てる視点も抱いていた。彼のこの潔癖な姿勢もまた、平岡や大牟田に引き継がれたといえよう。

注

- (1) 三省堂。昭和46(1971)年刊。
- (2) 金井利博の葬儀で配布された「故人の業績」(1974年)。大牟田稔の執筆。広島大学文書館蔵。
- (3) 戸籍上の生年月日。「本当は1913年12月15日生まれ」と、長女山本ゆみ子さんと、その夫一隆氏に宛てた年賀状(1974年正月)にはある＝広島大学文書館蔵。
- (4) トキは本名。通称は「時子」。
- (5) 村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生『金井利博氏の場合』」、『中央公論』1962年2月号。
- (6) 在任期間は昭和17(1942)年6月から昭和20年7月＝三次市秘書広報課の回答。
- (7) 金井時子さんを偲ぶ会編集・発行『ひとすじの道』1986年。
- (8) 『現代日本文学全集20 志賀直哉集』所収の年譜によると志賀直哉は昭和4年4月から同13年まで奈良市上高畑に住んでいた。
- (9) 広島女性史研究会編著『山陽路の女たち』1985年。
- (10) 山代巴「平和の友 金井時子さんのこと」、前記『ひとすじの道』所収。山代は「あの作品が現代文学の手法に反逆して、我国農民の語り言葉の伝承方法に依拠するというほうけんを試みられたのはあなたの保護とはげましによってあえてなされたものでした」と書いている。
- (11) この時、トキは「十年を経つつ怒りは新たなり女(おみな) たたずば平和ならざる」「女にはかかわりのなき核兵器されど惨害は子女を避けざる」と詠んでいる。
- (12) 前掲、金井時子さんを偲ぶ会編集・発行『ひとすじの道』。
- (13) いずれも旧制。県立三次中学校は現・三次高校、広島高等学校は現・広島大学、九州帝国大学は九州大学。
- (14) 中国新聞社総務人事部所蔵人事記録。
- (15) 金井利博自筆「履歴申立書」、1958年4月28日付、広島大学文書館所蔵。
- (16) 前掲、金井時子さんを偲ぶ会編集・発行『ひとすじの道』。
- (17) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。
- (18) 金井利博「学生時代の吾々」。九州帝国大学法文学部会誌『悠交』第2号所収、昭和14年2月20日発行、広島大学文書館所蔵。

- (19) 金井利博『『人間』の問題』、『月刊中国』昭和23年6月号所収、広島大学文書館所蔵。この考え方を金井は後年、中国新聞社説で展開している（昭和42年12月7日付）。
- (20) 前掲、中国新聞社総務人事部所蔵人事記録。
- (21) 広島市役所編「新修広島市史第四巻文化風俗編」昭和33年。
- (22) 「三人による戦後史 広島文芸の日々」第33回（大牟田稔執筆）。昭和53年3月1日付中国新聞。
- (23) 前掲「故人の業績」、1974年。
- (24) 中国新聞社「中国新聞六十五年史」、昭和31年。
- (25) 「戦後・広島文芸史」(21)、昭和34年11月5日付中国新聞。阿川弘之氏はこの件について手紙で照会したのに対し、電話で「全く記憶がない」と語った（2009年2月4日）。
- (26) 『広島ペンクラブ會報』第1号。昭和24年5月31日。広島大学文書館所蔵。
- (27) 『広島ペンクラブ今年度総会報告その他』、広島市立中央図書館所蔵。前掲、広島市役所編「新修広島市史第四巻文化風俗編」。「戦後・広島文芸史」(21)。
- (28) 「戦後・広島文芸史」(37)、昭和34年11月24日付中国新聞。
- (29) 現・広島大学。
- (30) 前掲、「三人による戦後史 広島文芸の日々」第49回（大牟田稔執筆）、昭和53年3月31日付中国新聞。梶山美那江編『積乱雲 梶山季之一その軌跡と周辺』所収「仕事の年譜・年譜の行間」。原民喜詩碑建設「趣意書」、広島市西区田方1丁目、原時彦さん所蔵。
- (31) 昭和25年5月19日付、金井利博より原民喜あて書簡。広島市立中央図書館所蔵。
- (32) 昭和26年5月17日付中国新聞。
- (33) 前掲、中国新聞社総務人事部所蔵人事記録。
- (34) 梶山季之『雲か山か 若き日の頼山陽』集英社、1974年、「あとがき」。
- (35) 近藤芳美『短歌と思想』砂子屋書房、1992年。1963年8月9日付、2003年9月10日付中国新聞ほか。
- (36) 前掲、梶山季之『雲か山か 若き日の頼山陽』。
- (37) 小久保均発富沢佐一宛ファクス。2009年1月16日付。
- (38) 昭和28年4月17日付中国新聞ほか。
- (39) 原民喜の甥、原時彦氏は、民喜の義弟で文芸評論家の佐々木基一が広島へ帰る度に「中国新聞に行ってくる」と言って出掛けたと話している。2009年1月16日の聞き取り。
- (40) 梶山季之弔辞「金井利博氏のご霊前に」、1974年＝広島大学文書館所蔵。
- (41) 平岡敬『希望のヒロシマ』、1996年、岩波書店、岩波新書452。
- (42) 金井自身も前掲『核権力』の「あとがき」を「私は広島で人間というものを教えられてきた。広島市民はその意味で私の恩人である」と結んでいる。
- (43) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。広島県編『広島県史 総説』、昭和59年3月、終章（今堀誠二執筆）など。
- (44) 金井は「（『荷車の歌』は）民衆としての人間の姿をよく描きあげている」と評している＝金井利博「時間の貧しさということ」、『芸備地方史研究』第19号、昭和32年。
- (45) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。宮本常一『私の日本地図4 瀬戸内海 I 広島湾付近』20頁（昭和43年、同友館）。同書によると、大阪府天王寺師範学校の同窓生、桧垣月見が中国新聞社に勤めていた昭和20年代半ばまでは、彼との縁で同新聞社をよく訪れていたとある。
- (46) 私家版。
- (47) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。

- (48) 金井利博「内海研究会の話」、昭和34年9月25日付中国新聞社報所収。
- (49) 2009年1月11日聞き取り。秋信は常務取締役まで務めた。
- (50) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。
- (51) 中国放送テレビ台本「話題の広場 テレビ歳時記 文学風土『荷車の歌』」昭和38年6月7日放送＝広島市立中央図書館所蔵。
- (52) 峠三吉編、青木書店、青木文庫、1952年。
- (53) 原爆被害者の手記編纂委員会編、三一書房、昭和28年。
- (54) 茶本繁正「中国新聞“ヒロシマ”の怨念」。月刊『現代』昭和51年9月号。前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。
- (55) 山代巴編、岩波書店、岩波新書566、1965年。
- (56) 前掲、秋信利彦氏の証言。2009年1月11日聞き取り。
- (57) 同誌は4回増刷され、発行部数は40万部に達した＝『アサヒグラフ』昭和57年8月10日号。
- (58) 田原伯氏による。同年の『改造』11月原爆特集増刊号にも金井らは大きな衝撃を受けた。
- (59) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。
- (60) 前掲、村上兵衛構成「地域社会に生きる三つの人生 金井利博氏の場合」。
- (61) 鈴子は金井との間に長男、宏一郎をもうけた後、昭和17年3月、流感で死去した。23歳だった。岡田泰吉には最初、金井の母トキの妹道（みち）が嫁いだが彼女は早く没した。
- (62) 昭和31年11月21日付長崎日日新聞＝長崎歴史文化博物館所蔵。毎日新聞西部本社『激動二十年—長崎県の戦後史』1994年（昭和40年刊の復刻本）＝長崎県立図書館所蔵。
- (63) 前掲、『核権力—ヒロシマの告発』の「あとがき」。
- (64) 昭和27年10月9～11日掲載。
- (65) 昭和28年8月9、11、12、13、14日掲載の「原爆文献をめぐる」。
- (66) 昭和30年8月3、4、5、6、8、9日掲載の「原爆文献10年の地図」、および、12月25～31日掲載の「原爆文献10年史」。
- (67) 今堀誠二『原水爆時代』（上下）1959、1960年、三一書房。
- (68) 昭和28年7月12、13日掲載。
- (69) 昭和28年12月26～29日掲載。
- (70) 昭和29年2月22日付中国新聞社報第23号。
- (71) 昭和33年8月4日付中国新聞。
- (72) 前掲、中国新聞社総務人事部所蔵人事記録。
- (73) 昭和38年8月8日付朝刊では「国策で『原爆白書』を」と題する社説を掲載している。
- (74) 広島市編『広島新史 市民生活編』419頁（田中聡執筆）、昭和58年。
- (75) 日本評論新社。
- (76) 前掲、金井利博『核権力』。昭和39年8月6日付、および10月9日付中国新聞など。
- (77) 前掲に同じ。
- (78) 「いかなる国の核実験にも」反対するかどうかで社会党系と日本共産党系に分裂した。
- (79) 大江健三郎「さかさまに立つ『雨の木』」、『「雨の木」を聴く女たち』所収、昭和57年、新潮社。大江健三郎『「志」のジャーナリスト—金井利博氏を悼む』（広島大学文書館所蔵）＝昭和49年6月20日付中国新聞掲載。
- (80) 1965年、岩波新書563、岩波書店。
- (81) 前掲『ヒロシマ・ノート』。

- (82) 昭和 39 年 10 月 3 日付中国新聞。
- (83) 昭和 40 年 8 月 6 日付中国新聞ほか。
- (84) 昭和 40 年 12 月 8 日付中国新聞。
- (85) 広島県編『広島県史 原爆資料編』912 頁。
- (86) 広島平和文化センター編『平和事典』、229 頁、1985 年。
- (87) 今堀誠二「ヒロシマと金井利博氏」、昭和 46 年 6 月 22 日付中国新聞。
- (88) 4 集目は金井の没後 10 年目に田原伯によって刊行された。
- (89) 宇吹暁「核兵器廃絶の世紀へ」、中国新聞社編『年表 ヒロシマ』1995 年所収。
- (90) 平岡敬『希望のヒロシマ』1996 年、岩波書店、岩波新書 452。
- (91) 平岡敬氏への聞き取りによる = 2009 年 1 月 4 日。
- (92) 中国新聞社編『証言は消えない—広島記録 1』1966 年、未来社。山代巴編『この世界の片隅で』1965 年、岩波書店、岩波新書 566。
- (93) 『証言は消えない』『炎の日から 20 年』など。
- (94) 中国新聞社社報第 170 号、昭和 41 年 6 月 30 日。
- (95) 前掲、社報。
- (96) 外に日本ジャーナリスト会議大賞（2000 年度）、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞（2002 年度）を受賞。
- (97) 田城明「『金井学校の二人展』に思う」、平成 17 年 9 月 10 日付中国新聞掲載。
- (98) 前掲、平岡敬『希望のヒロシマ』。
- (99) 前掲、中国新聞社総務人事部所蔵人事記録。
- (100) 平岡敬「原点と志と—新聞の責任をめぐって」、雑誌『世界』1978 年 8 月号所収、岩波書店。
- (101) 昭和 49 年 8 月 1 日付中国新聞社報、第 225 号。
- (102) 昭和 48 年 7 月 1 - 3 日付中国新聞。
- (103) 大江健三郎『状況へ』、昭和 49 年、岩波書店。
- (104) 前掲、昭和 49 年 8 月 1 日付中国新聞社報、第 225 号ほか。
- (105) 前掲、茶本繁正「中国新聞“ヒロシマ”の怨念」。月刊『現代』昭和 51 年 9 月号。
- (106) 平岡敬氏の指摘、2009 年 1 月 4 日の聞き取り。
- (107) 前掲、茶本繁正「中国新聞“ヒロシマ”の怨念」。月刊『現代』昭和 51 年 9 月号。

『表現者、としてのジャーナリスト～ヒロシマと大牟田稔の関わり』

大牟田 聡

はじめに

大牟田稔（1930～2001）は、広島大学を卒業後中国新聞社に入社し、以後一貫してヒロシマの諸問題と向き合った。ただし新聞社では長く管理部門に在籍したこともあって、必ずしも記者として取材を続けたというわけではない。もちろん出発点は新聞記者であるが、彼には一方で、記者という立場を超えてヒロシマと向き合い続ける内在的な動機があったように考えられる。さらにいえば彼は、思索を深めるにつれて後年ジャーナリストの限界を痛感してもいた。そのことは定年を前に新聞社をあっさり退職し、行政側の財団法人広島平和文化センターの理事長に就き、以後その職を七年間にわたって務めたことから窺われる。誤解を招かないようにつけ加えれば、彼は新聞記者という職業を心から愛していた。

現在、広島大学文書館には「平和学術文庫」として、大量の「大牟田文書」が寄託されている。そこには14歳の終わりに敗戦を迎えた大牟田稔による、戦後五十五年のヒロシマの記録がほぼ網羅されている。彼を戦後突き動かし続けたものとはどのようなものであったのか。拙論では大牟田稔の思想と行動の原点にあるものの一端を、家人（筆者は大牟田稔の二男）の目もまじえて考察したい。

1945年まで

大牟田稔は1930年（昭和5年）9月1日、宮崎県西諸縣郡加久藤村（現在の宮崎県えびの市）で、父・一恵、母・千穂の長男として出生した。生前の稔の証言によれば、彼の祖父は加久藤村の村会議員を務めた人物であり、祖父の兄は小林村（現在の宮崎県小林市）の郵便局長だったという。さらにいえば、一恵の弟はえびの市に合併される前の最後の加久藤町長を務めるなど、大牟田一族は宮崎県霧島地方において、それなりの人物を輩出していたことが窺われる。

そうしたなかで、稔の父・一恵は海軍機関学校に進み、職業軍人の道を選んだ。一恵の従妹にあたる母・千穂は、仕事で家を空けることの多かった夫に代わり、稔たち四人の兄妹を育て上げた。

職業がら一恵は転勤が多く、稔は小学校六年間に横須賀、呉、佐世保、加久藤村、そして再び呉と、学校を転々とした。地理と数学が好きで、どちらかといえば理数系が得意な少年だった。幼少期（1938年頃か）を過ごした呉ではのちに作家となる大庭みな子⁽¹⁾（当時の本名は椎名美奈子）と同級で、よく遊んだのだという。

1943年、呉一中（現・広島県立呉三津田高校）に進学した稔だったが、戦争の激化に伴って授業はほとんど行われなくなり、農村での暗渠排水を作る作業や工場動員に駆り出されるようになっていく。

そして1945年（昭和20年）は、軍港呉に対する大規模な空襲が相次いだ。

3月19日、米海軍第58機動部隊の艦載機350機による艦船を目標とした空襲。稔も工場に向かう途中の電車で初めて機銃掃射を経験する。

5月5日には動員されていた広の海軍工廠がB29の集中爆撃を受け、航空機のエンジンを生産していた工場が壊滅的な被害を受けた。稔は防空壕に逃げ込むが、親しい友人を含む4人が死んだ。同じ5月には一恵と海軍で同期の父を持つ親友が徳山の空襲で落命した。稔はこの友人と同じように父親の転勤に伴って徳山中学への転校を持ちかけられていたが、転校を拒んで呉に残ったために、結果的に生き残った形となった。

しかし、呉の空襲は一向に収まる気配がなかった。

6月22日にも呉・海軍工廠の兵器工場が爆撃され、400人以上が犠牲になった。このときも翌日の新聞

では「死者なし」と報じられたという⁽²⁾。

そして、それまで海軍工廠を対象としていた空襲は、ついに市街地へと目標を変える。7月1日から2日にかけての呉大空襲である。深夜の市街地を襲った焼夷弾による絨毯爆撃は、呉の街を灰燼に帰した。稔たちは山の東側斜面に設けられた防空壕に逃げ込んだが、同じ山の西側斜面に設けられた防空壕には、西からの熱風が吹き込んだために蒸し焼き状態となり、おびただしい犠牲者が出た。およそ2500人が死んだこの空襲でも、稔は仲の良い友人を亡くした。

呉はさらに7月24日、28日にも艦船や工場が空襲を受けるが、この頃になると稔は、「何もない市街地を狙って来るわけがないから逃げ隠れしなかった⁽³⁾」と証言している。とはいえ、空襲の恐怖感、親しい友人を相次いで亡くした経験は、稔のその後を決定づける原点となる。

そして8月6日。原爆投下の瞬間を稔は呉の工場で迎えた。

「高圧線がショートした、あるいは電車の火花みたいな感じ」の光線を感じた稔は、広島上空にグレーを基調とし、ところどころピンクや黄色、緑や青に染まったきこ雲を目撃し、「非常にこう、綺麗な印象があったという⁽⁴⁾」。当然それが人類史上初の原子爆弾投下であることなど知る由もなく、仲間と「火力発電所が爆発したらしい」「いや、火薬庫だろう」などと噂しあうのが関の山だった。呉での空襲体験は、広島で何が起きたかを想像させる余裕すら与えなかったのだ。

このときのことを稔は晩年、

「既に米艦載機による出勤途上の市内電車への機銃掃射、働いていた工場への絨毯爆撃、そして市街地への焼夷弾攻撃をすべて経験していた。すべてが恐怖の体験だったが、それは何人かの学友を失うことによって頂点に達し、きこ雲を望見したときはむしろ捨て鉢な気分で、一瞬美しいとさえ思ったのだった」と記している⁽⁵⁾。

思春期の最も多感な時期にあった稔は、14歳の後半を爆撃や空襲に追われたのだった。そしてその挙句に、15歳になる半月前に迎えたのが敗戦だった。

「八・一五は、大多数の日本人にとってのさまざまな価値観が一挙に一八〇度の転換をとげた日だが、その衝撃は、素直に国家を、戦いを、教師を信じていた私にとっては、たとえようもなく大きなものだった。もともと、当時の私にとって敗戦は、三交替で昼となく夜となく働いていた工場動員からの解放であり、薄暗い灯火管制や窮屈なゲートル（巻き脚絆）から自由になるという、一種のほっとした部分もあった」（「私にとっての原爆報道⁽⁶⁾」）

確かに解放感があっただろうが、一方で職業軍人を父にもち、いっばしの軍国少年だった稔を想像しがたいほどの虚脱感が襲った。そもそも彼が小学校に入学した1932年に日中戦争が勃発して以降の日本は常に戦時であったわけで、それはつまり戦争の日常化を意味した。生前稔は、「戦争に負けた」と聞いてもしばらくはその意味が理解できなかったと語っているが、彼のなかでは戦争は「勝つ」とか「負ける」とかいったものではなく、ア prioriに「ある」ものとして認識されていたと考えられる。

敗戦を迎えて、同時に彼が鮮烈に意識したのが「だまされた」という感覚だった。先に引用したとおり、稔少年は「素直に国家を、戦いを、教師を信じていた」だけに、掌を返すように平和主義を説く教師や国のありように猛烈な反発を覚えていた⁽⁷⁾。

この「だまされた」感覚、そして空襲の体験と親しい友人の死、それらが戦後の稔が一貫して問い続けたものの原点にある。

新聞記者になるまで

敗戦の衝撃をひきずったまま、海軍士官だった父・一恵の失業に伴い、翌46年春、稔は故郷の宮崎県加

久藤村へ家族とともに帰ることになった。戦時中、立志伝中の人物として、学校に備品を寄贈するなどして一恵にしてみれば、戦争に負けたとはいえ故郷は温かく迎えてくれるのでは、という淡い期待もあったはずだ。しかし、旧軍人であるというだけで家族までもが白眼視される時代、宮崎の田舎は、都会に比べて露骨なまでに冷ややかだったらしい。学校への寄贈品もGHQに見つかると問題視される、と処分されるようなことがあったという。

失意の稔は旧制小林中学校に編入するが、この学校も転校生にとってはあまり居心地がよくはなかったようだ。だが、ここで稔は、後に映画監督となる黒木和雄（1930～2006）と知り合う。

幼少期を満州で過ごした黒木は、1942年宮崎県飯野町（現・宮崎県えびの市）に戻り、一年遅れで旧制小林中学校に入学するが、薩摩弁が話せないことでなかなか周りと馴染めなかったという。

「標準語で話ができるということもあったのでしょうか、大牟田と私は気が合い、飯野から小林に向かう汽車の中で文学の話に夢中になったものでした⁽⁸⁾」と黒木は記している。だが、ふたりの波長が合ったのは、むしろ親しい友人を米軍の爆撃で喪ったという共通体験があったからかも知れない。戦争末期、黒木もまた都城の航空機工場に動員されていたが、1945年5月、米軍機の爆撃によって目の前で親友が殺されるのを目撃し、しばらく登校もできないほどの衝撃を受けていた⁽⁹⁾。それは呉での空襲体験を背負い、親しい友人を少なからず失った稔と共通する心性だったに違いない。

戦後、稔と同じように虚無感に襲われていた黒木は、

「生まれてから一五年間、戦争をしている世の中しか知らなかった私は、あっけらかんと変わっていく世界についていくことができず、すべてが虚妄の一五年間だったのだろうかと思ひも自己不信にも陥るのでした⁽¹⁰⁾」と、生前の稔と共通する感慨を綴っている。

さて、結局稔は郷里に二年いたものの、戦後かつての戦友と事業を興した父親が仲間裏切られる形で経済的にも困窮したこともあって、授業料が免除される広島高等師範学校英語科を受験し、合格した。しかし、宮崎の田舎から出てきた稔にとって英語科のレベルが驚くほど高かったことや仏文学への憧れなどから、翌49年、稔は新製の広島大学文学部仏文科に入り直した。

この頃、稔のその後には大きな影響を与える同世代との出会いが数多くあった。

そのなかでも注目されるのが、一時起居をともした川手健（1931～60）と梶山季之（1930～75）である。

川手健は稔と同じ仏文科に在籍していた。被爆者の一人として、広島大学在学中から原爆被害について「被爆者の視点」からの運動を模索し、十代後半から詩人の峠三吉、作家の山代巴らとともに被爆者による手記の編纂などに力を注いだ⁽¹¹⁾。

のちに流行作家として一世を風靡する梶山季之とは文学仲間だった。稔と同じ年に広島高等師範に入学した梶山は、友人らと同人誌を発行しようと資金作りのためのアルバイトに奔走していた。稔も途中から加わった同人誌「天邪鬼」は1950年9月に第一号が発刊され、翌51年3月に第二号が、そして同じ年の7月に、梶山に宛てた手紙を遺して自死した原民喜⁽¹²⁾の追悼号が第三号として刊行されてその役割を終える。「天邪鬼」発行に向けて、広島市水主町（現・広島市中区加古町）にあった梶山の自宅には、同世代の文学仲間たちが集まっては闊達な議論を交わしたが、この頃の交遊の多くは「天邪鬼」以降も細く長く続くことになる。戦後の自由な空気を思う存分吸いながら、新たな時代を築こうとする若者たちの熱気がそこにはあった。ちなみにこの「天邪鬼」の同人として加わっていたなかには、梶山夫人となる小林美那江や、稔の伴侶となる迎田郁子がいた。

稔は宮崎時代、軍人であった父を通じて戦争を考えることが多く、いわゆる東京裁判に関心を抱いていた。広島に出てきてからは朝鮮戦争へと時代は急激に動く。だが稔は、「当時の私自身は、むしろそういった現実には背を向けていたようだ。どちらかといえば、いわば文学青年だったと思う」（「私にとっての原爆報道⁽¹³⁾」）と述懐している。

ただ、文学に傾倒する一方で、親しかった川手の考え方やその行動に触発された部分は間違いなくあったと考えられる。広島で暮らしていると、思わぬところから被爆の生々しい傷痕が姿を現すことがあるが、戦後間もない時期であれば広島全体がまだ被爆の影響下にあった。戦後発表された峠三吉や原民喜の詩や小説を通して、稔は漠然と原爆の意味を考え始めていたのではなかったか。そして20歳前後に深めた川手や梶山らとの交流が、意識するしないにかかわらず、稔のその後にも大きな影響を及ぼすことになるのである。

稔は1951年の冬、梶山の誘いでたまたま募集をかけていた中国新聞社の就職試験を受ける。経済的な困難もあっただろうが、新聞社受験は、記者稼業の傍らで創作活動を続けられるのではないかという梶山と共通した思いがあったはずだ。試験の結果ふたりはいずれも一旦は合格するが、梶山は肺に空洞が見つかり不合格になる。一方、稔はラジオ部配属に反発して内定を返上した⁽¹⁴⁾という。就職難の時代ではあったが、稔がまだ大学三年だったということも関係したかも知れない。稔は結局翌52年の秋に再度中国新聞社を受験して合格し、1953年春、新聞記者大牟田稔が誕生した。

新聞記者として～微視と巨視と

新聞社に入社した稔は、当初小学生新聞を担当し、その後整理部に籍をおいた。先述したように、彼のなかではまだ記者を本業とする覚悟はなく、むしろ執筆活動で身を立てたいという思いが強かった。そこで、まだ開局したばかりの民放ラジオ局のドラマ脚本を書いたり、小説の草稿を書いたりしていた。また55年頃からは「天邪鬼」の同人のひとりだった一歳下の迎田郁子と恋愛に陥るが、比較的裕福な家庭に育った郁子との結婚は先方からなかなか許されず、また長男として弟妹たちの学費の仕送りに追われるなど、若者らしい蹉跎の日々を送っていたようだ。

しかし、そうしたなかで稔のその後の方向性を大きく決定づける新たな出会いもあった。当時学芸部の記者だった金井利博⁽¹⁵⁾（1914～74）の薫陶を受けたことはとりわけ大きな意味を持つ。稔は学生時代から金井の知遇を得ていたが、若者と語り合うのを好んだ金井とは、新聞記者となってから幾度も徹夜で議論したという。

金井は民俗学や文学に精通していた上に、オルガナイザーとしての才もあったようで、梶山季之が奔走した1949年の広島ペンクラブ設立にも深く関わっていた。1951年に、梶山が原民喜の詩碑建立の際に最初に頼ったのも金井である。

金井はまた、広い視野の持ち主でもあった。彼は広島・長崎の被害の真相を世界に伝えてこそ核戦争を防ぐ重要な手立てになると考えていた⁽¹⁶⁾。60年代には、一向に原爆被害調査のために動こうとしない政府に業を煮やし、自ら原爆被災白書をつくる運動の中心に立ち、文献資料の収集に執念を燃やす。金井は広島ジャーナリストとして、まず被爆の実相をつまびらかにすること、そしてそれを世界的あるいは歴史的な位相に押し上げることに、その二点に意味を見出していた。

すなわち、原爆被害がもたらしたひとつひとつの悲劇と真摯に向き合いながら（＝微視）、それらを世界的・歴史的座標において再構築すること（＝巨視）、それこそがヒロシマの進むべき道であると示唆していたのだ。

「金井学校」ともいわれた金井に大きな影響を与えられた若い記者のなかには、稔のほか、いち早く在韓被爆者問題を取り上げた平岡敬⁽¹⁷⁾がいたことも特筆に値する。

さらに稔の私生活においても大きな影響を与える人物がいた。先述した迎田郁子である。原爆投下時、県立広島第一高等女学校二年だった郁子は、広島市西部の高須で作業中被爆した。彼女自身は直接的な外傷などはなくてすんだが、一歳下で同じ第一高女に通っていた妹・佳子^{よしこ}を原爆で亡くしていた。非被爆者である稔は、郁子との交際のなかで、彼女の心的外傷としての被爆体験を痛感したはずだ。結婚後も郁子は被爆体験について「経験したものでないといけない」と多くを語らず、稔も敢えて妻が被爆者であることを対外

的に語らなかつた。唯一晩年になって次のような文章を綴っているが、ここでもこの証言が妻のものであることは伏せている。

「自らの被爆状況すら語らず、頑なに沈黙を守ってきたある被爆者が、五十数年を経てようやく語り始めた、例を私は知っている——。大戦末期、ほっそりした姉は女学校の二年生、丸顔の妹は同じ女学校の一年生。八月六日朝、姉は広島西郊の航空機部品工場へ、妹は市中心部の建物疎開作業へ。学徒動員下の出勤だった。姉がつくった弁当を持った二人は満員電車に乗り、同じ吊り革に手を掛けた。妹が先に目的地に着いて下車、その電停には下車した一年生がぎっしりと整列し、車中に残った上級生に向かって深々と頭を下げる。当時はそれが上級生への礼儀だったのだ。その光景を車中から見ていた姉の目に、お辞儀を終えたかっば頭の列の間から、妹のこぼれんばかりの笑顔が瞬間的に見えたのだった。『妹の目と私の視線は確かに合った』と姉は今も信じる。それから十数分後、原爆は炸裂した。妹は再び帰らず、姉の脳裡に笑顔だけを刻み込んだ⁽¹⁸⁾。」

最も近い人物が沈黙を守る被爆者であったこと——郁子は被爆者ゆえに出産の際も常に不安につきまといわれたという。被爆者にとって被爆の事実が決して単なる記憶にならず、いつまでも生々しい傷のままであるということを経験は実感していた。そして記者としてではなく、人間としてそうした現実と向き合うことが、のちの稔のヒロシマに対する姿勢をかたちづくっていった。

また、1960年前後に稔は、地元ラジオ局のドキュメンタリーのためにテープレコーダーを抱えて、被爆者のみならず、医師や平和運動の組織関係者、作家などの証言を取材している⁽¹⁹⁾。この取材は新聞社の休みの日に精力的に行ったようで、ここで培った人脈や多角的なヒロシマの捉え方は、稔の思索の基盤となるものとなった。

1963年、東京支社に転勤となった稔は内閣記者会に所属し、そこで偶然沖縄在住の被爆者の存在を知る。当時米国の軍政下にあった沖縄にはビザが必要だったが、外国人記者のアドバイスもあって、沖縄出身で初めてプロ野球選手となった広島カープの安仁屋宗八投手の取材にかこつけてビザを取得。1964年8月に沖縄に渡ったのだった。

すでに1957年に原爆医療法が施行されていたが、米国民政府統治下の沖縄に在住する被爆者は放置されたままだった。稔は19人を取材し、その現状を「沖縄の被爆者たち」と題して中国新聞に連載する。この記事は大きな反響を呼び、広島の医師が沖縄の医師と連絡を取り合う契機となり、やがて日本政府と琉球政府が互いに重い腰を上げて調査や健診を行うきっかけともなった⁽²⁰⁾。

稔が沖縄に渡ったほぼ同じ頃、平岡敬は韓国在住の被爆者から手紙を受け取り、初めて在韓被爆者問題を意識した。翌65年秋、平岡は初めて韓国に渡り⁽²¹⁾、韓国人被爆者を取材する。

稔と平岡がこの時期にそれぞれ少数者である沖縄・韓国の被爆者取材をしていることは興味深い。それらは政党主導の組織的な平和運動とは対極に位置する「微視」的な取材だった。何ら組織化されていない忘れられた被爆者の存在を掘り起こす作業はしかし、微視的な取材でありながら、どちらも日本という国の戦後処理のあり方をあぶりだすものであり、金井学校が生んだ大きな成果といえる。

「きのこ会」との関わり

1965年、被爆二十年を機に、同時代の被爆者がおかれている状況をいくつかのルポルタージュでまとめようという岩波新書の企画が持ち上がった。編者は作家であり、農村運動などさまざまな活動を展開していた山代巴（1912～2004）である。山代は戦後、生活に追われる被爆者の手記編纂に関わり、1952年には川手健らとともに「原爆被害者の会」を発足させている。しかし次第に組織や運動体の論理が強まってくなかで、ともに活動した川手が1960年自殺したことに山代は強い衝撃を受けていた。

山代は、あくまで被爆者の視点からさまざまな運動が導かれるべきだという川手の手法を受け継ぎ、広島在住の若い作家やジャーナリストとともに「広島研究の会」を立ち上げ、被爆者の置かれている現実の取材を始めていた。稔は東京支社勤務だったこともあり、前年から取り組んでいた沖縄の被爆者についてのルポルタージュを書いた。

『この世界の片隅で』と題され、65年7月に刊行されたこの新書には、被爆二十年後の被差別部落の被爆者、在日韓国・朝鮮人被爆者、原爆孤児のその後など、さまざまな状況におかれている被爆者が登場する。

そのなかに原爆小頭症について初めてまとめられたルポがあった。稔の大学の後輩で、当時中国放送の記者だった秋信利彦（1935～）が書いた「IN UTERO」（ラテン語で「子宮の中で」）である⁽²²⁾。

秋信によると、取材のきっかけは、1965年1月、成人式を迎えた直後のひとりの女性の自殺だったという。彼女は胎内で被爆し、原爆投下二週間後に生まれた。母親は三年前に他界し、彼女自身肝臓が悪く治療を続けていた。病院の医師らは、彼女の病気と胎内被爆の関係を否定したが、疑問を感じた秋信が取材したところ、さらに深刻な胎内被爆の現状が明らかになったのだ。

広島や長崎に原爆が投下された際、爆心から2キロ前後で被爆した妊娠4週から15週の母親たちがいた。彼女たちは1945年冬から翌年春にかけて出産したが、生まれた子供たちの中には知的障害や先天性の障害のある子供たちがいた。彼らは出生時の頭囲が、標準を下回っていたことから「原爆小頭症」と呼ばれるが、親たちは子供の障害が被爆に起因するという事実を誰からも知らされず、孤立した生活を送っていた。

放射線が妊娠に与える影響は動物実験などで1930年頃から知られていたが、実際は原爆投下で「人間の胎児」にどのような影響を与えたのかはほとんど知られていなかったのだ。

しかし実際には、世界で初めての症例・データに着目し、執拗に調査を続けていた機関がひとつだけあった。

1947年に米国の原子力委員会が広島、長崎に設置した「原爆傷害調査委員会」、通称A B C Cである。広島では1950年に米国人小児科医の手によって早くも調査が行われていた。

「胎児期の前半期に被爆した四歳半の児童二〇五名について調査した。（中略）一二〇〇メートル以内で被爆したこれら一名に児童の中七名は精神遅滞を伴う小頭症があった。（中略）本研究から到達する結論は爆心地から約一二〇〇メートル以内で被爆し、コンクリートのような効果的な遮蔽によって放射線の直接照射から胎児が守られていないならば、原子爆弾の放射線によって胎児に中枢神経系欠損が起り得ることである」（G.Plummer 論文、1952年米国で発表、邦訳は「広島医学」所収、1961年）

しかし、A B C Cが求めたのはあくまで医学的な「データ」に過ぎなかった。小頭症患者を抱えた家族の苦悩や、親が被爆しているがゆえの生活苦などには、A B C Cはもちろん日本政府も目を向けることはなかった。

1965年春、秋信は入手した資料に記載されたわずかな手がかりをもとに、施設や福祉センターなどを訪ね歩き、各地に散らばった胎内被爆児をひとり、またひとりと特定していった。

秋信が出会った障害のある胎内被爆児を抱えた家族は、母子家庭が多く、小頭症の子供を抱えているのは自分だけだと思い込んでいた親もいた。

結局秋信がこのとき辿りつけたのはあわせて9人。自らも被爆し、健康とはいえない親と障害のある子供。彼らはいずれもA B C Cから幾度となく検査を求められていた。調べるだけ調べて一切治療もしないA B C Cに対する不信感、親たちに共通していた。しかもA B C Cは、子供の障害について「栄養失調のせいだ」「発育が遅れているだけだ」などと説明し、原爆に起因することを認めようとはしなかったと親たちは証言している。

一方、原爆医療法は「治療を必要とする被爆者」を対象にした法律であり、回復不能な先天的な障害に対しては扉を閉ざしたものだ。原爆小頭症患者たちは20歳になるまで、何の援助もなく放置された状況にあった。

そうした実態の取材を続ける秋信だったが、そのなかで彼はある母親から静かに、しかし厳しい言葉を投

げかけられた。

「あなた方は本を出してしまえば、それで終わりでしょう。しかし、私たち親子は、これからは世間の目にさらされて生き続けねばならないのです。その責任はどうしてくれるんですか」

秋信はその言葉を重く受け止め、山代に相談した。山代は即座にこう答えたという。

「まず集まることよ⁽²³⁾」

——1965年6月、小頭症患者6人とその親が集まり、「きのこ会」が誕生した。

会の名前は「きのこ雲の下で生まれた子供ではあるが、たとえ日陰であろうともきのこのような生命力をもって育ててほしい」というある父親の発案による。事務局として秋信と、『この世界の片隅で』で秋信をサポートした作家の文沢隆一⁽²⁴⁾、そして稔が会を支えることになった。会にはこの年、16家族が参加した。

さまざまな陳情や活動を続けた結果、二年後の秋にまず会員6名が「近距離早期胎内被爆症候群」として原爆症に認定され、その後も次々と原爆症認定を勝ち取っていった。認定を得たことによって生活が一変して楽になったというわけではない。しかし被爆後二十年間放置されてきた彼らの症状が、原爆投下による放射線障害であると政府に認めさせることは、それまでさまざまな差別や偏見にあってきた家族の悲願であり、大きな意味があった。

稔にとっても、沖縄や韓国といった広島から離れた場所ではなく、被爆地のなかにあって放置されてきた原爆小頭症患者の存在は衝撃的だったに違いない。

1967年、東京支社から本社に戻った稔は、翌68年春、編集局を離れて総務局に配属された。この後十年あまり、稔は新聞社の管理部門にいたため、「きのこ会」の活動に対しても記者としてではなく一市民として携わることになる。

「きのこ会」の初代会長を務めた畠中国三（1916～2008）は、バイタリティに溢れた人物だった。胎内被爆児として誕生した次女の障害をめぐって、「きのこ会」以前から岩国の米軍基地司令官に直訴する手紙を送ったり、娘とともに原水爆禁止運動の舞台に立ち核兵器の非人道性を訴えたりと、積極的に動いていた。あわせて彼は原爆小頭症患者が補償を求める根拠を次のように明快に述べた。

「原爆被害者だけがなぜ特に問題にされるかといえば、原爆が国際法で禁止された兵器以上に残虐なものであり、人道を無視したもので、その被害が一生にわたるのみか、その子にまで及ぶものであるからで、米国は戦争での責任を負わないとは言っても、国際法に反した原爆投下の責任を負わなければならない。また非を非と認め、その責任を果たしてこそ世界の一等国であり文化国家といえるので、責任の果たせない者に原水爆禁止はあり得ない、と国三は思う。その責任を果たさせるために補償を要求するので、物乞いではないのだ。補償のために米国が金を出せば、国三が胸を張って受取る事はいうまでもない⁽²⁵⁾」。

「きのこ会」では①原爆症認定、②原爆小頭症患者に対する終身保障、③核廃絶、この三つの要求を柱として活動し、不十分とはいえ①②は一定の成果をみた。しかしながら③に関していうと、畠中ほどの意識を「きのこ会」全員が持ち合わせていたわけではない。

稔は「きのこ会」を語る時、幾度となく「十人十色」という言葉をつかう。小頭症患者とその家族は、障害の程度も家庭環境もそれぞれ異なり、会としての共通の要求がなかなかまとめられないという現実があった。秋信や山代らとともに水俣病患者など他の障害者との連携を模索していた時期もあったが、生活に追われる家族らの反応は必ずしもいいとはいえなかった。しかしながら、小頭症患者とその家族が少しでも安心して暮らせるようにというのが「きのこ会」の最大目的であったことを考えれば、会は十分その役割を果たしたといってよい。

また、「きのこ会」の活動をみると、事務局をジャーナリストが務めたことにも大きな意味があった。原爆投下を正当化するさまざまな言説が飛び交うなか、母親の胎内で被爆した小頭症患者は、その存在その

ものが核の非人道性を象徴する。どのような詭弁を弄したとしても胎児に戦争の責任はないからだ。

しかしその象徴性ゆえに、山代は分裂と対立を深めていた原水禁運動の各組織にとりこまれることを警戒し、稔ら3人に事務局として盾になるよう提言したのだった⁽²⁶⁾。それゆえ取材の申し入れに対応することもあったが、ときに苦い経験もした。1982年、女性週刊誌の取材に応じてある親子を紹介したところ、「工場の片隅の小屋に見捨てられ、悲惨な生活を送っている」といったセンセーショナルな記事が掲載されたことがあった。実はその住居は、親子の窮状をみかねた工場主が好意で提供したもので、そのことは取材記者も了解していたはずだった。事務局がその処理に奔走したのはいうまでもない。

このことをきっかけに「きのこ会」は長い間、会自身の手で会報を発行するほかには、会員のプライバシーを守るため、そして報道機関への不信から事務局以外は取材に応じないこととした。本来取材する側のジャーナリストが、取材者に対して門戸を閉ざすほかないというジレンマ——同業者からの風当たりも相当強かっただろうことは想像に難くない。だが逆にいえば彼らは取材経験が豊かであるがゆえに、報道の影響力や怖さを熟知していた。力の弱い家族を守るためには、そうした強硬な態度も必要だった。

「きのこ会」の結成に深くかかわった山代巴も、彼女がさまざまな運動に参加していたがゆえに、敢えて「きのこ会」とは距離をおいた。会員たちが運動体組織の論理に巻き込まれ、つぶされないように山代は慎重な態度を貫いた。

一方そうやって事務局が一枚岩になって支えた結果、「きのこ会」は運動体とは一線を画した立場を維持することができた。

原爆小頭症患者は、「最も若い被爆者」と呼ばれる。時に彼らの存在は観念的に、あるいは象徴的に捉えられがちだ。それは決して間違っていないが、同時に「きのこ会」の歴史は、被爆者の親子が負ってきた生々しい苦闘の連続だった。

稔の「きのこ会」との関わりは、一過性の情報を求めて終わるジャーナリストとしてではない、より本質的な、職業を超えた人間としての関わりだった。しかしそれは同時に、稔がヒロシマを考えるときの座標軸、のようなものであったように思う。たった一個の爆弾が胎内で育まれていた小さな命を傷つけ、この世に生まれ出ても長い間かえりみられることのなかった原爆小頭児。その無垢な笑顔に応えるためにすべきこと。稔は絶えずそれを意識していたのではなかろうか。

行政側への転身

1970年代後半、ようやく希望がかなって管理部門から異動し、編集委員となった稔は、精力的に記事を書いた。戦後の広島で新たな文学を模索した若者たちの群像を、岩崎清一郎⁽²⁷⁾、小久保均⁽²⁸⁾とともに「三人による広島文芸の日々」(1978年)として連載したり、戦争末期に広島高等師範の附属小中学校で設けられた特別科学学級などを取材して記事にしたりした。それはあたかも自らの軌跡を再確認する作業のようにもみえる。

稔はこの後、創刊九十周年事業として中国新聞が企画した広島県大百科事典の編集に携わり、事典刊行後は論説委員を経て1986年論説主幹となった。

社説の執筆に限らず相変わらず幅広く活動していたが、一方で稔は新聞記者としての頂点にいながら、どこか物足りなさを感じていた。金井利博が模索した原爆被害の実相を伝えるという取材活動はそれなりに続け、数多くの記事を執筆し主張を展開して来たが、それが現実を動かす機動力になり得ていない、という思いがあったのではないだろうか。

一方新聞社内では、闊達な議論をしようにも勉強不足の記者が増え、相手が同じ土俵に上がって来ることすらできない、というもどかしさを感じていたように思う。

「話をしようにも本も読んどらんのだから、話にならん」と愚痴をこぼしていたのを筆者は記憶している。そして定年が近づいた1991年。広島市長に就任した平岡敬から、財団法人広島平和文化センターの理事長就任の打診があり、稔は定年までわずかな期間を残して新聞社を退社したのだった。家族も驚くほどのきっぱりとした転身だった。

行政の側に身をおいた稔は、水を得た魚のように精力的に活動した。気心の知れた平岡市長と二人三脚で推し進めた平和行政は、新聞社時代と違い、たちまち成果や反応が現れた。さらに国連をはじめとする国際政治の舞台にも足を運び、ヒロシマの歴史的な位置づけを直接訴えることができるというのは、記者時代には考えられない好機と受けとめたに違いない。一方でヒロシマの被害に対する諸外国の冷ややかな眼差しをも実感し、加害責任とヒロシマをどう連関して訴えるべきかについても心を砕いた⁽²⁹⁾。

戦後五十年にあたる1995年前後は、被爆者援護法の施行や、スミソニアン博物館での原爆展中止問題などもあって多忙をきわめた。

理事長就任以降の活動の詳細については割愛するが、この時期は、長くヒロシマに対する「微視」的アプローチを続けてきた稔にとって、その集大成ともいえる充実した日々だったのではないだろうか。ヒロシマを世界的歴史的に位置づける、いわば「巨視」に立った活動を少しでも進めることができたからである。それは金井利博の思いの具現化でもあり、長年接してきたヒロシマに関わるひとりひとり、そして被爆者ひとりひとりに対する稔なりの答えだったといえるのではないだろうか。

原点にあったもの

大牟田稔という人物の軌跡を簡単にここまで辿って来て、彼は「ジャーナリスト、であるというより、やはり「表現者、でありたかったのではないか、と改めて思う。

そもそも「ジャーナリズム」の語源は、ラテン語の「ディウルナ（日々の）」から派生したものであり、その意味では新聞をはじめとするメディアが一過性の取材や報道で満足するというのは持って生まれた習性だともいえる。しかし稔は、そうした断片的な事象の羅列としてのジャーナリズムとはついに相容れなかった。それは彼が長い新聞社勤務でついに社会部を経験しなかったこととも関わっているように思うが、戦前戦中の「だまされた感覚」に対抗するには、一過性の事象に振り回されるのではなく、歴史感覚を研ぎ澄まし教養を身につけた上で常に自らの立ち位置を確認するしかないという思いがあったのではないだろうか。そして、稔はそうした信念に基づいて表現することこそが自らの役割だと認識していた。そのことは、彼が終生文学の力に信をおいていたことにも通じる。

広島平和文化センター理事長を退いた後、稔は今一度自らの原点に回帰するかのようになり、没後五十年が近づいた原民喜の文学を見直そうという「広島花幻忌の会」を立ち上げたほか、二十代から七十代までの各世代のジャーナリストや研究者らに声をかけて「七人の会」を作り、ヒロシマについて改めて考えようとしていた。若い世代と語り合うことを好んだ稔は、そうした小さな研究会を通じて、自らが友人や先輩、取材相手から学びとったものを次の世代に伝えていきたいと考えたに違いない。

余談になるが、稔が書きおろした小文「平和のとりでを築く⁽³⁰⁾」が2002年度から小学校六年の国語の教科書（光村図書出版）に採用された。入院中のベッドの上で、嬉しそうに届いた教科書の見本を眺めていた姿を筆者は忘れられない。小学生に自らの思いを語りかけることができる、というのが彼にはこの上もない喜びだったのではないだろうか。

ところで、稔は「平和の課題⁽³¹⁾」と題した小論で、現代における核廃絶への道として次の三点を挙げている。

ひとつは、「すべての核兵器を国際管理する、あるいは核兵器の先制不使用を国際的に取り決めるなど、各国間の信頼に基づく措置が早急にとられるよう国際世論を盛り上げ」ること。

ひとつは「次世代の教育」だとして、教育において「核兵器の使用はもちろん、すべての戦争は地球環境を破壊することが強調されねばならない」し、「過去に目を閉ざすことなく、国家の歴史と人間（個人）の歴史の双方から未来をみつめるべき」だと提言する。

そして、「核兵器廃絶を訴える広島の声と、米国やアジア諸国に支配的な意見の差をどう埋めるか」を「大きな課題」ととらえ、「積極的な対話を通して、特に異なる意見を単純に排斥するのではなく、双方向の討議に変えていくことが肝要」と主張する。

その上で、

「世界で初めて原爆の被害をこうむった広島は、〈原爆は威力として語られるのではなく、人間的悲惨として語られねばならない〉というメッセージを世界の人たちに伝えたいと思う。

同時に、国際平和活動を更に豊かな方向に進めていくためには、ナショナルな視点に立つ考察を可能な限り抑制し、論議をたとえ理想主義と言われようとも、『人間』の普遍性に根ざすところから出発させることが何より大切、と確信している」と締めくくっている。

ここには、稔が追求してきたヒロシマとの向き合い方が端的に示されている。

改めて大牟田稔の原点とは何だったのか。

盟友だった小久保均は、同世代として「彼も『軍国少年』だったのだ」と分析している。「私の定義では『軍国少年』とは、第二次大戦の末期にわが国に発生した一つの間人類型で、昭和五年（一九三〇年）生まれを中核として（野坂昭如・開高健など）、上限を大正末から昭和元年にかけての生まれ（三島由紀夫、吉本隆明など）、下限を昭和十年前後生まれ（大江健三郎など）とする」。そして、「これらの間人類型の特質は、（中略）熾烈なロマンティシズムと微視的なリアリズムの混合体であることだ。『夢見る現実家』と言い換えても同じである。強烈な『夢』を牢固な『現実』の中に見ようというわけである⁽³²⁾」。

小久保の定義をあてはめると、稔はまさに「軍国少年」の典型であった。「軍国少年」世代に共通した微視的なリアリズムを追求しながら、ダイナミックに世界に向けて理想を掲げて働きかけ、ロマンティストであることを貫いた。

しかし「表現者、であろうとすることは、必然的にロマンティシズムの信奉者にならざるを得ない。「相手にいつか必ず伝わるはずだ」という粘り強い表現行為がない限り、非被爆者や世界はヒロシマを受けとめることはできず、究極にある核廃絶を成し遂げることは不可能だからである。

21世紀初頭の世界は、ともすれば理想や歴史、人間性が軽んじられる傾向にある。しかし、だからこそ、大牟田稔の原点を再確認し、そこから見えるヒロシマのありようを再構築することは、決して無意味なことではない。

稔の遺した宿題は、まだまだ山積したままである。

注

(1) 大庭みな子（1930～2007）作家。1968年『三匹の蟹』で芥川賞受賞。

彼女の父親も海軍軍医だった関係で稔と同じ呉の二河尋常小学校に一時通っていた。大庭が1980年に発表した長編小説『オレゴン夢十夜』（新潮社）「木の国」には、急死した担任教師の葬儀で弔辞を読む少年「大牟田さん」が登場する（集英社文庫『オレゴン夢十夜』1984年、62頁）。

(2) 「呉戦災を記録する会」HP参照。

<http://kure-sensai.homeip.net/Kuushuu/KureKoushou622/KureKoushou622.htm>

(3) 「インタビュー古希の記憶」『ヒロシマから、ヒロシマへ 大牟田稔遺稿集』（2002年、溪水社・以下『遺稿集』と略称）所収、181頁。

(4) 前掲「インタビュー古希の記憶」『遺稿集』182頁。

- (5) 大牟田稔「継承へ新たな方法論を —『自分史』充実のために」(「自分史つうしん ヒバクシャ」97号、2001年2月)『遺稿集』63頁。
- (6) 日本新聞労働組合連合新聞研究部編「地方紙の時代か」(1980年2月)『遺稿集』91頁。
- (7) 前掲「インタビュー古希の記憶」では、戦後学校をすっぱり辞めて魚屋になった教師を評価するコメントがある。『遺稿集』187頁。
- (8) 黒木和雄『私の戦争』(岩波ジュニア新書、2004年)176頁。
- (9) この時の体験は、軍国少年の終戦前後を描いた自伝的作品『美しい夏キリシマ』(2002年)に描かれている。また、映画にはないが、実体験として米軍爆撃によって死んだ学友たちは憲兵隊によって家族にすら対面が許されなかったといい(『私の戦争』34頁)、そうした軍部の対応が、宮崎の農村地帯の戦後の旧軍人への憎悪につながったことは想像に難くない。
- (10) 前掲『私の戦争』43頁。
- (11) 広島一中時代に被爆し、旧制広島高校在学中に共産党に入党。文学活動の傍ら、被占領下でありながら広島大学在学中からさまざまな運動に身を投じる。原爆被害者による詩集『原子雲の下より』、手記集『原爆に生きて』(ともに1953年刊)を編纂。1960年、東京で自殺。佐々木暁美『秋の蝶を生きる～山代巴 平和への模索』(山代巴研究室、2005年)参照。
- (12) 原民喜(1905～51)作家、詩人。幻想的な作風で知られたが、被爆体験を経て『夏の花』三部作など原爆文学の嚆矢となる作品を発表。1951年3月、鉄道自殺。梶山季之はいち早く原民喜詩碑建立に尽力する(同年11月建立)。
- (13) 前掲『遺稿集』92頁。
- (14) 広島朝鮮史セミナー事務局編『梶山季之を偲んで～梶山季之記念講座報告書』53頁。
- (15) 金井利博(1914～74)九州帝大法文学部を卒業後陸軍に召集され、1947年復員。中国新聞の学芸部長などを経て論説主幹。地域文化などに精通する一方、政府への「原爆被災白書」制定要求運動などを展開し、戦後広島におけるジャーナリズムの基礎を築いた。著書に『鉄のロマンス』(1955年)、『核権力』(1970年)ほか。
- (16) 平岡敬『希望のヒロシマ』(岩波新書、1996年)138頁。
- (17) 平岡敬(1927～)1952年中国新聞入社。編集局長等を経て中国放送社長。1991年から二期八年にわたり広島市長を務める。著書に『無援の海峡—ヒロシマの声、被爆朝鮮人の声』(1983年)ほか。広島大学文書館では平岡と大牟田稔、そして二人に影響を与えた金井利博に注目し、2005年9月「金井学校の二人展」を開催した。
- (18) 前掲「継承へ新たな方法論を —『自分史』充実のために」『遺稿集』64頁。
- (19) 2005年、稔の自宅から大量のRCC(中国放送)の名前の入った録音テープが再発見され、中国放送が復元を行った。取材対象は50人にのぼる。秋信利彦によると、こうした録音テープは一部番組に使用した後は通常廃棄されることから、それを惜しんだ秋信が保管を依頼したものだということ。
- (20) 詳細は、大牟田稔「沖縄の被爆者たち」参照。山代巴編『この世界の片隅で』(岩波新書、1965年)所収。
- (21) ただし平岡は中学校時代を京城(現在のソウル)で過ごしている。
- (22) 社内の手続きが煩雑だったため、ルポは「風早晃治」名で発表された。余談だが、秋信によると、彼が原稿を書くのが「風のように早かった」ことから山代がそう名づけたという。
- (23) 秋信利彦「大牟田さんと『きのこ会』～解説に代えて」『遺稿集』33頁。
- (24) 文沢隆一(1928～)作家。東大文学部を卒業後、1963年『重い車』で群像新人賞を受賞。著書に『ヒロシマの歩んだ道』(風媒社、1996年)、『日本語の空間』(溪水社、2007年～)ほか多数。
- (25) 畠中国三「片隅の記録」きのこ会編『原爆が遺した子ら～胎内被爆小頭症の記録』(1977年)136頁。

- (26) 伊藤敬子「山代巴がのこしたもの」(中国新聞 2008 年 2 月 26 日～28 日掲載) 参照。
- (27) 岩崎清一郎 (1931～) 作家。「天邪鬼」元同人。現・「安芸文学」主宰。
- (28) 小久保均 (1930～) 作家。広大文学部卒業。『折れた八月』(1972 年) で直木賞候補。『夏の刻印』(1976 年) で芥川賞候補。ほか著書多数。
- (29) 大牟田稔「アメリカ人と『原爆展』」(「軍縮問題資料」1995 年 9 月号) 等の論考を参照。『遺稿集』156 頁。
- (30) 大牟田稔「平和のとりでを築く」(光村図書出版、「国語六年(下) 希望」所収) 原爆ドームが世界遺産に選ばれるまでを平易に語った内容。『遺稿集』102 頁。
- (31) 大牟田稔「平和への課題」(出典不明・1999 年 8 月 4 日の自筆原稿) 『遺稿集』100 頁。
- (32) 小久保均「空ゆかば」(広島花幻忌の会「雲雀」創刊号、2002 年) 19 頁。

広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター所蔵 原爆被ばく関連新聞切り抜き記事の概要

川野 徳幸

はじめに

広島大学原爆放射線医科学研究所（以下、「原医研」）は、1961年の設立以降現在まで、原爆とその他の放射線被曝の実態解明に不可欠な様々な分野の学術資料を収集してきた。それらは、巻末資料に示すように、医科学、物理学、人文社会学と多岐の分野に跨っている。これは、一方で原爆被ばく被害の解明には、総合的な視点による考察が必要であることをも示唆しているのである。なお、これら学術資料群の内、特に重要な資料群の情報に関しては、「原爆・被ばく関連資料データベース」で公開している⁽¹⁾。以下の資料群がそれである。

- (1) 「原爆・被ばく」をキーワードとする新聞切り抜き記事 約 41,000 点
収録範囲：昭和 42（1967）年から昭和 54（1979）年までの中国新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社及び読売新聞社の記事
- (2) 米国陸軍病理学研究所（AFIP）から返還された医学的写真資料 約 1,200 点
- (3) 原爆・被ばく関連の図書資料の書誌事項 約 6,200 点
- (4) 原爆被爆物理試験データ 約 1,200 点
- (5) 米国及び旧ソ連核実験実施記録データ 約 1,800 点

上記資料群の内、最も継続的に収集しているのは、原爆被ばくに関する新聞記事である⁽²⁾。秦野（1991）が指摘するように、新聞記事は資料としての価値という側面では、その内容の詳細さにおいて、いわゆる「第一次資料」には及ばない（161-162）。しかし、秦野の指摘通り、「第一次資料」の索引としては有効に機能するであろうし、日々新たな展開を見せる原爆あるいはその他の被ばく問題に関する情報を得るためには、新聞は最適な情報源であると言えよう。

本小論においては、原医研が収集してきた原爆被ばく関連記事の概要を報告したい。記事の量的変化あるいは記事内容の変遷を検討することにより、原爆被ばく問題にマスコミがどのように関わってきたかを知ることができる。そして、それは、この問題が日本でどのように認識されているかを知る試金石ともなる。これらの問題については、次稿の課題としたい。ただ、年別の切り抜き記事数の提示などは、原爆被ばく関連記事の量的変化について、何らかの示唆をしていると言えよう。詳細については、あわせて次稿に期したい。

原爆被ばく関連記事収集沿革の素描

原医研では、1967年に原爆被ばく関連記事の切り抜き作業を開始した。2006年12月までの切り抜き総数は約21万点であり、後に言及するが、1990年までは分類別に、それ以降は年別に整理・保管し、希望者には公開している。年別での切り抜き記事数を示したものが次表である。

表1 広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター所蔵

新聞切り抜き記事の年別内訳（1967年－2006年分）

	件数		件数		件数
1967年	98	1981年	12,565	1995年	10,901
1968年	278	1982年	7,676	1996年	5,383
1969年	879	1983年	5,577	1997年	3,868
1970年	1,700	1984年	5,963	1998年	5,605
1971年	1,771	1985年	6,752	1999年	4,991
1972年	1,377	1986年	5,879	2000年	4,843
1973年	2,168	1987年	5,445	2001年	3,754
1974年	3,470	1988年	5,108	2002年	6,796
1975年	4,816	1989年	5,543	2003年	7,655
1976年	6,110	1990年	5,393	2004年	6,199
1977年	7,415	1991年	4,782	2005年	7,901
1978年	7,792	1992年	4,756	2006年	6,149
1979年	7,465	1993年	3,904		
1980年	8,581	1994年	5,979		
				総数	213,287

* 切り抜き記事の集計結果は、1977年分から『原爆放射能医学研究所年報』に報告されている。それ以前の集計結果については、「原爆・被ばく関連資料データベース」作成の際に広島大学図書館と共同で調べたものである。

この新聞切り抜き業務は、1967年、当時の原医研疫学・社会医学部門が始めたもので、1975年以降は国際放射線情報センターの前身である原爆被災学術資料センターが引き継いで現在に至っている⁽³⁾。1967年から1974年までは、中国新聞を中心に被爆者問題についての主要記事を収集する程度であったが、1975年からは朝日・毎日・読売・中国・長崎⁽⁴⁾の5紙を対象に、原爆問題に関わる記事を網羅的に収集している（宇吹 1990、秦野 1991）。その後、2001年からは産経新聞を加え、計6紙の切り抜きを行っている。また、1997年からは政党機関紙である赤旗、公明の切り抜きを始め（広島大学原爆放射能医学研究所 1999）、2001年にはそれらに自由民主、民主、社会新報を加え（原爆放射線医科学研究所 2003）、現在に至っている。

1967年から1974年まで：本格的切り抜き作業の前史

秦野（1991）は、新聞切り抜き作業は1975年から本格化したと指摘している。ここでは、本格化する1975年までの切り抜き作業の状況を概観したい。1967年から1974年までの切り抜き記事の新聞社別内訳を示したものが次表である。

表2 1967年－1974年新聞切り抜き記事の新聞社別内訳

	中国新聞	朝日新聞	毎日新聞	読売新聞	長崎新聞	合計
1967	42	54	2			98
1968	175	88	11	4		278
1969	596	267	14	2		879
1970	816	423	317	144		1,700
1971	961	399	405	5	1	1,771
1972	803	294	262	18		1,377
1973	1,306	433	418	11		2,168
1974	1,636	844	768	220	2	3,470
合計	6,335	2,802	2,197	404	3	11,741

* 「原爆・被ばく関連資料データベース」作成の際に広島大学図書館と共同で調べた。

記事の切り抜き開始から1968年までの2年間は、主に中国・朝日両紙の原爆に関する主要記事のみを対象としている。兩年あわせて376点の記事を収集したにすぎない。しかし、それ以降は、切り抜き件数が大幅な増加傾向を見せている。1970年からは毎日、読売の2紙も加え、切り抜き作業の本格化を目指したのではないかと考えられる。しかし、1971年から73年までの3年間は読売新聞の切り抜きはほとんど休止状態である。この3年間に読売新聞が原爆に関する報道をしなかったとは考えられない。何らかの理由で切り抜き作業を休止したのであろう。1974年には読売の切り抜きを再開し、同時に長崎新聞の記事2点を切り抜いている。翌年の1975年には長崎新聞の切り抜きを開始し、902点の記事を収集している。これをもって原爆関連記事の切り抜き作業が本格化した年と考えてよいだろう。1967年から2006年までの切り抜き記事の平均は、5,332点である。1975年にはそれに迫る4,816点である。秦野（1991）の指摘通り、1975年に切り抜き作業は本格化されたと言えよう。

1967年以来、新聞切り抜きは原医研疫学・社会医学部門が担当してきた。1974年には、現在、本業務を担当する国際放射線情報センターの前身である原爆被災学術資料センターが設立されている。この設立にあわせるかたちで原爆関連記事切り抜き作業は本格化している。疫学・社会医学部門から引き継がれた際に本格化することが協議されたのか、このあたりの詳細な経緯については、明らかではないが、原爆被災学術資料センターが原爆関連記事切り抜き業務を本格化させた事実だけは間違いなさそうである。

1975年から1990まで

1975年に本格化した新聞切り抜き作業は、1978年作成の分類表に基づき行われていた（宇吹 1985:3）。『原爆放射能医学研究所年報』での記事切り抜き記事数の報告が始まるのは、1978年『原爆放射能医学研究所年報』からである。そこでは、「被爆者関係」、「核・原子力関係」、「論説・評論」という3つの分類により集計されている。その翌年以降は、原則として、1978年作成分類表に基づき整理されている。1979年『原爆放射能医学研究所年報』には、1967年から1976年までの切り抜き記事を先の分類表に基づき再整理し、その集計結果を報告している。その翌年の1980年『原爆放射能医学研究所年報』では、1967年から1979年分の集計を行っている。その後は、1990年まで原則として、毎年、分類表に従って前年度の集計結果を報告している。

分類項目であるが、おおむね20の項目に分類され、さらに92の小分類に分けられている。次表は、宇吹ほか（1990）に基づき作成した分類項目および大分類による切り抜き記事数を示したものである。分類項目別で最も多かったのは、大分類においては「運動」、続いて「核平和利用」、小分類では「市民運動（9650件）」、「投書（4645件）」、「出版（4278件）」などである（宇吹ほか 1990:187-188）。但し、「核平和利用」に関しては、1982年以降は切り抜きの対象から外している⁽⁵⁾。また、新聞社別では中国新聞が全体の約30%を占め、月別では原爆が投下された8月が最も多く全体の約21%を占めている（宇吹ほか 1990:187）。この状況は現在もあまり変わらないと考えて差し支えない。宇吹は、「原爆報道」の内容を検討した結果として、その主な内容は被爆体験の継承であり、1981年までは記事全体の47%を、82年以降では60%前後を占めていると分析している。同時に、被爆者や原爆被害の実態に関する記事は、1989年までの15年間に於いて低水準で定着していることを指摘している。

この約15年間の切り抜き記事数の平均は、6,755点である。全体の平均記事数5,332点、1991年から2006年までの平均記事数5,842点、これらを勘案しても、この15年間の記事数が多いことが理解できる。これは、原爆被ばく関連記事そのものが多かった結果なのか、あるいは当時の担当スタッフが充足し、漏らさず記事を切り抜いた結果なのか。1986年にはチェルノブイリ原発事故が起き、それ以降、原子力発電の問題がマスコミで頻繁に取り上げられることとなる。また、セミパラチンスク地区の核被害についても1991年の旧ソ連邦崩壊後、マスコミによって度々報道されることとなる。「被爆」問題が、単に原爆問題に留まらず、

いわば「被曝」・「被ばく」・「ヒバク」の問題へと拡大していく。1999年には、東海村 JOC 臨界事故もあり、被ばく被害に関する報道が活発化する。こういった状況を鑑み、国際放射線情報センターも切り抜き記事の対象を「被ばく」問題へと拡大することとなる。逆説的に考えれば、「グローバルヒバク」の諸問題が顕在化していない、この約 15 年間の平均 6755 点という切り抜き記事数は、かなり多い件数であることが理解できる。この間は、原爆に関わる記事そのものが多かったと考えると差し支えないだろう。

表3 原爆被ばく関連記事分類項目表および大分類の記事件数

大分類	件数 (1967-1989年分)	小分類
被爆者 (I)	2,129	一般/人名/死亡/遺骨/被爆証人捜し
被爆者 (II)	3,717	一般/被爆者/胎内被爆者/在米被爆者/その他在外被爆者/朝鮮人被爆者/その他外人被爆者/核実験被爆者/被爆二世
被爆当時の 施設団体組織	596	一般/官公庁/民間/軍隊/学校/町内会/その他施設
行政	2,830	一般/国/地方自治体/原爆二法/援護法/原爆訴訟
福祉	1,783	一般/養護・福祉施設/慰問・奉仕
医療	864	一般/原爆症/検診/原爆病院/その他医療施設
慰霊・法要	5,883	一般/平和祈念式典/関連行事/慰霊祭・碑
資料・記録	8,999	一般/遺跡・遺物/文書・写真/出版/資料収集・記録/原爆展
調査・研究	3,389	一般/調査・研究活動/学会・シンポジウム・講演/原医研/放影研/平和科学研究センター
文化活動	6,186	一般/文芸/映画・演劇/絵画・彫刻/漫画・芸能/音楽・舞踊/放送・報道/
団体	1,903	一般/被爆者団体/原水禁団体/市民団体
運動	18,904	一般/被爆者運動/原水禁運動/核実験抗議/市民運動
平和教育	4,062	一般/学校教育/平和教育シンポジウム/教師・教組/地域・団体
平和都市	6,776	一般/広島市・長崎市/平和文化センター/平和公園・資料館等/行事/来訪者
その他	3,123	トピック/人物/参考
原爆投下	225	一般/開発の経緯/投下をめぐって
論説	11,398	一般/社説/企画記事/コラム/評論/投書
核軍事*	9,784	一般/日本の政策・状況/各国の政策・状況/核実験・影響/核管理・軍縮
核平和利用*	16,236	一般/日本の原子力行政/原発・原子力産業/原子力船「むつ」/各国の政策・状況/原子力協定・公益/国際機関・会議/事件・事故/研究・開発
連載記事	8,830	
合計件数	117,617	

* 1982 年以降切り抜き対象から外す。

1991 年から 2006 年まで

国際放射線情報センターは 1994 年 6 月、既存の原爆被災学術資料センターを改組拡充し、世界的視野に立った被ばく資試料の調査・収集・解析を行い、国際的な放射線情報の発信基地として機能することを目的に設置された。この改組に伴い、原爆被災学術資料センターが行っていた新聞切り抜きの業務も国際放射線情報センターに引き継がれた。これ以降、切り抜き記事は、その対象を原爆問題のみならず広くその他の被ばく問題にまで拡大することとなる。

一方、1990 年まで継続されていた分類表による新聞切り抜き記事の整理は、1991 年以降行われていない。分類表に基づく、記事の選定とその切り抜き作業は行われていたようであるが、分類項目に基づく集計は中止したようである。その理由は明らかではないが、当時、切り抜き作業を担当していた二人の職員が、1991 年・1992 年と相次いで急逝されたことが直接の原因ではないかと考えられる。何れにせよ、1991 年からは、年別の集計結果のみが報告されることとなる。担当者の逝去後、数名の常勤あるいは非常勤の職員が、数年

単位で新聞切り抜き業務に従事した。2001年4月から2008年12月現在まで、重田千晴氏が同業務に従事している。しかし、担当者間で十二分な引き継ぎが行われた様子は見受けられない。重田氏に関しても同様で、同氏は、表3の分類項目、そしてこれまでの切り抜き記事を参照し、対象となる記事を選定し、切り抜き作業を継続している。従って、対象とする記事内容については、担当者によって若干の相違が生じているものと考えられる。現在は、これまで収集された記事あるいは先に挙げた表3の分類項目から、次のようなキーワードに関連する記事を切り抜き対象とし、業務を継続している。

被爆（曝）、放射線（能）、原爆、水爆、原発、核、核開発、核実験、原子力、原子炉、原爆記念館、平和記念、原爆死没者、慰霊碑、被爆の・・・（建物）、平和学習、平和運動、永井隆、マルセル・ジュノー、峠三吉、原民喜、語り部、栗原貞子、佐々木貞子（サダコ）、折り鶴、チェルノブイリ、セミパラチンスク、ビキニ、IAEA、IPPNW など

おわりに

本小論では、広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター所蔵の原爆被ばく関連記事の概要を3期に分け、順次報告した。原爆被ばく関連の記事内容は社会的・時代的背景と共に若干の変化はあるものと考えられる。例えば、1967年から1989年までの切り抜き記事の中で「被爆証人捜し」の記事は932点あるが（宇吹 1990：678）、それ以降、それに関連する記事は減少したことは想像に難くない。原爆関連記事内容の変遷あるいは量的変化については、宇吹（1985・1990）が詳細に検討しているが、それは1980年代までの記事を対象とした分析である。それ以降の原爆被ばく関連記事内容の変遷を検討したものは見当たらない。記事内容の変遷を追うことは、原爆問題あるいは被ばく問題に、われわれがどのように対峙してきたかを知る手がかりになるはずである。日本は唯一の被爆国として、どのように原爆問題、あるいは被ばく問題に対してきたのか。そういったことをも知らしめる貴重な資料である原爆被ばく関連記事の収集・保管・公開は、原爆被害に端を発した、原爆放射線医科学研究所の責務の一つであろう。今後も本業務を継続する所以である。

謝辞

重田千晴氏（国際放射線情報センター非常勤職員）には、『広島大学原爆放射能医学研究所年報』・『広島大学原爆放射線医科学研究所年報』から新聞切り抜き記事数の集計を行ってもらった。また、松井恵美子氏（放射線分子疫学非常勤職員）には、1990年代の切り抜き作業の様子をお教えいただいた。記して深謝いたします。

注

- (1) URL は、<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/abdb/>。本データベースの概要と公開の意義については、川野ほか（2006）参照。なお、本データベースは、平成15年度・16年度科学研究費（研究成果公開促進費）データベースの助成を受けた。
- (2) 宇吹（1985・1990）は、原医研収集の新聞記事を「原爆報道」と呼んだ。しかし、1990年以降は、チェルノブイリ原発事故被害、セミパラチンスク地区の核被害を含む、その他の被ばく被害についても、切り抜きの対象に加えている。そのため、本稿では、「原爆報道」ではなく「原爆被ばく関連記事」という用語を用いる。
- (3) 但し、引き継ぎ後も随時、疫学・社会医学部門は切り抜き作業を手伝ったようである。
- (4) 全国紙は、広島県版を対象としている。産経新聞も同様である。

(5) 宇吹 (1985) は、その理由として、作業量が膨大であったことを挙げている。

引用文献

秦野裕子 (1991)、広島大学原爆被災学術資料センターの新聞切抜資料、国立国会図書館編、『資料保存シンポジウム・2 新聞の保存と利用－第2回資料保存シンポジウム講演集』、日本図書館協会、161-173。

広島大学原爆放射能医学研究所・広島大学原爆放射線医科学研究所 (1978-2008)、『広島大学原爆放射能医学研究所年報』・『広島大学原爆放射線医科学研究所年報』19-49、広島大学原爆放射能医学研究所・広島大学原爆放射線医科学研究所。

川野徳幸ほか (2006)、「原爆・被ばく関連資料データベース」の概要と公開の意義、『長崎医学会雑誌』、Vol. 81 特集号、201-205。

宇吹暁 (1985)、原爆報道の軌跡—新聞記事の量的側面の検討、『広島市公文書館紀要』、8、1-37。

宇吹暁ほか (1990)、過去15年間の原爆報道(新聞)の検討、『長崎医学会雑誌』、65(特集号)、677-682。

巻末資料 広島大学原爆放射線医科学研究所附属国際放射線情報センター所蔵原爆・被ばく関連資料

2008年10月現在

項目	内容	件数	公開レベル*
原爆被爆者データベース (ABS)	被爆者の年齢、性別、住所、被爆状況等のデータベース	被爆者約 28.8 万人	B*
新聞切り抜き記事	1967年から1979年までの中国、朝日、毎日、読売の新聞各社の「原爆・被ばく」をキーワードとする新聞切り抜き記事	約 41,000 点	A
	1977(年報記載開始年)～2006年の新聞切り抜き記事	約 190,000 点	C
図書	原爆被ばく関連図書 2006年12月末現在(寄贈図書も含む)	9,966 点	B
雑誌	雑誌・定期刊行物(2005年現在)	28 誌	C
米国陸軍病理学研究所よりの返還資料 (AFIP 資料)	医学記録ホルダー(剖検記録、検診記録、カルテ等をとじたもの)	9,060 例	C*
	写真資料(Webで公開中の写真資料)	1,205 枚	A
	病理標本(ホルマリン固定臓器)	35 例	B*
	病理標本(パラフィンブロック標本)	284 例	B*
	顕微鏡スライド	669 例	B*
医学資料	剖検資料(症例総数)	9,161 例	C*
	剖検記録	8,624 例	C*
	保有臓器標本	8,044 例	B*
	スライド標本	4,707 例	B*
平岡敬寄贈資料			
(韓国人・朝鮮人被爆者問題関係資料)	韓国取材関係、孫振斗裁判関係、韓国原爆被害者協会関係、韓国人被爆者支援関係等の文書類	約 1,000 点	B*
	被爆韓国人・朝鮮人関連図書・雑誌	約 400 点	B
原爆被爆物理試料	DS02の正当性を証明した被爆瓦、土壌などの被曝物理試料	約 1,200 点	B
チェルノブイリ関連試料	土壌、煉瓦、食品を灰化したもの	約 150kg	B
セミパラチンスク関連試料・資料	線量測定のための土壌サンプル、煉瓦など	約 600kg	B
	セミパラチンスク核実験場近郊住民を対象としたアンケート回答票及び証言	1,580 点 (証言1,097点を含む)	B*
朝日新聞「被爆60年アンケート調査」の調査票(証言含む)	原爆被爆者の健康状況、心的影響、社会経済的被害の実態を提示するアンケート調査票及び証言	約 13,000 人分のデータ及び証言	C*

山科資料	山科清氏による被爆初期剖検記録（1945年8月9日から8月15日までの広島（似島）における早期死亡12例の病理解剖症例 B5（25cm）	57枚	C*
その他 DVD、ビデオ等	広島・長崎における原爆の影響（日本語版・英語版） 日本映画新社作など		C

* A：無条件公開、但し使用の際には出典等を明記する

B：審議の上、条件付き利用可（要利用申込み）

C：審議の上、閲覧のみ可（要利用申込み）

なお、*はプライバシー保護の観点から慎重に対応すべき資料群を示す。

韓国人・朝鮮人被爆者問題と新聞報道

—昭和40年から平成2年までを中心に—

石田 雅春

はじめに

原爆報道をめぐる先行研究としては、モニカ・ブラウ『検閲 1945-1949—禁じられた原爆報道』（時事通信社、昭和63年）、江藤淳『閉された言語空間』（文春文庫、平成6年）、NHK出版協会編『ヒロシマはどう記録されたか—NHKと中国新聞の原爆報道』（NHK出版協会、平成15年）などがある。

これらの研究は、主として昭和20年8月6日直後の原爆被害の報道や、占領軍による検閲と原爆報道の関係を分析したものである。このように先行研究は占領期に集中しており、講和独立後の原爆報道については、ほとんど研究されていない状況である。

マスコミの報道が、世論形成に大きな影響力を持つことは言うまでもない。このため、原爆報道が、何を、どのように伝えてきたかということを検証することは、現在の私たちの核兵器や平和への認識の原点を探ることにつながると筆者は考えている。この点に関連して島津邦弘氏（当時中国新聞記者）は、『年表 ヒロシマ—核時代の50年の記録』の編集作業を振り返って次のような興味深い指摘を行っている（傍線筆者）⁽¹⁾。

『年表 ヒロシマ』の編集作業は一九九三年の夏にスタートした。編集と言えば聞こえはいいが、過去五十年の新聞を一枚ずつめくって、原爆、核関連の記事を年表化する気の遠くなるような作業である。日常の取材活動が「空間」を移送しながら目と耳を働かせるのに対し、これは五十年という「時間」を移動する、われわれにとっては全く経験の無い営みであった。（中略）「へえ、こんなことがあったのか」「こんな人がいたのか」「あの人は当時と今では言っていることが随分違うなあ」…。時間の旅を続けながら、驚き、考え込み、多くのことを学んだ。それは、空間の移動では得られない貴重な体験であった。

率直に言って、われわれは五十年という時間にはんろうされた。一つの事実が、ある時点から姿を消す。一つの事実が、時間の経過とともに全く異なった解釈を生み出す。何が「事実」かを見極めるのは容易でない。さらに厄介なことに、新聞に載ったという事実は、真偽とは無関係に残り続ける。締め切り時間という制約の中で、日々発行する新聞の限界を思い知らされながら、『年表 ヒロシマ』の編集を進めた。

すなわち、島津氏を初めとする中国新聞ヒロシマ50年取材班は、被爆後50年間の原爆報道を整理する過程で、報道と事実の間に相当の乖離があることに気がついたのである。その後、こうした問題意識にもとづき中国新聞ヒロシマ50年取材班は、事実の再調査に着手し、その成果の集積として『検証ヒロシマ 1945-1995』をまとめたのであった。

こうした問題意識と取材姿勢に対して筆者は共感を覚える一方で、事実の再検証に加えて原爆報道そのものの分析も必要ではないかと考えている。すなわち、仮に後から見直してみても「誤報」と思われる記事があった場合、一義的には事実の再確認が必要である。ただ、その「誤報」記事も新聞に掲載された当時は多くの読者に「真実」という印象を与え、人々の行動に何らかの影響を与えたはずである。歴史とは人々の営みの記録であり、その原因や背景を解き明かすことが歴史学に課せられた重要な課題の一つである。このため、報道の分析を通じて当該期の人々の行動を規定した要因を探ることは、歴史学にとって重要な作業であると思われる。

さて、こうした問題関心に基つき本稿では、韓国人・朝鮮人被爆者の問題をめぐる報道に焦点を合わせて分析を行う。韓国人・朝鮮人被爆者については、「周縁化された被爆者」という表現が示すように、被爆者の中でも特殊な位置づけをされてきた⁽²⁾。

すなわち、韓国人・朝鮮人被爆者は、原爆の被害者であるとともに日本の植民地支配の犠牲者でもあるため、二重の被害を受けたと評価されてきた。また、日本人被爆者が被爆者医療法や被爆者特別措置法によって救済されていたのに対して、韓国人・朝鮮人被爆者は、こうした恩恵を受けることができず日本政府によって放置されたとも評価されてきた⁽³⁾。

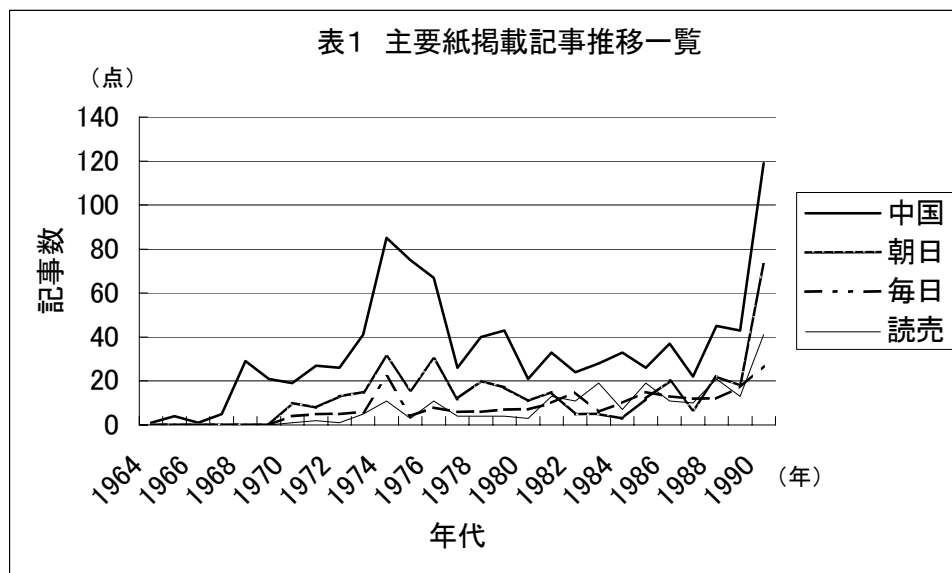
このように同じ被爆者でありながら韓国人・朝鮮人被爆者は、日本人の被爆者と全く異なる境遇におかれてきた。当然ながら報道においても、日本人の被爆者とは異なった視点から取り上げられてきたと考えられる。本稿では、こうした点に留意しつつ韓国人・朝鮮人被爆者に関する報道を分析するとともに、その意味について考察する。

1. 使用史料とその特徴

本稿では「平岡敬関係文書」所収の新聞記事切り抜きを使用する⁽⁴⁾。「平岡敬関係文書」には、年ごとに紙袋に仕分けされた新聞記事の切り抜きが存在する。総点数は2037点、記事が収集されている期間は昭和39（1964）年から平成2（1990）年までである。収集対象となった新聞は、地元紙『中国新聞』（記事数：941点）と『朝日新聞』（363点）、『毎日新聞』（217点）、『読売新聞』（214点）が中心である。

また、時期的に偏りがあるものの『統一日報』（136点）、『朝鮮時報』（76点）、『祖国統一新報』（48点）など、在日韓国人・朝鮮人向けに発行されている新聞の記事も収集されている。

この新聞記事の切り抜きは、平岡敬氏が、新聞記者として韓国人・朝鮮人被爆者の問題に取り組む過程で収集したものである。個人が収集したため収集範囲・時期について偏差が見られるが、主要紙については丹念に収集されているので、報道の全体的な傾向を確認するには問題がないと考えている。また、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』については、全国版の記事の他に広島県版の記事が多数収集されており、より総合的な分析が可能であると考えている。



さて、表1に主要紙の掲載記事数の推移を示した。また、これら主要紙の記事一覧目録を附録として掲載した（報告書巻末参照）。これを見ると、当然ながら地元紙『中国新聞』の記事が圧倒的に多くなっていることが分かる。全国紙については、『朝日新聞』の記事数が最も多い。一方、『毎日新聞』と『読売新聞』の記事数はほぼ同じである。

ただ、附録の記事一覧目録を見ると、『朝日新聞』が全国版に多くの記事を掲載しているのに対して、『毎日新聞』と『読売新聞』の記事は大半が広島県版であることが分かる。すなわち、全国紙のなかでも報道姿

勢には温度差があり、『朝日新聞』は韓国人・朝鮮人被爆者の問題に熱心に取り組んできたと評価できよう。

また、このことは広島県内と広島県外とでは、韓国人・朝鮮人被爆者問題の情報に触れる機会に大きな差があることを示している。すなわち、広島県外の在住者はそもそも韓国人・朝鮮人被爆者関連の記事を目にする機会自体が少なく、問題が浸透しにくい環境に置かれていたと言える。

次に、記事数の推移について見ると、昭和49（1974）年と平成2（1990）年にピークを迎えていることが分かる。その内容については次節で詳述するが、両年とも韓国人・朝鮮人被爆者問題にとって画期となるできごとが起きている。すなわち、現実社会の動向に報道が敏感に反応している証左と思われる。

2. 時期による記事の特徴

前節では、韓国人・朝鮮人被爆者問題に関する新聞記事の動向について、全体状況を俯瞰した。これを踏まえ本節では、記事の内容的な特徴について見てゆく。前節で確認したように、新聞報道の動向と現実のできごとは密接な相関関係にあることがうかがえる。そこで分析にあたっては、韓国人・朝鮮人被爆者を取り巻く社会情勢を勘案し、①昭和40～44年、②昭和45～52年、③昭和53～61年、④昭和62～平成2年の4期に分けて分析することとした。

（1）第一期 昭和40（1965）～44（1969）年

第一期は、広島の地元紙『中国新聞』が中心となって報道を展開した時期である。『中国新聞』の記事における初見は、昭和40年7月28日夕刊（29日朝刊）の報道である。これは在日韓国居留民団広島本部と同青年同盟によって韓国へ派遣された「被爆者実態派遣団」の調査報告を記事にまとめたものである。同記事では「救いの手待つ韓国の原爆症患者」「被爆後帰国の五千人」「奇形・精薄児も出産」という見出しのもと、在韓被爆者の存在を7段写真付で大きく報じられている。

ただ、この記事は間接的な取材によるもので、在韓被爆者への直接取材は、同年12月3、4日の特集記事（「隣の国韓国」⑨、⑩）まで待たなければならなかった。同記事は初めての本格的な在韓被爆者のレポートであるため、その後の報道のあり方に影響を与えたと思われる。そこで記事のスタイル、主張について確認するため、以下、「隣の国韓国」第9回を全文掲載する（傍線筆者）。

隣の国韓国⑨ 平岡本社特派員

ヒロシマの傷あと 検診など夢物語り 広島から救援の声を

おばのチマ盗み手術

二十年前の八月六日、広島で起こった悲劇を日本人は忘れていない。だが、そのとき広島には数万の朝鮮人がいたといわれる。そのうち原爆で何人が傷つき、何人が死んでいったのか、そして彼らが母国へ引き揚げてからどうなったのか—日本人は彼らの悲惨な運命について、ほとんど無関心であった。ソウル東部の貧しい住宅地で金福詰さん（三四）にめぐり会ったとき、彼女の顔の右半分から首筋にかけて残る大きなケロイドは、まるで私たち日本人のケロイドのように思えた。

日本語をすっかり忘れてしまった金さんは「記憶力が薄れたのも原爆のせいではないだろうか」とつぶやきながら、`炎の日、を語り始める。顔色がひどく悪い。

広島市竹屋国民学校六年生だった金さんは、ちょうどそのとき、御幸橋を渡っていた電車のなかで被爆した。せん光とごう音—それからどこをどう逃げたのか。気がついたときには、顔半分と両腕のつけ根から指の先まで皮膚がめくれ垂れ下がっていた。

二十年秋、一家は韓国へ帰り、いなかへ引っこんだが、火傷のひきつりで金さんお首は右へ傾いたまま。ものごころついた少女に、他人の視線は耐えがたかった。

十七歳のとき、〃ヒロシマ、の傷あとをなおしたい一心から、おぼのチマ（スカート）を盗んで家出。大田市でそれを売り、手術費を作った。手術の結果、首はどうにかまっすぐになったが、首のケロイドは消えなかった。

ソウルで結婚して今は二児の母親。三度も流産したが、妊娠中は下半身がひきつるように痛い。金さんはそれも原爆のためだと思う。昨年からときどき目まいを覚えるようになった。じっと見つめていると視野がゆらぐ。

自分の苦しみを周囲の人に話しても、わかってもらえない。原爆後遺症の話も聞いた。病院に行きたいが、金がかかる。金さんは不安だ。「自分のからだがどうなっているのか分からないのは、頭のなかに大きな荷物をかかえているような気がする。一度すみからすみまで調べてもらいたい」

末っ子が小児マヒ

ソウルで木材の売買をしている柳春成さん（四九）は、昭和十九年三月徴用を受け、呉にあった海軍施設部の測量隊で働いていた。〃あの日、は広島市に出張を命ぜられた。朝八時五分に広島駅に着き、駅前の人を待っていた。腕時計をのぞきこんだ瞬間、目の前が光った。上半身と両腕を火傷、全身血だらけになって、線路を越え駅裏へ逃げた。

火傷は一ヶ月ぐらいでなおったが、帰国後はからだの調子がよくない。五年前に腸チフスのような病気になり、血をはいたりした。病院で白血球が多いといわれた。目も悪い。十一歳になる末っ子が歩けない。小児マヒだと診断されたが、原爆に関係があるかもしれないと考えこむときがある。

柳さんは迷っている。「とにかく正しい診察を受けて、原爆症かどうか確かめたい気持ちがある一方、病院に行くと死刑を宣告されるのではないかという気もして恐ろしい」

釜山の箱房地帯で捜しあてた朴順子さんは二十四歳。被爆の記憶は、家が倒れて火事が起こったことだけ。引き揚げ後、父は密航船で再び日本に渡って結婚し、母も子供も捨てて再婚した。順子さんは孤児院、託児所などを転々とし、いまは母のいところにあたる家で子もりやせんたくをしながら食べさせてもらっている。昨年、孤児院でロク膜炎といわれた。両足が神経痛のように痛む。原爆症の話を知ると、広島は記憶がよみがえり、自分はどうかと心配になる。父の名は朴尹先。「私を捨てて行った父だけど、とにかくひと目でも会いたい、と順子さんは涙をふいた。

薄い社会の関心度

韓国には健康保険制度がない。生活が苦しいから、医者にみてもらう余裕はない。そのうえ、原爆症にたいしては、国外で起こった惨禍であるだけに、社会の関心度も低い。被爆者たちは生活に追われ、何の援護も期待せず、一種のあきらめの心境で、つらい運命を耐えている。「原爆手帳」の話をするとみんな目を丸くした。だが、韓国では定期検診ですら、夢物語りとして受け取られる状態だ。

夏になるとからだのだるくなり「骨のなかに風がはいるような気がする」と訴える林福順さん（三五）も、疲れると手足に赤い斑点ができ、水に入れるとはれあがるという朴信彦さん（四四）もこういって深々と頭を下げた。

「すんだことはしかたがないが、わたしたちは原爆にあっという間、一度もまともな治療を受けなかった。なおるものなら、なんとかしてなおしたい。でも私たちの国は貧乏だし、被爆者の数も少ないから、黙ってしんぼうしている。私たちは広島の人がうらやましい。広島から救援の声をあげてもらえるよう、ぜひお願いします」

同記事では、「ヒロシマの傷あと」の見出しのもとで、①被爆の経緯、②貧しい生活の中で原爆症に苦しむ在韓被爆者の実態、③在韓被爆者を取り巻く韓国社会の状況を生々しく伝えている。そして続く「隣の国韓国」第10回では、在韓被爆者の全体数、職業、被害状況の統計的なデータと韓国政府の対応について紹介した上で、次のような主張で記事を締め括っている（傍線筆者）。

しかし、韓国の被爆者問題はただ日本人が同情や哀れみから救援の手をさしのべるだけで解決する問題ではない。韓国の被爆者の悲惨さを知ることは、日本人の「はずかしさ」を認識することである。「ヒロシマ」と「韓国」を重ね合わせて、そこから読みとらねばならないものは、おそらく日本人自身の問題であろう。彼らの受けた二重の傷に気がつかないことは、私たち自身の心の傷に目をつぶることなのだ。

短い旅行中、会うことのできた韓国の被爆者たちは、ひとりとして恨みがましいことを言わなかった。彼らは自分たちの苦悩を訴えるすべを知らない。それは他人の理解を超えるものとして、彼らの胸の底に秘められている。だが、それをわかち合うことができるのは、私たち日本人が「朝鮮人」にたいして、心から「アンニョンハシムニカ」（今日は）をいえるときではないだろうか。

「二重の傷」という表現からも明らかのように、在韓被爆者が原爆被爆と日本の植民地支配による二重の被害者であるという視角を同記事は提示している。このため「同情や哀れみ」ではなく、過去への反省の上に立った日本人の支援が必要であることを訴えているのである。

以上、初めての在韓被爆者の特集記事を見てきたが、このような記事の構成と問題分析の視角は、韓国人・朝鮮人被爆者報道の基本的なスタイルとして受け継がれてゆくのである。

さて、このように在韓被爆者の存在が紹介されたのであるが、全国紙などで本格的に報道されるようになったのは、孫貴達への被爆者健康手帳交付問題がきっかけである。これは昭和43年に日本に密入国した孫貴達が、逮捕後、原爆症の治療を密入国の理由として主張した。これを受けて孫貴達への被爆者健康手帳の交付と治療を支援しようとする動きが市民の間で起こった。

結局、韓国に残した子供が心配という理由で孫貴達が帰国したため、中途半端な状態で問題が終結するのであるが、この過程において在韓被爆者(外国人)への被爆者健康手帳交付の可否が問題となったのであった。すなわち、韓国人・朝鮮人被爆者の救援問題は、このできごとを契機として韓国という国外のできごとから、日本国政府の対応という国内の問題になったのである。

(2) 第二期 昭和45(1970)～昭和52(1977)年

第二期は、韓国人・朝鮮人被爆者の記事数が増えるとともに、問題が本格的に取り上げられるようになった時期である。たとえば、7月下旬から8月上旬に行われる各社の原爆特集記事の中に韓国人・朝鮮人被爆者の問題が必ず組み込まれるようになっていった。

さて、こうした記事の動向について附録の記事一覧を見ると、以下の二点が理由として挙げられる。第一に、日本国内において在韓被爆者に対する支援の動きが活性化し、これに関する記事が増えたことである。なかでも、核兵器禁止平和建設国民会議(民社党系、通称「核禁会議」)は毎年医師団を派遣したり、韓国陝川に被爆者専門の診療センターを設置するなど積極的に活動していった。

第二に、「孫振斗裁判」の影響があげられる。「孫振斗裁判」とは、原爆症の治療を理由として密入国した孫振斗が、被爆者健康手帳を交付しなかった福岡県を相手取り却下処分を取り消しを求めて起こした訴訟のことである。昭和49年の福岡地裁判決、昭和50年の福岡高裁判決、昭和53年の最高裁判決のいずれにおいても原告側が全面的に勝訴した。この裁判の過程を通じて改めて韓国人・朝鮮人被爆者問題が注目され、報道の機会が増えていったものと推定される。前掲表1において昭和49年に報道数が増えているのは、同年3月に福岡地裁が画期的な判決を出したことに拠るところが大きい。

さて、このように報道が活性化することによって新しい事実の掘り起こしが積極的に行われ、韓国人・朝鮮人被爆者の置かれた悲惨な境遇が次々と報じられていった。それと同時に韓国人・朝鮮人被爆者問題に対する認識が深まりを見せたのが、第二期の特徴でもある。以下、特徴的な指摘を行っている五点の記事を抜粋して掲載した(傍線筆者)。

『毎日新聞』昭和45年6月20日

彼らにとって「原爆」とは「植民地支配、強制連行など朝鮮人に対する差別を生んだ日本民族の責任と、朝鮮人被爆者の差別の問題であろう。戦後世代の自分たちもその差別の歴史の中に身を置いている加害者である」ことなのだ。

『毎日新聞』昭和47年8月11日夕刊

また私たちは「朝鮮人被爆者も救済しよう」といった言葉もしりぞける。それは朝鮮人や中国人被爆者たちが日本軍国主義とアメリカの原爆による二重の被害者であり、このことへの自責の念を欠落した安易な被害者意識からは真の連帯は生まれえないからである。

『朝日新聞』昭和48年8月3日

当時の援護関係者に会って聴き取りにはいると、きまって「いまさらそんなこと掘り起こしても」という答えが返って来る。三菱の倉庫に眠っていたはずの朝鮮人関係資料も、訪ねたら「社史編さんに使ったあと五年前に焼いた」。「わたしがしゃべった、ということをだれにもいえないなら」と、再三にわたって念を押す人もなかにはいるという。

ヒロシマのこの拒絶反応。なぜか、と思う。彼らにとって過去は、もう痛みのいえた古傷にすぎないのか、あるいはしゃべることが自分のプラスにならないためなのか。深川さんはこれを、いまもしつように生き続けている広島「軍都的性格」とみる。原爆投下の一因であり、侵略の基地であったといわれる過去を決して認めようとしぬ罪深い平和都市の素顔をそこに見出すのである。

『読売新聞』昭和49年8月7日

その治療の施設、経験、資料を少しでも多くもつ、日本が果たさなければならぬ責任があるはずである。「ヒロシマ」「ナガサキ」を世界平和の原点と称しながらも、韓国人を含む外国人被爆者を長い間、はじき出していた事実を、日本人は考えてみなければならない。彼らを忘却することで、日本は唯一の原爆被害者になりえたのではないだろうか。

『朝日新聞』昭和49年8月5日

その出発において朝鮮人を置き去りにした聖地ヒロシマ。自衛隊のパレードが堂々と行進し、市長が閲兵する聖地ヒロシマ。ベトナム戦争に加担し、恐らくは核をふくむ基地や増強される陸海自衛隊に囲まれた聖地ヒロシマ。アジアへの経済侵略でふくれる聖地ヒロシマ。被爆者といえど、そんな国家の一員であれば潜在的に加害者であるばあいがある。

これらの記事に共通する視点は、広島・長崎で韓国人・朝鮮人が被爆した事実から日本の植民地支配の責任を考えようという見方である。こうした見方は、「戦後世代の自分たちもその差別の歴史の中に身を置いている加害者」とか、「自責の念を欠落した安易な被害者意識」といった表現からも明らかのように、日本人の加害責任を追及する方向性を有していた。

さらには、「罪深い平和都市の素顔」、「彼らを忘却することで、日本は唯一の原爆被害者になりえた」、「被爆者といえど、そんな国家の一員であれば潜在的に加害者であるばあいがある」という表現に端的に示されているように、平和都市ヒロシマ、ナガサキの意味を問い直し、その加害責任を考える方向へと発展していったのである。

このように、韓国人・朝鮮人被爆者へ関心が集まるなかで、新聞記事は日本人自身の責任を内省する方向へと深化していったのである。

(3) 第三期 昭和53(1978)～昭和61(1986)年

第三期は、孫振斗裁判が最高裁において原告の全面勝訴となったことを受けて、日本政府が正式に在韓被爆者の支援に乗り出した時期である。すなわち、昭和56年12月より在韓被爆者は、日韓両政府が経費を負

担することで日本での治療を受けられるようになった。しかしこの渡日治療は、①対象者が年間 60～100 人と少なく、ごく一部の救済にとどまっていた上、②自力での渡日が難しい重症者が選ばれなかったという問題を抱えていた。しかも韓国側の事情により、渡日治療自体が5年後の昭和 61 年に打ち切られてしまった。

このように在韓被爆者を取り巻く環境が変化したため、各紙は、韓国人・朝鮮人被爆者問題を定期的に取り上げていった。このため前掲の表 1 から明らかなように、この間の掲載記事の数は安定している。しかし、その一方で記事のステレオタイプ化、マンネリ化が目立つようになっていった。その例として、特集記事の冒頭または末尾部分を抜粋して以下に掲載した（傍線筆者）。

『朝日新聞』昭和 49 年 8 月 5 日

人類史上初のアメリカによる広島（一九四五年八月六日）、長崎（同九日）への原爆投下は、日本人のみならず朝鮮人にも多大な惨害をもたらした。だが、日本人のそれに比べ、朝鮮人被爆の実相と被爆者の実情は皆目明らかにされていないというのが現状である。朝鮮人被爆者数はこれまで約七万人とみられていたが、その後の各種の資料や証言などの分析にもとづき、約八万人（広島五万、長崎三万）と推定されている。そのうち爆死者は四～六万人（広島三～四万、長崎一～二万）にのぼるとみられている。原爆が投下された八月六、九日を前に被爆朝鮮人の実相と、その後および被爆者援護の問題点などをさぐってみよう。

『朝鮮時報』昭和 54 年 5 月 17 日

かつて日本帝国主義に国を奪われ流浪の民となった朝鮮人。日本に強制連行、徴兵、徴用され、そのうえ広島、長崎にいた約七万人は原爆の受難まで背負わされた。三十四年目を迎えるこんにちも後遺症、貧困、民族的差別の二重苦、三重苦にあえぐ被爆朝鮮人。しかし日本政府は彼らに対してほとんど何の手だても講じていないばかりか、掌握している資料さえ公表していない。広島の被爆二世協議会結成を機に被爆朝鮮人にスポットをあて、その現状をレポートする。

『毎日新聞』昭和 55 年 7 月 26 日

広島市内では四万八千人の朝鮮人が被爆、三万人が死亡したと推定されている。被爆者手帳を所持している朝鮮人被爆者は県内に二千二百人。被爆後、韓国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）に引き揚げた人がほとんどで、証人などの関係で被爆者手帳を所持していない人も多く、世界の被曝者の実態とともに対策を講じるには実態調査が不可欠だが、李さんは「ひと言謝ってくれば、気が済んだのに。それもせずに実質的な差別政策を続ける日本政府への恨みは消えない」。被害者が全世界に広がる中で、被爆と被曝の実相の解明されない部分も増大しているのは事実。それを克服するのは国家、民族意識を超えた市民レベルでの国際連帯しかないといえる。

『祖国統一』昭和 55 年 12 月 5 日

先月、わずか十人の在韓被曝者の渡日治療がようやく実現した。光復後三十五年、在韓被曝者は韓日条約によって切り捨てられ、在日同胞も不当な差別政策にひたすら耐え、その中で恨みをのんで死んでいった被曝者は多い。日本政府はいまだに韓国人被爆者への補償にそっぽをむき、在韓被曝者の実態調査すら行わない。この機会に同胞被曝者の生まれた過程とその実状をあきらかにすべく、月刊誌「プリ・キップナム（深い根の樹）」（十一月号現在廃刊される）に寄せた宋慶植（音訳）の労作を全文、連載紹介する（訳、見出しは本編集室）。

『毎日新聞』昭和 59 年 8 月 5 日

また、暑い夏が巡ってきた。セミの声に三十九年前の悪夢をよみがえらせるのは、全国三十七万被爆者だけではない。お隣の韓国では、日本政府から何の補償も受けられないまま、病苦と貧困、社会の無理解という三重苦の中で生活している人たちがいる。在韓被爆者、その数約二万人。彼らは反核・被爆者援護を唱える日本の原水爆運動からも置き去りにされ、いまだに原爆を引きずって生きている。

『中国新聞』昭和59年11月11日

数多い被爆死の空白の中でも、朝鮮人犠牲者の不明部分はとりわけ大きい。死没者数にしてさえ約三万人とする説から一万人以下とする説までさまざまである。日本の植民地政策の下で、強制連行や強制徴用された揚げ句、被爆死した朝鮮人は、個人としても集団としても日本人以上に無視され、放置されている。

『読売新聞』昭和60年6月4日

韓国にはいま広島、長崎での被爆者が約二万人いる、といわれている。当時、日本人として生活していながら、それまで培って来た財産を一瞬のうちに奪われた人たち。強制的に連れてこられて働かされ、望郷の思いに焦がれるうちに「死の閃（せん）光、を浴びた人たち。失意と苦痛だけ抱いて海を渡り、四十年一。日本に対する様々な感情を抱きながら生き抜いて来た。忘れられた被爆者として一。

先月二十七日、日韓両国政府による在韓被爆者渡日治療の第十二陣、九人が広島原爆病院での二か月の治療を終え帰国した。韓国には被爆者のための救済対策はなく、日本での短い入院生活だけがこの人たちに許された援護措置だ。四十年ぶりに広島へ戻り、初めて〈被爆者〉として扱われた人たちに話を聞いた。

『朝日新聞』昭和61年7月16日

広島、長崎で被爆した在韓被爆者は約二万人といわれる。しかし、日本政府などによる本格的な調査は取り組まれたことがなく、その実態は不明のままだ。爆死者の数、強制連行による犠牲者はいったい何人にのぼるのか。そして、原爆の後遺症に苦しむ体、心、暮らしぶりはどうか。被爆四十一年目の夏を、韓国から報告する。

一般的に特集記事の冒頭または末尾で企画を組んだ意図が説明される。その記述を見てみると、どの記事も事実を淡々と紹介しようとする姿勢であることが分かる。また、構成を見てみると、おおむねどの記事も①来日の経緯、②被爆の状況、③悲惨な病状・生活状態を記述しており類似している。

また、こうした特集記事を読んでいくと、第二期でみられた日本人やヒロシマの加害責任を考えるとといったような鋭い指摘が影を潜めていることに気がつく。多くの記事は目の前で起きている出来事を一定の視角から取り上げ、報道することで完結しているのである。このため当該期の記事を見ると、第二期と比べてステレオタイプ化が進んだ印象を受けるのである。

この理由としては、やはり孫振斗裁判の原告勝訴によって日本政府が在外被爆者の援護責任を負わされたことが大きいと考えられる。すなわち、日本政府が対策に乗り出したことによって、曲がりなりにも在韓被爆者救済という当面の目標が達成された。このため、問題を深く掘り下げようという意識が希薄化したのではないかと推測されるのである。

(4) 第四期 昭和62(1987)～平成2(1990)年

昭和61年に在韓被爆者の渡日治療が打ち切られたことによって、日韓両政府は、新たな在韓被爆者の支援策を模索していた。しかし両国政府による交渉が難航したため、当該期において在韓被爆者は再び放置されることとなった。そこで韓国原爆被害者協会は、日本政府に対して23億ドルの補償を要求するなど行動を尖鋭化していった。そしてこの問題は平成2(1990)年5月、日本政府が在韓被爆者対策のために約40億円を拠出することで政治的決着が図られた。

こうした状況の変化を受けて、前掲表1からも明かなように各紙の掲載記事数は再び増加することとなった。しかもこの間の各紙の記事を見てみると、日本人の加害責任や戦後補償のあり方に対する厳しい指摘が再び登場していることが分かる。その例として、第三期と同様に特集記事の冒頭、または末尾部分を抜粋して以下に掲載した(傍線筆者)。

『中国新聞』 昭和 63 年 7 月 30 日

韓国内に現在、推定約二万人の韓国人被爆者がいる。広島、長崎で日本人として被爆しながら戦後帰国、韓国籍という理由で十分な補償をうけないまま、病苦と貧困、そして社会の無理解の中でひっそりと暮らしてきた。しかし、この厳しい現実に対し、補償問題の解決と被爆者医療の充実を求める支援の輪がここ数年、日韓両国の間で広がり始めている。ソウル五輪にわく韓国。その片隅で生き、四十三年目の夏を迎えた在韓被爆者の周辺を追った。

『読売新聞』 昭和 63 年 9 月 3 日

ソウル五輪の開幕を目前にわき立つ韓国。日本でも韓国ブームが高まっている。そのはざま、強制連行などによって広島、長崎で被爆した在韓被爆者は約二万人と推定されるだけで、四十三年たった今も実態はわかっていない。彼らの現状を知ろうと、大阪、広島の市民グループ「韓国原爆被害者を救済する市民の会」が八月中旬、韓国南部の慶尚南道で実態調査に入った。韓国原爆被害者協会の支部はなく、日本人もほとんど訪れたことのないこの地域の調査は〈埋もれた被爆者〉との出会いだった。被爆者の高齢化が進む中、日本政府の補償もないまま十分な治療を受けられず、生活苦の中で次々になくなっていく現実をあらためて思い知らされた。

『読売新聞』 平成元年 9 月 16 日

今年の夏、韓国で被爆者問題がクローズアップされた。マスコミはこれまでにない大きな扱いで、日本と韓国両政府の責任を追及した。在韓被爆者にとっても高齢化は深刻で一日も早い根本的な施策が求められているが、四十四年間も知らぬ顔が続けている両国政府にシビレをきらせた韓国原爆被害者協会は協会負担による被爆者治療費無料化を打ち出した。今後、韓国内での関心の高まり次第では社会問題となり、日本の責任を追及する声ますます強くなりそうだ。ソウル市に同協会の辛泳洙会長（七〇）らをたずね韓国内の動きや治療費無料化の狙いを聞いた。

『中国新聞』 平成 2 年 4 月 13 日

ヒロシマ・ナガサキ以後の放射能被害を追って世界各国取材した私たちは、各被害の原点である広島・長崎の被爆者が、異境の地で、ひっそりと生きる姿を忘れることができない。日本国内にもまして、異境の被爆者は健康への不安と周囲の偏見という二重の苦しみが深い。まず「近くて遠い国」韓国に暮らし、日本に補償と援護を求め続ける被爆者の現状を報告する。

『朝日新聞』 平成 2 年 4 月 18 日

初めてまとまった形で来日した韓国人被爆者の組織「韓国原爆被害者協会」（本部・ソウル）の辛泳洙会長ら代表十三人は、十七日、広島での日程を終えて次の訪問地、大阪に着いた。強制連行などで連れてこられて広島、長崎で日本人と同じように被爆しながら、戦後四十五年間、韓国、日本両政府から何の対策も講じられないまま放置されている人たち。十九日には東京で日本政府に謝罪と賠償を求める。日本人被爆者との交流会で「やっと日本人の懐に近づいた気がする」（辛会長）半面、戦争責任をあいまいにしたままのイルボンサラム（日本人）にあちこちで直面している。

『毎日新聞』 平成 2 年 7 月 21 日

広島市の本革橋西詰めに建つ「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」。本川を挟んで広島平和記念公園の対岸に位置する。今、その公園内移設問題が大きな論議を呼んでいる。四十五回目を迎える「ヒロシマの夏」が回答を迫られている最大の課題だ。一九四五年八月六日、広島市は人類史上、最初の核戦争による被害をこうむった。被爆地・広島の人々は「8・6」の影を引きずりながら、一貫して平和を模索してきた。そうした中でアジアへの日本の加害責任をヒロシマはどうとらえてきたのか。日韓併合から八十年一慰霊碑移設をめぐる問題は、日本の戦後処理のありようが凝縮された形で噴き出したともいえる。高さ五メートル、重さ十トンの碑が問いかける意味を検証する。

抜粋した記事を見てみると、第三期と比べ日本人の加害責任や戦後処理のあり方を問う方向性が強まっているのが分かる。直接の原因としては、上述のように韓国原爆被害者協会が日本政府に対して補償要求をしたことが大きい。

ただ、間接的な原因として、①昭和50年代後半に日本政府と韓国政府が教科書問題などで歴史認識をめぐる対立したこと、②昭和天皇の崩御にともない日中戦争・太平洋戦争の責任があらためて議論されたこと、という時代状況に影響された面も無視できないと思われる。

このように韓国人・朝鮮人被爆者問題に再び関心が集まったのであるが、一方で行き過ぎた報道も見られた。そうした例として顕著なのが、韓国人原爆犠牲者慰霊碑をめぐる一連の報道である⁽⁵⁾。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、昭和45年10月に韓国居留民団広島県本部を中心として設立された。ただ、当時広島市が平和記念公園内に新規の慰霊碑建立を認めない方針を決定していたため、平和記念公園と川一本隔てた本川河岸（中区堺町）に設置されることとなった。この場所が選ばれた理由としては、朝鮮王族の李錫（当時陸軍第二総軍教育参謀）が重傷を負い収容された縁故地だったからである。

しかし、平和記念公園の対岸という立地であったため、昭和50年代初めごろから韓国人原爆犠牲者慰霊碑が平和記念公園から意図的に締め出されたとか、差別されているという解釈が次第に広まっていった。また、関係者の間では、韓国人原爆犠牲者慰霊碑の公園内移設を求める声が高まっていった。

一方、各紙は、広島市の差別的な措置によって同碑が平和記念公園の対岸に建設されたという言説を形成していった。たとえば、『毎日新聞』昭和62年6月20日広島県版に掲載された記事では、「なぜ差別 移転要求の動き高まる」、「日本人と同じく平和記念公園内に」という見出しで韓国人原爆犠牲者慰霊碑の問題を紹介している。『中国新聞』の場合、8月6日を前に毎年掲載される連載特集記事（「43年目の夏 韓国の被爆者たち」昭和63年8月2日掲載）で次のように記述している。

公園外に締め出し

四十五年、韓国居留民団広島県本部が中心となり、平和記念公園内に建立しようと計画した。しかし、公園内の慰霊碑新設は認めないという広島市の方針で公園外に締め出されてしまったのだ。

また、『朝日新聞』平成2年4月18日の記事では、「怒り・悲しみの訪日、韓国人被爆者一行、なぜ今なお差別・・・」という見出しのもと、韓国人原爆犠牲者慰霊碑の前で号泣する韓国人被爆者の写真を掲載している。そして写真の説明文では「同胞をまつる碑が平和公園の外にあることを知り、号泣する韓国人被爆者たち」としているのである。

このように韓国人原爆犠牲者慰霊碑をめぐる報道は、差別される韓国人被爆者問題という文脈のなかで展開されていった。こうした状況に変化をもたらしたのが、全国在日朝鮮人教育研究協議会広島有志・ピカ資料研究所共編『資料・韓国人原爆犠牲者慰霊碑』（碑の会、平成元年8月）の発行である。同書では、一次史料に基づいて韓国人原爆犠牲者慰霊碑の建立経緯を紹介し、慰霊碑の立地が差別を意図したものではなかったことを明らかにしたのであった。こうした事実の解明を受けて、慰霊碑の差別性を強調する報道は、次第に影を潜めていったのであった。

おわりに

本稿では、韓国人・朝鮮人被爆者問題に関する報道を分析してきたが、以下、明らかになった点をまとめるとともに、その意味について考察を加える。

第一の特徴として、韓国人・朝鮮人被爆者問題に対する報道の問題意識は、当初よりほとんど変化していないことがあげられる。すなわち、①在韓被爆者は原爆被害と日本の植民地支配による二重の被害者であり、②日本は過去に対する反省の上に彼らを支援する必要があるという見方である⁽⁶⁾。ただ、こうした見方は、

第2期の報道では日本人の戦争責任やヒロシマの加害責任を内省する方向へと深化するなど、時期によって内容に変化が見られた。

一方、こうした問題意識の固定は、二つ目の特徴である記事のステレオタイプ化やマンネリ化を招くこととなった。これは特に第3期の記事で顕著に見られた。この点について、韓国人・朝鮮人被爆者の報道に携わった中村一郎氏（当時読売新聞記者）は次のように述べている（傍線筆者）。

『読売新聞』平成2年3月11日広島版

ホッとたいむ 在韓被爆者問題 書き続けるしか…

「悔しいじゃない」。在韓被爆者問題にずっと関わっているKさんにその理由と尋ねると、こう答えるだけだった。三年前のこと。

「人道上、助けてあげなければいけないのではなく、日本と日本人がどう過去と現在の責任を取るのかの問題。その責任を果たそうとしない日本人の一人であることが悔しい」そう言いたかったのだ。取材の時はいつもこの言葉を思い出す。

（中略）

「日本から何人もの新聞記者が取材に来たが、何が変わったのか」という批判もある。Kさんと話をした時も同じような問いかけを受けた。

記者として、一人でも多くの人に関心をもってもらうには書き続けることしかない。このままでは「悔しいじゃない」。

ここからは、在韓被爆者を救済するためには、同じような内容の記事であっても粘り強く報道し続けるより他に途がないという記者の姿勢が読み取れる。韓国人・朝鮮人被爆者を取り巻く社会環境が本質的に変化しない中で結果的に記事のスタイルが類似してしまうのは、ある程度やむをない問題であると思われる。また、この問題は、多くの論者が指摘するように原爆報道に共通する悩みでもある⁽⁷⁾。

ただ、記事のステレオタイプ化は、固定化された見方を助長する危険性を内包していた。たとえば、第4期には、十分な事実の検証を踏まえずに韓国人原爆犠牲者慰霊碑の問題を報道するという事例が見られた。このことは、報道が韓国人・朝鮮人被爆者への差別という先入観にとらわれすぎたことに起因すると思われる。

三つ目の特徴として、主要紙において韓国人・朝鮮人被爆者の記事の掲載状況に差異があったことがあげられる。すなわち、『朝日新聞』がこの問題を広島県版および全国版で積極的に掲載したのに対して、『毎日新聞』や『読売新聞』は全国版にあまり記事を掲載していないことがあげられる。

また、全国版で取り上げられた記事を見てみると、原爆医療法の解釈を大きく転換させた孫振斗裁判や、盧泰愚大統領の訪日との関連で注目された在韓被爆者への補償問題など、政治問題化しできごとしか掲載されていない。さらに記事の書き方を見てみると、日本国内の問題との関連でしか理解できない内容になっている。例として、孫振斗裁判の最高裁判決を受けた記事を以下に掲載した（傍線筆者）。

「援護法制定へはずみ」『朝日新聞』昭和53年4月1日

最高裁は三十日『現行の原爆医療法には社会保障的な性格もある』との判断を示し、韓国人被爆者も日本の被爆者健康手帳を受け取ることができる道が開かれたが、この最高裁の判断は、外国人被爆者の救済問題に突破口をひらいたばかりでなく、わが国で二十余年間にわたって続けられている被爆者援護法制定運動に大きなはずみをつけることになりそうだ。

「社説 被爆者救済の行政姿勢を正せ」『毎日新聞』昭和53年4月1日

今回の判決を機に、三十六万人をこえるわが国の被爆者についても、従来より国家補償的性格を強めた救済施策を推進すべきであることは言うまでもない。四十九年以来三度廃案となり、改めて野党五党共同提案で前国会から継続審議中の被爆者援護法案や、現行法の運用の改善など、前向に取りくまねば

ならぬ仕事は目の前に迫っている。

『朝日新聞』は解説記事の冒頭部分、『毎日新聞』は社説の結論部分にあたる。これをみると、韓国人・朝鮮人被爆者に関する裁判の記事であるにもかかわらず、日本国内の被爆者援護法制定運動と関連づけて記載されている。このため一読しただけでは、韓国人・朝鮮人被爆者問題の固有性を看取することが難しい。むしろ読者は、日本人被爆者の団体が行っていた被爆者援護法制定運動との関連で判決を理解する可能性が高いのである。

このように掲載紙および掲載方法に偏りがあるため、韓国人・朝鮮人被爆者問題に関する報道は、限定的な影響力しか持ち得なかったと考えられる。すなわち、韓国人・朝鮮人被爆者問題は全国に浸透しにくい状況に置かれていたと考えられるのである⁽⁸⁾。

以上、韓国人・朝鮮人被爆者問題に関する新聞報道の特徴をまとめた。ただ、こうした報道の構造が、韓国人・朝鮮人被爆者問題に固有の問題なのか、それとも他の原爆報道でも見られる傾向なのか、という点について本稿では明らかにできなかった。この点については、他の原爆報道の分析が必要であるため、今後の課題としたい。

注

- (1) 中国新聞ヒロシマ50年取材班『検証ヒロシマ1945-1995』（中国新聞社、平成7年）。
- (2) 川口悠子「原爆被害と戦後日本のナショナリズム—「周縁化された被爆者」を通して」同時代史学会編『日中韓ナショナリズムの同時代史』（日本経済評論社、平成18年）所収。「周縁化された被爆者」とは、一般的に使用される「在外被爆者」、「外国人被爆者」という用語にかわって川口氏が提起した概念である。日本人被爆者と韓国人・朝鮮人被爆者（在米被爆者、在南米被爆者なども）の間に存在する「格差」を的確に表現する用語としては、周縁概念を援用した説明は有効と考えている。ただ、たとえば周縁化の主体は何かなど、その中身について議論の余地が残されていると思われる。
- (3) 平岡敬『偏見と差別』（未来社、昭和47年）、同『無援の海峡』（影書房、昭和63年）、朴秀馥・郭貴勲・辛泳洙編『被爆韓国人』（朝日新聞社、昭和50年）、広島県朝鮮人被爆者協議会編『白いチョゴリの被爆者』（労働旬報社、昭和54年）等参照。
- (4) 広島大学文書館編『平岡敬関係文書目録（韓国人・朝鮮人被爆者問題関係史料）』IPSHU 研究報告シリーズ No.34（広島大学平和科学研究センター、平成17年）参照。
- (5) 平岡敬『希望のヒロシマ—市長はうったえる—』（岩波新書、平成8年）157～160頁参照。
- (6) 「隣の国韓国」第9、10回『中国新聞』昭和40年12月3、4日。
- (7) 前掲『検証ヒロシマ1945-1995』364頁、大牟田稔・安東善博「対談「原爆報道」を語る」『新聞研究』（409号、平成元年）、土屋弘「「ヒロシマ・ナガサキ」をどう伝えるか—被爆60年アンケートと原爆報道」『新聞研究』（650号、平成17年9月）参照。
- (8) たとえば、本稿で紹介したように韓国人・朝鮮人被爆者問題の報道を通じて、早くからヒロシマ・ナガサキの加害責任を問題視する視点が形成されていた。しかし、この視点が広く紹介されるようになったのは、管見の範囲では昭和60年代以降であり、時期的な遅れを生じている（拙稿「ヒロシマの被害と加害に関する一考察—平成3年の平和宣言を題材に—」『地域経済ニューズレター』79号〈金沢大学経済学部、平成20年3月〉参照）。

附録(1) 「きのこ会」関係史料目録(大牟田稔関係文書)

解 題

小宮山 道夫

1. 「きのこ会」とは

本資料群は、故大牟田稔氏(以下、敬称略)が事務局を務めた原爆小頭症患者とその家族の会「きのこ会」に関わる資料群である。

原爆小頭症は1967年に厚生省(現 厚生労働省)に認定された原爆症のひとつで、公式には近距離早期胎内被爆症候群と呼ばれる。妊娠4～15週の母親の胎内で被爆し、精神発達の遅滞、身体の奇形や発育障害を併せもって生を受けた子どもたちのことを示し、出生時の頭囲が標準を下回っていたことから一般的に原爆小頭症あるいは胎内被爆小頭症と呼ばれた。最も若い第一世代の被爆者たちである。

原爆小頭症患者は、ABCC(原爆傷害調査委員会)の調査対象であっても治療対象ではなかった。また厚生省も「小頭症は治療の方法がなく、医療の対象になり得ないものである。従って医療法の認定に該当しない」(『きのこ会会報』3号19頁)ことを理由として、胎内で被爆した事実がありながら長らく原爆医療法(昭和32年法律第41号原子爆弾被爆者の医療等に関する法律、同年4月1日施行)の適用外に置いていた。わずか17名という生存患者(厚生省の認定患者数は全国で22名)の少なさから、ただでさえ不十分な医療保障体制下に置かれていた被爆者の中でも、さらに遠く人知れぬ世界の片隅に追いやられていた。

1965年、被爆から20年を経た広島の実態を明らかにしようと作家山代巴が有志とともに広島研究会を立ち上げたことがきっかけで、原爆小頭症患者とその親の集まりが実現した。山代巴編『この世界の片隅で』(岩波新書、1965年)に執筆した風早晃治(本名秋信利彦、当時中国放送記者)、文沢隆一(作家)、大牟田稔(中国新聞記者)の3名がその事務局をつとめることとなった。この会は畠中国三会長の発案で「原爆の雲、きのこ雲」のもとで生まれた子供であることから「きのこ会」と名づけられ、「キノコのように落葉をおしのけてすすくと、たくましく成長してくれますように」との願いが込められた。会の目標は、①胎内被爆小頭症が原爆被爆に起因することを国は認めよ、②この子たちの生活を終身保障せよ、③あらゆる核兵器の完全撤廃、の3つだった。

きのこ会についてより理解するために参考となる書籍を以下に示しておく。また、1966年に創刊し1980年の12号まで続いた『きのこ会会報』も参考されたい。

- ・風早晃治「IN UTERO」(山代巴編『この世界の片隅で』岩波新書、1965年、所収)
- ・きのこ会編『原爆が遺した子ら：胎内被爆小頭症の記録』溪水社、1977年
- ・「大牟田稔遺稿集」刊行委員会編『ヒロシマから、ヒロシマへ：大牟田稔遺稿集』溪水社、2002年、
- ・斉藤とも子『きのこ雲の下から、明日へ』ゆいぽおと、2005年

2. 資料群の成り立ち

本資料群はきのこ会の発足当初から深くかかわり、また1975年の秋信の東京転勤以降、2001年に没するまで実質的に事務局を取り仕切っていた大牟田稔の手元に残されていた関係資料である。資料はその内容と形態により、①誕生会関係、②会員情報、③陳情・要望、④被爆者援護関係、⑤事務局関係、⑥きのこ会を支える会、⑦明星事件関係、⑧「日本の原爆文学」事件関係、⑨論文、⑩書簡、⑪原稿・メモ、⑫新聞・雑誌記事、⑬写真・映像、⑭冊子・パンフレット、⑮その他、⑯書籍、⑰雑誌、に分類した。

本資料群の整理に関しては、第1期整理を村上須賀子宇部フロンティア大学教授（現 県立広島大学教授）と斉藤とも子（女優）が行い、大牟田稔関係文書全体の整理の進捗にともない発見されたその後の資料を第2期整理として、小宮山道夫と菅真城公文書室主任（現 大阪大学文書館設置準備室講師）のもと、川島佳弘（現 愛知県総務部法務文書課県史編さん室嘱託）、高木泰伸（現 広島大学大学院文学研究科博士課程後期）、西本佳代広島大学大学院教育学研究科博士課程後期（現 香川大学教育・学生支援機構助教）が行った。

仮番号の最初の数字は箱番号を表し、第1期整理は1から3番を占め、4番以降は第2期整理分であることを表す。第2期整理分は分類ごとに書簡が箱番号6、原稿・メモ・冊子が箱番号7、新聞・写真・ビラ類が箱番号9、その他の書類が箱番号4・5・8と分けた。しかし追加資料が増大したため、箱番号9～14に至っては分類せずに登録順で箱を分けている。

このような経緯とともに、本報告書の作成時点で大牟田稔関係文書全体の整理が完了していないことから、本目録は仮目録の域を出ない。また個人情報ほか閲覧の制限を必要とする情報の精査を完了していないため、本仮目録に基づき閲覧請求が行われた場合には、請求時点で文書の再審査を行う必要がある。このため、請求当日に閲覧に供せないことが生ずる場合があることを予めお断りする。

3. 分類項目ごとの特徴

分類項目ごとの特徴と主要資料について以下に概要を述べる。

①誕生会関係

きのこ会は結成の翌年の1966年に小頭症患者たちの成人を祝う集まりを開いて以降、満30歳のお祝い会から5年ごとに祝い会を開催してきた。この分類には各回のお祝い会（誕生会）に関する資料を配置している。

②会員調査・会員情報

きのこ会会員の生活状況のアンケートや医療診断書など、胎内被爆小頭症が原爆被爆に起因することを国に認めさせるため、また、患者の生活の終身保障を実現するために、会として自主的に、あるいは行政機関などの求めに応じ、様々な調査を行った。この分類の資料は当分の間無条件で公開することはできないが、蓄積された情報は患者とその家族の実態を把握する上で最重要の資料である。

例えば、きのこ会会員の母親の被爆線量に関する放射線影響研究所による調査回答が含まれている（仮3-8-1～5）。この照会は長岡千鶴子が行ったが、回答内容は「専門的な説明を要する内容でも」あることから、「推定被爆線量について（回答）」（仮3-8-3）にみるとおり長岡宛には別途回答の旨が通知され、「キノコ会会員の母親の被曝線量に関する照会について（回答）」（仮3-8-4）で明らかかなように一括して被爆養護ホーム理事長志水清のもとへ回答がなされた。また「きのこ会名簿」（仮3-8-2）が存在するように母子の氏名・被爆線量を記載した資料はコピーがとられ、おそらく大牟田と清水との打合せにもとづくと思われる「[[被爆線量診断結果通知書草案]]」（仮3-8-1）が作成された。この草案を成文化した会員個人宛の「[[被爆線量診断結果通知書]]」（仮3-8-5）が鉛筆書きの原本とともにコピーとして残されている。

③陳情・要望

ここにはきのこ会が政府や政党などに対して行った陳情・要望・嘆願に関する資料を所収している。「きのこ会趣意書」（仮1-6-5）は、きのこ会発足後最初の嘆願書といえる。1966年3月には既に1,000部が印刷され、配布計画を練っていたことが後述の「文沢〔隆一〕書簡」（仮6-23）からわかる。1971年8月には「[[胎内被爆小頭症患者保護につき] 嘆願書」（仮1-6-7）を佐藤栄作内閣総理大臣へ、「[[日本社会党委員長への要望書]]」（仮5-5）および「[[原爆小頭症患者保護につき] 要望書」（仮1-6-8）により、被爆者の待遇改善について要望した。その他にも1973年の「[[原爆小頭症患者のNHK受信料免除要請関連資料一件]]」（仮10-29）、1975年の「原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書」（仮1-6-9）など、起案の段階に

おける草稿やメモおよび写しも含み、多くの重要な要望事項の内容と要望活動の推移とが窺える。また、「申立書 [草案]」（仮 3-10-10）のように指定病院への通院が困難な事情を申し立てるための個別の草案なども残され、大牟田氏の手篤い支援の姿が理解できる。

④被爆者援護関係

きのこ会の陳情や原爆医療法の改善を求める被爆者運動が実を結び、1968年9月、認定被爆者に対する特別手当や医療費の支給等を盛り込んだ「原子爆弾被害者に対する特別措置に関する法律」（特措法）が施行された。「[広島原子爆弾被爆者養護ホーム建設に関する陳情書 草案]」（仮 2-9-4）は被爆者援護に関わる最も初期の陳情書である。県と市が共同出資して設立した財団法人広島原爆被爆者援護事業団のもと、養護ホームの建設計画が具体化していた。原爆小頭児も入所対象者に含まれることから、きのこ会関係者は大いに期待していたが、機能訓練やリハビリテーションに配慮した施設ではなく、老人ホームであった。このためきのこ会は入所を拒否することとなった。

「広島市原爆小頭症患者生活相談指導事業実施要綱」（仮 1-9-1）や「広島市原爆小頭症患者生活指導事業実施要綱（案）」（仮 1-9-3）などの資料は1977年当時の行政側の対応をうかがい知ることのできる資料である。「[被爆者援護金支給一覧表]」（仮 2-8-3）は各種の補助金や交付金の支給実績を表にしたもので、専門的知識による解説の必要があるが、当時の複雑な費目が一覧できる資料となっている。

⑤事務局関係

きのこ会の会計状況など会の運営に関わる事務局所蔵資料をここに分類した。『きのこ会会報』の発行等に関する資料も含んでいる。

きのこ会の会計については『きのこ会会報』各号に掲載されているので改めて一次史料を掘り起こす必要性はあまりないだろう。その一方で「[きのこ会]資料」（仮 2-4-2）や「[きのこ会現況・略史関連資料一件]」（仮 10-2）などのように、大牟田がまとめた書類できのこ会を理解するのに便利な書類が含まれている。

「[企画書]『原爆を告発する－胎児に刻まれた放射線障害』（仮題）」（仮 8-5）は1977年に刊行した『原爆が遺した子ら』の企画書である。同書と対照すると編集意図がより理解できる。また、『原爆の遺した子ら』を編集する際に作成された資料も含まれる。「[[原爆が遺した子ら]編集資料 『きのこ会会報』手記コピー]」（仮 2-10-5）は『きのこ会会報』に掲載された手記の部分を抜き出した資料と、「[[原爆が遺した子ら]編集資料 『きのこ会会報』『きのこ会の歩み』コピー]」（仮 2-10-6）は同じく会のあゆみを抜き出した資料である。手記を抜き出す作業のなかで、秋信はそれぞれの手記の文末に死亡年月日を明記することを提案するメモを付して大牟田に届けている（仮 2-10-5）。この発案は受け入れられたようで、刊行された『原爆の遺した子ら』にはそれが実現している。

長岡にあてた坂本の文案「[胎内被爆小頭症についての補償要望]」（仮 2-10-4）は、1975年7月に厚生省へ陳情するために作成された「原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書」（仮 1-6-9）の文案である。

⑥きのこ会を支える会

従来きのこ会は後述の明星事件に見られるような問題から会員を守るため、会員の個人情報については特に注意を払い、メディアからの取材なども極力避けるようにしていた。しかし1980年代に入り、会員や事務局の高齢化の問題が意識されるようになり、会の運営のために外部との連携を進める必要が生じてきていた。1983年には原爆病院の若林節美と広島市民病院の村上須賀子の2人の医療ソーシャルワーカーがきのこ会に深くかかわり、支える役割を担っていた。組織の大きな舵取りを進める時期が到来していた。会員の親の高齢化や死去が更に進んだことをうけ、1996年のきのこ会50歳の誕生会の席上で、村上は「きのこ会を支える会」の結成を呼びかけた。支える会は、①当事者別の個別の支援ネットワークづくり、②個々の家族史または自分史づくり支援、③「きのこ会」支援のためのボランティア要請、④「きのこ会」支援のため

の広報など、を活動の柱としていた。きのこ会を発足時から支えてきた大牟田、秋信、文沢や、平位剛医師、被爆者団体職員、ジャーナリストなどきのこ会の周囲を固める人々が会員となって様々な支援活動を行う。「[[きのこ会を支える会一件]]」(仮1-4-5)の中に1996年時点の名簿が残されている。

⑦週刊「明星」事件関係

集英社発行の『週刊明星』掲載のきのこ会会員に関する記事に誤りがあり、一般の読者に誤解を与えかねない表現も含まれていたことから、きのこ会として記事の訂正を求めた問題に関する資料を収録した。会と集英社側との往復書簡や大牟田のメモなどが含まれる。「[[『週刊明星』への抗議文写]]」(仮1-12-4)にみるきのこ会としての抗議文よりも前に「[[山下秀樹書簡]]」(仮1-12-2)が届けられている。また当該記事の記者に出した抗議文「[[きのこ会書簡写]]」(仮1-12-1-3)と「熊谷博子氏への態度」(仮8-23)との間に存在するはずの来簡が発見できていないため、正確な全容の把握には不十分といえる。

⑧「日本の原爆文学」事件関係

日本図書センター発行の『日本の原爆記録』シリーズの14巻に『原爆が遺した子ら』が収録された。しかし掲載許可と著作権処理を経ぬままの掲載であり、またシリーズ全体に誤字が多いとの指摘がなされるなど、問題が明らかとなった。「[[水原肇書簡]]」(仮8-33-10、11)は事件の経緯を伝える個人誌『正観亭通信』を発行し、編集者・発行者を非難した。「[[黒古一夫書簡]]」(仮8-33-3、2、8-33-41)にみるように『日本の原爆記録』の編集委員黒古一夫や「[[清水博義書簡]]」(仮8-33-1、7)にみるように編集担当の清水博義からお詫びや仲介役の依頼が寄せられた。残念ながら結末を示す資料は含まれていない。

⑨論文

きのこ会・原爆小頭症に関係する論考や抜き刷り・コピーを収録している。G・プルーマー論文「広島市における胎内被爆児童に発現した異常」(仮7-2)は、ABCCの見解を初めて否定した論考である。「胎内被爆児の障害について」(仮1-1-2)は田淵昭教授を筆頭とする広島大学医学部産婦人科学教室が取り組んだ日本側単独での本格的な医学的調査結果であり、同じく田淵産婦人科学教室の「胎内原爆小頭症の臨床所見について(厚生省科学研究「小頭症の疫学的研究」の分担報告草案)」(仮7-18)は中泉正徳東京大学名誉教授を代表とする厚生省科学研究「胎内原爆被爆小頭症の疫学的研究ならびに諸機能障害に関する研究(厚生省小頭症研究班報告)」(仮1-1-3)の一部をなしている。これらの学術研究成果は小頭児症の原爆症認定を実現する上で重要な基盤となった。

⑩書簡

きのこ会・きのこ会関係者に充てられた書状・葉書・電報・FAXを収録した。

「文沢[隆一]書簡」(仮6-23)はおそらく1966(昭和41)年のものと断定して良いが、文沢と秋信が原医研渡辺漸所長と会談した際の内容が報告されている。「真剣に考えてくれています。特に嬉しく思ったのは、小頭症にこだわらずに、胎内被爆児全体にみられる発育不全症を、原爆の後遺症と考えてはどうかといわれた点です。私達もそうしてもらいたいのは山々だったのですが、医学的に文句をいわれるのではないかと思って遠慮していたのです。それを向うから積極的に発言してくれたので、ちょっぴり泣かされました。」と率直な気持ちが記されている。真摯な協力者が現れる一場面が臨場感を伴って伝わってくる良資料である。

これを契機に小頭症の原爆症認定はにわかには現実味を帯びるようになる。「十七名のまったく無力な親たちが、手さぐりで慣れぬ専門的分野で迷路に度び度び踏みこみながら、うまずたゆまず子どもの倖せを願って、ひた押しに押し」(『きのこ会会報』3号、20頁)てきた成果が現れつつあった。この書簡の日付の6日後、渡辺所長は中央医療審議会で小頭症を原爆症として認定することについて提案を行い、審議会の賛意を得ることになる。中央医療審議会会長の中泉正徳を代表とする厚生科学研究補助金により小頭症の本格的な調査が実施され、1967年の原爆症認定へと繋がっていく。

⑪原稿・メモ

大牟田稔によるきのこ会に関連した論考の原稿、および取材メモやメモ書きが中心である。その他、きのこ会初代会長の畠中国三をはじめ大牟田宛に送られた原稿類も含んでいる。内容は多種多様であり、「[大牟田稔原稿] 盲目譜」(仮3-10-4)のように直接的にはきのこ会と関連がないと思われる資料も含んでいる。今後の整理の過程で見出される資料の存在も考慮すれば、全容が未確定であり、個々の資料の連関や分類も明らかでないため資料群としての特徴を軽々に断じることはできないが、会の実態を知る上で重要な資料を多数含んでいることは事実である。

「[きのこ会建て直し関連文書他メモ]」(仮4-35)は、「きのこ会を支える会」発足に至る伏線として大牟田が構想をまとめたメモである。会員である患者と父母のみでの運営に限界が見えてきたことから、「小なりとはいえ会の組織を立て直すつもりでいる。」と記している。

⑫新聞・雑誌記事、⑬写真、⑭冊子・パンフレット、⑮その他、⑯書籍、⑰雑誌

⑫から⑰までの分類には、形態ごとに資料を収録し、内容や形態により分類のしがたいものや単体の文書資料を「⑮その他」に収録した。但し「⑬写真」のうち、誕生会に関係するものは「①誕生会関係」に分類している。

以上見たように、今後の大牟田稔関係文書の整理の進捗とともに、「きのこ会」関係資料はさらに密度を増し、資料ごとの関連性も高まっていくものと思われる。大牟田はじめ関係者が大切にしてきた「きのこ会」の記録の数々が、世界の片隅から光を放ち、被爆実態研究の深化と平和構築教育の拡大に役立つことを切に願う。

凡 例

1. 本目録は、故大牟田稔氏が事務局を務めた「きのこ会」に関する史料の目録である。
2. 本目録に採録した史料の中には、国籍・職業・身体・性別等による差別的表現・記述や、プライバシーを侵害する可能性のある記述がある。しかし、歴史的事実を正確に記録し、かつ科学的な歴史研究を推進することによって、基本的人権の擁護を図ることを目的として採録した。史料の利用に当たっては、この趣旨を理解された上で調査・研究に役立てることをお願いしたい。
3. 本目録においては、文書等と書籍・雑誌との2種で目録形式を分けた。
4. 文書等の目録の各項目は以下の通りである。

(1)分類

文書等の内容と形態に沿って、①誕生会関係、②会員調査・会員情報、③陳情・要望、④被爆者援護関係、⑤事務局関係、⑥きのこ会を支える会、⑦週刊「明星」事件関係、⑧「日本の原爆文学」事件関係、⑨論文、⑩書簡、⑪原稿・メモ、⑫新聞・雑誌記事、⑬写真・映像、⑭冊子・パンフレット、⑮その他の15種類に分類した。

(2)仮番号

箱番号1～3は村上須賀子氏らによる第一期整理分、箱番号4～9は、その後発見された文書で、第二期整理分であることを表す。

第二期整理では、書簡を箱番号6、原稿・メモ・冊子を箱番号7、新聞・写真・ビラ類を箱番号9、その他の書類を箱番号4・5・8に整理して採録した。

文書番号は、各箱内の文書一点ずつに付し、封筒入・添付などの形態に応じて「-」でさらに細分化した枝番号を付けた。

(3)件名

表題や文書名をとり、無いものに関しては仮題を付して [] 書きとした。書簡の場合には「発信者名+書簡」と記した。

(4)年月日

西暦の8桁で入力した。推定の年号に関しては [] 書きとした。複数の年月日があるものについては最古と最新の年代を「～」で結んで表記した。

(5)作成（発信→受信）

文書の作成者・発信者と受信者とを「→」を用いて記す。推定によるものは [] 書きとした。

(6)形態

基本的に用紙の大きさ（B4・A4・○×○cm等）、紙質（洋紙・わら半紙等）、数量、記述の方法（黒ペン書、コピー等）を可能な限り収録した。また、まとまりのあるものについては、「仮綴」等と表記し（ ）のなかに用紙の大きさ、紙質、記述の方法、綴りの方法（クリップどめ、ホッチキスどめ等）を採録した。

(7)備考

書き込み等、他の項目で採録できなかった事項のうち、文書の性格を理解する上で必要と思われるものを採録した。

5. 書籍・雑誌の目録の各項目は以下の通りである。

(1)分類

⑩書籍、⑪雑誌の2種に分類した。

(2)整理番号

右側の箱番号と左側の文書番号で構成した。

(3)タイトル

表題紙、奥付、背、表紙に表示されている各書名が異なるときは、共通する書名があればその書名を、なければ表題紙、奥付、背、表紙の優先順位に従って書名として記録した。副題もこの欄に入力した。

(4)著者

原著者、翻訳者等もこの欄に記録し、名前の後に「著」「訳」を加えた。（例：チャールズ・バーチ著 長野敬訳）。編者の場合は、名前の後に「編」を加えた。著者のみの場合は「著」は表記せず、名前のみとした。

(5)出版社

出版社名を表記した。

(6)発行年月日

西暦を半角数字8桁で記入した（例：19630225）。出版年を序文、あとがき、本文等から推測したときは[]内に記録した（例 [19750000]）。

(7)形態

大きさと頁数を記入した。両者の間には「、」を記入した。

(8)備考

上記の項目で採録できない事項のうち、書籍・雑誌の性格を示す上で必要と思われるものを表記した。

①誕生会関係

仮番号	件名	年月日	作成(発信→受信)	形態	備考	
8	31	[封筒]	00000000	封筒1枚	内容は8-31-1～2	
8	31-2	きのこ会調査票	19760212	[大牟田稔]	B4方眼洋紙1枚、鉛筆書、A4洋紙16枚、コピー	原本1枚、同伴コピー16枚。全て未記入。
8	31-1	きのこ会満30歳を祝う会 [式次第および来賓・会員名簿]	19760215	[大牟田稔]	B5方眼紙1枚、鉛筆書、A4洋紙2枚、コピー	原本1枚、同伴コピー2枚
3	4-3	[きのこ会満30歳を祝う会式次第・出席者名簿]	19760215	[きのこ会]	A4洋紙1枚、コピー	
5	6	[きのこ会会員名簿]	[19760000]	[大牟田稔]	A4洋紙1枚、黒ペン書、B5E罫紙1枚、鉛筆書	A4洋紙裏側「きのこ会満30歳を祝う会」式次第・名簿
6	3	荒木武電報	19760215	[広島市長] 荒木武→[きのこ会会長] 畠中国三	電報1	第30回誕生祝賀会のお祝い
6	12	サトウヒロシ電報	19760215	サトウヒロシ→きのこ会	B6洋紙1枚、活版	きのこ会満30歳を祝う会祝電
8	12	[きのこ会「三十年の生を祝う集い」案内状]	[19750000]	[きのこ会]事務局	25.7×16cm洋紙1枚、コピー、B5中国新聞社用箋1枚、黒ボールペン・赤マジック書、B5E中国新聞社原稿用紙1枚、黒ボールペン書	メモ2枚挟み込み
8	35	[「三十年の生を祝う集い」案内状]	[19760000]	[きのこ会]事務局	20cm×12.3cm洋紙1枚、孔版	
6	45	[きのこ会30年の生を祝う集い返信葉書]	00000000	きのこ会事務局	葉書1枚	[「30年の生を祝う集い」案内]
3	4-2	[きのこ会会議メモ]	[19760000]		B5E罫紙1枚、青ペン書	[「満30歳誕生祝賀会」、「30年目の問題点」についてのメモ]
3	4-1	[きのこ会写真]	[19760000]		封筒5枚、写真5枚	きのこ会30歳誕生祝賀会記念写真、封筒に宛名「川本邦夫」・「庄野」・「行宗」・「水国」とあり
11	3	[きのこ会「40歳の誕生日を祝う会」記念写真アルバム]	[19860000]		アルバム1冊(写真29枚(うち6枚挟み込み)、ネガ1本、新聞記事切り抜き1枚)	
9	5	[45歳の誕生日を祝う会垂れ幕]	[19910000]	きのこ会	60×180cm和紙1枚、墨書	
9	7	誕生会案内	19910227	長岡千鶴野→大牟田稔	封筒1枚、往復葉書3枚、活版、黒ペン書	長岡千鶴野発大牟田稔宛封筒にあり、往復葉書同伴3部あり
3	3-1	[「満50歳を祝う集い」芳名帳]	19960000	きのこ会	B5帳簿1冊、A4E洋紙3枚、コピー、名刺6枚、ホテル「東方2001」のパンフレット1枚、写真2枚	B5帳簿にA4洋紙、名刺、パンフレット、写真の挟み込みあり
3	3-2	[「満50歳を祝う集い」記念写真の人名]	19960000	[きのこ会]	A4E洋紙2枚、コピー	
3	3-3	[「満50歳を祝う集い」欠席者のメッセージ]	19960000	[きのこ会]	B5洋紙1枚、コピー	
3	3-5	[「『きのこ会』を支援する会(仮称)の提案」(レジュメ)]	19960320	[「きのこ会」を支援する会]	B5洋紙、コピー、6.5×18cm洋紙7枚	平位剛、平岡敬、文澤隆一、秋信利彦、大牟田稔、若林節美、河口幸貴の名札の挟み込みあり

仮番号	件名	年月日	作成(発信→受信)	形態	備考	
3	3-6	伊東壮書簡	19960311	日本被団協代表委員伊東壮→大牟田稔	仮綴(封筒、23×17cm 便箋、黒ペン書、A4 洋紙、コピー、クリップどめ) 1部	きのこ会への声明書
3	3-7	[[きのこ会]の歴史と現状・「満50歳を祝う集い」欠席者のメッセージ]	19960319	安佐市民病院医療相談室村上須賀子→ヒロシマ平和文化センター理事長大牟田稔	封筒1枚、仮綴(A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	村上須賀子氏から FAX で転送されたもの
3	3-8	[[きのこ会・満50歳を祝う集い]案内]	19960200	きのこ会	封筒1枚、クリアファイル1枚、封筒1枚、はがき1枚、A4 洋紙1枚、B4E 洋紙1枚、コピー、A3E 洋紙2枚、コピー、B5 洋紙1枚、コピー、A4 洋紙9枚、コピー、A4 洋紙2枚、コピー、ホテル「東方2001」チラシ2枚、封筒11枚	封筒に一括
3	3-9	[きのこ会会計収支表]	19960328	きのこ会	B4E 洋紙1枚、コピー	支出・寄付金の記録
3	3-10	領収書	19960000	きのこ会	仮綴(封筒、8.5×12.5cm 洋紙、10.5cm×7.5cm 洋紙、レシート、20×15cm 洋紙、13×18cm 洋紙、クリップどめ) 1部	「満50歳を祝う集い」関係の領収書
3	3-11	[きのこ会関係書類]	[19960000]	文沢隆一→大牟田稔	封筒1枚、B4E 洋紙5枚、コピー、B5 罫紙2枚、黒ペン書、B4E 洋紙3枚、活版	きのこ会会計収支、豊町町長への要望書、「満50歳を祝う集い」関係新聞記事コピー
8	25	「原爆の刻印」背に半世紀 - 「きのこ会」の満50歳 -	[19960000]	大牟田稔	仮綴(A4E・B4E 洋紙、コピー・鉛筆書き) 1部	挿入分原稿コピーあり
8	27-5	[満50歳を祝う集いに関する新聞記事切り抜きコピー等送付添え状]	19960326	大牟田稔	A4 洋紙2枚、コピー	同伴2部あり
8	27-6	[50歳を祝う会]欠席された方たちからのメッセージ]	[19960000]	[大牟田稔]	B5 洋紙1枚、黒ペン書	
8	27-7	[50歳を祝う会メモ一件]	[19960000]	[大牟田稔]	A4 洋紙1枚、青・赤ボールペン書、仮綴(A4 洋紙、青・赤ボールペン書、ホッチキスどめ) 1部	第14回全国健康福祉祭広島開催関連資料の裏紙を使用
11	2	[[きのこ会・満50歳を祝う集い]記念写真]	[19960000]		封筒1枚、12.7×21.5cm 写真1枚	
3	3-12	[きのこ会写真]	19960322	茶和田武重→ヒロシマ平和文化センター理事長大牟田稔	封筒1枚、写真3枚	大牟田稔等の写真
3	3-4	大石芳野書簡	19970526	大石芳野→大牟田稔	封筒1枚、25×17.5cm 便箋2枚、黒ペン書	きのこ会50歳誕生会の記念写真送付の時のものか

②会員情報

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
1	6-2-1	[調査票]	00000000		B5 洋紙1枚、青焼き	同伴8枚あり。未記入。1-6-2-3に挟み込み。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
1	6-2-2	[被爆小頭症患者の扶養状況] 調査についてお願い	19761101	きのこ会	B4 洋紙1枚、コピー	同伴2枚あり。未記入。1-6-2-3に挟み込み。
1	8-1-1	胎内被爆小頭症の生活史		きのこ会	21cm×31cm 冊子1部、活版	
1	8-1-2	きのこ会申し合わせ事項	00000627	きのこ会会員一同	B5 洋紙1枚、活版	1-8-1-1の添付資料
1	8-1-3	きのこ会名簿	19650800		B4 洋紙1枚、青焼き	1-8-1-1の添付資料
1	10-1	[きのこ会会員に関するメモ]	00000000	[大牟田稔]	仮綴 (B5 原稿用紙、鉛筆書き、クリップどめ) 1部	
1	10-2	[原爆小頭症患者個人調査表]	19770700		B4 洋紙中折18枚、コピー	コピー9枚で1部。「取り扱い注意」とあり。同伴2部あり、うち一部は書込あり。
1	10-3	[原爆小頭症患者に関するメモ]	00000000	[大牟田稔]	仮綴 (18cm×23cm 便箋、黒ペン書、ホッチキスどめ) 1部	
1	10-4	『きのこ会』生活実態一覧	19761220	[きのこ会] 事務局	仮綴 (B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	書込あり
1	10-5	胎内被爆小頭症の生活史	00000000	きのこ会	B5 冊子1部、活版	演劇のリーフレット挟み込み。書込あり。
1	10-6	『きのこ会』の現況	[19770700]	[大牟田稔]	B4 方眼紙1枚、鉛筆書き	朱印にて「取り扱い注意」とあり
1	10-7	胎内被爆小頭症患者とその家族	[19770800]		B4 洋紙1枚、コピー	書込あり
1	10-8	世帯表	00000000		仮綴 (B4 洋紙、活版、ホッチキスどめ) 1部	
1	13-1	きのこ会調査票	19760215		A4 洋紙4枚、黒ペン書・鉛筆書、B4 洋紙13枚、コピー・黒ボールペン・青ボールペン書	B4 洋紙には朱印にて「取り扱い注意」とあり
1	13-2	調査についてお願い	19761101		A4 洋紙2枚、コピー・黒ボールペン書	
1	13-3	[きのこ会会員生活状況アンケート]	19761101		A5 変洋紙4枚、黒ボールペン・青ボールペン・鉛筆書	「調査についてお願い」を切り取ったもの
1	14-1	[畠中百合子および家族の生活状況について]	00000000		仮綴 (23cm×18cm 便箋、黒ボールペン書、クリップどめ) 1部	
1	14-2	[太田正信および家族の生活状況について]	00000000		仮綴 (23cm×18cm 便箋、鉛筆書、クリップどめ) 1部	
1	14-3	[久保美智子および家族の生活状況について]	00000000		仮綴 (B5 便箋、鉛筆書、クリップどめ) 1部	
1	14-4	[長岡博および家族の生活状況について]	00000000		仮綴 (B5 便箋、鉛筆書、クリップどめ) 1部	
1	14-5	[賀村晴男および家族の生活状況について]	00000000		仮綴 (B5 便箋、鉛筆書、クリップどめ) 1部	
1	16-2	[岡田タメ書簡]	19790621	岡田タメ→大牟田稔	仮綴 (封筒、B5 原稿用紙、青ペン書・黒ペン書、229×176 便箋、黒ペン書、クリップどめ) 1部	封書、岡田タメ氏に関するメモ、送付状
1	16-3	[長岡千鶴野に関する診断書]	19790528	池田放射線クリニック医師池田義明→主治医	仮綴 (封筒、B5 洋紙、177×125 洋紙、黒ペン書、B4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1部	池田義治医師の報告書、送付状、長岡千鶴野氏の健康診断書

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	16-5	[山崎ツル書簡]	19790522 山崎ツル→長岡千鶴野	仮綴(封筒、229×177便箋、黒ペン書、B4E洋紙、コピー、クリップどめ)1部	70×90メモ有り、山崎ツル氏の健康診断表と送付状
1	16-6	[山崎ツル検査成績表及び長岡千鶴野・坂本ヨネ診断書写]	19790509 ～ 19790528	仮綴(B4E洋紙、コピー、クリップどめ)1部	山崎ツル発長岡千鶴野宛書簡写有り
1	16-8	[坂本ヨネ診断書]	00000000 栗原医院医師栗原儀郎→坂本ヨネ	仮綴(封筒、B5便箋、黒ペン書、クリップどめ)1部	
1	2-1	[原爆小頭症児童の検査について依頼(英文および和訳文)]	19870624 財団法人放射線影響研究所→長岡夫人[長岡千鶴野]	仮綴(A4洋紙、タイプ、B5便箋、鉛筆書、クリップどめ)1部	
2	1-1	[下村盛長原爆小頭症についての大牟田メモと新聞記事切り抜き]	19880223 [大牟田稔]	仮綴(B5洋紙、黒ペン書、新聞記事切り抜き、クリップどめ)1部	
2	3-1	厚生科学研究補助金交付申請書	19660630 中泉正徳	32.3×25.4cm洋紙、湿式コピー	
2	5-1	[川下ヒロエ胎内被爆認定につき一件]	19880817 ～ 19880821	仮綴(B5E・B4洋紙、コピー・鉛筆書き、クリップどめ)1部	意見書(写し)1枚、健康診断(写し)1枚、認定申請書1枚、認定申請書(写し)2枚
2	6-1	胎内被爆者調査についてのお願い	19620406 横弘	B5洋紙1枚、湿式コピー	仮番号2-6-1は一括してクリップどめ
2	6-2	[高橋キミエ宛胎内被爆児調査依頼]	00000000 横弘→高橋キミエ	B5洋紙1枚、湿式コピー	仮番号2-6-2は一括してクリップどめ
2	6-3	[高橋美智枝の両親宛胎内被爆児調査依頼]	00000000 ウッド医師、大森医師→[高橋美智枝両親]	B5洋紙1枚、湿式コピー	仮番号2-6-3は一括してクリップどめ
2	6-4	[高橋美智枝宛胎内被爆児調査依頼]	00000000 ウッド医師、大森医師→高橋美智枝	B5洋紙1枚、湿式コピー	仮番号2-6-4は一括してクリップどめ
3	2-16	[原子爆弾被爆者の医療に関する法律規定認定書、写真]	19790116	封筒1枚、B4E洋紙2枚、コピー、11.5×16.5cm写真2枚、ネガ1枚	封筒に一括。畠中百合子・敬恵の認定書の写真・ネガ・コピー
3	5-1	きのこ会調査票	19760215 きのこ会	A4洋紙1枚、コピー	裏面にきのこ会運営方針に関するメモあり
3	5-2	[原爆小頭症認定申請書写]	19830000	封筒1枚、仮綴(封筒、B4洋紙、B4E洋紙、コピー、クリップどめ)1部	
3	5-3	[年未詳10月2日付メモ]	00001002	A4洋紙1枚、黒ペン書	岡田タメ氏死去の件、11月14日きのこ会の件、川野三郎・福田勉氏手紙の件などのメモ、裏面に市議会一般質問原稿コピーあり
3	5-4	[原爆小頭症認定に関するメモ]	00000000	B5E原稿用紙1枚、黒ペン書	
3	5-5	[きのこ会会員に関するメモ]	00000000 [きのこ会]	A5洋紙1枚、黒ペン書	きのこ会会員の人数確認のためのメモか/裏面「料金別納郵便物差出表」
3	5-6	[きのこ会会議用メモ]	00000000	クリアファイル1枚、B5罫紙2枚、B4洋紙1枚、黒ペン書、B6洋紙7枚、鉛筆書)1部	原爆小頭症患者の記録、10月30日付大牟田稔書簡下書、きのこ会会議用メモ
3	7-19	[きのこ会関係者住所リスト]	00000000	メモ1枚、黒ペン書	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
3	8-3	推定被爆線量について（回答）	19751023	放射線影響研究所 理事長 山下久雄 →長岡千鶴子	B5 洋紙1枚（放射線影響研究所用箋）、活版	被爆線量回答の件（回答は志水清氏に一括して通知との回答）
3	8-4	キノコ会会員の母親の被曝線量に関する照会について（回答）	19751023	放射線影響研究所 理事長 山下久雄 →被爆養護ホーム 理事長 志水清	仮綴（B5 洋紙、活版、25.5 × 20.5cm 洋紙（放射線影響研究所用箋）、コピー、ホッチキスどめ）1部	きのこ会会員の被曝線量の報告、きのこ会会員名簿
3	8-2	きのこ会名簿	19751023	きのこ会	A4 洋紙2枚、コピー	母子の氏名・被曝線量を記載（8-4の添付資料のコピー）
3	8-1	[被爆線量診断結果通知書草案]	00000000	[きのこ会]	B5E 洋紙1枚、黒ペン書、鉛筆補筆	
3	8-5	[被爆線量診断結果通知書]	19751101	きのこ会事務局	22 × 31cm 洋紙1枚、鉛筆書、A4E 洋紙4枚、コピー	原本1枚、コピー4枚あり
5	4	[調査用紙]	19761101	きのこ会	A4 洋紙6枚、コピー	同一6枚。国に対する補償要求のためのアンケート
5	7	[[きのこ会] 会員リスト原稿]	19950331	広島平和文化センター大牟田稔→平位剛	B5 原稿用紙4枚、黒ペン書	取扱注意。きのこ会会員リスト／1995年段階のきのこ会会員状況
8	6	[原爆小頭症患者一覧表]	00000000		B4E 洋紙1枚、活版	
8	18	近距離早期胎内被爆症候群認定申請一覧表	19620807		B4 洋紙1枚、孔版・黒ペン書	書込あり
8	20	[被爆小頭症患者の扶養状況] 調査についてお願い	19761101	きのこ会	封筒1枚、B4 洋紙1枚、黒ペン書	未記入。封筒添付。
8	36-1	[反核団体リスト作成につき] アンケート	19820507	月刊ぴーぶる編集部→きのこ会	B4 洋紙1枚、コピー・黒ペン書	
8	36-2	NGO：生活史調査にかんするアンケート	19790600		A4 洋紙1枚、コピー	
8	36-3	認定疾病患者数	00000000		B4E 洋紙1枚、コピー	
8	36-4	資料提出について	19790107	厚生省公衆衛生局 企画課	仮綴（B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ）1部	
9	8	[川下ヒロエ被爆者認定関係書類]	19880317 ～ 19880415		B4 洋紙2枚・B4E 洋紙2枚・B5 洋紙1枚・B5E 洋紙1枚、コピー	証明書、意見書、権衡診断表、認定申請書、厚生大臣 藤本孝雄宛書簡

③陳情・要望

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
1	6-5	きのこ会趣意書	19650724	きのこ会	B4E 洋紙1枚、活版	同件3枚あり
1	6-7	[胎内被爆小頭症患者保護につき] 嘆願書	19710806	胎内被爆小頭症患者を持つ親の会・きのこ会代表・長岡千鶴野→内閣総理大臣 佐藤栄作	B4 冊子1部、活版・筆書	同件3部あり
1	6-13	[胎内被爆小頭症患者保護につき] 嘆願書	19710806	胎内被爆小頭症の子を持つ親の会・きのこ会代表長岡千鶴野→内閣総理大臣 佐藤栄作	B5 冊子1部、活版	同件3部あり、うち1部は黒ペンにて書込あり
5	5	[日本社会党委員長への要望書]	19710806	きのこ会	A4E 洋紙3枚、コピー	被爆者への待遇改善要望書

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	6-8	[原爆小頭症患者保護につき] 要望書	19710806	胎内被爆小頭症患者を持つ親の会・きのこ会代表・長岡千鶴野→日本社会党委員長 成田知己	仮綴 (A4E 洋紙中折、コピー、ホッチキスどめ) 1部 同伴2部あり
10	29	[原爆小頭症患者のNHK受信料免除要請関連資料一件]	19730416	原爆小頭症患者をもつ父母の会きのこ会会長 長岡千鶴野→日本放送協会中国本部本部長 松本宗次	仮綴 (B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部、B4E 洋紙2枚、A4E 洋紙3枚、A4 洋紙1枚、コピー、B5 洋紙5枚、青ペン書 「原爆症認定患者及び原爆による障害者の放送受信料免除要請に関する陳述書」、「原爆による障害者の受信料免除のお願い」、「原爆被災資料広島研究会規約書」、「ABCC」に関する政府答弁について、「討議資料『ヒロシマの思想』」、「原爆被災資料総目録第四集(新聞編)編集方針について小委員会開催のお知らせ」、「◎受信料減免基準の考え方と福祉行政の内にある思想」
1	16-7	放送受診料の免除要請について	[19760000]	長岡千鶴野	仮綴 (B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部
1	6-6	原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書付参考資料	19750700	胎内被爆小頭症患者をもつ親の会(きのこ会)	B4E 冊子1部 同伴2部あり
1	6-9	原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書	19750700	被爆小頭症患者をもつ親の会(きのこ会)	B5 冊子1部、活版
8	11	[胎内被爆小頭症につき] 要望事項	[19750000]		B4E 洋紙1枚、コピー 「原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書」(1-6-9)の部分コピー
1	6-2-3	[胎内被爆小頭症患者の終身保障をもとめる] 要望書	19760712	胎内被爆小頭症とその親の集り「きのこ会」	B4E 洋紙1枚、コピー
1	6-4	[胎内被爆小頭症患者の終身保障をもとめる] 要望書	19760712	胎内被爆小頭症とその親の集り「きのこ会」	仮綴 (B4E・11cm×23cm 洋紙、コピー、クリップどめ) 1部 きのこ会会員一覧添付
1	6-10	[胎内被爆小頭症につき終身保障をもとめる] 要請書	19760806	胎内被爆小頭症と、その親の集り・きのこ会・太田正信他33名→内閣総理大臣 三木武夫	21cm×115cm 洋紙切継1枚、コピー
8	3	[胎内被爆小頭症につき終身保障をもとめる] 要請書	19760806	胎内被爆小頭症と、その親の集りきのこ会→内閣総理大臣 三木武夫	20.5cm×115cm 洋紙切継1枚、コピー
1	6-12	原子爆弾被爆者援護措置に関する陳情書	19770500	広島県・長崎県・広島市・長崎市	B5 冊子1部、活版 メモあり
3	10-3	[小頭症患者の補償を求めた陳情書原稿]	19780500	「きのこ会」長岡→大牟田稔	封筒1枚、B5 罫紙6枚、黒ペン書、13×18cmカーボン紙2枚 陳情書(1-6-5)の原稿。印刷納品書・請求書あり。
1	6-1-1	知事への陳情の骨子	19780525	きのこ会	B5 中国新聞社用箋1枚、黒ペン書

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1 6-1-2	[知事への陳情の骨子写し]	19780525	きのこ会	B4 洋紙1枚、コピー	1-6-1-1 に挟み込み
1 6-3	[胎内被爆小頭症患者の支援施設設置につき] 陳情書	19780500	胎内被爆小頭症とその親の集まりきのこ会	B4E 洋紙1枚、活版	同伴2枚あり
8 30-10	[胎内被爆小頭症患者支援施設設置につき] 陳情書	19780500	胎内被爆小頭症患者とその親の集まりきのこ会	B4E 洋紙1枚、活版	
8 30-11	原子爆弾被爆者援護措置に関する陳情書	19780600	広島県・長崎県・広島市・長崎市	B5 冊子1部	
1 6-11	要望書・嘆願書・陳情書関係	19780500 ～ 19791200	きのこ会	封筒1枚、青マジック書	1-6-10-1～3の封筒書
1 6-11-1	原子爆弾被爆者の援護に関する意見書(案)	00000000		B4E わら半紙1枚、孔版	鉛筆に書込あり
1 6-11-2	[胎内被爆小頭症患者の終身保障をもとめる] 陳情書	19791200	胎内被爆小頭症と、その親の集り「きのこ会」	B4E 洋紙1枚、活版	同伴2枚あり(別10-28)
1 6-11-3	[胎内被爆小頭症患者の支援施設設置につき] 陳情書	19780500	胎内被爆小頭症とその親の集まり「きのこ会」	B4E 洋紙1枚、活版	同伴2枚あり
3 10-10	申立書 [草案]	00000000	茶和田文枝	B5 原稿用紙1枚、黒ペン書	小頭症患者指定病院変更の申立書
8 32-17	[小頭症患者手当引き上げにつき陳情書コピー]	19841124	胎内被爆小頭症患者と、その親の集まりきのこ会代表長岡千鶴野→厚生大臣増岡博之	A3 洋紙2枚、コピー	
5 11	陳述書	[1985] 1120	きのこ会代表 長岡千鶴野→厚生大臣増岡	B4E 洋紙1枚、黒ペン書	黒鉛筆による校正メモ書きあり
3 2-3	[広島県知事・広島市長への請願書原稿]	00000000	きのこ会会員一同・畠中国三→広島県知事 広島市長	仮綴 (B5 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1部	表題「原子爆弾による小頭症の子をもつ親の願い」
1 5-1	要望書 近距離早期胎内被爆症候群の患者に対する諸手当の一本化をもとめる要望書	19950700	きのこ会(原爆小頭症・親の会)	27cm×19cm 冊子1部	同伴4部あり
1 5-2	要望書 近距離早期胎内被爆症候群の患者に対する諸手当の一本化をもとめる要望書	19950704	きのこ会(原爆小頭症・親の会)・RCC 秋信→平和文化センター 大牟田理事長	仮綴 (B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	FAX 送信。付箋あり。

④被爆者援護関係

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
2 9-4	[広島原子爆弾被爆者養護ホーム建設に関する陳情書草案]	[19690925]	きのこ会	21×30cm 原稿用紙3枚、黒ペン書	
2 9-3	昭和四十四年九月二十五日 広島原子爆弾被爆者養護ホーム建設に関する陳情書	19690925	きのこ会	B5 冊子1部、活版	
2 9-1	広島原爆養護ホーム収容要領(案)	00000000		仮綴 (B5 わら半紙、孔版、ホッチキスどめ) 1部	黒ペンにて書き込み有り
2 9-2-1	広島原爆養護ホーム [施設案内]	[19700000]	広島県・広島市財団法人広島原爆被爆者援護事業団	B5 冊子1部、活版	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
2	9-2-2	広島市原子爆弾被爆者の養護に関する要綱	19700328		仮綴り (B4 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1部	
2	9-2-0	[封筒]	19700328 ～ 00000000		封筒 1 枚	2-9-2-1・2-9-2-2 の封筒
8	30-5	被爆 30 年における被爆障害者の医療と福祉の現状分析 司会のことば	[19750000]	志水清	B5 洋紙 1 枚、コピー	
8	30-6	被爆者の福祉について	19750300	長崎原子爆弾後障害研究会	B5 冊子 1 部	『第 15 回原子爆弾後障害研究会講演集 別冊』抜き刷り。シンポジウムの司会者は志水清・宮城重信、報告者は松坂次男・荒木真人・相坂忠一・木下研一郎・上平憲・市丸道人。
1	9-1	広島市原爆小頭症患者生活相談指導事業実施要綱	[19770000]		仮綴 (B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	同伴 2 部あり。うち一部は「原爆小頭症患者の現況 (広島市居住者)」なし。
1	9-2	原爆小頭症患者生活指導事業の実施について	19770928	厚生省公衆衛生局長→各都道府県知事・広島・長崎市長	仮綴 (B5 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	
1	9-3	広島市原爆小頭症患者生活指導事業実施要綱 (案)	19771107		仮綴 (B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	
1	9-4	原子爆弾小頭症患者支援交流事業 (案)	00000000		A4 洋紙 1 枚	
1	23-14-4	[原爆医療法に関する] 資料	00000000		26.2cm × 36.4cm 洋紙 1 枚、活版	1-23-14-1 に挟み込み
2	7-1	[「医療法」制定までの経緯]	00000000		仮綴 (B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	
2	8-3	[被爆者援護金支給一覧表]	00000000		B4E 洋紙 1 枚、コピー	赤鉛筆にて書き込み有り
2	8-2	被爆地別・距離別 推定空気線量	19760422		B5 洋紙 1 枚、コピー	写し
2	8-1	広島県原爆小頭症患者生活指導事業実施要綱	19770000		B4E 洋紙 1 枚、コピー	
2	8-6	一九七七・五・五〈被爆者ニュース資料 No.16〉社会・公明・民社・共産・新自由クラブ提案による原子爆弾被爆者等援護法案	19770505	日本原水爆被害者団体協議会	24.5 × 17.5cm 冊子 1 部、活版	
2	8-7	事業概要 昭和 53 年 3 月	19780300	広島市原爆被爆者協議会	B5 冊子 1 部、活版	添付資料「広島原爆被爆者療養研究センター 神田山荘」有り
2	8-4	昭和 54 年度における本市の原爆被爆者援護対策の拡充強化について	19790320	広島市原爆被害対策部	仮綴り (B4 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1 部	
2	8-5	昭和 54 年度における国の原爆被爆者援護対策の拡充強化 (予定) について	19790320	広島市原爆被害対策部	仮綴 (B4 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1 部	
8	27-15	平成 6 年度被爆者援護 (手当等) のお知らせ	19941000	広島市衛生局原爆被害対策部援護課	A3E 洋紙中折 2 枚、活版	同伴 2 部あり (8-29-8-1)
8	29-8-4	[療育手帳・身体障害者手帳・障害年金に関する解説]	00000000		仮綴 (B5 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 2 部	同伴 2 部あり、8-29-8-1 に挟み込み

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
8	29-8-5	原爆被害者援護対策年表	00000000	原爆被害対策部調査課	B4 洋紙 4 枚、コピー	8-29-8-1 に挟み込み
7	6	平成 13 年版 原爆被爆者対策事業概要	20010700	広島市社会局原爆被害対策部	封筒 1 枚、A4 冊子 1 冊、A4 洋紙 1 枚、コピー	

⑤事務局関係

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
8	7	きのこ会趣意書	19650700	きのこ会	仮綴 (B4・B5 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1 部	裏面に誤植メモあり
8	40	きのこ会趣意書	19650724	きのこ会	B4 洋紙 2 枚、活版	同件 2 枚あり
8	8-1	きのこ会会報 (No1)			仮綴 (B4 洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1 部	
8	8-2	きのこ会名簿	19650800		B5 洋紙 1 枚、青焼き	8-8-1 に挟み込み。電話番号の書込あり。
10	37	[きのこ会会員現況一覧]	00000000		B4E 洋紙 1 枚、コピー	氏名は伏せられた状態
10	38	[きのこ会会員現況聞き取り]	[19660000]		封筒 1 枚、仮綴 (B4・A4 洋紙、青焼き) 1 部	部外秘大牟田稔宛秋信利彦封筒に所収
10	27	きのこ会会則案	00000000		B4E 洋紙 1 枚、青焼き	「討論資料」と記載あり
2	4-1	「きのこ会」の記録 '94.6.29	19940629		仮綴 (B5 用箋、黒ペン書。B5 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	一枚は写し
2	4-2	「きのこ会」資料	00000000		仮綴 (B4E 洋紙、コピー) 1 部	同件 21 枚の綴り
10	2	[きのこ会現況・略史関連資料一件]	00000000	[大牟田稔]	封筒 1 枚、B4E 洋紙 1 枚、黒ペン書、B4E 洋紙 2 枚、コピー、B5 罫紙 1 枚、青ペン書、B5 罫紙 7 枚、黒・青ペン書、15.2 × 10.5cm 洋紙 1 枚、黒ペン書	「きのこ会」資料、「< 事ム局報告 >」、「[きのこ会会員現況]」、「[きのこ会] 略史」、「お祝い」。「[きのこ会] 資料」は原本 1 枚とコピー 2 枚。一括して中国新聞社封筒に所収。
8	30-1-5	[領収証控え綴]	19760922 ～ 19771212		仮綴 (5 × 9.5cm 厚紙、ボールペン書、クリップどめ) 1 部	名刺 2 枚あり
8	30-7	[きのこ会会計帳簿コピー]	00000000		B4 洋紙 3 枚、コピー	
8	30-8	「きのこ会」会計報告	19780626	長岡千鶴野	B5 洋紙 2 枚、鉛筆・黒・青ペン書	8-30-3 の原本
8	30-3	「きのこ会」会計報告	19780626	長岡千鶴野	B4E 洋紙 6 枚、コピー	同件 6 枚あり、原本は 8-30-8
3	7-1	[きのこ会会計収支表]	19790000	[きのこ会]	仮綴 (B5E 洋紙、黒ペン書、B5E 洋紙、鉛筆書、クリップどめ) 1 部	1978 年度の収支記録
3	7-2	[きのこ会会計報告]	19790626	[きのこ会]・畠中国三→長岡千鶴野	仮綴 (封筒、B4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	1977 年度の会計報告
10	32	納品書	19960229	株式会社溪水社→きのこ会	B6E 洋紙 1 枚	封筒、葉書印刷、官製葉書、コピーの納品書
6	47	[広島県立図書館郷土資料室葉書]	19760120	広島県立図書館郷土資料室→きのこ会事務局長岡千鶴野	葉書 1 枚	『きのこ会会報』No.1～9 の受領書
10	30	「12 月 1 日・被爆者の声を聞く会」質問要旨	19771128	きのこ会会長 畠中国三・副会長 長岡千鶴野	A4 洋紙 1 枚、黒ペン書、A4 洋紙 1 枚、コピー	原本とコピー各 1 枚

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10 31	原爆小頭症患者援護措置の充実	[19770000]		B4E 洋紙1枚、コピー、17.2 × 12cm 洋紙1枚、黒ペン書	被爆者の声を聞く会での要望内容か。赤・青鉛筆による他の要望部分の削除あり。「[被爆者の声を聞く会次第]」挟み込み。
8 30-14	[年表 1945～1974年]	00000000	[大牟田稔]	仮綴 (B4E 洋紙、孔版、ホッチキスどめ) 1部	
8 27-12	[きのこ会会員家族の被爆状況に関するメモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 市議会史編纂用箋2枚、黒ボールペン書	田中敏子・水国正義
8 27-13	[きのこ会会員死去に関するメモ]	00000000		B5 洋紙1枚、コピー	高橋美智子
10 26	[きのこ会組織概要]	19910600	[大牟田稔]	B4 洋紙1枚、コピー	1991年6月のきのこ会組織概要。登録のための書類か。
2 10-1	[封筒]	00000000		封筒1枚	「会報」と記述、中身なし
2 10-2	[大牟田メモ]	00000000		B5 原稿用紙1枚、黒ペン書	認定制度、援護法などについて
2 10-3	[原爆関連記事につきメモ]	00000000		B4E 洋紙1枚、黒ペン書	裏面は中国新聞社原稿、コピー
2 10-4	[胎内被爆小頭症についての補償要望]	[19750000]	坂本→長岡「千鶴野」	B4E 原稿用紙2枚、黒ペン書	「原爆の胎内被爆小頭症患者終身補償をもとめる要望書」(仮1-6-9)の草稿
12 6	[大牟田稔ノート]	[1980]0228～[1986]0819	[大牟田稔]	A6 洋紙1冊、B5 原稿用紙1枚、黒ペン書	きのこ会総会内容、大野寮での作業内容等、きのこ会史の項目案、きのこ会・きのこ会員の連絡先、ひろしまを考える旅で放映する映画『聞こえるよ、母さんの声が…』関連メモ書き。市内電車回数乗車券挟み込み。
12 7	[大牟田稔ノート]	19820419	[大牟田稔]	A6 洋紙1冊、黒ペン書	原爆養護ホールで聞いたきのこ会員1名の被爆体験・症例・原爆症認定申請の経緯メモ書き
10 11	[ドキュメンタリー映画『原爆小頭症』(仮題)関連資料一件]	19850727	[熊谷博子]	封筒1枚、仮綴(A4洋紙、コピー、ホッチキスどめ)2部、B5 罫紙3枚、黒ペン書き	「企画書 ドキュメンタリー映画原爆小頭症(仮題)第一案」、「大牟田稔宛熊谷博子書簡」。一括して大牟田稔宛熊谷博子封筒に所収。
10 24	[埼玉県立浦和西高等学校修学旅行でのきのこ会に関する大牟田稔講演関連資料一件]	19880220		封筒2枚、B5 洋紙1枚、コピー、仮綴(B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部	「[修学旅行報告書初稿送付状]」、「胎内被爆小頭症のこと」、「伊藤博宛封筒」。「胎内被爆小頭症のこと」は送付した原稿の保管用写しか。「伊藤博宛封筒」には未使用切手貼付。一括して大牟田稔宛埼玉県立浦和西高等学校封筒に所収。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
8	5	[企画書]『原爆を告発する -胎児に刻まれた放射線障 害』(仮題)	00000000		仮綴 (B4 洋紙、青焼き、 ホッチキスどめ) 4 部	同伴 4 部あり。きのこ 会関係書籍出版の構想
2	10-5	[『原爆が遺した子ら』編集 資料 『きのこ会会報』手 記コピー]	[19960000]		仮綴 (B4・15 × 21cm・ 21 × 16cm 洋紙、コ ピー、ホッチキス・ク リップどめ) 1 部	『きのこ会会報』7、8、 9号のコピー、秋信氏の 添え状、書き込みあり
2	10-6	[『原爆が遺した子ら』編集 資料 『きのこ会会報』「き のこ会の歩み」コピー]	[19960000]		仮綴 (B4E 洋紙、コピー、 ホッチキス・クリッ どめ) 1 部	『きのこ会会報』5、9、 10号のコピー、きのこ 会の活動に関するメモ (株)ビデオ・リサー チの1996年2月3日付 広島地区視聴率資料の 裏紙) 添付
10	17	[『原爆が遺した子ら』第二 版コピー]	00000000	「きのこ会」事務 局	A4E 洋紙 3 枚、コピー	畠中百合子関連部分、 きのこ会現況部分をコ ピーしたもの。蛍光マ ーカーによる強調、黒鉛 筆書きによる質問メモ 書きあり。
10	33	[原爆医療法認定申請関連 資料一件]	19880617	川下ヒロエ→厚生 大臣藤本孝雄	封筒 1 枚、B5 洋紙 2 枚、 B5E 洋紙 1 枚、21 × 48cm 洋紙 1 枚、コピー、 B4 洋紙 1 枚、黒ペン・ 黒鉛筆書、B5 罫紙 1 枚、 B5 原稿用紙 10 枚、黒 ペン書	「認定申請書」、「意見 書」、「健康診断」、「[き のこ会原爆ドーム保存 募金]」、「[きのこ会他 関連メモ]」、「胎内被 爆小頭症と推定され るケースについて」、 「[1989年6月18日き のこ会議事録メモ]」、 「[きのこ会について雑 メモ]」、「[原爆医療法 認定申請についてのメ モ]」、「[11月19日き のこ会議事録メモ]」。安 佐市民病院平位剛宛中 国新聞社封筒に一括所 収。
10	5	故森瀧市郎先生合同お別れ 会のご案内	19940100	故森瀧市郎先生合 同お別れ会実行委 員会	封筒 1 枚、21.7 × 16cm 洋紙中折 1 枚、活版	きのこ会宛故森瀧市郎 先生合同お別れ会実行 委員会封筒に所収
10	3	[『ヒロシマ事典』関連資料 一件]	[19950000]	[平和のためのヒ ロシマ通訳者グル ープ]	封筒 1 枚、A4 洋紙 1 枚、 A4 洋紙 2 枚、B5 洋紙 2 枚、コピー、仮綴 (A4E・ A4 洋紙、コピー、ホッ チキスどめ) 1 部	「『ヒロシマ事典』発 刊の案内」、「プレス リリース『ヒロシマ事 典』(改訂版)発行につ いて」、「[ヒロシマ事典] 「きのこ会」、「中国・ 読売・朝日新聞「『ヒ ロシマ事典』改訂関連 記事」。一括してきの こ会宛平和のためのヒ ロシマ通訳者グループ 封筒に所収。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10	13	[『ヒロシマ事典』きのこ会 項目内容確認関連資料一 件]	19950621 大牟田稔→HIP. 山賀光江	A4 洋紙1枚、黒ペン書、 A4 洋紙2枚、コピー、 B5 洋紙1枚、黒鉛筆書	「[山賀光江宛大牟田稔 FAX 原稿]」、「大牟田 稔宛山賀光江 FAX」、 「[山賀光江宛大牟田 稔 FAX 原稿下書き]」。 FAX 原稿は原本とコ ピー各1枚。メモの裏 面にはスケジュールの メモ書きあり。FAX 原 稿と下書きには連絡先 と伝言メモが書かれた 付箋貼付。
10	35	[平和関係団体名簿修正関 連資料一件]	19990419 (財)広島平和文化 センター理事長 吉中康磨	封筒2枚、A4・A4E 洋 紙2枚、コピー	「平和関係団体の名簿 の修正について(お願 い)」、「[名簿コピー] きのこ会」、「財団法人 広島平和文化センター 調査担当課西村宛封 筒」。封筒には未使用切 手添付。一括してきの こ会宛財団法人広島平 和文化センター封筒に 所収。
8	28	[クリアファイル]		クリアファイル1部	内容は8-28-1～2
8	28-1	[朝日新聞コピー「[きのこ 会50歳誕生会関連記事一 件]」]	19960215	B4E 洋紙2枚、コピー	
8	28-2	[きのこ会会員援護手当状 況一覧]	00000000	A4E 洋紙7枚、コピー	
8	29	[クリアファイル]		クリアファイル1部	内容は8-29-1～14
8	29-1	[きのこ会会員一覧メモ]	00000000 [大牟田稔]	A4 洋紙1枚、黒・赤・ 青ボールペン書	
8	29-2	被爆体験証言者交流の集い 研修会講師の行程	[19960000]	A4 洋紙1枚	書込あり
8	29-3	平成7年度第3回「被爆体 験証言者交流の集い」研修 会	19950000 被爆体験証言者交 流の集い世話人事 務局・(財)広島 平和文化センター	A4 洋紙1枚、コピー	
8	29-4	被爆体験証言者交流の集い 研修会講師の行程	[19960000]	A4 洋紙1枚	裏面に石栗勉氏の発言 に関する大牟田メモ あり
8	29-5	[安部一成略歴]	00000000	A4 洋紙1枚、コピー	裏面に大牟田メモあり
8	29-6	[きのこ会] 一覧	00000000 [大牟田稔]	B5 原稿用紙1枚、黒ペ ン書、B5 洋紙3枚、コ ピー・青ペン書、B5E 洋紙1枚、黒・赤ペ ン書	原本1枚、コピー3枚 あり。きのこ会会員関 連メモあり。
8	29-7	[住所録メモ]	00000000 [大牟田稔]	A4 洋紙1枚、青・赤ボ ールペン書	きのこ会会員受入先カ。 裏紙を使用
8	29-8-2	[澤田由紀子宛大牟田稔書 状コピー]	19951012 大牟田稔→澤田由 紀子	A4 洋紙3枚、コピー	8-29-8-1に挟み込み
8	29-8-3	[澤田由紀子宛大牟田稔書 状原稿および大牟田メモ]	[19950000] [大牟田稔]	A4 広島平和文化セン ターけい紙2枚、黒ペ ン書	8-29-8-1に挟み込み
8	29-9	[きのこ会に関するメモ]	00000000 [大牟田稔]	25×25cm 紙ナブキン 1枚、青ボールペン書	
8	29-10	[広島県大百科事典きのこ 会箇所コピー]	00000000	A4 洋紙2枚、コピー	同伴2枚あり

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8	29-11 [広島県大百科事典きのこ会箇所及びきのこ会の現況]	19960300	[大牟田稔]	B4 原稿用紙1枚、黒ペン書、B4 洋紙1枚、コピー	原本とコピー各1枚。原本には広島県大百科事典きのこ会箇所コピー添付。
8	29-12 [大牟田メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 広島平和文化センターけい紙1枚、鉛筆・黒ペン書、A4E 洋紙1枚、黒・赤・青ペン書、A4E 洋紙1枚、青ペン書、A4 洋紙1枚、黒ペン書	3枚は裏紙を使用、きのこ会会員についてのメモ等
8	29-13 石黒所長との協議項目	00000000		A4 洋紙1枚、コピー・黒ペン書	書込あり
8	29-14 きのこ会を支援する会(仮称)の提案	19960320		仮綴(A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部	大牟田稔宛村上ファックス送付票添付
8	19 [寄付金]目録	20000623	生活協同組合ひろしま理事長 富田巖→「きのこ会」世話人代表 大牟田稔	包紙2枚、39.5×52.5cm 中性紙折り紙1枚、筆ペン書	

⑥きのこ会を支える会

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10	23-1 [「きのこ会」を支援する会(仮称)関連資料一件]	19960320	[「きのこ会」を支援する会(仮称)]	B5 洋紙1枚、B4E 洋紙4枚、コピー	「きのこ会」を支援する会(仮称)の提案、「～「きのこ会」の歴史と現状～」。「～「きのこ会」の歴史と現状～」は2枚1組。
6	35 広島市立安佐市民病院医療相談室書簡	19970217	広島市立安佐市民病院医療相談室→大牟田稔	封筒1枚、B5 洋紙1枚、コピー	封書、第5回の「きのこ会を支える会」への広島大学ボランティア学生の参加について
1	4-1 [「きのこ会」「きのこ会を支える会」合同クリスマス会案内状]	19971200		B4 洋紙1枚、コピー	
1	4-2 [「きのこ会」「きのこ会を支える会」合同クリスマス会案内状]	19971203	広島市立安佐市民病院医療相談室 藤田→広島平和文化センター理事長 大牟田稔	A4 洋紙2枚、コピー	FAX 送付添え状あり
1	4-3 12月20日の案内の件	[19970000]		A4 洋紙1枚、鉛筆書	
1	4-4 きのこ会を支える会の今後について	19980318		A4 洋紙1枚、コピー、黒ペン書	
1	4-5 [きのこ会を支える会一件]	19960430 ～ 19960917		仮綴(B5・A4 洋紙、コピー、クリップどめ)1部	内容:「きのこ会を支える会のご案内」「きのこ会を支える会例会」きのこ会を支える会名簿」。黒ペンにて書込あり。

⑦週刊「明星」事件関係

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	12-1 [封筒]	00000000	大牟田稔→長岡千鶴野	封筒1枚	1-12-1-1～3の封筒
1	12-6 [週刊明星掲載記事コピー]	[19820819]		B4E 洋紙2枚、コピー	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
1	12-2	[山下秀樹書簡]	19820913	週刊明星編集部副編集長 山下秀樹→きのこ会事務長大牟田稔	封筒 1 枚・25.5cm × 18.5cm 用箋 1 枚、青ペン書、A4 洋紙 2 枚、コピー	封書、内容：『週刊明星』掲載記事の訂正について回答
1	12-1-2	[山下秀樹書簡写]	19820913	週刊明星編集部副編集長 山下秀樹→きのこ会事務長大牟田稔	A4 洋紙 3 枚、コピー	「写」とあり内容：『週刊明星』掲載記事の訂正について回答
1	12-1-1	[大牟田稔書簡]	19820914	大牟田稔→長岡千鶴野	B5 便箋 1 枚、黒ペン書	封筒なし。内容：『週刊明星』編集部からの回答について。
1	12-3	[『週刊明星』への抗議文原稿・メモ]	[19820000]	[大牟田稔]	用箋 6 枚、黒ボールペン・黒ペン書	
1	12-4	[『週刊明星』への抗議文写]	19820917	胎内被爆小頭症患者とその親の会・きのこ会会長・長岡千鶴野→(株)集英社「週刊明星」編集部	B4E 洋紙 8 枚、コピー	4 枚 1 組、同件 2 部あり
1	12-5	[週刊明星事件に関する新聞記事コピー]	19820919		B4 洋紙 3 枚、コピー	
5	3	[『週間明星』の取材記事に対する抗議関係]	19821007	きのこ会	B4E 洋紙 2 枚、コピー、B5 雑誌 1 冊	同封の『週間明星』P.74～75 に該当記事
1	12-1-3	[きのこ会書簡写]	19821007	きのこ会→熊谷博子	B4E 洋紙 2 枚、コピー	内容：『週刊明星』への抗議文手交以降のきのこ会の動向について
8	23	熊谷博子氏への態度	19821016	[大牟田稔]	B5 中国新聞社用箋 2 枚、ボールペン書、B4E 洋紙 1 枚、コピー	原本とコピー各 1 部。原本には連絡先一件書き込みあり。
6	33	山下秀樹書簡	19821026	週刊明星編集部副編集長 山下秀樹→きのこ会会長 長岡千鶴野	封筒 1 枚、B5 便箋 1 枚、青ペン書、B5E 洋紙 2 枚、コピー	封書、訂正記事原稿の送付について書状、訂正記事原稿コピー同封

⑧ 「日本の原爆文学」 事件関係

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
8	33	[封筒]「日本の原爆文学」の件	00000000		封筒 1 枚	黒マジック書にて「「日本の原爆文学」の件」とあり、内容は 8-33-1～14
8	33-6-1	[『日本の原爆記録』出版に付き契約書コピー]	19901025	中国新聞社 尾形幸雄・日本図書センター 高野義夫→	B5 洋紙 1 枚、コピー	8-33-6-3 に挟み込み
8	33-13	[鎌田定夫書簡]	19910428	[長崎の証言の会] 鎌田定夫→大牟田稔	封筒 1 枚、B5E 便箋 2 枚、黒ペン書き、B4E 中折 8 枚、B5 洋紙 3 枚、活版	封書、『ヒロシマ・ナガサキ事典』出版について書状。『ヒロシマ・ナガサキ通信』No106・107、シンポジウムなどのビラ同封
8	33-4-2	[封筒]	19910524	エディトリアルさあかず清水博義→論説主幹大牟田稔	封筒 1 枚	中身なし、8-33-1 の封筒カ

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8 33-1	[清水博義書簡]	19910524	エディトリアルさあかす清水博義→大牟田稔	A4E 原稿用紙 2 枚、黒ペン書、B5 洋紙 4 枚、コピー	封書・封筒なし、『日本の原爆記録』出版につき著作権について書状。『日本の原爆記録』出版に際し『原爆が遺した子ら』収録許可願い、『日本の原爆記録』企画書、『日本の原爆記録』収録作品一覧挟み込み
8 33-4-3	[『原爆の遺した子ら』収録許可につき返信葉書]	19910000	→エディトリアルさあかす 清水博義	葉書 1 枚	未発送、8-33-4-2 に同封されていたものと思われる
8 33-4-1	[黒古一夫書簡]	19910528	黒古一夫→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 便箋 2 枚、黒ペン書	封書、『日本の原爆記録』出版について書状 8-33-4-1～3 はクリップどめ
8 33-10	[水原肇書簡]	19910528	水原肇→大牟田稔	封筒 1 枚、A4・A5E 洋紙 2 枚、コピー	封書、『日本の原爆記録』刊行の著作権問題について。『日本の原爆記録』の「記録」NEWS(個人誌『正観亭通信』③) 同封
8 33-5	[秋信利彦書簡]	19910602	秋信利彦→大牟田稔	26 × 25cm ファックス用紙 1 枚、コピー	ファックス、『日本の原爆記録』出版につき清水博義発ファックスの転送
8 33-3	[黒古一夫書簡]	19910619	黒古一夫→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 便箋 5 枚、黒ペン書、A4 洋紙 1 枚、コピー	封書、『日本の原爆記録』の誤謬問題について書状。ピカ資料研究所の要望について回答コピー同封
8 33-2	[黒古一夫書簡]	19910702	黒古一夫→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 便箋 2 枚、黒ペン書、B5 洋紙 1 枚、コピー、仮綴 (B5 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	封書、『日本の原爆記録』の誤謬問題について書状。ピカ資料研究所回答コピー、『日本の原爆記録』第二刷用訂正箇所一覧同封
8 33-7	[清水博義書簡]	19910708	エディトリアルさあかす清水博義→大牟田稔	封筒 2 枚、B5 洋紙 2 枚、活版・黒ペン書	封書、『日本の原爆記録』第 2 刷出版につき原稿依頼。『日本の原爆記録』第一刷著者印税計算書
8 33-6-2	[『日本の原爆記録』出版につき契約書 (案)]	19910604	秋信利彦→大牟田稔	26.5 × 25.5cm ファックス用紙 1 枚、コピー	ファックス、きのこ会と日本図書センターの契約書案。8-33-6-3 に挟み込み
8 33-6-3	[秋信利彦書簡]	[1991] 0604	秋信利彦→大牟田稔	26.6 × 25.6cm ファックス用紙 1 枚、コピー	ファックス、6 月 7 日の日程について
8 33-11	[水原肇書簡]	19910616	水原肇→大牟田稔	封筒 1 枚、A4 洋紙 2 枚、A5 洋紙 1 枚、活版、葉書 1 枚	封書、『日本の原爆記録』刊行の著作権問題について。『日本の原爆記録』の「記録」NEWS(個人誌『正観亭通信』⑤) 同封。返信用葉書は未発送
8 33-8	[きのこ会会員アンケート依頼]	19910624 ~ 19910703	中国新聞報道部江種則貴・井上浩一→大牟田稔	B5 ファックス用紙 13 枚、コピー	6 月 24 日付・7 月 3 日付 FAX

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
8	33-9-1	[長崎新聞コピー「『日本の原爆記録』刊行関連記事一件』]	19910613 ～ 19910621		A3 洋紙1枚、コピー	
8	33-9-2	「宿直日誌」から	00000000		B5E 洋紙1枚、コピー	8-33-9-1 に挟み込み
8	33-9-3	京都の長女への手紙二編	00000000		B5E 洋紙1枚、コピー	8-33-9-1 に挟み込み
8	33-9-4	[原爆関係小説コピー断簡]	00000000		B5E 洋紙2枚、コピー	8-33-9-1 に挟み込み
8	33-9-5	[大牟田メモ断簡]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙1枚、黒ボールペン書	8-33-9-1 に挟み込み
8	33-12	平成2年分所得税確定申告の修正について	19910610	広島東税務署長→大牟田稔	B4 洋紙、活版・黒ボールペン書	
8	33-14	『日本の原爆記録』第十四巻解説“核”の反人間性を明示＝時間をこえる人間破壊	00000000	黒古一夫	仮綴(A4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部	

⑨論文

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
9	2-6-2	原爆文学について雑感	[19530801]	川手健	仮綴(B4E 洋紙2枚、コピー、ホッチキスどめ)1部	『広島文学』8月号所収、11-2-6-1 に挟み込み
1	1-4	ABCC 業績報告集	[19590000]	原爆傷害調査委員会	B4E 洋紙21枚中折、コピー	内容:「原爆傷害:特に放射線について」「広島および長崎における原子爆弾の遺伝学的影響」「広島における胎内被爆児童に発現した異常」
7	2	広島市における胎内被爆児童に発現した異常	19610000	G.Plummer	B5 冊子1冊、活版	『広島医学』Vol. X I V No.9, 1961 別冊
1	7-1	原子爆弾と小頭症	[19650000]	広島研究会	17cm × 24.5cm 冊子1部、活版	同件4部あり。うち1部に、きのこ会30歳を祝う会の新聞記事切抜2点添付。
7	8	原子爆弾と小頭症	00000000	広島研究会	仮綴(B5E 洋紙、活版、ホッチキスどめ)5部	同件5部あり
1	1-2	胎内被爆児の障害について	19651000	広島大学医学部産科婦人科学教室・教授田淵昭・平位剛・真田光明・中川繁・佐藤秀生	B5 冊子1部、活版	同件3部あり(7-1, 7-9)、『広産婦誌』第4巻第2号、昭和40年10月別冊/小頭症関係の記述あり。
7	17	The Microcephalic Children of Hiroshima	19660000	大牟田稔	仮綴(B4E 洋紙中折、ホッチキスどめ)3部	冊子「Japan Quartely Vol.XIII No.3」抜刷。同一3部。英語表記。
9	4-15	The Microcephalic Children of Hiroshima	[19660000]	大牟田稔	封筒1枚、B4E 洋紙12枚、コピー	p381・p384が4枚あり、「Reprinted from the Japan Quarterly Vol. X III No.3, 1966」のコピー
9	4-16	The Microcephalic Children of Hiroshima	[19660000]	大牟田稔	B4E 洋紙4枚、25.5 × 70cm 切継洋紙1枚、コピー	欠頁あり
10	10	[論文「The Microcephalic Children of Hiroshima」表紙]	19660000	大牟田稔	A4 洋紙1枚、コピー	冊子「Japan Quarterly Vol.XIII No.3」抜刷。表紙上部に破れあり。
10	19	The Microcephalic Children of Hiroshima	19660000	大牟田稔	仮綴(B5・B4E 洋紙、コピー、クリップどめ)1部、B4E 洋紙12枚、コピー	冊子「Japan Quartely Vol.XIII No.3」抜刷。同一3部。英語表記。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
7 18	胎内原爆小頭症の臨床所見について(厚生省科学研究「小頭症の疫学的研究」の分担報告草案)	19661224	田淵昭・平位剛・中川繁・島田勝信・藤東淳朗	B5 冊子1部	
1 1-3	胎内原爆被爆小頭症の疫学的研究ならびに諸機能障害に関する研究(厚生省小頭症研究班報告)	[19670000]	東京大学名誉教授中泉正徳・広島大学教授田淵昭・志水清・東邦大学助教有馬正高	B5 冊子1部、活版	同伴2部あり
8 9	きのこ会	19721112	長岡弘芳→大牟田稔	封筒1枚、B5用箋1枚、黒ペン書、B5E洋紙1枚、湿式コピー、仮綴(B4E洋紙、湿式コピー、ホッチキスどめ)1部	1975年11月21日付、論文について大牟田の所見を求める書状および新聞記事コピー同封
8 21	共同研究・集団	19760620	思想の科学研究会編	A4洋紙中折9枚、コピー	長岡弘芳「きのこ会」・越智道雄「折鶴の会」のコピー
8 30-9	放射線影響研究所の現状と将来	19760925	財団法人放射線影響研究所理事長山下久雄	B5 冊子1部	『長崎医学会雑誌』51巻3号の抜き刷り
8 30-4	胎内被爆小頭症患者の現況と今日的課題	19780000	志水清	B5 冊子5部	『広島医学』344・1978年抜き刷り、同伴5部あり
1 11-1	きのこ会	00000000	長岡弘芳	仮綴(B4洋紙、コピー、クリップどめ)1部	
1 1-1	胎内被曝小頭症患者の現況と今日的課題	19780000	志水清	B5 冊子1部、活版	『広島医学』Vol.31 No.4別冊抜刷
8 22	人間と放射線	19910200	John W. Gofman著、今中哲二他訳	A4洋紙中折6枚、コピー	原題はRadiation and Human Health。「第21章 胎内被爆による先天的影響」の一部コピー
8 16	原爆胎内被爆精神遅滞者の脳異常	19920700	William J. Schull他5名	仮綴(B4E洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部	付箋あり
3 1	広島における『近距離早期胎内被爆症候群』児の現況	19960611	平位剛・村上須賀子・大牟田稔	仮綴(B5洋紙、印刷、B5冊子、活版、クリップどめ)1部	大牟田稔宛の書簡添付。『広島医学』Vol.49 No.3、1996年。
3 6	[大牟田論文<The Microcephalic Children of Hiroshima>コピー等]	00000000		封筒1枚、仮綴(A4洋紙、活版、ホッチキスどめ)14部、23.5×16cm洋紙冊子1部、B5冊子1部、仮綴(A4E洋紙、活版、ホッチキスどめ)、仮綴(B5洋紙、27.5×21.5cm洋紙、A4洋紙)1部、A4洋紙1枚、仮綴(封筒、A4洋紙、クリップどめ)1部	海外向けの講演・会議のための資料カ

⑩書簡

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
6 2	青山直樹書簡	19780301	[[きのこ会] 支援者、大学生] 青山直樹→きのこ会	封筒1枚、B5便箋3枚、黒ペン書き	封書、「原爆が遺した子ら」送付依頼とカンパ
3 7-3	[赤沢佳信書簡]	19770809	赤沢佳信→長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋2枚、黒ペン書	被爆33年に際し激励と見舞い金の送付
1 18-1	[長岡様への手紙(秋信氏からと思われる)・きのこ会10年の歩み]	[19720000]	[秋信利彦] →長岡 [千鶴野]	仮綴(B5原稿用紙、青ペン書・鉛筆書、ホッチキスどめ)1部	きのこ会10年の歩みと送付状

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
1	17-1	[秋信利彦書簡]	00000129	秋信利彦→大牟田稔	仮綴（封筒、B5 便箋、青ペン書、クリップどめ）1部	援護法等近況報告
3	7-7	[秋信利彦書簡]	19780623	秋信利彦→長岡千鶴野	封筒1枚、B5原稿用紙3枚、青ペン書	現金書留
3	7-4	[秋信利彦書簡]	19790402	秋信利彦→大牟田稔	封筒2枚、B5便箋2枚、青ペン書	現金書留、大牟田稔母逝去の件
3	7-5	[秋信利彦書簡]	19790331	秋信利彦→大牟田稔	封筒1枚、B5便箋2枚、青ペン書	現金書留、社会保障制度
3	7-6	[秋信利彦書簡]	19810122	秋信利彦→大牟田稔	封筒1枚、B5原稿用紙2枚	
6	42	[秋信利彦書簡]	00000000	秋信利彦→大牟田稔	封筒2枚、B5洋紙5枚、B5洋紙3枚、黒ペン書	各々大牟田稔宛秋信利彦封筒に所収
6	4	泉田千歳書簡	19930701	「各国元首の平和式典参列を願う市民の会」代表泉田千歳→きのこ会	封筒1枚、B5洋紙1枚、B4E洋紙2枚、コピー	封書、8月15日・長崎市民平和行進に関するお願い、八月十五日終戦の日に関する請願、被爆48周年原爆犠牲者慰霊・世界平和祈念市民大行進実施要領と送付状
6	44	[磯野恭子書簡]	19790315	磯野恭子→大牟田稔	B4E洋紙2枚、コピー、B5洋紙4枚、黒ペン	山口放送「ドキュメント'79聞こえるよ母さんの声が・・・・～原爆の子・百合子～」の感想を伝える書簡の控え。「大牟田稔宛磯野恭子書簡」同封。大牟田稔宛山口放送磯野恭子封筒に所収。「山口放送「ドキュメント'79聞こえるよ母さんの声が・・・・～原爆の子・百合子～」[使用写真]」(11-5)同封。
6	5	恵木尚、古田隆規書簡	19950200	広島弁護士会会長恵木尚・平和シンポジウム実行委員長古田隆規→きのこ会	封筒1枚、B5洋紙2枚	封書、3・18平和シンポジウムの案内とポスター
1	16-1	[大泉利通書簡]	19790509	日本放送協会中国本部本部長大泉利通→大牟田稔	仮綴（封筒、筆ペン書、B5洋紙、活版、クリップどめ）1部	封書、広島県視聴者会議委員就任についての感謝状
6	6	大木松子書簡	19770914	[福岡YMCA関係者]大木松子→きのこ会	封筒1枚、B5洋紙2枚	封書、「原爆が遺した子ら」送付に対する感謝状
1	16-4	[太田重利封筒]	19790606	太田重利→大牟田稔	封筒1枚、青ペン書	中身なし
6	7	太田重利書簡	19860225	太田重利→大牟田稔	封筒1枚、B5便箋4枚、黒ペン書、B5E冊子1冊	障害福祉年金の件／『福祉のしおり』同封
3	7-8	[太田幸子書簡]	19751006	太田幸子→長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋3枚、黒ペン書	
1	21-1	[太田幸子書簡]	19761029	太田幸子→長岡千鶴野	封筒1枚、230×177便箋2枚、青ペン書	お見舞いのお礼
3	7-9	[岡田タメ書簡]	19760224	岡田タメ→長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋2枚、黒ペン書	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
6	8	19760226	小草栄三→きのこ会事務局	封筒1枚	封筒のみ
1	20-1	19780718	[小草栄三書簡] 小草栄三→大牟田稔	封筒1枚、230×177便箋2枚、黒ペン書	暑中見舞いと小草信子の近況報告
3	7-10	19891115	[川下兼子・ヒロエ書簡] 川下兼子・ヒロエ→大牟田稔	封筒1枚、B5便箋2枚、黒ペン書	
3	7-11	19770727	[川本一之書簡] 川本一之→大牟田稔	封筒1枚、B5便箋3枚、青ペン書	
3	7-12	00000220	[久保キクヨ書簡] 久保キクヨ→長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋1枚、B6便箋1枚、黒ペン書	
6	29	20000412	黒川浩明書簡 財団法人広島平和文化センター理事長黒川浩明→きのこ会	封筒2枚、B5E洋紙1枚、B4洋紙2枚、A4洋紙1枚、コピー	平和関係団体アンケート
6	9	[19770000]	国連 NGO 主催「被爆の実相とその後遺、被爆者の実情に関する国際シンポジウム」広島準備委員会事務局書簡	封筒3枚	封筒のみ
6	10	19780301	近藤雅雄→きのこ会	封筒1枚、B5便箋2枚、青ペン書	『原爆が遺した子ら』購入申込
3	7-18	19810803	[境邦夫書簡] 中国新聞岩国支局境邦夫→広島県大百科事典刊行委員会事務局大牟田稔	封筒1枚、B5便箋2枚	1枚は白紙
1	15-1	19811121	[坂口周子書簡] 大阪府松原高等学校2年4組担任坂口周子→長岡千鶴野	仮綴（封筒1枚、B5原稿用紙、黒ペン書、B4E原稿用紙、コピー、クリップどめ）1部	封書、大阪府立松原高等学校生徒の修学旅行感想文と送付状
1	22-1	19860226	[坂本父書簡] 坂本日吉→大牟田稔	封筒1枚、177×228便箋2枚、黒ペン書	お祝い金一覧
6	11	00000000	坂本書簡 きのこ会 坂本→総務部 大牟田稔	封筒1枚、A5罫紙1枚、黒ペン書	
3	7-13	19780905	[杉田一枝書簡] 杉田一枝→長岡千鶴野	郵便書簡1枚、黒ペン書	
6	13	[19940000]	聖イエス会御幸教会書簡 御幸教会牧師 大塚信聖イエス会御幸教会→きのこ会	封筒1枚、A4洋紙1枚、B4E洋紙1枚、コピー、B5ポスター3枚	「アンネ・フランク展」案内、同伴3点
3	7-14	20000617	[生協ひろしま組織企画室書簡] 生活協同組合ひろしま組織企画室室長渡辺とおる→「きのこ会」代表世話人大牟田稔	封筒1枚、A4洋紙1枚、コピー	被爆者支援募金贈呈について
6	32	19811130	「戦争への道を許さない女たち」の連絡会書簡 「戦争への道を許さない女たち」の連絡会→きのこ会 長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋1枚、黒ボールペン書、B5E洋紙3枚	封書、反戦集会開催につき書状、同伴ビラ3枚同封
6	14	19760216	高橋安須美書簡 高橋安須美→きのこ会	封筒1枚	封筒のみ
3	8-6	19980629	竹林伸幸書簡 竹林伸幸→大牟田稔 方きのこ会	仮綴（封筒、B5洋紙、B4E洋紙、コピー、クリップどめ）1部	核廃絶の呼びかけ
6	37	19820501	[田代和温書簡] 田代和温→大牟田稔	封筒1枚、A4洋紙1枚、青ペン書、A5冊子1冊、活版	「Atomikring- Kring ohne Ende」同封大牟田稔 宛 James K Tashiro 封筒に所収

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
6	16	19771223	板垣千賀子・横山孝子・若槻真由美・田辺順子→きのこ会	封筒1枚、B5便箋2枚、黒ペン書、B5わら半紙1枚、青焼き	島根県立横田高校卒業論文作成の協力願い
3	7-15	19780130	田森孝仁→長岡千鶴野	封筒1枚、メモ1枚	現金書留
6	17	19930714	デルタ女の会→きのこ会	封筒1枚、B5洋紙11枚、コピー、A5便箋1枚、黒ペン書	衆院選立候補者に対するアンケート結果
1	19-1	19750912	長岡千鶴野→大牟田稔	封筒1枚、B5便箋3枚、黒ペン書	きのこ会の趣旨説明
6	31	19770820	長岡弘芳→大牟田稔	封筒1枚、B5E用箋1枚、黒ペン書、B5洋紙1枚、湿式コピー	封書、『原爆が遺した子ら』受領につき礼状、新聞記事「人気集める原爆小文庫」同封
1	22-2	19860316	中島竜美→大牟田稔	封筒1枚、177×230便箋3枚、黒ペン書き	きのこ会50周年のお祝い
6	43	19730713	[日本原水爆被害者団体協議会書簡] →きのこ会	封筒1枚、B5洋紙2枚、黒ペン書、中折(B4E洋紙1枚、活版)、中折(B4E洋紙1枚、活版)、B4E洋紙4枚、A5洋紙3枚、活版、	NHKへのカラーテレビ受信料無料要請結果について。きのこ会宛日本原水爆被害者団体協議会封筒に所収。被団協速報No.55、原子爆弾被爆者の援護法制定に関する請願書、原爆被害者援護法案のための要求骨子同封。
3	2-2	19761208	畠中国三→大牟田稔	封筒1枚	
3	2-7	19780721	畠中国三→大牟田稔	葉書1枚、青ペン書	暑中見舞い
3	2-14	19780524	畠中国三→大牟田稔	仮綴(封筒、23×17.5cm便箋、青ペン書、クリップどめ)1部	テレビ番組「世界のお母さん」に関する指示
6	50	[19990603]	畠中国三→大牟田稔	ハガキ1枚、黒ペン書	大牟田稔の中国新聞社退社のねぎらい
6	51	[19990100]	畠中国三→大牟田稔	ハガキ1枚、黒ペン書	年賀状
6	41	19711226	服部旦・保子→きのこ会	228×177cm洋紙2枚、青ペン書	きのこ会宛服部旦・保子封筒に所収
6	20	19780313	日本被団協代表委員→きのこ会畠中国三	封筒1枚、B5洋紙1枚、コピー、B5便箋1枚、黒ペン書、B4洋紙1枚、活版、はがき1枚	原爆被害者援護法制定促進全国行脚オリヅル旗ひきつぎ広島集会開催について
1	15-3	19811121	「広島証言の会」事務局→長岡千鶴野	封筒1枚、B5E洋紙2枚、ハガキ1枚、活版	封書、「広島証言の会」創立総会の案内、返信用ハガキ
6	15	20010409	広島平和文化センター理事黒川浩明→きのこ会	封筒2枚、A4洋紙1枚、A4E洋紙1枚、コピー	平和関係団体アンケート
6	23	[00000311]	文沢[隆一]→大牟田稔	B5便箋2枚、青ペン書	封筒なし/原爆小頭症の定義・きのこ会の運動方針について
6	24	19770709	増沢喜千郎→きのこ会	封筒1枚	現金書留 封筒のみ

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	15-2 [松川義明書簡]	19811015	大阪府松原高等学校校長松川義明→長岡千鶴野	封筒1枚、B5洋紙1枚、B4E洋紙1枚	封書、大阪府立松原高等学校生徒の修学旅行における講師依頼と日程表
6	25 松田涼子書簡	19781024	松田涼子→きのこ会長岡千鶴野	封筒1枚、B5便箋2枚、青ペン書	現金書留
6	48 村上啓子葉書	19991012	村上啓子→大牟田稔	葉書1枚	
6	40 村上須賀子書簡	19980700	村上須賀子→大牟田稔	封筒1枚、16.2×11.4cm洋紙1枚、活版・黒ペン書、葉書7枚、A4E1枚、活版	「[ポストカード]花の日々」、「[ポストカードの説明書]」共に未開封ビニル袋に所収。全資料一括して大牟田稔宛村上須賀子封筒に所収。
3	7-16 [山崎ツル書簡]	19730217	山崎ツル→長岡千鶴野	封筒1枚	封筒のみ
3	7-17 [吉村悟書簡]	00000907	毎日新聞広島支局吉村悟	B5便箋6枚	封筒なし
9	2-6 - 4 [吉本トミエ書簡]	19910801	吉本トミエ→大牟田稔	封筒1枚、23×18cm便箋2枚、ボールペン書、8×11.5cm写真2枚	大牟田稔の写真同封
6	49 米田卓史葉書	19790226	米田卓史→大牟田稔	葉書1枚	胎内被爆小頭症に関するレポート依頼
3	7-21 [封筒]	00000000	→長岡	封筒1枚	封筒のみ
6	1 [78核兵器完全禁止・被爆者援護世界大会広島実行委員会書簡]	19780802	核兵器完全禁止・被爆者援護世界大会広島実行委員会→きのこ会	封筒1枚、A4洋紙1枚、B4E洋紙2枚、コピー	封書、広島実行委員会ニュースNo.1、被爆33周年原水禁大会広島大会々場と宿泊場所位置図、世界大会の参加確認
6	18 原水爆禁止1985年世界大会ヒロシマのひろば実行委員会準備会書簡	19850720	原水爆禁止1985年世界大会ヒロシマのひろば実行委員会準備会→きのこ会	封筒2枚、B4Eわら半紙1枚、コピー	原水爆禁止1985年世界大会ヒロシマのひろば実行委員会への参加要請と結成総会のご案内
6	19 [名古屋大学教育学部附属中学校高等学校書簡]	20001116	名古屋大学教育学部附属中学校高等学校校長速水敏彦→きのこ会 大牟田稔	封筒1枚、A4洋紙1枚、コピー、A4便箋2枚、黒ペン書、写真1枚	生徒の訪問・インタビューに対するご協力についてのお礼
6	21 被災25周年・3.1ビキニデー広島集会よびかけ人会議書簡	19790225	被災25周年・3.1ビキニデー広島集会よびかけ人会議→団体代表者各位	封筒1枚、B5洋紙1枚、孔版、B4E洋紙3枚、活版	被災25周年3・1ビキニデー広島集会にご参加を！！同件3点
6	22 [被災25周年・3.1ビキニデー広島集会よびかけ人会議]事務局書簡	[19790000]	被災25周年・3.1ビキニデー広島集会よびかけ人会議事務局	封筒1枚、B4E洋紙1枚、青焼き	被災25周年3・1ビキニデー広島集会よびかけ人会議報告
6	26 8・6ヒロシマ平和へのつどい1999世話人会書簡	[19990000]	8・6ヒロシマ平和へのつどい1999世話人会	封筒1枚、A4洋紙2枚、コピー、振込用紙1枚	「8・6ヒロシマ平和へのつどい1999」案内・賛同金振込
6	27 [David Graham 書簡]	19980217	David Graham →きのこ会	封筒1枚、A5洋紙2枚、黒ペン書	
6	28 [残暑見舞い・『原爆が遺した子ら』購入申込葉書]	00000000	きのこ会	ケース1箱、葉書46枚	同件46点

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
6 30	[きのこ会関係新聞記事 FAX]	19960215	朝日新聞岩国通信局 加藤→広島平和文化センター理事 大牟田稔	仮綴 (B4 洋紙、コピー) 1部	きのこ会 50歳誕生会・島中百合子氏記事
6 34	[国連 NGO 主催「被爆の実相とその後遺、被爆者の実状に関する国際シンポジウム」広島準備委員会書簡]	00000000	[国連 NGO 主催「被爆の実相とその後遺、被爆者の実状に関する国際シンポジウム」広島準備委員会] →きのこ会島中国三	封筒1枚、仮綴(B4洋紙、コピー、ホッチキスどめ)	封書、シンポジウムの経過及び国際連合非政府機関について
6 36	[国連 NGO 主催「被爆の実相とその後遺、被爆者の実状に関する国際シンポジウム」広島準備委員会書簡]	[19770000]	[国連 NGO 主催「被爆の実相とその後遺、被爆者の実状に関する国際シンポジウム」広島準備委員会] →きのこ会長岡千鶴野	封筒1枚、B4洋紙1枚・B5E洋紙1枚、コピー	封書、被爆問題国際シンポジウムを結成させる市民の会結成総会議事録、「国連 NGO 国際シンポジウムを成功させる市民の会」案内先
6 46	[NGO ジュネーブ国際軍縮会議派遣募金領収書]	19780200	被爆問題国際シンポジウム広島準備委員会会長飯島宗一→きのこ会	葉書1枚	NGO ジュネーブ国際軍縮会議派遣募金領収
6 38	[Evelyn Smith、Steve Sumerford 書簡]	19850112	Evelyn Smith、Steve Sumerford →大牟田稔	中折り (B6E 洋紙1枚、黒ペン書)、A4洋紙1枚、コピー	英語表記。受信・送信者不明書簡コピーを挟み込み。大牟田稔宛封筒に所収。
6 39	[Tom Ives 書簡]	19841120	Tom Ives →大牟田稔	封筒1枚、A4洋紙1枚、活版	英語表記。大牟田稔宛 tom ives 封筒に所収。

⑪原稿・メモ

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10 7	[きのこ会関連モニター原稿]	[196511] 15		仮綴 (B4E・B5 変洋紙、青焼き、ホッチキスどめ) 1部	佐々木クス子死亡記事 6種、補筆あり
3 2-1	[原稿草案]	[19710000]	きのこ会	B5 洋紙1枚、青ペン書	宣言文案案か
3 2-4	[書簡草案]	00000000		B5E 原稿用紙2枚、黒ペン書	
3 2-6	[長岡千鶴野原稿]	19780602	長岡千鶴野	B4E 洋紙2枚、コピー	表題「わが子は”原爆小頭症”」
3 2-8	[坂本日吉への弔辞原稿]	[19860000]	長岡千鶴野	B5E 洋紙4枚、黒ペン書	
3 2-5	[島中国三原稿]	[19750000]	島中国三→大牟田稔	仮綴 (A4E 原稿用紙、黒ペン書、ホッチキスどめ)、23 × 17.5 洋紙1枚	大牟田稔への書簡1枚あり、表題「被爆三十年の夏」
3 2-15	[島中国三原稿]	[19780000]	島中国三	A4E 原稿用紙5枚、黒ペン書	表題「『世界のお母さん』撮影日記」
3 2-11	[島中国三原稿]	19790704	島中国三→大牟田稔	仮綴 (封筒、A4E 原稿用紙、青ペン書、クリップどめ) 1部	表題「ピカの日妻は妊娠していた」
3 2-12	[島中国三原稿]	19880830	島中国三→大牟田稔	仮綴 (封筒、A4E 原稿用紙、23 × 17.5cm 便箋、青ペン書、クリップどめ) 1部	表題「厚生省陳情紀行」
3 2-10	[島中国三原稿]	[19950000]	[島中国三]	A3E 洋紙2枚中折、A4 洋紙1枚、コピー	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
3	2-13	[畠中国三原稿]	00000000	畠中国三	B4 洋紙 3 枚、コピー	表題「ヒロシマからの訴え」
3	7-20	[援護紙給金についてのメモ]	00000000		メモ 1 枚、黒ペン書	援護支給金について
3	9-1	[『きのこ会』の歴史と現状] 原稿]	19960000	大牟田稔	仮綴 (メモ書、B5 原稿用紙、B5 洋紙、黒・青ペン書、プラスチッククリップどめ) 1 部	『きのこ会』の歴史と現状] 原稿・会員名簿・FAX 原稿、「きのこ会・満 50 歳を祝う集い」関係のものか
3	9-2	[住所・振込先メモ]	00000000		A4 洋紙 1 枚、鉛筆書	秋本佐人士連絡先、きのこ会銀行口座等のメモ
3	9-3	[出席者確認メモ]	[19770000]		B5 洋紙 1 枚、黒ペン書	昭和 52 年 12 月 12 日の会合等の出席確認か、裏面履歴書
3	9-4	[長岡氏 NHK 番組に関するメモ]	00000000		B5 罫紙 1 枚、黒ペン書	「長岡さん NHK23 日 14:25 - 14:45 中学生の時間 翠町中学校 7/19」とあり
3	9-5	[メモ・原稿]	00000000		B5 罫紙 4 枚、黒ペン書、B5 原稿用紙 16 枚、黒・青ペン書	在韓被爆者問題、被爆者認定問題、新聞記事草案など
3	9-6	[被爆者補償問題関係メモ]	00000000		仮綴 (B5 罫紙、黒ペン書、クリップどめ) 1 部	
3	9-7	[講演内容メモ]	00000000		B5 原稿用紙 4 枚、黒ペン書	原爆・被爆者に関する報告か
3	9-8	[きのこ会に関する講演メモ]	00000000		26 × 19cm 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	
3	9-9	[きのこ会議事録等メモ]	19950000		A4 レポート用紙 5 枚、黒ペン書	95.10.24 きのこ会会議、11.6 第 22 回専門委員研究報告に関するメモ
3	9-10	[きのこ会総会メモ]	[19760000]		B5 原稿用紙 1 枚、鉛筆書	
3	9-11	[きのこ会に関する講演メモ]	00000000		B5 原稿用紙 1 冊、黒ペン書	
3	10-1	[きのこ会 35 歳誕生記念祝辞]	00000000	[秋信利彦]	仮綴 (B5 原稿用紙、黒ペン書、クリップどめ) 1 部	
3	10-2	[原稿] 胎内被爆小頭児たちの戦後—『きのこ会』のあゆみと相談事例から—	19911009	広島赤十字原爆病院 若林 [節美] →中国新聞社論説委員 大牟田稔	封筒 1 枚、仮綴 (B5 洋紙、B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部、B5 罫紙 (広島原爆病院) 1 枚、黒ペン書	若林氏の送付状あり
3	10-4	[大牟田稔原稿] 盲目譜	19551125	大牟田稔	綴 (B4E 原稿用紙、紐綴、黒ペン書) 1 部	
3	10-5	[きのこ会会報メモ]	00000000		B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会 15 年目頃の記事か
3	10-6	[アメリカペンシルバニア州での原発事故に関する記事原稿]	00000000		B5E 原稿用紙 2 枚、黒ペン書	1 枚は白紙
3	10-7	[原稿] 『ラド』という単位について	00000000		仮綴 (B5E 原稿用紙、黒ペン書) 1 部	
3	10-8	[大牟田稔新聞記事原稿]	00000000	大牟田稔	B4E 原稿用紙 17 枚、コピー	きのこ会会員に関する記事
3	10-9	[メモ]	00000000		封筒 1 枚、B5 わら半紙 6 枚、A5 洋紙 3 枚、黒ペン書、B4 わら E 半紙 1 枚、孔版	中国新聞労働組合 組合ニュース No.98 (1979.3.3)、住所・電話番号のメモなど

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
3	10-11	[小頭症患者に関する原稿]	00000000		B4E 原稿用紙 3 枚、黒ペン書	
3	10-12	[大牟田稔原稿]	19651021	金井利博か→大牟田稔	封筒 1 枚、B5E 原稿用紙 64 枚、黒ペン書	封筒に「9月16日 大牟田様 原爆三部作 記念資料 金井」と記載。1965年10月21日(木)付特集「新聞協会賞受賞記念座談会」の大牟田による原稿
3	10-13	[企画書]『原爆を告発する-胎内に刻まれた放射線障害』(仮題)	00000000		仮綴 (B4 洋紙、青焼、ホッチキスどめ) 1 部	『原爆が遺した子ら』の企画書
4	1	[畠中敬恵死去に関する記事原稿・メモ]	[19780000]	[大牟田稔]	B4E 洋紙 17 枚、コピー、B5E 原稿用紙・罫紙 14 枚、黒ペン書	畠中敬恵 (= 畠中国三妻)
4	2	[きのこ会の現状の問題点を記したメモ・事務局旅行案]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 1 枚、黒ペン書、仮綴 (B5 罫紙 1 枚、黒ペン書、B5 洋紙 1 枚、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	きのこ会の活動の問題点/事務局旅行案
4	3	[長岡千鶴野への質問事項メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 19 枚、B5 罫紙 1 枚、黒ペン書、B5 洋紙 1 枚、コピー、8.5 × 5cm 名刺 1 枚	きのこ会関係 (長岡氏への質問覚書) / その他きのこ会関係ではないと思われるメモも多数
4	4	[きのこ会関係記事構想メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 5 枚、B5E 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	
4	5	[取材メモ]	00000000	[大牟田稔]	17 × 9.1cm メモ帳 1 冊、黒ペン・青ペン書	9月8日きのこ会総会のメモあり
4	6	[取材メモ]	00000000	[大牟田稔]	メモ帳 1 冊、黒ペン書	6月17日・11月18日きのこ会総会のメモあり
4	7	[きのこ会・市懇談会メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	
4	8	[きのこ会 ポスター墨書原案]	[19700000]	きのこ会	24.3 × 33.5cm 和紙 1 枚、墨書、B5E 罫紙 1 枚、赤ペン書	「二十五年前の恐怖と怒りを呼び戻せ 真実を隠すな 人類の破滅に通じる胎内被爆小頭児」とあり (きのこ会ポスターの下書きか)
4	9	[きのこ会の現状に関するメモ]	19980727	[大牟田稔]	A4 罫紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会原爆小頭症患者の現状(1998年当時)・データ
4	10	[きのこ会運営計画メモ]	00000000	[大牟田稔]	A4 罫紙 1 枚、鉛筆書	きのこ会を支援する会との連携強化・『きのこ会 35 年史』編纂計画について
4	11	[きのこ会総会メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 ノート 1 冊 (B5 原稿用紙 3 枚、黒ペン書、伝票 1 枚、挟み込み一括)	12月18日きのこ会総会のメモ
4	12	[きのこ会・原爆小頭症に関する著書章立て・構成メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 1 枚、黒ペン書	
5	1	[きのこ会運営方針・支援者への訴えを記した原稿]	00000000		B5E 原稿用紙 5 枚、黒ペン書	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
5	2	[きのこ会新聞記事原稿]	00000000		仮綴 (B4 藁半紙 6 枚青焼き) 2 部	
5	8	[原爆小頭症・きのこ会関係記事原稿]	[19890000]		B4E 原稿用紙 1 冊、黒ペン書	
5	9	[「きのこ会と平和運動」原稿]	[19690000]		封筒 1 枚、B4E 原稿用紙 88 枚、青ペン書、B5 罫紙 2 枚、黒ペン書	原稿・大牟田によるものと思われる審査文添付
8	17	[きのこ会に関するメモ]	00000000	[大牟田稔]	B4E 洋紙 1 枚、黒ボールペン書	
8	37	きのこ会 '79.3.5 総会・志水談話など [メモ]	19790305 ～ 19790322	[大牟田稔]	A6 メモ帳 1 冊、黒ボールペン書	メモ紙 1 枚挟み込み
8	38	きのこ会 秋信フィルム・コメント [メモ]	[1980] 0307～ [1981] 0621	[大牟田稔]	A6 メモ帳 1 冊、黒ボールペン書	
8	39	[きのこ会その他メモ]	00000000	[大牟田稔]	A6 メモ帳 1 冊、黒ボールペン書	メモ紙 3 枚挟み込み
9	3-1	[原稿] 続々片隅の記録	[19780000]	畠中国三	仮綴 (A4E 原稿用紙、黒ペン・黒ボールペン・赤鉛筆・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1 部、仮綴 (A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤鉛筆・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1 部、仮綴 (A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤鉛筆・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1 部、仮綴 (A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤鉛筆・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1 部	きのこ会会報 11 号
9	3-2	[紙面割り指示原稿] NGO 会議から妻の死まで - 続・片隅の記録 岩国市 畠中国三	[19790000]	[大牟田稔]	19.5 × 26cm 原稿用紙 1 枚、黒ボールペン・赤ペン書	きのこ会会報 11 号
9	3-3	[紙面割り指示原稿]	[19790000]	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、鉛筆・赤ボールペン書	きのこ会会報 11 号
9	3-5	[原稿] 会計報告	[19790000]		仮綴 (26 × 19.5cm 原稿用紙、黒ペン・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1 部	きのこ会会報 11 号、9-3-4 の手書き原稿
9	3-4	[会計報告その他校正ゲラ]	[19790000]		B4 洋紙 3 枚、コピー・赤ペン書	きのこ会会報 11 号、9-3-5 の校正ゲラ
9	3-6	[原稿] 喜び・悲しみ	[19790000]	[大牟田稔]	19.5 × 35.5cm 原稿用紙 2 枚、黒ボールペン・赤ボールペン書	きのこ会会報 11 号、会員の出産、死去について原稿
9	3-7	[原稿] 来年の夏ごろ“最後の断”か	[19790000]	[大牟田稔]	仮綴 (20 × 35cm 原稿用紙、黒ボールペン・赤ボールペン書、B4 洋紙、黒ボールペン・赤ボールペン書・コピー、クリップどめ) 1 部	きのこ会会報 11 号
9	3-8	[紙面割り指示原稿] 「認定制度」の意味を問う	[19790000]	[大牟田稔]	26 × 19.5cm 原稿用紙 1 枚、黒ボールペン・赤ボールペン書	きのこ会会報 11 号

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
9	3-9	[きのこ会会報11号校正ゲラ]	[19790000]	B4洋紙中折15枚、コピー・赤ボールペン・赤ペン書	きのこ会会報11号
9	3-10	[原稿]『きのこ会』の皆さんへ	[19790000]	日本原水爆被害者団体協議会事務局長 伊東壮	きのこ会会報11号
9	3-11	[原稿] 原爆小頭症に学ぶ 修学旅行の先生・生徒たちの感想	[19790000]	19.5×35.5cm原稿用紙、黒ボールペン・赤ペン・赤鉛筆書	きのこ会会報11号
9	4-1	[原稿] 「認定制度」の意味を問う	[19790000]	秋信利彦	きのこ会会報11号
9	3-12	[修正原稿] 畠中国三さん宅を訪ねて	[19790000]	上平井中教員 横山勝紀	きのこ会会報11号、原稿のコピーに大牟田稔によると思われる朱が入れたもの
9	3-13	[修正原稿] 原爆体験と現状の“はざま”で	[19790000]	上平井中教員 坂本ひろの	きのこ会会報11号、原稿のコピーに大牟田稔によると思われる朱が入れたもの
9	4-2	[修正原稿] 畠中さんを訪ねて…	[19790000]	鈴木孝枝	きのこ会会報11号、中国新聞社15文字20行罫紙に原稿コピーを貼り付けたもの。朱入れあり。
9	4-3	[修正原稿] 畠中さんにお会いして	[19790000]	結城文美	きのこ会会報11号、中国新聞社15文字20行罫紙に原稿コピーを貼り付けたもの。朱入れあり。
9	4-4-1	『きのこ会』覚え書き	[19790000]	文沢隆一	きのこ会会報11号
9	4-4-2	『きのこ会』覚え書き [校正ゲラ]	[19790000]	文沢隆一	きのこ会会報11号、12-4-4-1に挟み込み
9	4-5	三十三歳の春 [報校正ゲラ]	[19790000]	長崎市 太田重利	きのこ会会報11号
9	4-6	[原稿] 広島・長崎と“核文明”	[19790000]	[大牟田稔]	きのこ会会報11号
9	4-7	[原稿]『きのこ会』の家庭は素通り 「NGO被爆シンポ報告書」から、『きのこ会』のあしどり	[19790000]	[大牟田稔]	きのこ会会報11号
9	4-8	[原稿] 人権研究交流集会へ会長名でメッセージ	[19790000]	[大牟田稔]	きのこ会会報11号、第二回人権研究交流集会へのアピール送付に関する原稿

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
9	4-9	[修正原稿] ヒロシマからの訴え	[19790000]	「きのこ会」会長 畠中国三	B5E 洋紙5枚、コピー・赤ボールペン書	きのこ会会報11号、「Aのつづき」とあり(9-4-7に続く意)。原稿のコピーに大牟田稔によると思われる朱が入れたもの。
3	2-9	[きのこ会会報12号校正ゲラ]	[19800000]	きのこ会	仮綴(30.7×21.7cm洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部、36.3×26.4cm原稿用紙1枚、黒ペン書	
9	1	[封筒]	00000000		封筒1枚	きのこ会会報12号、12-1-1～12-1-12の封筒
9	1-1	[目次原稿]	19800000	[大牟田稔]	26×19cm原稿用紙1枚、黒ボールペン・黒ペン・赤ペン・鉛筆書	きのこ会会報12号
9	1-2	[原稿] 喜び	[19800000]	[大牟田稔]	仮綴(26×19cm原稿用紙、黒ペン・赤ペン書、ホッチキスどめ)1部	きのこ会会報12号、会員の出産、結婚について
9	1-3	[原稿] 編集を終えて	[19800000]	[大牟田稔]	仮綴(26×19cm原稿用紙、黒ペン・赤ペン書、ホッチキスどめ)1部	きのこ会会報12号、
9	1-5	[表紙裏原稿] きのこ会趣意書	[19800000]	[大牟田稔]	B4E 洋紙1枚、コピー・黒ボールペン・赤ペン・青鉛筆書	きのこ会会報12号、昭和40年6月27日付の「趣意書」コピーに手を加えたもの
9	1-7	「きのこ会」会報11号	19790723	きのこ会事務局	B5 冊子1部、活版	きのこ会会報12号
9	1-6	[追加原稿] 「きのこ会」のこの一年(79年7月～80年7月)	[19800720]	[大牟田稔]	仮綴(26×19cm原稿用紙、黒ボールペン・赤ペン・赤鉛筆・青鉛筆書、ホッチキスどめ)1部	きのこ会会報12号
9	1-4	[奥付原稿]	19800000	[大牟田稔]	26×19cm原稿用紙1枚、黒ボールペン・赤ペン書	きのこ会会報12号
9	1-8	[畠中宛塩田書簡の記事のゲラ]	00000000		30.7×21.5cm洋紙1枚、コピー	きのこ会会報12号
9	1-9	[紙面割り指示原稿] 原爆の子・百合子は34歳になった 続々・片隅の記録 岩国市畠中国三	[19790000]	[大牟田稔]	A4原稿用紙1枚、青鉛筆・赤鉛筆・赤ボールペン・鉛筆書	きのこ会会報12号
9	1-10	[きのこ会会報第12号ゲラ]	19800000		仮綴(A4洋紙、コピー・赤ボールペン・青ペン・青鉛筆書、ホッチキスどめ)1部、仮綴(A4洋紙、コピー・赤ボールペン・青ペン・青鉛筆書、ホッチキスどめ)1部、仮綴(A4洋紙、コピー・赤ボールペン・青鉛筆書、ホッチキスどめ)1部	きのこ会会報12号、内容は、「被爆者保護法の行方 東京での“八つの場面”」、「修学旅行で『きのこ会』の学習 「放射線の恐ろしさ知った」 普連土学園(東京)の23人から手紙」、「原爆の子・百合子は34歳になった 続々・片隅の記録 岩国市畠中国三」

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
9	1-11	[修正原稿] 意見書	[19800000]	[森滝市郎]	仮綴(A4E 洋紙、コピー・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1部	きのこ会会報12号、「(五)平和憲法下の被爆者援護法の理念」その他の部分。原稿のコピーに大牟田稔によるものと思われる朱が入られたもの。
9	1-12	[原稿] 東京・上平井中学校との交流	[19800000]	[畠中国三]	仮綴(A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤ボールペン・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1部、仮綴(A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤ボールペン、ホッチキスどめ) 1部、仮綴(A4E 原稿用紙、黒ボールペン・赤ボールペン・赤ペン書、ホッチキスどめ) 1部	きのこ会会報12号、原稿に大牟田稔によるものと思われる朱が入られたもの。
9	2-1	[天風録原稿] 26年をともに歩いて	[19910000]	大牟田稔(「きのこ会」代表世話人)	B5E 原稿用紙10枚、黒ペン・鉛筆書	[きのこ会関連モニター原稿] (10-12)の原稿
9	2-2	[天風録原稿] 26年をともに歩いて(コピー)	[19910000]	大牟田稔(「きのこ会」代表世話人)	B5E 洋紙10枚、コピー	9-2-1のコピー
9	2-3	[メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙1枚、黒ボールペン・鉛筆書	きのこ会の方針についてのメモカ
10	9	[きのこ会員体験記他]	[19850610]	長岡千鶴野	封筒3枚、仮綴(A4E 原稿用紙、黒鉛筆書、ホッチキスどめ) 1部、仮綴(A4E 原稿用紙、青ペン書、ホッチキスどめ) 1部、仮綴り(B4 洋紙、活版、ホッチキスどめ) 1部、B4・B4E 洋紙1枚、コピー	[[長岡千鶴野の体験記]]、「[[太田重利の体験記]]」、「新研ニュース」、「沖縄タイムス「戦後40年反戦の誓い新た」(裏面は「詳細不明新聞「社説「慰霊の日」を迎えて」)」、「詳細不明新聞「重い今日の意味と課題」(裏面は「詳細不明新聞「どう語り継ぐ戦争体験」)」。[[長岡千鶴野の体験記]]、「[[太田重利の体験記]]」各々所収していたと思われる封筒あり。一括して中国新聞社宇品北販売所封筒に所収。
9	2-6-1	[原爆関係新聞記事切り抜き]	19910711 ～ 19910807		A4 ファイル1冊	
10	12	[きのこ会関連モニター原稿]	[1991]0802	大牟田稔	17.8×52.3cm 洋紙2枚、コピー	3日付記事の原稿。補筆あり。
5	10	[[「原爆の刻印」背に半世紀-「きのこ会」の満50歳-]]	[19960000]	(財)広島平和文化センター理事長 大牟田稔	A4E 原稿用紙11枚、黒万年筆書	雑誌『軍縮問題資料』No.189のpp.34～39原稿

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考	
5	12	[名古屋大学教育学部附属 中学校フィールドワーク発 表「こども～被爆した子供 達～」原稿一件]	20010316	名古屋大学教育学部 附属中学校 A4 班	仮綴 (B4E 洋紙 5 枚、 ホッチキスどめ) 1 部、 仮綴 (B4E 洋紙 4 枚、 ホッチキスどめ) 1 部、 封筒 1 枚、A4 洋紙 1 枚、 コピー	[[「ホームページ原稿」 こども～被爆した子供 達～]、[[「集録原稿」こ ども～被爆した子供達 ～]。「大牟田稔宛名古屋 大学教育学部附属中 学校 A 組 4 班一同・湯 澤秀文書簡]、「湯澤秀 文封筒」同封。封筒に は未使用切手貼付。一 括して大牟田稔宛名古屋 大学教育学部附属中 学校高等学校封筒に所 収。
5	13	[きのこ会の歴史]	00000000	[大牟田稔]	B4E 原稿用紙 22 枚、青・ 黒ペン書、B4E 洋紙 1 枚、コピー	赤鉛筆による校正あり。 [[「きのこ会」を構成し ている胎内被爆による 小頭症の 16 人とその家 族] 挟み込み。
4	13	[きのこ会員所在・小頭症 関連メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会員所在都道府 県、小頭症認定に関す るメモ。小頭症は英語 表記。
4	14	[きのこ会員の被爆認定申 請関連メモ]	00000000		A5E・A6 洋紙 1 枚、黒 鉛筆書	2 枚 1 組。大牟田稔にあ てたメモカ。
4	15	[きのこ会員発言メモ]	19940619	[大牟田稔]	A4 罫紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会員の近況報告
4	16	[きのこ会員発言メモ]	00001121	[大牟田稔]	A4 罫紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会員の近況報告、 会議出席者氏名等のメ モ
4	17	[きのこ会員氏名メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5E 原稿用紙 1 枚、黒 ペン書	三角やチェック印をつ けられた氏名あり
4	18	[きのこ会員氏名メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5E 罫紙 1 枚、黒ペン 書	きのこ会員氏名を男女 別に分けたメモ。用紙 の 1/4 が欠損。
4	19	[「きのこ会」の計画]	20000623	[大牟田稔]	A4 罫紙 1 枚、青ペン書	
4	20	[きのこ会員連絡先一覧メ モ]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 4 枚、黒ペン書	4 枚 1 組
4	21	[長岡千鶴野懇談関連メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5E 罫紙 1 枚、黒ペン 書	懇談相手、日程に関す るメモ
4	22	[きのこ会の未来メモ他]	00000000	[大牟田稔]	B5 変・B5 罫紙 2 枚、 黒ペン書	きのこ会員の未来等につ いて、1975 年・第 7 回広島を考える旅の感 想文の集計メモ
4	23	[きのこ会員連絡先メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペ ン書	
4	24	[きのこ会員現況メモ]	[19860801]	[大牟田稔]	B5 藁半紙 4 枚、黒ペ ン書	
4	25	[きのこ会員陳情メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 藁半紙 1 枚、黒ペ ン書	きのこ会員の連絡先、 陳情の様子メモ
4	26	[原爆小頭症患者関連メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペ ン書	胎内被爆等の項目、認 定患者人数・所在地の メモ
4	27	[きのこ会員氏名メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 藁半紙 1 枚、黒ペ ン書	きのこ会員氏名を男女 別に分けたメモ。裏面 に別件メモあり。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
4 28	[きのこ会員病状等メモ]	00000000	[大牟田稔]	仮綴 (B5 罫紙、黒ペン書) 1 部	他に弘前大学関係者連絡先のメモ書きあり。裏面は「明社運動「公益法人化」について」。
4 29	[きのこ会検診方針関連メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 洋紙 1 枚、黒鉛筆書	裏面に同様の内容メモ書きあり
4 30	33 年後の生と死 二枚の認定書を	[19780000]	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	畠中百合子の母親の葬儀と原爆症認定申請に関する項目メモ書き
4 31	[きのこ会員両親関連メモ]	00000000		B5 洋紙 1 枚、コピー	きのこ会員の両親の氏名、生年月日、生死の如何のメモ書き
4 32	[『日本の原爆記録』第 1 刷関連書簡下書き]	[19910000]	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会会合で『日本の原爆記録』第 1 刷の著者印税計算書が了承を得た事と振込先を伝える旨の書簡下書き
4 33	[きのこ会員所在等メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 1 枚、黒鉛筆、B5E 罫紙 3 枚、黒ペン書	きのこ会員所在地の男女比、住所のメモ書き
4 34	[きのこ会建て直し関連文書他メモ]	[19950000]	[大牟田稔]	B5 罫紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会の組織建て直し構想に至る経緯の文書、IPPNW 関連メモ書き
4 35	[原爆症認定関連メモ]	[19780000]	[大牟田稔]	B4E 藁半紙 1 枚、黒ペン書	畠中百合子の母親の葬儀と認定申請、きのこ会と妊娠早期近距離胎内被曝症候群として小頭症患者の厚生省による原爆症認定経緯のメモ書き。「中国新聞労働組合 組合ニュース No.56」の裏面に書かれたメモ。
4 36	2 枚の認定書	[19780000]	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	畠中百合子の母親の死、きのこ会成立以前と成立後で認定患者氏名を分けたメモ書き
4 37	[きのこ会関連項目メモ]	[19950000]	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	きのこ会の歴史、会員、問題点に関する 5 つの項目と主な内容のメモ書き
4 38	[中国新聞記事題名案メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	原爆小頭症患者の母親の原爆症認定申請却下を伝える記事題名案カ。他、天風録掲載日のメモ書きあり。
4 39	[きのこ会関連文書下書き]	00000000	[大牟田稔]	B5 洋紙 1 枚、黒鉛筆書	25 枚目のみ。概要不明。
4 40	[きのこ会員福祉対策等メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 罫紙 4 枚、黒ペン書	原爆症認定訴訟、きのこ会「満 30 歳を祝う集い」、きのこ会と他の被爆者団体、被爆者問題、福祉対策、参考文献のメモ書き。文書執筆のためのメモカ。
4 41	[きのこ会員両親有無メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5E 原稿用紙 1 枚、黒ペン書	裏面に日本人と戦争に関する書籍情報メモ書きあり

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
4 42	[小頭症患者分類メモ]	00000000	[大牟田稔]	B4 原稿用紙1枚、黒鉛筆書、B4E 原稿用紙1枚、青ペン書	高度小頭症患者とで分類したメモ。核兵器戦争についての原稿部分あり。
4 43	[大牟田稔宛長岡千鶴野書簡下書き]	[19860000]	[大牟田稔]	B5E 原稿用紙2枚、黒鉛筆書	子供の40歳誕生日を祝う旨の書簡下書き。宛先は長岡千鶴野カ。

⑫新聞・雑誌記事

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
9 2-5	原爆小頭児 45歳の夏	19910803		B4E 洋紙3枚、コピー	中国新聞掲載記事のコピー。同伴3部
9 4-10	NHK あなたのダイヤル	19790801	NHK 事務部	タブロイド判新聞、1部	
9 4-13	“希望”こそ生きる力 広島市特別名誉市民 ノーマン・カズンズ氏	19640307		B4E 洋紙2枚、コピー	新聞記事コピー、同伴2部あり
9 4-14	Editor & Publisher	19790217	THE FOURTH ESTATE	仮綴 (A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	新聞記事コピー
1 3-1	原爆小頭症「45歳の夏」	19910724 ～ 19910804		A4 洋紙9枚、B5 洋紙1枚、A3E 洋紙1枚、コピー	中国新聞掲載記事のコピー
1 23-1	[胎内被爆小頭症関係新聞記事切り抜き]	19590805 ～ 19890627		スクラップブック1冊	
1 23-2	原爆小頭症の娘、なるみ	[19820000]	小林敏昭	B4E 洋紙中折5枚、コピー	『そよ風のように街に出よう』季刊11号掲載
1 23-3	[胎内被爆小頭症関係新聞記事切り抜き]	19660615 ～ 19900121		仮綴 (切り抜き、クリップどめ) 1部	
1 23-4	ヒバクシャ家族史 21世紀への伝言〈3〉	19790728		切り抜き1枚	毎日新聞掲載記事切り抜き
1 23-5	「あの時、助かったばかりに」～胎内被爆小頭症の息子とともに～	00000000	若林節美	仮綴 (B4 洋紙、コピー、A4 洋紙、黒ボールペン書、クリップどめ) 1部	八橋氏に関するメモ、治療状況に関するメモのコピー添付。書込あり。
1 23-6	Victims of Exposure in Utero(Fetal Victims)	00000000		仮綴 (A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	同伴2部あり
1 23-7	[NEW YORK TIMES 原爆関連記事]	19810806 ～ 19810810		仮綴 (B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部。封筒1枚・A3 洋紙7枚・B4 洋紙6枚、コピー、クリップどめ) 1部	
1 23-8	[胎内被爆小頭症患者の50歳誕生会に関する新聞記事]	19960320 ～ 19960326		B4E 洋紙3枚、コピー	
1 23-9	[畠中氏関係新聞記事ゲラ]	19950804	朝日新聞写真部大野明→平和文化センター [大牟田稔]	A4 洋紙2枚、コピー	FAX、添え状あり
1 23-10	原爆小頭症患者の生活支援組織結成へ	19960319		B5 洋紙1枚、コピー	新聞記事コピー
1 23-11	山陽新聞 夕刊	19960426		ブランケット判新聞1部	大牟田稔インタビュー掲載
1 23-12	「原爆の刻印」背に半世紀 - 「きのこ会」の満50歳 -	19960800	大牟田稔	仮綴 (A4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1部	
1 23-13	[胎内被爆小頭症患者の50歳誕生会に関する新聞記事]	19960321 ～ 19960324		B4E 洋紙5枚、コピー	同伴5枚あり

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	23-14-1 [被爆者援護および被爆小頭症患者援護に関する新聞記事切り抜き]	19750101 ～ 19830720		仮綴(切り抜き、クリップどめ)3部、切り抜き22枚、ブランケット判新聞4枚	
1	23-14-2 [坂本晃ちゃん死亡記事]	19790329		切り抜き2枚	1-23-14-1に挟み込み
1	23-14-5 ドキュメント被爆者たちの37年を追う・息子よ、娘たちよ私たちの“戦争”はまだ終わっていない!	19821125		B5わら半紙3枚、活版	1-23-14-1に挟み込み
8	4 [八月の沈黙]	[19700000]	大牟田稔	仮綴(A4E洋紙、コピー、ホッチキスどめ)2部	同伴2部あり
8	24 <反原爆思想>を求めてー胎内被爆小頭症と歩いた10年	19760000	大牟田稔	仮綴(B5E洋紙、コピー、クリップどめ)1部	『日本の原爆文学14』『焼津、ビキニ、そして』の部分コピー
8	34 [封筒]	[19820612]	そよ風のように街に出よう→大牟田稔	封筒1枚	内容は8-34-1～2
8	34-1 そよ風のように街に出よう季刊11号	19820610	そよ風のように街に出よう編集部	冊子1部、B5罫紙2枚、青ペン書	小林敏昭「原爆小頭症の娘、なるみ」収録、添え状、チラシ等8枚挟み込み
8	34-2 原爆小頭症の娘、なるみ	19820610	小林敏昭	仮綴(B4洋紙、コピー、クリップどめ)1部	『そよ風のように街に出よう』季刊11号、1982年、所収。裏面にメモあり
11	1 [新聞切り抜き]	00000000		B4洋紙2枚、B4E洋紙1枚、B5洋紙1枚、コピー、B5原稿用紙1枚、黒ペン書	1991年3月18日付「天風録」(きのご会関係記事)あり。/年未詳6月13日付「胎内被爆者の請求却下」の記事あり。/残暑見舞い原稿(長岡氏会長辞任の関係の内容)あり。

⑬写真・映像

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1	24-1 [賀村春男写真]	00000000		11×16cm写真7枚、11×18cm写真4枚、21×25cm写真4枚	写真裏面に書込あり
1	24-2 [山崎睦子写真]	00000000		11×16cm写真7枚、11×18cm写真4枚、21×25cm写真4枚	写真裏面に書込あり
1	24-3 [田中敏子写真]	00000000		11×16cm写真6枚、13×20cm写真17枚、21×25cm写真6枚	写真裏面に書込あり
1	24-4 [大野寮・久保美智子写真]	00000000		11×16cm写真1枚、13×20cm写真8枚	写真裏面に書込あり
1	24-5 [岡田佳一写真]	00000000		12×8cm写真5枚、20.5×25cm写真1枚	写真裏面に書込あり。大牟田稔の写真あり。
1	24-6 [畠中百合子写真]	00000000		11×16cm写真5枚、11.5×18cm写真9枚、13×18cm写真4枚、20.5×25cm写真4枚	写真裏面に書込あり。大牟田稔の写真あり。
1	24-7 [大牟田稔写真]	00000000		11.5×17.5写真2枚	写真裏面に書込あり

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1 24-8	[きのこ会写真]	00000000		封筒2枚、11×18cm 写真1枚、16×24.5cm 写真1枚、13×18cm 写真2枚、12.5×17cm 写真1枚、12×21cm 写真1枚、20×25cm 写真1枚、25.5×30.5cm 写真1枚	13.8×18cm 写真同伴2部あり 写真裏面に書込あり 大牟田稔宛メモ書きあり
1 24-9	[きのこ会集会写真]	00000000		封筒1枚、12×17cm 写真15枚、9×11cm ポラロイド写真1枚	12×17cm 写真同伴3、2、2部あり。ネガあり。
1 24-10	[岡田親子の写真]	19960625		封筒1枚、10×15cm 写真15枚	平尾直政（中国放送） 発大牟田稔宛の封筒に所収
1 24-11	[胎内被爆小頭症誕生25周年記念の集い・きのこ会30才誕生祝賀会写真]			封筒2枚、10.5×17cm 写真4枚	同伴2部あり
1 24-12	[きのこ会関係写真]	00000000		12×16.5cm 写真1枚、12×17cm 写真5枚、11×18cm 写真5枚、11×19cm 写真3枚、12.5×19cm 写真2枚、20×25cm 写真2枚	粘着、折れ曲がり
1 24-13	[きのこ会関係写真縮刷版]	19790803		18.5×22.5cm 写真1枚	
1 24-14	[きのこ会関係写真]	00000000		封筒4枚、34×22.5cm 原稿用紙1枚、マジック書、17×24.5cm 写真11枚、11×16cm 写真26枚	菅沼清美発大牟田稔宛 封筒に所収、添え状あり
2 2-1	[写真]	00000000		8×12cm 写真4枚、11×15cm 写真4枚、12×16.5cm 写真5枚	13枚中5枚裏に書き込み有り、「中国放送」の封筒に所収
11 5	[山口放送「ドキュメント'79 聞こえるよ母さんの声が・・・～原爆の子・百合子～」使用写真]	[19790000]	[山口放送]	16.6×12cm 写真2枚	山口放送「[磯野恭子宛大牟田稔書簡]」（6-49） 封入封筒に同封されていたもの
12 8	ETV特集 モリチョウさんを探して-ある原爆小頭症児の空白の生涯-	19930831	NHK	VHSビデオテープ1本	

⑭冊子・パンフレット

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1 17-2	孫さんに治療と在留を京都市民の会会報9 1977.5	19770500		17cm×12.6cm 申込用紙1枚、B4E わら半紙3枚中折、B5 わら半紙1枚、孔版、封筒1枚、黒ペン書	長岡千鶴野発大牟田稔宛封筒に所収
7 3	胎内被爆小頭症の生活史	00000000	きのこ会	封筒1枚、B5 冊子3冊、活版	小頭症患者とその両親のデータ。同伴3部あり。
7 4	[テレビ番組台本]	00000000	ラジオ中国	B5 冊子1冊、コピー	ラジオ中国「原爆特集・忘れられたヒロシマー原爆小頭児の20年」台本

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
7 5	[テレビ番組台本]	[19700000]		B5 冊子 1 冊、活版	放送用台本『わたしの25年 (No.1)』／島中敬恵「小頭児を持つ母親の願い」収録
7 7	ISDA HIROSHIMA NAGASAKI NEWS No.2	19770618	被爆の実相とその後遺、被爆者の実情に関する国際シンポジウム日本準備委員会→きのこ会長岡千鶴野	封筒 2 枚、B4E 中折 2 枚、活版、B4E 洋紙 1 枚、活版	『ISDA HIROSHIMA NAGASAKI NEWS』No.2、NGO 国際シンポ関係チラシ
7 10	心から笑える日を - 胎内被爆者の生活とその周辺 -	19660727	山下会	21 × 15cm 冊子 1 部	
7 11	Hiroshima		Thomas Bo Pedersen 著 [松井やより監修]	210 × 149cm 冊子 1 部、B5 罫紙 1 枚、コピー、B5 わら半紙 1 枚、黒ペン書き	松井やより発信の送付状およびそれへの返信の挟み込みあり
7 12	胎内被爆児		きのこ会、写真群 1970	B5 冊子 2 部	同伴 2 部あり
9 4-12	'79 NHK ひろしま 原爆特集ハイライト	19790000	NHK 広島 番組広報	B5E 冊子 1 部、活版	
7 13	テレビドキュメンタリー 聞こえるよ母さんの声が… ～原爆の子・百合子～	[19790000]	山口放送	B5 冊子 1 部、B5 洋紙 1 枚、コピー、B5 洋紙 2 枚、黒ペン書き、	受賞記念案内状の挟み込みあり
9 2-6 - 3	YWCA 第 480 号	19910801	日本キリスト教女子青年会	38 × 54cm 洋紙中折 1 枚、活版	
7 16	平和文化 No.111	19940501	(財)広島平和文化センター	封筒 1 枚、B4E 洋紙 2 枚中折、活版	2 枚 1 組きのこ会宛財団法人広島平和文化センター封筒に所収
7 14	被爆 54 周年原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 The 54th Nagasaki Peace Ceremony	19990809	長崎市	封筒 1 枚、A4 冊子 1 部、A4 洋紙 1 枚、コピー、	送付状同封。きのこ会宛長崎市役所封筒に所収。
7 15	「平和宣言」を読む	20000100	広島市・(財)広島平和文化センター	封筒 1 枚、A4 冊子 1 部、A4 洋紙 1 枚、コピー、	送付状同封。きのこ会宛財団法人広島平和文化センター封筒に所収。
12 3	原爆の子、百合子展 その瞬間。母の胎内にいた私	[1981] 0800	創価学会岩国青年部平和委員会	封筒 1 枚、B5 洋紙 3 枚、B5 洋紙 1 枚、黒ペン書き	同一 3 枚。送付状同封。一括して大牟田稔宛中国三封筒に所収。
12 4	ピカの日私は胎内にいた	[19710000]	きのこ会	37.8 × 26.5cm ポスター 1 枚	1971 年夏きのこ会ポスター
7 20	孫さんに治療と在留を 京都市民の会会報 16 号	19780900	京都市民の会	封筒 1 枚、B4E 藁半紙中折 2 枚、孔版	「長野千鶴野」宛封筒入り (三つ折り)。払込票挟み込み。
7 21	孫さんに治療と在留を 京都市民の会会報 18 号	19790100	京都市民の会	封筒 1 枚、B4E 藁半紙中折 3 枚、B5 藁半紙 1 枚、孔版	「きのこ会」宛封筒入り (三つ折り)。払込票挟み込み。

⑮ その他

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
1 23-14-3	[原爆ゆるすまじ歌詞カード]	00000000		12.5cm × 18cm わら半紙 1 枚、活版	1-23-14-1 に挟み込み
8 1-1	原爆に関する資料・文献等の調査について (お願い)	19911203	財団法人広島平和文化センター理事長河合護郎→きのこ会大牟田稔	仮綴 (封筒、B4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	封筒には未使用切手添付
8 1-2-1	原爆死没者慰霊等施設の基本機能	19911216		仮綴 (B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	8-1-1 にクリップどめ

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8	1-2-2 [第1回平和に関するデータベース構築検討委員会資料綴り]	19920828		仮綴 (B5 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	内容: 北山正文に関するメモ、中国新聞記事、検討委員会出席者、理事長挨拶、検討委員会進行次第。8-1-2-1 に挟み込み
8	1-2-3 広島平和文化センターが所有する資料	19920331		B4E 洋紙 1 枚、コピー	8-1-2-1 に挟み込み
8	1-2-4 広島平和記念館が所有する主な資料	00000000		B4E 洋紙 1 枚、コピー	8-1-2-1 に挟み込み
8	1-2-5 「平和に関するデータベース」概念図	00000000		仮綴 (B4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	8-1-2-1 に挟み込み
8	1-2-6 第1回平和に関するデータベース構築検討委員会資料	19920800	(財)広島平和文化センター	仮綴 (B 4 E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	8-1-2-1 に挟み込み
8	2 原爆倒壊校舎脱出中学生の手記	19621017	広島県高等学校長協会	仮綴 (A4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	「全国高等学校長協会普通部会第十二回総会資料」とあり。添え状あり。「飛べない沈黙」添付。8-1-2-1 に挟み込み
8	10 総会報告と分担金のお願い	19780911	'78核兵器完全禁止、被爆者援護世界大会広島実行委員会事務局	封筒 1 枚、B4E 洋紙 1 枚、コピー、13 × 16.8cm 洋紙 1 枚、活版	振り込み用紙同封
8	13 被爆 50 周年原爆犠牲者慰霊平和記念式典	[19950809]	長崎市	封筒 1 枚、A4 冊子 1 部、A4 洋紙 1 枚	添え状あり
8	14 石川道子広島講演会	00000000	ベンジャミン・クレーム招聘西部委員会	封筒 1 枚、A4・23.8 × 16.5 洋紙 2 枚	
8	15 朗読劇この子たちの夏 [ピラ]	19940000	地人会	封筒 1 枚、B5 洋紙 6 枚	同件 5 枚。添え状あり。
8	26 '95 年以降の“原爆関係”論文リスト	00000000	[大牟田稔]	仮綴 (A4 (財) 広島平和文化センター罫紙、黒ペン書き、A4E 洋紙、コピー、クリップどめ) 1 部	大牟田稔「原爆の刻印」背に半世紀-「きのこ会」の満 50 歳-」添付。電話番号の書かれた付箋あり。
10	14 傷つけられた胎児 Fetuses Injured	00000000		31.2 × 18.2cm 洋紙 1 枚、コピー	広島平和記念資料館東館の展示パネルをコピーしたものか。上部に「No4202 続く原爆被害」とメモ書きあり。日本語、英語表記。
8	27 [クリアファイル]	00000000		クリアファイル 1 部	内容は 8-27-1 ~ 18
8	27-1 [出欠の確認メモ]	00000000	[大牟田稔]	12.5 × 9cm 洋紙 1 枚、青ボールペン書	裏面には電話に関するメモあり
8	27-2 請求書	19960229	溪水社→きのこ会	B6E 洋紙 1 枚、カーボン複写	
8	27-3 [ジョン・ハーシー『ヒロシマ』寄贈関係一件]	19950827	亜国日報社長菅井栄四→広島市交流協会山崎克洋	B4 洋紙 2 枚、コピー、仮綴 (B5E・A4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	内容: 新聞記事コピー、江原武略歴、山崎克洋宛菅井栄四書簡写、山崎克洋宛小田秀樹 FAX 写
8	27-4 パレルモ 日本庭園に響くユパンキの詩ヒロシマ	19950810		B4 洋紙 2 枚、コピー	同件 2 部あり、『らぶらた報知』コピー
8	27-8 [近距離早期胎内被爆症候群認定書]	19951109	厚生大臣 森井忠良	封筒 1 枚、B6E 洋紙 1 枚、カーボン複写、仮綴 (B5・B5E・B4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1 部	別件伝言挟み込み。富田敏春

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8 27-9	見積書	19960229	溪水社→きのこ会	B6E 洋紙1枚、カーボン複写	
8 27-10	[きのこ会会員援護手当状況一覧]	00000000		仮綴(A4E洋紙、コピー・黒ペン書、ホッチキスどめ)1部	
8 27-11	[原爆小頭症に関する小論原稿]	19950526	安佐市民病院 平位剛	B4 洋紙12枚、コピー	広島平和文化センター大牟田稔理事長宛安佐市民病院平位剛FAXコピー。6枚1組。同件2部あり
8 27-14	[原爆小頭症に関する小論]	[19950000]	[安佐市民病院 平位剛]	A4 洋紙3枚	3枚1組
8 27-16	[被爆小頭症状および援護関係書類]	[19950000]	[安佐市民病院 平位剛]	A4 洋紙3枚、コピー	3枚1組 [原爆小頭症に関する小論] で用いたスライド資料カ
8 27-17	[「那覇・広島・長崎 ピース トライアングル サミット」アピール(案)]	19950624	那覇市長 親泊康晴・広島市長 平岡敬・長崎市長 伊藤一長	仮綴(A4E洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部	
8 27-18	那覇・広島・長崎 ピース・トライアングル・サミット-戦後50年の日本・アジア・世界-企画趣意書	[19950000]		A4 洋紙3枚、コピー	
8 30	[封筒]		広島大学原爆放射能医学研究所志水[清]→中国新聞編集局大牟田稔	封筒1枚	内容は8-30-1～12
8 30-1	[封筒]	[19780426]	青山直樹→きのこ会	封筒1枚	8-30-1-1～5を所収
8 30-1-1	[きのこ会宛青山直樹書簡]	19780425	青山直樹→きのこ会	封筒1枚、B5用箋5枚、黒ペン書き	
8 30-1-2	ビキニ事件とマスコミ	19771217	全国心理学学生ゼミナール連合中央事務局	B5 冊子1部	
8 30-1-3-1	[吉本トミエ書簡]	[19771029]	吉本トミエ→長岡千鶴野	封筒1枚、23×18cm 便箋2枚、ボールペン書、12×8.5cm 写真2枚	写真は一括してビニル袋に封入
8 30-1-3-2	きのこ会ご寄付について	19770912	島根県連合婦人会 会長斎藤稲→広島県地域婦人団体連絡協議会	B4E 島根県婦人会館青罫紙1枚、黒ペン書	8-30-1-2-1に同封
8 30-1-3-3	[島根県連合婦人会住所]	00000000		B5 財団法人広島県婦人会館用箋1枚、青ペン書	8-30-1-2-1に同封
8 30-2	[胎内被爆小頭症につき小論原稿]	00000000	[大牟田稔]	B5 中国新聞社用箋2枚、黒ペン書	
8 30-12	[「二枚の認定書-被爆者母娘をめぐる生と死」原稿]	00000000	[大牟田稔]	B4 広島市公文書館原稿用紙3枚・B5 中国新聞社論説委員会原稿用紙2枚・300字詰め中国新聞社原稿用紙14枚、黒ペン書	畠中家と被爆・被爆認定について
8 32	[封筒]	00000000		封筒1枚	黒マジック書にて「原爆」とあり、内容は8-32-1～8-32-18-4
8 32-1	[きのこ会会員に付きメモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 天風録用原稿用紙1枚、鉛筆・黒ペン書	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8 32-2-1	[中国・詳細不明新聞コピー「[核拡散関係記事]」]	19840718		仮綴 (B4・B4 変洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	セロテープ添付部分一部剥離
8 32-2-2	[核ミサイル・核爆弾および安全保障に付きメモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 中国新聞社原稿用紙 3枚、黒ボールペン書	8-32-2-1 に挟み込み
8 32-3	[中国・朝日・読売・日本経済新聞コピー「[核問題関連社説]」一件]	19830801 ～ 19840805		B4 洋紙7枚、コピー	
8 32-4	中国新聞夕刊	19840207		ブランケット判新聞1部	「世界への警句「ノーモア・ヒロシマズ」元UP記者が生みの親」掲載
8 32-5	[読売・詳細不明新聞コピー「核持ち込み関連記事一件」]	19841126		A3・B5 変洋紙2枚、コピー	読売新聞掲載、「核持ち込み」に関する記事
8 32-6	[中国新聞コピー「[広島市史]の在り方」]	19491212		A4 変洋紙切り抜き1枚、湿式コピー	
8 32-7	[中国新聞コピー「社説」一件]	19830806 ～ 19841107		B4 洋紙3枚、コピー	「社説 核廃絶へ市民の輪を広げよう」「社説「有事」の国民被害を問う」「社説 久々の「被爆者」結束を喜ぶ」
8 32-8	いのちこそたから (ヌチドゥタカラ) 丸木俊・丸木位里の世界	19840000		A4 パンフレット中折1枚	
8 32-9	[中国新聞コピー「小頭症と取り組んで」]	19660301	文沢隆一	洋紙切り抜き1枚、コピー	
8 32-10	児童扶養手当の改悪を許さない集会・報告書	19840710	児童扶養手当を18才に引上げる会	B5 冊子1部、A4 洋紙1枚、活版	チラシ「グリーンナムコムンピースキャンプ」挟み込み
8 32-11	「ヒロシマを語る会」趣意書	00000000		仮綴 (B4 洋紙、湿式コピー、ホッチキスどめ) 1部	
8 32-12	[朝日新聞・赤旗コピー「[原水協関連記事一件]」]	19840530 ～ 19840721		B4・B5 洋紙2枚、コピー	
8 32-13	[朝日新聞一面コピー]	19450815		A4 洋紙1枚、コピー	終戦の記事
8 32-14	[蘇れ！水俣 反農薬キャラバン]	00000000	蘇れ！水俣・反農薬キャラバン「水俣」映画上映実行委員会→	B5 洋紙4枚、コピー	同伴4枚
8 32-15	日本における原水爆禁止運動の前提 - 「被爆体験」の検討 -	19820400	宇吹暁	A5 冊子1部	『日本史研究』236号抜刷
8 32-16	[大牟田メモ]	00000000	[大牟田稔]	封筒1枚、黒ボールペン書	「愛する MONADE」とあり
8 32-18	[封筒]	19840124	社会保険広島市民病院相談室塚本→中国新聞社論説委員大牟田稔	封筒1枚	8-32-18-1 ～ 8-32-18-3 を所収
8 32-18-1	[添え状]	[19840124]	全国障害者問題研究会塚本→大牟田稔	B5 社会保険広島市民病院用箋1枚、黒ペン書	
8 32-18-2	[あの夏から 胎内被爆小頭症の娘の父として / 戦争・軍国主義と障害者の人権]	00000000	畠中国三 / 清水寛	仮綴 (A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
8	32-18-3 [全国障害者問題研究会全国大会関係書綴り]	19840800	全国障害者問題研究会	仮綴 (B4E・B5 洋紙、コピー、ホッチキスどめ) 1部	「第18回全国大会 (ヒロシマ) 日程概要」など
11	4 [きのこ会印・新聞切り抜き]	00000000		紙袋1枚、印3個、朱肉1個、切り抜き4枚	「きのこ会長岡千鶴野」・「きのこ会」・「御祝」の印 / 『中国新聞』切り抜き (1984年6月18日付きのこ会関係記事、1985年12月28日付島中敬恵関係記事、1986年2月25日付きのこ会40歳の誕生日を祝う会関係記事、1987年8月14日付山代巴関係記事)
12	1 [きのこ会・劇団世代ポスター一件]	19700000 ～ [19780000]		封筒1枚、B4ポスター10枚、B3ポスター3枚、B版変ポスター1枚、A4洋紙1枚、コピー、13×9.5cmメモ1枚、青ペン書	1970年・1972年夏きのこ会ポスター、劇団世界創立10周年記念公演「原子爆弾」ポスター・案内チラシ、大牟田氏へのメモ。1972年夏きのこ会ポスターは同一10枚、「原子爆弾」B3ポスターは同一3枚。
12	2 [きのこ会関係ポスター一件]	19700000 ～ [19810800]	[きのこ会]	52×37cmポスター1枚、37.8×26.5cmポスター84枚	「原爆の子、百合子展」ポスター (1枚)、1970年夏きのこ会ポスター (1枚)、1971年夏きのこ会ポスター (30枚)、1972年夏きのこ会ポスター (53枚一括)
12	5 [きのこ会会印]	00000000		封筒1枚、印鑑2個、洋紙1枚、朱印、仮綴 (洋紙、ホッチキスどめ) 1部	会印2種。領収証綴り同封
10	20 [雑誌『軍縮問題資料』コピー「原爆の刻印」背に半世紀-「きのこ会」の満50歳-]	19660800	大牟田稔	A4E洋紙3枚、コピー	
9	4-11 DAY DAY 特集：放送のいまそして未来	19790700	NHK 広報室	B3E洋紙4つ折り1枚	
10	15 [セミナー“The Child as a Victim of War” 関連資料一件]	19790720	Shoji Tsutomu	仮綴 (A4洋紙、活版、ホッチキスどめ) 1部、A3E洋紙中折2枚、活版、A5和紙1枚、青ペン書	「[CPCインフォメーション No252]「The Child as a Victim of War」」、[Japan Christian Activity News]、[大牟田稔宛縄田 [宝子] 書簡]。冊子記事コピーと冊子は英語表記。一括して大牟田稔宛縄田宝子封筒に所収。
9	4-17 [封筒]		→大牟田稔	封筒1枚	
9	2-4 平和宣言	19910806	平岡敬	B4E洋紙3枚、コピー	
9	6 平和宣言	19910806	広島市長平岡敬・広島平和文化センター→きのこ会	封筒1枚、22.5×36cm洋紙1枚、活版	広島平和文化センター発きのこ会宛

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10 25	[平成7年平和宣言関連資料一件]	19950806	広島市長 平岡敬	22.7 × 36.4cm 洋紙、活版、A5 洋紙1枚、活版	「平和宣言」(裏面は「核兵器廃絶広島平和都市宣言に関する決議」)、「広島市の平成7年の平和宣言について(ご送付)」。一括してきのこ会宛財団法人広島平和文化センター封筒に所収。
10 1	[埼玉県立川越女子高等学校修学旅行でのきのこ会に関する大牟田稔講演関連資料一件]	00000000		B5 洋紙1枚、B4E 洋紙2枚、コピー、仮綴(B4E 洋紙中折、コピー、ホッチキスどめ)1部	「昭和62年2年生修学旅行日程・活動内容大要」、「詳細不明冊子「11.原爆被害と子供たち」」、「A・GIRL NO7最終号」。書類2F。
10 6	[山口放送「聞こえるよ、母さんの声が・・・」関連資料一件]	00000000	[大牟田稔]	B5 原稿用紙5枚、黒ペン書、B5 藁半紙90枚、黒鉛筆書	「[[聞こえるよ、母さんの声が・・・]感想]」、「[[聞こえるよ、母さんの声が・・・]制作意図・反響等メモ]」。共に宗教の授業で使用した資料カ。
10 4	[創価大学創立25周年新世紀管弦楽団平和公園～戦後50年を迎えて～関連資料一件]	[19950700]	創価大学新世紀管弦楽団担当 樋山浩→きのこ会	封筒1枚、B4E 洋紙1枚、B5 洋紙1枚、B5E 洋紙1枚、コピー、5.6 × 18.2cm 洋紙2枚	「創価大学創立25周年新世紀管弦楽団平和公園～戦後50年を迎えて～御案内」、「ご挨拶」、「創価大学創立25周年新世紀管弦楽団平和公園～戦後50年を迎えて～」、「創価大学創立25周年新世紀管弦楽団平和公園～戦後50年を迎えて～[御招待券]」。招待券は同一2枚。一括してきのこ会宛創価大学新世紀管弦楽団封筒に所収。封筒は未開封だった。
10 16	[自衛隊法改正を求める請願の会関連資料一件]	19950815	油谷良夫	B4E 洋紙1枚、A4E 洋紙2枚、コピー	「戦後50年のふしめを迎えての感想」、「自衛隊法の改正を求める請願」一署名運動ご協力のお願い」。一括して「きのこ会」代表者大牟田稔宛油谷良夫封筒に所収。
10 23-0	[財団法人広島平和文化センター封筒]	00000000		角形3号封筒1枚	
10 23-2	[チェルノブイリ原発事故関連資料一件]	[19960000]	リュボーフィ・コワレフスカヤ	仮綴(B4E 洋紙、コピー、ホッチキスどめ)2部、B4E 洋紙中折2枚、コピー、仮綴(A4 洋紙、コピー、ホッチキスどめ)4部、8.1 × 16.9cm 罫紙2枚、黒ペン書	「基調報告〔特に日本向け〕」、「～著者より～」、「チェルノブイリ原発事故被災者の手記」、「核の惨事被災者の精神的健康状態」、「チェルノブイリ原発事故の規模」、「チェルノブイリの惨事」、「報告書-第1部」、「大牟田稔宛ジュノーの会事務局後藤書簡」

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10 34	[ヒロシマ・ナガサキ市民緊急行動実行委員会関連資料一件]	19981028	広島・長崎市民緊急行動実行委員会結成準備会事務局	封筒1枚、A4洋紙2枚、コピー、仮綴（A4洋紙、コピー）1部、葉書1枚	「広島・長崎市民緊急行動実行委員会発足会のご案内」、「声明（案）」、「[ヒロシマ・ナガサキ市民緊急実行委員会準備会]議事録」、「[実行委員会発足会出欠連絡用]山田順二宛葉書」。葉書は未使用官製葉書。一括して大牟田稔宛広島・長崎市民緊急行動実行委員会結成準備会封筒に所収。
10 36	[広島・長崎市民緊急実行委員会結成準備会開催関連資料一件]	19981002	長崎平和研究所長鎌田定夫・第九条の会ヒロシマ岡本三夫	封筒1枚、A4洋紙2枚、コピー	「広島・長崎市民緊急行動実行委員会結成準備会へのご案内」、「岡本三夫宛梅林宏道書簡」。書簡は配布するための写し。一括して大牟田稔宛岡本三夫封筒に所収。
10 22	[平成11年平和宣言関連資料一件]	19990806	広島市長秋葉忠利	封筒1枚、A4E洋紙1枚、活版、A5E洋紙1枚、活版	「平和宣言」、「広島市の平成11年の平和宣言について（ご送付）」。一括してきのこ会宛財団法人広島平和文化センター封筒に所収。
10 21	[第54回国連総会で核兵器廃絶の諸決議賛成を求める日本政府宛要請関連資料一件]	19990930	原水爆禁止広島県協議会→きのこ会	封筒2枚、B4E洋紙6枚、コピー	書類「日本政府へ国連総会で核兵器廃絶諸決議に、賛成するよう求める署名に御協力を」、「日本政府に国連総会で核兵器廃絶諸決議に賛成するよう求める署名、推進のお願い」、「日本政府が第五十四回国連総会で核兵器廃絶の諸決議に賛成するよう求めます」、「第54回国連総会にあたり核兵器のない21世紀のために日本政府に要請します」、書簡「原水爆禁止広島県境議会封筒」、「第54回国連総会にあたり核兵器のない21世紀のために日本政府に要請します」は同一3枚。一括してきのこ会宛原水爆禁止1999年世界大会封筒に所収。

仮番号	件名	年月日	作成・発信→受信	形態	備考
10 18	[広島修道大学国際シンポジウム「核兵器は廃絶できる—21世紀からのメッセージ—」関連資料一件]	20000000	広島修道大学	封筒1枚、B5洋紙1枚、活版、A4E洋紙1枚、コピー、A4洋紙3枚、コピー、A4洋紙18枚、活版、仮綴(A4洋紙、コピー、ホッチキスどめ)1部、A3E洋紙中折2枚、活版、A2洋紙1枚、活版、	『「核兵器廃絶への新しい道-中堅国家構想」[注文用紙]』、「核のボタンに手をかけた男たち」[書籍カバーコピー]』、「国際政治学科公設10周年記念広島修道大学国際シンポジウム「核兵器は廃絶できる-21世紀からのメッセージ-」<メモ用紙>」、「国際シンポジウムのアンケートのお願い」、「質問用紙」、「国際政治学科公設10周年記念広島修道大学国際シンポジウム 核兵器は廃絶できる-21世紀からのメッセージ-」[リーフレット]』、「核兵器は廃絶できる-21世紀からのメッセージ-」[大判ポスター]』、「核兵器は廃絶できる-21世紀からのメッセージ-」[ポスター]」 「国際政治学科公設10周年記念広島修道大学国際シンポジウム「核兵器は廃絶できる-21世紀からのメッセージ-」<メモ用紙>」は同一2枚、リーフレットは同一2部、ポスターは同一16枚あり一括してきのこ会世話人代表大牟田稔宛広島修道大学封筒に所収

⑩書籍

仮番号	タイトル	著者	出版社	発行年月日	形態	備考
13 2	原爆が遺した子ら	きのこ会	溪水社	19770801	21.2 × 15.1cm、197p	初版。
13 3	原爆が遺した子ら	きのこ会	溪水社	19840710	21.2 × 15.1cm、197p	第2刷。初版は19770801。
13 4	いのちの証 I .原爆被害と被爆者	長崎原爆被災者協議会編	長崎原爆被災者協議会	19950809	21 × 15cm、293p	初版。兼井亨葬儀の案内と送付状の挟み込みあり。
13 6	原爆の子どもたち 長崎、広島、マーシャル諸島でのあるアメリカ人医師の回顧録	ジェームス・N・ヤマザキ、ルイス・B・フレミング著 青木克憲、青木久男訳	ブレーン出版	19960725	21 × 15cm、187p	

仮番号	タイトル	著者	出版社	発行年月日	形態	備考	
13	5	続ヒロシマの女たち	広島女性史研究会編著	ドメス出版	19980411	19.5 × 13.5cm、190p	初版。「続・ヒロシマの女たち」出版記念会の案内ハガキ、四国五郎のいとこの戦死に関する書籍コピーの挟み込みあり。
13	1	医療福祉学概論	佐藤俊一、竹内一夫編	川島書店	19990615	21 × 15cm、191p	初版。

⑰雑誌

仮番号	タイトル	著者	出版社	発行年月日	形態	備考	
13	7	きのこ会会報 No.1	きのこ会		19660600	21.5 × 15.9cm、68p	同件4部。うち1部にはきのこ会趣意書1枚、「平和な朝をベトナムに」ポストカード2枚、封筒1枚挟み込み。
13	8	きのこ会会報 No.2	きのこ会		19661200	21.5 × 15.9cm、60p	2部あり。葉書2枚挟み込み。うち1部はコピー。
13	9	きのこ会会報 No.3	きのこ会		19670600	21.5 × 15.7cm、76p	同件2部。うち1部にはきのこ会趣意書1枚挟み込み。
13	10	きのこ会会報 No.4	きのこ会		19680300	21.7 × 15.6cm、39p	同件5部。
13	11	きのこ会会報 No.5	[きのこ会]		19690000	25.4 × 18cm、134p	同件8部。
13	12	きのこ会会報 No.6	[きのこ会]		19701105	25.2 × 17.8cm、16p	同件4部。
13	13	きのこ会会報 No.7	[きのこ会]		19710000	25.2 × 17.7cm、57p	同件3部。
13	14	きのこ会会報 No.8	きのこ会		19720801	25.5 × 17.8cm、45p	同件4部。
13	15	きのこ会会報 No.9	きのこ会事務局		19730801	25.5 × 18cm、128p	同件5部。
13	16	きのこ会会報 No.10	きのこ会事務局		19770627	25.7 × 18.2cm、19p	同件6部。
14	1	きのこ会会報 No.11	きのこ会事務局		19790723	25.7 × 18.2cm、66p	同件18部。ゲラ1部あり。
14	2	きのこ会会報 No.12	きのこ会事務局		19800728	25.7 × 18.2cm、58p	同件9部。
14	4	テレビモニター週報	ラジオ中国 企画局調査部		19650806	24.8 × 17.9cm、22p	
14	5	広島通信 3			19661000	21.3 × 15.4cm、12p	
14	3	群生 第二号	片山武昭編 群生グループ発行		19740207	21.3 × 15.6cm、34p	畠中国三「あやまちは再び」収録。
14	6	ヒロシマ・ナガサキの証言 秋・第8号	[広島・長崎の証言の会発行 秋月辰一朗・庄野直美編集発行]	汐文社	19831030	21 × 14.7cm、132p	

附録(2) 沖縄被爆者関係史料目録(大牟田稔関係文書)

解 題

小 池 聖 一

本史料群は、故大牟田稔氏の沖縄在住被爆者に関する取材（1964年8月9日～同年8月24日）に関する資料群である。

全体は、(1) 事前の調査資料、(2) 取材ノート・取材関係、(3) 取材後の関係資料、(4) その他、の四点に分類することができる。最大の特徴は、取材ノートを中核として、調査取材に関する全てが基本的に同一資料群としてまとめられている点にある。

具体的に、上記の四点にそって資料の内容について述べることにしたい。なお、本目録は、原秩序にもとづき、作成されたものであるため、沖縄在住被爆者関係以外の資料も含まれている。

1. 事前調査資料

事前調査資料は、①取材関係書類、②取材依頼関係の書簡、の二つに細分類できる。

- ①取材関係書類：基礎となった故大牟田稔氏が取材のきっかけとなったのは、1962年3月9日の帆足計日本社会党代議士（社会党沖縄対策副委員長）の本会議における代表質問とされている。その帆足計による（沖縄00801）「沖縄復帰への具体的方針」（『月刊社会党』第84号、1964年6月）に掲載されたもの、（沖縄00500）「国際沖縄デーのために」が本資料群に所収されている。また、沖縄人権協会による（沖縄01606）「被選挙権剥奪による基本権侵害 本土への渡航制限に関する意見書」および（沖縄01607）「提訴事件の概要」、（沖縄01605）「わだつみのこえ No.19」も、作成時期が調査前であることから、事前に収集した調査書類であると考えられる。しかし、（沖縄01606）「被選挙権剥奪による基本権侵害 本土への渡航制限に関する意見書」・（沖縄01607）「提訴事件の概要」、および（沖縄01605）「わだつみのこえ No.19」については、大牟田氏が参考として閲覧した形跡がない。このため、これらの資料については、事後ないし、取材の過程で入手したとも考えられる。

なお、（沖縄00500）「国際沖縄デーのために」は、日本語と英語が併記された冊子であり、祖国復帰を願う当時の沖縄を髣髴とされる資料である。

- ②取材依頼関係の書簡：（沖縄01900）「大牟田稔宛大島修書簡」、（沖縄01612）「大牟田稔宛大島修書簡」および（沖縄00300）「大牟田稔宛安仁屋宗英書簡」が所収されている。

1964年2月17日付の（沖縄01612）「大牟田稔宛大島修書簡」は、大牟田稔氏からの調査協力依頼に対する回答に相当するものである。このなかで、1964年1月末までの段階で68名の沖縄在住被爆者が確認されているものの（原爆症による死者は1名のみ確認）、「米軍関係の仕事に従事している人や政府や米軍政府と特別の関係のある人の中でそれを申し出れば軍や政府から目をつけられはしないかということでも申し出ない人がいるようです」と「特殊事情下にあるところだけに本土のようにスムーズにはいきません」と述べられている。さらに、沖縄原水協として、①琉球政府をつきあげる、②本土政府に要請する、③本土政府に要請する、④被爆者の団体をつくる、⑤救護大会をもつ、の五点をあげ、①②③を「スミ」としている。また、数度の要請により、原爆医療法が適用可能となったことが述べられている。

る。本書簡からは、大牟田氏からの連絡により、沖縄被爆者への関心と、これに対する救護が開始されたことが理解できる。また、1964年6月29日付の（沖縄00200）「大牟田稔宛大島修書簡」からは、沖縄の被爆者問題について中国新聞が取り上げることを期待していることが述べられている。また、取材受け入れにあたってのやり取りとともに、「①七月三十日頃までには被爆者の組織もできますので（十二日に結成の予定です。）取材は可能だと思います」と取材にあわせるように沖縄の被爆者組織が結成されたことが理解できる。安仁屋宗英書簡は、渡航「表の理由」である広島東洋カープ安仁屋宗八投手の父から、取材にあたっての身元引受を承諾する内容の手紙である。

2. 取材ノート・取材関係

取材ノート・取材関係は、①取材ノート、②取材旅行関係書類、③写真、の三つに細分類できる。

①取材ノート：取材ノートは、（沖縄01501）「取材ノート」（沖縄02300）「取材ノート」の二冊を所収している。

（沖縄01501）「取材ノート」では、1964年8月10日～同年8月23日の沖縄在住被爆者取材の行動記録とメモ、および9月8日の東京オリンピック関係のメモである。（沖縄02300）「取材ノート」は、沖縄取材後のノートで、沖縄取材を連載するにあたってのタイトル案・項目案、池田勇人首相の病状に関する情報とのメモを所収している。なお、（沖縄02300）「取材ノート」で大牟田氏がメモした沖縄在住被爆者に関する記事のタイトル案は、「孤独な被爆者たち」であった。

1964年8月31日から同年9月11日まで11回にわたって連載された中国新聞記事「沖縄の被爆者たち 現地ルポ」（沖縄01700）と比較すると、取材ノートの記載量は少ない。他に、取材ノートか、取材過程での原稿等があったと考えられる。

②取材旅行関係書類：（沖縄00400）東京都総務局渉外部管理課渡航係編「沖縄渡航のしおり」、（沖縄01300）「渡航申請につき電報メモ」等の渡航申請関係の書類。（沖縄01200）「日本航空国内線時刻表」、宿泊先であった（沖縄01000）「沖縄球陽館観光ホテル [パンフレット]」、および、調査に必要な、地図（沖縄01101）「新日本分県地図 沖縄全図」、（沖縄01300）「沖縄米軍基地配置図」、（沖縄02200）「沖縄全図」等が含まれている。また、沖縄在住の被爆者に関する情報資料としては、（沖縄01505）「沖縄在住被爆者一覧表」、（沖縄01506）「沖縄在住被爆者所在図」がある。

（沖縄00400）東京都総務局渉外部管理課渡航係編「沖縄渡航のしおり」では、「1. 南西諸島へ渡航するには、外国へ渡航することは異なり、内閣総理大臣が発給した身分証明書と琉球列島米国民政府が発給した入域許可証が必要です」とされ、「2. 外国への渡航する時ととなり、外務大臣の発行した旅券を用いないのは、この地域が「日本国との平和条約」により、領域は日本のものでありながら、米国の立法、司法および行政権のもとにある特別地域であるためです」とされている。

（沖縄01505）「沖縄在住被爆者一覧表」は、被爆当時の住所、症状などを一覧表にしたものであり、64名が記載されている。これに基づき作成されたものが、大牟田稔氏によって作成された（沖縄01506）「沖縄在住被爆者所在図」である。

（沖縄01300）「沖縄米軍基地配置図」については、1964年4月作成沖縄連資料とあり、また、原水爆禁止沖縄県協議会の判があるため、沖縄取材中に入手したものと考えられる。同様に、（沖縄02200）「沖縄全図」および（沖縄01900）「ご贈答好適品のしおり」についても、この沖縄取材の過程で入手したものと考えられる。他に取材中、備忘のため作成されたと考えられるものに、（沖縄01503）「沖縄渡航経費に関するメモ」がある。

③写真：（沖縄01502）「写真」および（沖縄01601）「縮小版写真」、（沖縄01602）「ネガ」は、沖縄在住被爆者取材中の写真である。

3. 取材後の関係資料

取材後の関係資料としては、さらに、①中国新聞記事、②取材経費関係、③沖縄被爆者関係書類、の3つに分類できる。

①中国新聞記事：(沖縄 01700)「中国新聞コピー「沖縄の被爆者たち 現地ルポ」①～⑩」が、大牟田氏の沖縄在住被爆者取材の成果であり、1964年8月31日から同年9月11日まで11回にわたって連載された。また、この取材を大牟田氏は、「沖縄の被爆者たち」山代巴編『この世界の片隅で』（岩波新書、1965年）としてまとめている。

②取材経費関係：(沖縄 01509)「沖縄取材費精算」等が所収されている。

③沖縄被爆者関係書類：大牟田稔氏の取材が契機の一つとなり、沖縄被爆者に関する取材以後、作成された書類である。

沖縄在住被爆者救援の会による(沖縄 00600)「平和はみんなの願い」は、琉球政府行政主席松岡正保のあいさつもあるもので、原爆症の概要と若干の手記が掲載されている。他に、沖縄県被爆者連盟による(沖縄 00700)「沖縄在住原子爆弾被害者名簿」、(沖縄 00101)「沖縄在住原子爆弾被害」、(沖縄 01500)「沖縄原子爆弾被害者連盟第2回定期総会」、(沖縄 01800)「沖縄在住原爆被爆者の救援について要請」がある。

このうち、(沖縄 00700)「沖縄在住原子爆弾被害者名簿」は、1965年の第一回検診の際の名簿であり、172名が掲載されている。この検診に基づき、1965年8月12日に沖縄在住原子爆弾被害者聯盟理事長金城秀一から内閣総理大臣佐藤栄作に提出されたのが(沖縄 01800)「沖縄在住原爆被爆者の救援について要請」である。

また、随分と後年となるが、コピーして作られた(沖縄 01000)「年表「沖縄の被爆者」('45～'81)」も同封されている。

4. その他

大牟田稔氏による取材ノート、各種原稿と雑書類であり、沖縄在住被爆者取材とは関係のないものであるが、原秩序において一緒にされていたものである。具体的に、①取材ノート・メモ、②大牟田稔原稿、③書簡等、④雑、の四つに分類できる。

①取材ノート・メモ：(沖縄 00901)「沖縄取材ノート」は、ノートには、「沖縄取材ノート」と鉛筆書がなされているが、内容は沖縄における取材についてではない。1962年7月17日から19日にかけての広島在住被爆者3名からの聞き取りと、1962年10月26日に湯河原新聞協会寮で行われた「新聞研究中央集会」および1963年1月23日「労使懇談会」についての詳細なメモである。また、メモ・(沖縄 00905)「韓国・皇氏（花郎会委員）の話・その他メモ」は、簡単な内容である。

②大牟田稔原稿：(沖縄 00902)「胎内被爆の小頭症を見守って—原爆の町・広島の片隅で— [原稿]」、(沖縄 00306)「広島における被爆問題の現況につき原稿」、新聞紙面用の入稿原稿である(沖縄 01608)「原爆小頭症関係新聞記事原稿」がある。

③書簡等：(沖縄 01102)「大牟田稔宛竹西憲子葉書」は、取材結果の記事送付をもとめる葉書である。(沖縄 01611)「大牟田稔宛河合堯書簡」(沖縄 01613)「大牟田稔宛唐島玲子葉書」は礼状。(沖縄 01614)「大牟田稔宛大牟田章葉書」は近況報告である。

④雑：東京支社在勤中の書類である(沖縄 01504)「火旺会各社重点取材一覧表」、(沖縄 01507)「『ウエストサイド物語』一行の来日、記者会見のお知らせ」等、および被爆関係として(沖縄 00102)「『みんなのヒロシマ』発刊のお知らせ」、(沖縄 01609)「原爆関係文献目録 その一 —中国新聞社資料室収集分—」

が所収されている。(沖縄 01504)「火旺会各社重点取材一覧表」は、東京オリンピックにあたって地方新聞各社の重点取材種目を一覧表にしたものである。また、1960年に起きた強盗殺人事件・丸正事件にあたり冤罪(在日韓国人に対する偏見にもとづく)とする(沖縄 01810)「丸正事件ニュース」も所収されている。

他には(沖縄 01604)「RCC フェスティバル」等がある。(沖縄 00903)「書状原稿」は多地氏への返信であり、「地方文化」とは何か、について鉛筆書で推敲したものである。有給休暇を認める通知(沖縄 00304)「有給休暇について通知」は、昭和 38 年度(1963 年)の有給休暇日数を知らせるものであるが、一日も消化されていない。

以上、大牟田稔関係文書沖縄被爆者関係について、四つに分類した。本資料群には、東京支社在勤中であったことから、東京オリンピック関係の資料等、当該期に大牟田氏が行っていた仕事・原稿・メモが混在している。しかし、基本的に、沖縄在住被爆者の調査に関する資料は、一通り揃っているとみてよいだろう。

事前調査→取材→原稿→記事

本資料群は、新聞記者の仕事の流れを明らかにしてくれる。そして、大牟田氏の取材は、結果としてルポルタージュとしても完成度の高いものとなった(大牟田稔「沖縄の被爆者たち」山代巴編『この世界の片隅で』岩波新書、1965 年)。そして、何よりも、この大牟田稔氏の取材が、沖縄在住の被爆者に光をあたる一つの契機となったことが本資料群から理解することができるのである。

凡 例

1. 本目録は、故大牟田稔氏が沖縄在住の被爆者を取材する際に収集・作成した文書の目録である。
2. 本目録に採録した史料の中には、国籍・職業・身体・性別等による差別的表現・記述や、プライバシーを侵害する可能性のある記述がある。しかし、歴史的事実を正確に記録し、かつ科学的な歴史研究を推進することによって、基本的人権の擁護を図ることを目的として採録した。史料の利用に当たっては、この趣旨を理解された上で調査・研究に役立てることをお願いしたい。

3. 文書の目録の項目は、次の通りである。

(1)整理番号

解題で紹介したとおり、本目録では、原文書の状態を反映するように目録番号を附した。目録番号の階層は以下の通りである。

(例) 001 00
文書番号 附属文書・別紙

(2)件名

表題や文書名をとり、無いものに関しては仮題を付して [] 書きとした。書簡の場合には[発信者名+書簡]と記した。

(3)年月日

西暦の 8 桁で入力した。不明のものについて「00」で表記した。

(4)作成・発信→受信

文書の作成者・発信者と受信者とを「→」を用いて記す。推定によるものは〔 〕書きとした。

(5)形態

基本的に用紙の大きさ（B4・A4・○×○ cm 等）、紙質（洋紙・わら半紙等）、数量、記述の方法（黒ペン書、コピー等）を可能な限り収録した。また、まとまりのあるものについては、「仮綴」等と表記し（ ）のなかに用紙の大きさ、紙質、記述の方法、綴りの方法（クリップどめ、ホッチキスどめ等）を採録した。

(6)備考

書き込み等、他の項目で採録できなかった事項のうち、文書の性格を理解する上で必要と思われるものを採録した。

沖縄被爆者関係史料目録

整理番号	件名	作成年月日	作成（発信→受信）	形態	数量	備考
000100	[渡航申請につき電報メモ]	00000000		B5 わら半紙 1 枚、黒ボールペン書	1	
000200	[大島修書簡]	[1964] 0629	大島修→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 便箋 2 枚、青ボールペン書	2	封書、大牟田稔の沖縄取材について書状
000300	[安仁屋宗英書簡]	19640707	安仁屋宗英→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 洋紙 2 枚、青ボールペン書	2	封書、大牟田稔の沖縄取材について書状
000400	沖縄渡航のしおり	00000000	東京都総務局渉外部管理課渡航係	B5 冊子 1 部	1	
000500	国際沖縄デーのために	00000000	帆足計	B6 冊子 1 部	1	
000600	平和はみんなの願い	19671120	沖縄在住被爆者救援の会	B6 洋紙 2 枚、冊子	2	同一 2 冊。
000700	沖縄在住原子爆弾被害者名簿 一九六五年第一回検診名簿一七二名	19651001	沖縄県被爆者連盟	仮綴り（B5 洋紙、湿式コピー、ホッチキスどめ）1 部	1	「『みんなのヒロシマ』発刊のお知らせ」挟み込み。
000801	沖縄祖国復帰への具体的方針	00000000	帆足計	A5 冊子 1 部、活版	1	
000802	[新聞記事切り抜き]	19500000		切り抜き 1 枚	1	00000801 に挟み込み、「秋の星座」『西日本新聞』掲載。藤田良雄「北十字の白鳥座」、村山定男「九月十二日に日食」。
000901	沖縄取材ノート	00000000	[大牟田稔]	A5 ノート 1 部、鉛筆・黒ボールペン・青ペン書	1	新聞研究中央集会・労使懇談会に関するメモあり
000902	胎内被爆の小頭症を見守って－原爆の町・広島 <small>の片隅で</small> － [原稿]	00000000	大牟田稔	B5 岩波書店原稿用紙 13 枚、青ペン・鉛筆書	13	右上に頁番号あり、55 頁のうち 13 枚のみ、00000901 に挟み込み
000903	[書状原稿]	00000000	[大牟田稔]	23 × 18cm 便箋 3 枚、鉛筆書	3	田地映一宛、内容は地方文化について、00000901 に挟み込み
000904	[有給休暇について通知]	00000000	労務部長→大牟田稔	B5 わら半紙 1 枚、孔版	1	00000901 に挟み込み
000905	[韓国・皇氏（花郎会委員）の話・その他メモ]	00000000	[大牟田稔]	B5 中国新聞社用箋 1 枚、鉛筆書	1	00000901 に挟み込み
000906	[広島における被爆問題の現況につき原稿]	00000000	[大牟田稔]	B4 原稿用紙、8 枚、鉛筆書	8	00000901 に挟み込み
000907	[映画いぬチケット]	00000000		封筒 1 枚、チケット 1 枚	1	00000901 に挟み込み
000908	[原水禁などにつきメモ]	00000000	[大牟田稔]	B6 中国新聞原稿用紙 1 枚、鉛筆書	1	00000901 に挟み込み

整理番号	件名	作成年月日	作成 (発信→受信)	形態	数量	備考
001000	年表「沖縄の被爆者」(45～'81)	00000000		B4 洋紙中折 2 枚、コピー	2	福地暁昭編著『沖縄の被爆者』(1981年、沖縄被爆協)に書き込み、裏面にメモ書きあり
001101	新日本分県地図 沖縄全図	00000000	日本出版株式会社	54 × 36cm 洋紙 1 枚	1	
001102	[竹西憲子葉書]	[1964] 0715	竹西憲子→大牟田稔	葉書 1 枚、青ペン書	1	00001101 に挟み込み
001200	日本航空国内線時刻表	19640000	日本航空	10 × 37cm 洋紙六折 1 枚	1	
001300	沖縄米軍基地配置図	19640400	原水爆禁止沖縄県協議会	B3 洋紙 1 枚	1	
001400	沖縄原子爆弾被害者連盟第 2 回定期総会	19650828		仮綴り (B5 洋紙、孔版、ホッチキスどめ) 1 部	1	左上に「資料」の印あり
001501	[取材ノート]	00000000		A5 中国新聞社ノート 1 部、鉛筆・黒ボールペン・青ペン書	1	内容：沖縄取材、東京五輪
001502	[写真]	00000000		12 × 16.5cm 写真 4 枚、13 × 18cm 写真 1 枚	5	00001501 に挟み込み
001503	[沖縄渡航経費に関するメモ]	00000000		B5 中国新聞社東京支社用箋 2 枚、鉛筆書	2	00001501 に挟み込み
001504	[火旺会各社重点取材一覧表]	00000000		A4 洋紙 1 枚、青焼き	1	00001501 に挟み込み
001505	[沖縄在住被爆者一覧表]	00000000		仮綴り (20 × 33cm 洋紙、孔版、ホッチキスどめ) 1 部	1	00001501 に挟み込み
001506	[沖縄在住被爆者所在図]	00000000	[大牟田稔]	B5 中部日本新聞社原稿用紙 1 枚、鉛筆・黒ボールペン書	1	00001501 に挟み込み
001507	[ウエストサイド物語] 一行の来日、記者会見のお知らせ	00000000	日生劇場→大牟田稔	封筒 1 枚、B5 洋紙 1 枚、活版、20 × 20cm ビラ 1 枚	1	00001501 に挟み込み
001508	[メモ]	00000000	[大牟田稔]	B6 中国新聞原稿用紙 2 枚、鉛筆書	2	00001501 に挟み込み
001509	沖縄取材費清算	19640000	大牟田稔	B5 中国新聞社用箋 1 枚、黒ペン書	1	00001501 に挟み込み
001510	御勘定明細書	19640811	球陽館→大牟田稔	19 × 13.5cm 洋紙 1 枚、カーボン	1	00001501 に挟み込み
001511	[封筒]	00000000	NORTHWEST ORIENT AIRLINES	14 × 10.7cm 洋紙 1 枚	1	00001501 に挟み込み
001600	[封筒]	00000000		封筒 1 枚	1	黒マジック書にて「65 年前後沖縄ポジほか」「大牟田様」とあり、00001601～000001614 の封筒
001601	[縮小版写真]	00000000		4 × 23cm 写真 8 枚、7.5 × 23cm 写真 1 枚、10 × 23cm 写真 1 枚、15 × 23cm 写真 1 枚、25 × 30cm 写真 6 枚	17	沖縄取材時撮影写真など
001602	[ネガ]	00000000		3.5 × 15cm ネガ 1 枚	1	
001603	[モノレール・電車写真]	00000000		封筒 1 枚、8 × 12cm 写真 1 枚、11 × 15.5cm 写真 2 枚、12 × 16.5cm 写真 4 枚	8	
001604	RCC フェスティバル	00000000		B5 冊子 1 部	1	田地映一・大牟田稔「〈往復書簡〉地方文化について」所収

整理番号	件名	作成年月日	作成(発信→受信)	形態	数量	備考
001605	わだつみのこえ No.19	19631100	日本戦没学生記念会(わだつみ会)	A5冊子1部	1	
001606	被選挙権剥奪による基本権侵害 本土への渡航制限に関する意見書	19630200	沖縄人権協会	B6冊子1部	1	
001607	提訴事件の概要	[19630510]	沖縄人権協会	B5冊子1部	1	
001608	[原爆小頭症関係新聞記事原稿]	00000000		仮綴(B4洋紙・21×44cm洋紙、青焼き、ホッチキスどめ)1部	1	
001609	原爆関係文献目録 その一 中国新聞社資料室収集分一	00000000		仮綴(B4洋紙、青焼き、ホッチキスどめ)1部	1	
001610	丸正事件ニュース	19660410	「丸正事件」後援会→大牟田稔	封筒1枚、B5冊子1部、B6洋紙1枚、葉書1枚	1	「丸正事件」後援会機関誌第1号、大牟田稔宛封筒に所収、「丸正事件」後援会入会申込書、振込用紙同封
001611	[河合堯書簡]	[1966] 0223	角川書店 河合堯→大牟田稔	封筒1枚、B5角川書店原稿用紙2枚、黒ペン書	2	封書、参考書類受取りにつき礼状
001612	[大島修書簡]	[19640217]	沖縄県原水協大島修→大牟田稔	封筒1枚、23×18cm便箋6枚、黒ペン書	6	封書、沖縄の被爆者問題について書状
001613	[唐島玲子葉書]	[1966] 0303	鹿島玲子→大牟田稔	葉書1枚、黒ペン書	1	写真受取りにつき礼状
001614	[大牟田章葉書]	[1966] 0212	大牟田章→大牟田稔・郁子	葉書1枚、黒ペン書	1	写真の送付および近況報告
001700	[中国新聞コピー「沖縄の被爆者たち 現地ルポ」①～⑪]	19640911	大牟田稔	A4洋紙1枚、仮綴(クリップどめ)	1	コピー。⑨は同一3枚あり。
001800	沖縄在住原爆被爆者の救援について要請	19650812	沖縄在住原子爆弾被害者連盟理事長 金城秀一→佐藤栄作	B5洋紙1枚、仮綴(ホチキスどめ)	1	コピー。
001900	ご贈答好適品のしおり	19640000	リウボウ	20×14cm冊子1部	1	
002000	旅あんない	00000000	沖縄エアサービス	21.5×30cm洋紙三折1枚	1	
002100	沖縄球陽館観光ホテル [パンフレット]	00000000	球陽館観光ホテル	24×37.5cm洋紙四折1枚、24.5×18cm洋紙中折1枚	2	
002200	沖縄全図	00000000	沖縄観光協会	42×30.5cm洋紙1枚	1	
002300	[取材ノート]	00000000		A6中国新聞社ノート1部、鉛筆・青ペン書	1	内容：沖縄取材、池田の症状、東中との話し合い等

附録(3) 韓国人・朝鮮人被爆者問題関係新聞記事一覧 目録 (平岡敬関係文書)

凡 例

1. 本目録には、「平岡敬関係文書」所収の新聞記事切り抜きのうち、『中国新聞』、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』のものを採録した。なお、朝鮮半島の政情関係など被爆問題に直接関係ない記事は適宜除外した。
2. 本目録には、①年月日、②社名・掲載面、③扱い、④見出し、⑤備考、⑥整理番号を記載した。各項目の説明は、以下の通り。
 - ①年月日は西暦表記とした。原文書に年月日の記載がないものは、可能な限り筆者が調べて記載した。
 - ②社名・掲載面には、新聞社名、朝刊・夕刊の別、掲載紙面を分かる範囲で記載した。たとえば、「中国2」とあるのは、『中国新聞』の第2面に掲載されていたことを示す。また、「広島」は広島県版、「社会」は社会面への掲載を示す。
 - ③扱いには、記事の段数と写真の有無を掲載した。段数は5行以上を1段と数えた。見出しや写真部分については見なしで数えた。また、写真については、○囲みで顔写真しか掲載していないものを除外した。なお、人名でJISコードにない漢字は、カタカナ表記した。
 - ④見出しは、各記事の見出しを記載した。縦・横の採録の順番については、筆者が適宜判断して決めた。
 - ⑤備考は、その他記事を理解する上で必要と思われることを記載した。
 - ⑥整理番号は、広島大学文書館編『平岡敬関係文書目録 (韓国人・朝鮮人被爆者問題関係史料)』IPSHU 研究報告シリーズ No.34 (広島大学平和科学研究センター、平成17年)の番号を記載した。

『中国新聞』掲載記事一覧

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19641106	中国	4段写真	原爆手帳で初の検診、`五輪、で来日の被爆韓国人、心配な旅券の期限切れ、18年ぶり夫とも再会、広島	コピー	HT0900502
19650514	中国	4段	在韓被爆者救え、広島の韓国人22日代表が本国へ	コピー	HT0900502
19650729	中国朝社	7段写真	救いの手待つ韓国の原爆症患者、被爆後帰国の五千人、奇形・精薄児も出産	7月28日夕刊にも同記事掲載	HT0400400
19651203	中国	7段写真	隣の国韓国⑨、ヒロシマの傷あと、検診など夢物語り、広島から救援の声を	執筆：平岡本社特派員、『韓国の被爆者救援に関する報道』（中国新聞社、私家版、発行年不明）所収。以下、同書を『救援報道』と略。	HT0500100
19651204	中国	7段写真	隣の国韓国⑩、二重のケロイド、治療待つ六百人、`人間悲惨、に共感を	執筆：平岡本社特派員、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19660728	中国13	7段写真	広島の訴え⑨、原爆スラム、政治に見放されて、窓のある家に住みたい	特集記事	HT0400100
19670730	中国15	7段写真	原爆スラム⑤、「同居した朝鮮人、何を好き好んで……」、病床に怒りと涙	特集記事	HT0400200
19671018	中国	3段	会いたい三篠小の友、韓国人の尹炳一さん、剣道大会で来日広島へ		HT0400200
19671019	中国3	3段写真	【広島のお宿】国際社会人剣道で優勝した尹炳一さん、22年ぶりの故郷、日本恋しさで腕みがく		HT0400200
19671212	中国朝社	5段	朝鮮人被爆者、初の実態調査、広島など八都道府県で、原水協生活状況にもメス		HT0400200、HT0900500
19671226	中国夕社	6段写真	韓国で264人目の原爆犠牲者、治療・援護法もなく、韓国日報一女性の死を訴える		HT0400200
19680125	中国4	5段写真	広島のお嬢さんありがとう、韓国の被爆者から礼状、「善意は平和のきずな」、広島女学院高校生実を結んだ贈り物		HT0400300
19680803	中国	1段	【天風録】〔核禁会議と韓国人被爆者問題について〕	コラム欄、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19680804	中国朝社	6段写真	忘れられた被爆者①、韓国からの訴え、青春を返せ、憎しみと苦しみと、原爆症と貧困の谷間で	特集記事、平岡記者	HT0400400
19680805	中国朝社	6段写真	忘れられた被爆者②、韓国からの訴え、私を実験台に、忍び寄る死の恐怖、実数さえつかめぬ現状	特集記事、平岡記者	HT0400400
19680806	中国朝社	6段写真	忘れられた被爆者③、韓国からの訴え、自立の芽、救援を求め声を結集、協会をよりどころに	特集記事、平岡記者	HT0400400
19680813	中国朝社	3段	被爆の夫救って、韓国の一主婦が広島市へのたより、日本で治療を、精神異常悪化の一方		HT0400400
19681003	中国	6段写真	原爆症治療したさ、山口県阿武町韓国女性が密入国	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681004	中国	3段	被爆密航婦人救おう、山口県被団協、入国許可の要請へ	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681005	中国	5段	密航韓国人事件、「私は孫さんと同級生」、被爆の証人名乗り出る	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681007	中国	1段	被爆の密航韓国人、日本で治療を、広島折鶴の会が嘆願書	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681008	中国	7段写真	学籍簿見つかる、密航の孫、友人一家も被爆証言、大阪にいた身寄りのいとこ、孫を山口拘置所に移す	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681009	中国	3段写真	同級生の証言に涙、密航韓国女性いとこと面会、山口、希望通り治療措置を、原水協入管局長に要望	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681010	中国	4段	山大教授ら街頭へ、密航韓国女性救援で	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681011	中国	3段写真	市民千人が署名、密航被爆女性の救援、山大教授らが街頭に	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681012	中国	7段写真	被爆韓国婦人ら起訴、山口県被爆者福祉会館保釈を働きかけへ	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681013	中国	4段	孫の保釈申請出す、山口県被爆者福祉会館「逃亡の心配ない」	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681015	中国	3段	密航の孫を保釈、領事館が身元引き受け	前掲『救援報道』所収	HT0500100

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19681016	中国	2段	孫一ヶ月の放免、指定病院で原爆症検査	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681019	中国	6段写真	韓国被爆者を広島で治療、近く救援組織を結成、広島日韓の平和団体など、孫広島入り、原爆病院で検査、治療	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681019	中国	3段	孫原爆病院に入院、月曜から精密検査	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681027	中国	4段	韓国の被爆者、広島に招き治療、日韓有志救援協議会を結成	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681101	中国	2段	七万余円集まる、韓国被爆女性の救援資金	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681105	中国	4段	密入国の孫らに猶予、「被爆」は情状酌量せず、山口地裁	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681109	中国	7段写真	被爆の孫急に帰国、「残した子供気がかり」、下関	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681211	中国	6段写真	「原爆病院で治療を」、二人の被爆韓国女性、23年ぶり広島入り	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681212	中国	1段	あす原爆病院に入院、被爆の韓国女性二人	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681213	中国	2段	「一時渡航者にも被爆手帳を」、韓国の厳さんら市へ要望、広島	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681213	中国	4段	原爆病院へ入院、二人の被爆韓国女性	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19681229	中国	2段	一ヶ月延長認める、二被爆女性の滞在、法務省	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690112	中国	8段写真	「冷たかった日本政府」、失意の中であす退院、広島で治療、韓国の二被爆女性、「もらえぬ原爆手帳」	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690114	中国	2段	原爆手帳交付さらに運動、韓国被爆婦人の退院見合わず、被韓協	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690115	中国	3段	【市政レーダー】被爆韓国婦人の支援を評価	コラム記事、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690115	中国	5段	広島市も運動へ、原爆手帳、韓国の被爆者への交付、韓国婦人の治療奉仕したい、広島市の開業医申し出	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690118	中国	6段写真	被爆治療の孫さん逮捕、韓国紙報道、密航組織一味の疑い	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690204	中国	1段	滞在期間を一ヶ月延長、二被爆韓国女性	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690215	中国	6段	韓国人被爆者への原爆手帳、市交付実現へ本腰、山田市長近く政府と折衝	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690219	中国	4段	治療なかばで退院へ、韓国二女性被爆手帳交付されず、広島	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690220	中国	2段写真	被爆韓国婦人二人が退院、広島原爆病院	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690305	中国	3段	外国人への原爆手帳交付、政府首脳と折衝し実現図る、山田広島市長が語る	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690308	中国	1段	「広島市民に感謝」、被爆韓国婦人が帰国	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690312	中国	1段	韓国被爆者にも暖かい手を	読者投稿欄、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690318	中国	1段	広島の皆様へ感謝 [渡日治療の韓国人被爆者]	読者投稿欄、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690403	中国	4段	【風紋】ゝまだら、の被爆人口	コラム記事、前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690509	中国	1段	韓国の被爆者救援に百万円、核禁会議が贈る	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690509	中国	5段	日本へ医師招き研修、韓国の原爆被爆者治療、公費治療の渡航認めぬ、衆院委で政府説明	前掲『救援報道』所収	HT0500100
19690726	中国朝広	5段	韓国の被爆者慰めて…、折りヅルを託す、折鶴の会ゝ里帰り、の学生らに		HT0400500
19690801	中国1	7段写真	ゝヒロシマ、の人權⑩、朝鮮人被爆者、手帳ももらえぬ、立ちふさがる差別	特集記事	HT0400500
19690807	中国朝	5段	感無量の外国人参列者、韓国婦人が集団参加、民族衣装で平和を祈る		HT0400500
19691017	中国朝社	6段	原爆、韓国人慰霊碑建立へ、年内除幕念願実り広島市内に		HT0400500
19691110	中国朝広	4段	医師派遣協力したい、広島入りした駐日韓国大使、韓国の被爆者援護で語る		HT0400500
19700727	中国6	6段写真	韓国のヒロシマ①、夏は親指がうむ、二人の子供も目が悪い	特集記事	HT0400400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19700728	中国 6	6 段写真	韓国のヒロシマ②、「楽しみは酒だけ」、目も見えぬ手も不自由	特集記事、文・柳大葉、写真・重田雅彦	HT0400400
19700729	中国 6	7 段写真	韓国のヒロシマ③、働けず暗い日々、「忘れぬあの日のB29」	特集記事、文・柳大葉、写真・重田雅彦	HT0400400
19700730	中国 6	6 段写真	韓国のヒロシマ④、「日本人はひどい」、今は子供のからだ心配	特集記事、文・柳大葉、写真・重田雅彦	HT0400400
19700731	中国 6	6 段写真	韓国のヒロシマ⑤、何一つ希望がない、病苦と貧困に追われる	特集記事、文・柳大葉、写真・重田雅彦	HT0400400
19700801	中国 6	6 段写真	韓国のヒロシマ⑥、暗い思いの毎日、日韓政府は誠意見せぬ	特集記事、文・柳大葉、写真・重田雅彦	HT0400400
19700801	中国朝社	2 段	8・6 式典、献花の朝鮮人代表も		HT0400600
19700806	中国朝広	6 段写真	この折り再びひとつに、「原爆の日」前に各地で慰霊祭、「25 年も待ちました」、韓国人被爆者初の慰霊祭にまた涙		HT0400600
19700806	中国夕 7	5 段	決して忘れられない、初の朝鮮人代表多くの同胞が犠牲		HT0400600
19700810	中国夕 2	3 段写真	【この人と 30 分】韓国原爆被害者援護協会常任顧問辛泳洙さん、韓国人へも関心を、前進させたい被爆者救済	人物紹介欄	HT0400600
19700811	中国朝社	3 段写真	救援運動盛り上げへ、核禁広島県民会議韓国被爆者と懇談		HT0400600
19701201	中国夕社	6 段写真	【この人と 30 分】「ヒロシマ会議」の傍聴者。韓国人被爆者の英を制作中の会社員、前田忠正さん、全国的な広がりへ、ヒロシマの意味考える	人物紹介欄	HT0400600
19701208	中国朝社	5 段	「広島で被爆、治療を」、孫貴達さんの兄が密入国		HT0400600
19701217	中国夕 1	4 段	【風紋】韓国の被爆者を救え	論説	HT0400600
19701218	中国朝社	2 段	日本で原爆症の治療させよ、「孫振斗救済委」呼びかけ		HT0400600
19701219	中国朝社	3 段	精密検査が必要、広島大原医研密入国の被爆者・孫		HT0400600
19701221	中国朝社	3 段写真	街頭で署名やカンパ、密入国の孫振斗救済活動始まる		HT0400600
19701229	中国朝	1 段	【青ポスト】孫さんの治療に支援を	読者投稿欄	HT0400600
19701230	中国	2 段	【青ポスト】原爆症の医療機関充実を	読者投稿欄	HT0400600
19710222	中国朝	7 段写真	転機に立つ在日朝鮮人⑦、差別に泣く被爆者、「密航以外に手はない」、援護はばむ「外人」扱い		HT0400700
19710611	中国朝	5 段	韓国政府への協力要請、被爆者治療の医師団派遣、核禁広島会議		HT0400700
19710801	中国朝	2 段	韓国被爆者援護協会長ら広島入り		HT0400700
19710804	中国朝社	2 段	首相に韓国被爆者の実情を、辛会長が広島市長に要望		HT0400700
19710809	中国朝広	4 段	朝鮮人被爆者も支援、祇園地区労、`手帳獲得、へ実態調査		HT0400700
19710811	中国朝社	3 段	在韓の被爆者を慰問、広島折鶴の会近く出発		HT0400700
19710823	中国	2 段	【青ポスト】韓国被爆者の窮状を訴える	読者投稿欄	HT0400700
19710827	中国朝社	3 段	広島折鶴の会少女ら韓国から帰る、4 市で被爆者慰問、`二世、の会と姉妹縁組み		HT0400700
19710902	中国朝社	2 段	4 カ所で巡回診療、韓国派遣の医師団日程、核禁広島県民会議		HT0400700
19710912	中国朝社	2 段	韓国の被爆者救おう、広島医師団派遣で街頭募金		HT0400700
19710915	中国朝社	4 段	結団式、誠意をもって診療、韓国被爆者診療医師団		HT0400700
19710920	中国夕社	4 段写真	韓国の被爆者診療へ、広島への派遣医師団出発		HT0400700
19710921	中国朝社	3 段	あすから巡回診療、核禁会議の訪韓医師団第一陣ソウル着		HT0400700
19710922	中国夕社	1 段	韓国被爆者診療団の河村医師も出発		HT0400700
19710923	中国朝社	4 段	すがりつくよう…悲惨な被爆者たち、訪韓医師団、診療始める	執筆：石井特派員	HT0400700
19710924	中国朝社	4 段写真	重症患者ら詰めかける訪韓医師団被爆者診療、3 日ばかりで来た人も、「広島での治療」訴える		HT0400700

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19710927	中国朝社	3段	被爆後初の受診者も、ソウルでの診療終える、訪韓医師団		HT0400700
19710929	中国朝社	4段	「葉ほしい」と被爆者、訪韓医師団、釜山で診療	執筆：石井特派員	HT0400700
19711002	中国	1段	【青ポスト】韓国の被爆者救済全力注げ	読者投稿欄	HT0400700
19711002	中国夕社	3段写真	貧困に苦しむ被爆者、無料診療に援助必要、訪韓医師団の2人帰る		HT0400700
19711003	中国朝社	7段	引き続き援護の手を、在韓被爆者を診療して、石田広島原爆病院内科部長が手記		HT0400700
19711005	中国夕社	5段写真	「なぜ苦しめられるの」韓国の被爆二世、怒りの手記30通、広島折鶴の会に届く		HT0400700
19711006	中国朝社	5段	密航の韓国人被爆者、孫が「手帳」交付申請、福岡		HT0400700
19711008	中国朝社	4段	韓国の被爆者診療終わる、1・2陣合わせ252人、陝川地区平均1つ以上の病気	執筆：石井特派員	HT0400700
19711011	中国朝社	6段写真	被爆者117人を診療、訪韓医師団第2陣帰る	執筆：石井浩史記者	HT0400700
19711120	中国朝5	5段写真	日本の原爆医療団を迎えて、辛会長が本社に手記、ほしい診療後の対策、世論喚起は一応の成果		HT0400700
19711203	中国朝社	3段	韓国人医師招きたい、被爆者治療の研究のため、学術会議に申請、広島大学		HT0400700
19720413	中国朝社	3段	福岡県が控訴、孫振斗さん被爆者手帳訴訟		HT0900500
19720449	中国朝社	3段	韓国の鄭所長きょう帰国、広島で被爆者治療研修		HT0400800
19720518	中国朝社	2段	韓国側も乗り気、被爆者診療施設の建設、核禁の村上氏帰国し語る		HT0400800
19720608	中国朝広	3段	韓国へ医療団派遣、核禁会議が運動方針案		HT0400800
19720612	中国夕2	6段	北朝鮮の被爆者問題、実態は確かめられず、「十分治療している」、核の説明が米帝批判に、当局者	執筆者：松浦亮	HT0400800
19720615	中国朝社	1段	原水禁世界大会、重点を沖繩・朝鮮の被爆者問題に		HT0400800
19720623	中国朝社	4段写真	韓国から若手医師、広島で被爆治療を研修		HT0400800
19720629	中国朝社	7段	朝鮮人被爆者には対米請求権がある、「講和条約の適用外」、援護運動に法的論拠、広島女子大小野寺助教が論文		HT0400800
19720630	中国朝社	6段	韓国から医師ら招待、被爆者治療の視察にと、徳山ニューライオンズク		HT0400800
19720715	中国朝社	2段	孫さんの申請却下、福岡県被爆者手帳交付で		HT0400800、HT0900100、HT0900502
19720730	中国朝社	6段写真	朝鮮人被爆者を描く、丸木夫妻が新「原爆の図」、差別措置、を告発、悲惨な死訴える水墨画		HT0400800
19720802	中国朝1	2段	韓国の被爆者救援強く推進、核禁が運動方針決める		HT0400800
19720803	中国朝2	5段	被爆の科学的解明を、核禁広島全国集会開く		HT0400800
19720803	中国夕社	2段	在韓被爆者の救援グループ広島市で集会		HT0400800
19720805	中国朝社	3段写真	原爆の図「からす」公開、丸木夫妻東京のデパートで		HT0400800
19720805	中国夕社	8段写真	問題多いソウル原爆病院建設、徳山ニューライオンズクラブ、国境越えた大計画、集まるか10億円、各クラブ協力の試金石		HT0400800
19720809	中国朝社	4段	原爆症治療で密入国、韓国の孫に手帳交付を、衆院委で社党が追及		HT0900100
19720813	中国朝社	2段	あす徳山入り、韓国被害者援護協会会長ら		HT0400800
19720814	中国夕社	5段写真	韓国被爆二世の4女性が帰国へ、援護に力を入れたい、「折鶴の会」らが見送る		HT0400800
19720816	中国朝社	9段写真	「ソウル原爆病院」建設、実現へ愛の輪広げて、数千人今も苦しむ、辛韓国援護協会会長徳山で呼びかけ、資産投げ出し救援に半生、広島で被爆の辛会長		HT0400800
19720818	中国夕社	4段写真	韓国の被爆者慰問へ、折り鶴会員ら7名が出発		HT0400800
19720822	中国朝2	4段写真	広島市も側面援助を、韓国の被爆者援護政府へ運動で要望、辛会長		HT0400800
19720831	中国朝社	6段写真	韓国の被爆者に補償を、代表首相へ要望書、原爆手帳交付など5項目		HT0400800

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19720907	中国朝社	4段	今年も韓国へ医師団、ソウルなどで被爆者診療、核禁会議		HT0400800
19721002	中国夕社	5段写真	ことしも韓国被爆者診療へ、広島から医師団出発、ソウル市などで8日間		HT0400800
19721103	中国朝社	5段写真	韓国被爆者の惨状訴え、文化祭に救済展、広島電機大付高		HT0400800
19730121	中国朝社	3段	原爆症に苦しむ韓国女性、自費で招き治療へ、広島の開業医		HT0400900
19730125	中国朝社	6段	韓国人被爆者、孫さん広島で治療、市民運動が実結び転院へ		HT0400900
19730127	中国朝社	5段写真	韓国人被爆者孫振斗さん広島入り、まっすぐ病院へ、「母国の仲間も助けて・・・」		HT0400900
19730127	中国朝広	2段	【スポット】、広島で治療を受ける密航韓国人被爆者の身元引き受け人河村虎太郎さん(59)		HT0400900
19730127	中国18	5段写真	韓国人被爆者孫振斗さん広島入り、まっすぐ病院へ、「母国の仲間も助けて・・・」		HT0400900
19730210	中国朝社	4段写真	被爆者援護で陳情、官房長官に森滝氏ら、原水禁、署名運動の推進を決議、原水禁が東京で集会		HT0400900
19730222	中国朝社	5段	覚せい剤密輸団逮捕、韓国、一味に原爆症の女性、4年前に密航広島で治療を受ける		HT0400900
19730223	中国朝社	4段	韓国の覚せい剤密輸事件、組員の知人が橋渡し、釜山に渡り孫らと接触		HT0400900
19730228	中国朝社	6段	孫貴達の兄に疑惑、韓国からの覚せい剤密輸、逮捕の組員が自供、拘置所で知り妹紹介、「全く無関係」広島で治療中の孫さん		HT0400900
19730316	中国朝社	2段	韓国被爆者にも医療援助を約束、訴えに厚生政務次官		HT0400900
19730324	中国朝社	3段	「医は仁術、に国境なし、広島の河村医師が自費治療、韓国被爆者27日に広島へ		HT0400900
19730412	中国朝社	5段写真	治療入国の韓国人被爆者、「手帳」交付を広島市に申請、医療に欠かせぬ、核禁国民会議も支援へ		HT0400900
19730520	中国朝社	2段	在日同胞にも手を、被爆者援護などで語る、北朝鮮記者団長		HT0400900
19730612	中国朝広	2段	韓国被爆者に援護の手を、宋公使が広島市へ要望		HT0400900
19730620	中国朝社	4段	韓国に建設へ、被爆者診療センター、資金1千万円をカンパ、核禁会議		HT0400900
19730625	中国朝社	3段	韓国人被爆者の会結成へ、広島折鶴の会が計画		HT0400900
19730715	中国朝社	6段	医療扶助を支給して、広島市に申請被爆の韓国女性2人		HT0400900
19730717	中国1	9段	この人間疎外第1部③、被爆者援護法を求めて、朝鮮人被爆者、就職差別に泣く、重労働に復帰	連載記事	HT0400900
19730718	中国8	3段	【読書】新しい視点を提起、小黒薫編、ヒロシマの意味	新刊紹介	HT0400900
19730721	中国朝社	6段	被爆韓国女性に医療扶助、広島市、初めて公費負担、制度化にはなお難問		HT0400900
19730727	中国朝1	4段	韓国人被爆者の実態など、日韓で初の共同研究、来月から広大とソウル・嶺南両大		HT0400900
19730730	中国夕社	6段	ヒロシマに納骨をしてあげよう、弔う人なく気の毒、大牟田市民の運動実る、朝鮮人被爆者の遺骨、大牟田で死んだ李順子さん		HT0400900
19730801	中国朝文	8段写真	【文化】被爆朝鮮人「応徴士」を追う①、敗戦宣言に喚声、解放と帰国の夢実現	連載記事、執筆：深川宗俊	HT0400900
19730802	中国朝2	5段	世界へ平和の便り、核禁広島県民会議本年度方針決める、診療運動に謝意、韓国被爆者援護協の趙会長、核禁広島会議集會に参加		HT0400900
19730803	中国朝9	7段写真	【文化】被爆朝鮮人「応徴士」を追う②、虐げられ続けた人々、優れた文化も踏みにじる	連載記事、執筆：深川宗俊	HT0400900

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19730805	中国朝 11	7 段写真	【文化】被爆朝鮮人 `応徴士。を追う③、ざまんと強制的連行、恐怖の現実語る証人たち	連載記事、執筆：深川宗俊	HT0400900
19730806	中国	8 段写真	【文化】被爆朝鮮人 `応徴士。を追う④、百人は草津から帰国、漁船五十隻に分乗して	連載記事、執筆：深川宗俊	HT0400900
19730806	中国朝広	3 段写真	碑に平和誓う、広島に日朝鮮人が慰霊祭		HT0400900
19730807	中国	7 段写真	【文化】被爆朝鮮人 `応徴士。を追う⑤、荒天に向けて船出？、吉川さん生存の証言も	連載記事、執筆：深川宗俊	HT0400900
19730817	中国夕社	4 段写真	韓国の被爆者慰問へ、広島折鶴の会、女生徒ら 12 名出発、韓国人被爆二世も同行、4 度目交流深める		HT0400900
19730818	中国朝 2	2 段	韓国の原爆病院建設、資金集めなど協議、徳山ニューライオンズク、山下前会長がきょう訪韓		HT0400900
19730822	中国夕社	2 段	盗難の韓国人救えと・・・、救援金が続々		HT0400900
19730825	中国夕社	4 段写真	密入国した韓国人被爆者、孫さん刑期終える、広島去る近く強制送還か		HT0400900
19731114	中国朝社	6 段写真	ケロイドの手術受けに広島入り、韓国の被爆婦人		HT0400900
19731126	中国夕社	4 段写真	28 年ぶり念願の治療、被爆の韓国女性「早く自由な体に・・・」広島		HT0400900
19731128	中国朝社	2 段	原爆手帳の交付を申請、広島、ケロイド治療の韓国婦人		HT0400900
19731207	中国夕 1	4 段	【風紋】韓国からの被爆者	論説	HT0400900
19731213	中国朝社	2 段	被爆韓国人広島入り、今年 3 人目の治療		HT0400900
19731213	中国夕社	4 段写真	韓国被爆者に救いの手、広島の医師団が出発		HT0400900
19731216	中国朝社	5 段写真	韓国被爆者診療センター、待望の落成を祝う、広島からの代表も列席	執筆：島津邦弘	HT0400900
19731218	中国朝社	3 段	診療活動始める、韓国被爆者センター、日本医師団	執筆者：島津特派員	HT0400900
19740107	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者①、第二の故郷、原爆と懐かしさ同居、18 万人のうち 3 千人も	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740108	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者②、ある回想、物も心も奪った原爆、いま同胞の援護に奔走	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740109	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者③、偏見、「原爆症が伝染する」、デマ・・・身隠す食堂店主	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740110	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者④、ゼロから出発、傷負い身一つで帰国、焼けた財産に今も未練	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740111	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者⑤、診療センター発足、専門医療の手やっとな、核禁会議の援助支えに	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740112	中国夕 1	8 段写真	韓国の「ヒロシマ村」、寒村に生きる被爆者⑥、きずな、陝川を知って欲しい、診療センター完成機に	執筆：島津邦弘、連載記事	HT0400900
19740116	中国朝社	6 段写真	また仮埋葬のまま、被爆後遭難死した朝鮮人徴用工、韓国で遺族会結成、補償など働きかけ		HT0400900
19740124	中国朝社	3 段	手帳交付できぬ、広島で治療中の被爆韓国女性の申請、市が `居住、解釈認めず		HT0400900
19740128	中国朝 1	1 段	【天風録】[健康手帳不交付に寄せて]		HT0400900
19740131	中国朝社	3 段	日本での居住主張、被爆者手帳訴訟、本人尋問で孫さん		HT0400900
19740207	中国朝社	6 段写真	原爆ドームに落書き、保存工事後初の不祥事緑ペンキで 2 ヲ所		HT0400900
19740207	中国夕社	4 段	原爆碑文にも落書き、全面に青ペンキで×印		HT0400900
19740208	中国朝社	4 段	落書きさらに 3 ヲ所、原爆の子の像にも×印、平和公園		HT0400900
19740329	中国朝社	7 段	「孫さん被爆手帳訴訟」あす判決、福岡地裁、医療法解釈に焦点、外人治療問われる政府の姿勢		HT0400900、HT0900500
19740330	中国夕 1	8 段写真	原爆医療法国籍で制限されぬ、孫さんに手帳交付を、福岡地裁判決、被爆事実も認める、控訴の判断は国と相談して、桑島敬一福岡県知事の話		HT0400900、HT0900500
19740331	中国朝 1	1 段	天風録 [孫振斗裁判福岡地裁判決について]	コラム記事	HT0900500

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19740331	中国朝2	6段	被爆の事実を重視、立法趣旨の根本貫く、孫さんへの原爆手帳交付判決	解説記事	HT0900500
19740331	中国朝社	5段	孫訴訟判決、広島への反響、広がる治療の道、「政府の姿勢転換を」		HT0900500
19740424	中国朝社	7段	日本政府に補償要求、被爆韓国人遺族会を結成、三菱重工業用壱岐沖遭難の関係者、後宮大使に決議文		HT0401101
19740428	中国朝社	7段写真	「三菱広島」の朝鮮人徴用工、遭難裏付けに新資料、死者慰霊のビラ、動員名簿のフィルムも訪韓の深川氏確認		HT0401101
19740428	中国朝社	4段写真	韓国人被爆者の慰霊碑、文と位置修正の動き、広島		HT0401101
19740702	中国朝	9段写真	韓国の被爆徴用工、補償要求へ闘争委結成、来月はじめ来日し交渉、三菱重工・日本政府と		HT0401101
19740702	中国朝社	9段写真	韓国の被爆徴用工、補償要求へ闘争委結成、来月初め来日し交渉、三菱重工・日本政府と		HT0401101
19740721	中国朝社	7段写真	財政難で閉鎖の恐れ、1月発足の韓国被爆者センター、冷淡な現地自治体、専従の医師も不在、薬品援助など検討、核禁広島県民会議		HT0401101
19740723	中国朝1	4段	韓国在住の被爆者にも、都が健康手帳交付へ、国に連絡		HT0401101
19740723	中国朝1	4段	韓国在住の被爆者にも、都が健康手帳交付へ、国に連絡		HT0401101
19740723	中国朝社	4段	国籍に関係ない、入院中の辛さん本格的救済を訴え、被爆者手帳交付東京都の方針		HT0401101
19740723	中国朝社	4段写真	国籍に関係ない、入院中の辛さん本格的救済を訴え、被爆者手帳交付東京都の方針		HT0401101
19740724	中国	3段	韓国人への被爆者手帳交付、都の措置を歓迎、広島で大きな反響呼ぶ		HT0401101
19740724	中国	5段	在韓被爆者相次ぎ広島へ、8・6に向け援護を要請		HT0401101
19740726	中国朝1	11段写真	外国人にも被爆者手帳、国が交付を認める、正当な入国など条件		HT0401101
19740726	中国朝社	7段写真	辛さん複雑な喜び、被爆者手帳交付韓国人第1号、まだ多くの同胞、根本対策を訴える		HT0401101
19740726	中国夕社	7段写真	広島の韓国人被爆者慰霊碑、碑文の一部消す、「屈辱的」と修正か、黒い塗料で2行		HT0401101
19740727	中国	1段	【天風録】[辛泳洙への原爆手帳交付について]	コラム欄	HT0401101
19740727	中国朝社	3段写真	広島でも交付申請、外国人への被爆者手帳、親類訪問中の韓国人		HT0401101
19740731	中国朝社	6段	外国人への被爆者手帳、広島市が初めて申請受理、国の新見解に沿う、金さん「原爆病院で治療を」		HT0401101
19740801	中国夕社	4段	被爆者手帳申請へ、韓国から3人来日、大阪		HT0401101
19740802	中国朝社	4段写真	在韓被爆者の救済強く訴え、広島入りした鄭さんら		HT0401101
19740802	中国朝社	2段	被爆者補償真剣に考えよ、韓国から来日の3人会見		HT0401101
19740803	中国朝社	2段写真	安心して治療が…、都知事をお礼訪問、被爆者手帳交付された辛さん		HT0401101
19740804	中国朝1	4段写真	金さん（韓国）に被爆者手帳、広島市交付の方針、厚生省へ働きかけ		HT0401101
19740804	中国朝社	6段	ソウルに建設予定の原爆病院、資金集まらず難航、徳山ニューライオンズ・ク10億円の予定に500万円		HT0401101
19740804	中国朝社	7段写真	被爆直後の広島、朝鮮人志願兵が救護活動、「私に立証の責任」、元上官が記録執筆忘れてはならぬ事実		HT0401101
19740805	中国朝社	6段	韓国被爆者援護協会の会長ら広島入り、被爆者手帳交付手続きへ		HT0401101
19740805	中国夕社	5段写真	在韓被爆者二世も参列、韓国人犠牲者の慰霊祭、広島、韓国人犠牲者慰霊碑の碑文修正に抗議の声明、韓青同広島県本部		HT0401101
19740806	中国朝社	7段写真	韓国人3人の被爆者手帳申請、広島市は受理せず、入国目的あいま、滞在期間にも難点、「政府の姿勢に疑問」、手帳交付1号の辛さん、広島市の激励会		HT0401000

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19740806	中国夕7	9段写真	「平和宣言」にむなしさ、式典参加の韓国被爆者		HT0401101
19740807	中国朝2	6段	「この日、祈りは海越えて、韓国人被爆者、置き去りに怒り、ソウルで厳粛に慰霊祭		HT0401000
19740807	中国朝社	6段写真	広島に来た朴海君さん、差別に強い怒り、在韓被爆者の苦悩訴え		HT0401000
19740808	中国朝社	4段	金さんへの被爆手帳交付、しばらくお預け、厚生省滞在日数などで難色		HT0401101
19740809	中国朝社	4段写真	「未払い賃金など払え」、被爆韓国人徴用工代表三菱広島		HT0401000
19740809	中国	4段	【こだま】親切だった朝鮮の人	読者投稿欄	HT0401101
19740810	中国朝社	4段	官房長官も制定に難色、被爆者援護法	韓国人被爆者についても言及あり	HT0401101
19740812	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言①、逃亡者、`生き地獄。だった炭坑、名前を変え5年も転々	連載記事	HT0401101
19740813	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言②、動物以下、連日恐怖のダム建設、生き埋め事故も知らぬ顔	連載記事	HT0401101
19740814	中国朝4	10段写真	置き去りの在韓国被爆者、韓国言論人と現地座談会、実態調査が先決、推定で2万5千人、低すぎた国民の認識、悲惨さ報道やっと思心、人道的に解決図れ、深い日韓条約の`後遺症、	特集記事	HT0401101
19740814	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言③、炭掘り、一瞬の事故で海底に、一人の遺体も掘り出さぬ	連載記事	HT0401101
19740814	中国朝広	3段写真	本国の被爆者治療に、韓国の医師広大原医研で研修		HT0401000
19740815	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言④、帰還の港、終戦2年間に34万人、ハダカ同然の身で祖国へ	連載記事	HT0401101
19740816	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言⑤、平和の礎、祖国・命まで奪われ、骨箱には土砂や紙切れ	連載記事	HT0401101
19740817	中国夕社	3段	複雑な心境で辛さん帰国、韓国被爆者手帳第1号		HT0401101
19740818	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言⑥、追跡調査、血の過去掘り起こす、一世尋ね歩き聞き取り	連載記事	HT0401101
19740819	中国朝社	7段写真	埋もれた戦場、朝鮮人虐待の証言⑦、昔も今も、苦しい生活続く差別、祖国へ夢はせ「連絡船の歌」	連載記事	HT0401101
19740820	中国朝広	6段写真	韓国人被爆者にヒロシマの善意を、ソウルから来日の新進画家尹さん、診療センター援助に、油絵展を開催中		HT0401101
19740823	中国夕	4段	被爆者手帳交付、金さんの申請却下、広島市厚生省の意向で		HT0401000
19740828	中国広場	2段	大きな視野から善処望む、韓国人被爆者手帳交付	読者投稿欄	HT0401101
19740829	中国朝社	3段	「被爆者診療センター」への助成、韓国政府に要請、核禁広島代表あす訪韓		HT0401101
19740830	中国朝広	3段	治療半ばで退院、「ヒロシマの責任示せ」、被爆者手帳さえあれば…、韓国人被爆者・金さん、申請却下につる怒り		HT0401101
19740903	中国朝社	1段	広島で治療を、生活保護市に申請、被爆者手帳却下された金さん		HT0401101
19740912	中国朝社	2段	広島市への医療扶助申請、金さん取り下げる		HT0401101
19740912	中国夕社	4段写真	韓国の原爆治療センターを救おう、広島で「慈善易占い」、3人の韓国人`益金、を役立てて…		HT0401101
19740921	中国朝文	6段写真	ソウル・傷みの秋、被爆朝鮮人徴用工訪問の旅から	執筆：深川宗俊	HT0401101
19740925	中国朝11	6段写真	【この人この本】「鎮魂の海峡一消えた被爆朝鮮人徴用工246名」の深川宗俊氏、ある執念の探索日本人の責任問う	新刊紹介	HT0401101
19740925	中国朝社	4段	韓国に医師団派遣、11月に核禁広島県民会議、被爆者治療に方法指導、韓国人被爆者の金さんのビザ延期を認めず、広島入管事務所		HT0401000
19740927	中国夕社	2段	外国人被爆者の治療政府に働きかける、長崎県知事が表明		HT0401101

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19741004	中国夕社	4段	治療して帰りたいか…、韓国人被爆者の金容善さん、あす傷心の帰国、被爆者手帳来春また申請へ		HT0401101
19741112	中国朝社	2段	訪韓医師団けさ出発、核禁広島県民会議が派遣		HT0900100
19741122	中国朝社	3段	治療希望の被爆韓国女性、きょう念願の広島へ、手帳も申請		HT0401101
19741123	中国朝社	6段写真	「完全に原爆症治るまで滞在」、崔さん広島に着く		HT0401101
19741125	中国朝社	5段写真	証人、の同級生と29年ぶり再開、「治ったらクラス会を」、原爆症の崔さん		HT0401101
19741130	中国朝広	3段写真	旧友・恩師の励ましに包まれて、広島の病院原爆治療を受ける韓国の崔さん、日増しに回復、里帰り心待ち		HT0401101
19741204	中国朝社	4段写真	崔さんの申請受理、広島市被爆者手帳の交付		HT0900100
19741211	中国朝社	4段写真	崔さんに被爆者手帳、広島市が交付		HT0900100
19741225	中国朝広	2段	きょうから原爆病院で治療		HT0900100
19741226	中国朝広	5段写真	「早く全快したい」、韓国人被爆者・崔さん原爆病院へ入院		HT0401101
19750121	中国夕1	3段	「日本で治療」の念願実り、韓国女性長崎へ、広島で被爆したベンさん		HT0401101
19750122	中国朝社	3段	広島原爆病院入院の崔さん、ビザの延期を申請、治療さらに3ヵ月必要		HT0401101
19750130	中国朝社	2段	長崎で治療中の被爆韓国女性、広島で証人捜し		HT0401101
19750131	中国朝社	2段	ベンさんの被爆証人、広島の2人名乗り出る		HT0401101
19750131	中国朝社	3段	ビザを延長、原爆症治療の崔さん		HT0401101
19750209	中国朝社	2段	被爆者手帳をベンさんに交付、外国人として3人目		HT0900100
19750307	中国朝社	2段	韓国の原爆被災者死亡、日本政府の代表が初めて葬式に出席、「善処したい」と弔辞		HT0401201
19750321	中国朝社	5段	被爆韓国女性ベンさん、30年ぶりに広島へ、23日長崎から		HT0900100
19750324	中国朝社	5段写真	「国境超えた救いの手を」、今も苦しむ2万人、被爆韓国女性ベンさんが広島入り		HT0900100
19750419	中国夕社	5段	韓国被爆者の実態知ろう、生の声、求め渡韓、九州の青年「長崎の証言」に収録		HT0900100
19750420	中国朝社	7段	広島市の被爆手帳、観光ビザでも交付を、「治療」に限定は逆行、市民の会条件緩和訴える		HT0401201
19750421	中国1	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—①、抗議の遺言、「棺を大使館に…」、どん底の闘病人生	連載記事	HT0900100
19750422	中国2	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—②、切られた糸、ビザ交付中止に、行政の壁善意砕く	連載記事	HT0900100
19750423	中国1	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—③、直訴の兄妹①、治療を拒む国境、密入国し原爆訴訟	連載記事	HT0900100
19750424	中国1	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—④、直訴の兄妹②、早く手帳交付を、国籍の差別、を追及	連載記事	HT0900100
19750425	中国朝2	7段	韓国からの要請待ち、厚相在韓被爆者問題で答弁、衆院社労委		HT0401201
19750425	中国1	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—⑤、帰国の不安、本国では治せぬ、医療整備を訴える	連載記事	HT0900100
19750426	中国1	9段写真	この叫びいつ…—在韓被爆者30年の現実—⑥、復権への行動、広がる輪厚い壁、ヒロシマの心生かせ	連載記事	HT0900100
19750427	中国朝	2段	【広場】在韓被爆者を救え、平和国家が泣く強制送還	読者投稿欄	HT0900100
19750514	中国社	2段	孫さんの被爆手帳交付、訴訟が結審、判決は7月17日		HT0900100
19750516	中国朝社	6段写真	被爆者手帳、帰国後も効力継続を、崔さんあす広島市に陳情		HT0900100
19750518	中国朝社	3段	手帳交付に配慮を、外国人被爆者崔さん広島市に要請		HT0900100
19750524	中国夕	4段	在外被爆者支援する会を結成、長崎の3団体		HT0401201
19750613	中国夕	7段	在日韓国人被爆者、生活実態を調査、韓青広島県本部が方針、日本人並み援護を、30周年を気に運動へ		HT0401201

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19750616	中国朝社	6段写真	崔さん被爆治療終えあす帰国、広島、私は運が良かった、韓国に一層救済の手を		HT0900100
19750618	中国朝社	3段写真	被爆韓国女性、崔さん元気に帰国、広島原爆病院7カ月の療養終え		HT0900100
19750628	中国朝社	2段	外国人にも被爆者手帳を、厚相に市民団体が要請		HT0900100
19750703	中国朝社	6段	韓国・台湾被爆者の実態解明へ体験記、本年度内の収録目指す、核禁会議		HT0401201
19750712	中国夕	3段	韓国人被爆者のため歌作る、大阪の詩川さん・荒木さん		HT0900100
19750713	中国4	8段写真	原爆手帳交付訴訟、17日孫さんに2度目の判決、一審密航者でも認める、問われる法の適用、居住制限か保証義務か、「朝鮮人に償いを」、市民ら支援の輪広げる	特集記事	HT0900100
19750716	中国朝1	5段	争点は原爆医療法、孫さん訴訟あす福岡高裁で判決		HT0900100
19750717	中国朝1	9段写真	平和公園⑮、韓国人慰霊碑、断られた園内建立、援護面の不公平を象徴？	連載記事	HT0900100
19750717	中国夕1	12段	原爆医療法国家補償の性格持つ、被爆者手帳訴訟、孫さん二審も全面勝訴、国籍問わず交付を、福岡県の控訴を棄却、福岡高裁、一審さらに進める、姿勢転換迫られる政府、「ありがとう」とうれし泣き、収容所で孫さん、上告慎重に対処、亀井光福岡県知事の話、根本的な対策望む、辛泳洙さん語る		HT0900100
19750717	中国夕社	8段写真	朝鮮人被爆者に光伸びる、孫さん訴訟控訴審判決、涙で勝利の電話、喜びにわく支援者、孫さん勝訴に広島の声		HT0900100
19750718	中国7	5段	【社説】転換迫られる原爆医療法	社説	HT0900100
19750718	中国朝1	5段	「補償」に依然難色、孫さんの被爆者手帳控訴審判決、扱いに困る行政側		HT0900100
19750718	中国朝2	5段	援護法制定に力づけ、孫訴訟判決へヒロシマの反応、国家補償の精神を評価		HT0900100
19750718	中国朝社	2段	生活実態を広島で調査、大阪の韓国基督教		HT0401201
19750718	中国朝社	9段写真	「兄さんは勝った」、孫さん訴訟控訴審判決、釜山で喜ぶ貴達さん、「出国5年やっと」、目を潤ませて絶句、治療の道開かれた、30年耐えた当然の帰結、ソウルの反応、「福岡市民の会」の伊藤さん、孫さん支えた夫人の心情、仕事の合間に面会、「問題の重さ知る毎日」		HT0900100
19750723	中国3	6段写真	【原爆人生】母にわびる、裏目孝行の呼び寄せ	特集記事	HT0900502
19750724	中国	5段	孫判決、機に援護法促進を、「8・6」当時いた韓国徴用少年は？	読者投稿欄（2人分）	HT0900100
19750724	中国朝社	4段	手帳交付や援助訴え、韓国の3被爆者来日へ		HT0900100
19750727	中国朝社	5段	広島朝鮮人被爆者、連絡協結成し運動へ、来月2日大会		HT0401201
19750731	中国	2段写真	【平和を求めて】韓国被爆者援護協会、両国の谷間で被害補償訴え	特集記事	HT0900100
19750731	中国朝1	4段	福岡県が上告へ、孫さん訴訟		HT0900100
19750731	中国朝社	7段	「救済の道閉ざす」、孫さん訴訟福岡県の上告、関係者衝撃と怒り		HT0900100
19750802	中国朝1	4段写真	核禁会議広島で全国集会、核兵器完全禁止を、「平和利用」は推進へ		HT0900100
19750803	中国	4段写真	韓国人被爆者をテレビ映画化、日韓合作で「京城慕情」、救援訴え徳山市の国際協		HT0900100
19750803	中国朝社	6段写真	朝鮮人被爆者協が発足、広島実態究明へ動き出す		HT0401201
19750806	中国朝広	5段写真	また過去帳に237人、韓国人慰霊祭、100人参列、霊慰める歌も披露		HT0900100
19750806	中国夕2	6段写真	外国人被爆者に医療法、入国が合法なら適用、原爆病院建て替え国・県・市の負担で、田中厚相広島で語る		HT0401201

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19750807	中国朝社	1段	韓国人被爆者は10万人、韓国原爆援護協会が発表		HT0401201
19750809	中国夕社	9段写真	あの一瞬胸に刻んで、長崎の平和式典数珠を手に静かな祈り、在韓被爆者初めて出席、敬けんに早朝ミサ、浦上天主堂		HT0900100
19750810	中国朝2	4段	日本政府が援助を、韓国人被爆者協が声明、犠牲者追悼式ソウルで開く		HT0401201
19750813	中国朝社	3段写真	30年ぶり広島再訪、韓国の姜さん、政治犯で服役中に被爆		HT0900100
19750814	中国朝社	3段写真	服役中被爆の姜さん、広島刑務所を訪問、しみじみ「整った街に」		HT0900100
19750821	中国朝社	5段写真	ことしこそ援護を、被爆の韓国人徴用工遺族ら、広島入りし訴え		HT0900100
19750821	中国夕社	2段	韓国人の原爆慰霊碑に参拝、韓国の援護協会代表		HT0900100
19750824	中国朝社	7段	被爆者手帳、観光ビザの韓国人、あす広島市に申請、条件緩和発言（厚相）後初めて		HT0401201
19750825	中国夕1	5段	被爆者手帳を申請、広島観光ビザ入国の盧さん		HT0401201
19750826	中国朝	8段写真	広島を訪れた韓国被爆婦人、崔さんテーマに本づくり、「市民の会」広島支部、同胞3万人の実態、苦難の半生通じて訴え		HT0900100
19750829	中国朝1	6段	被爆者手帳、観光ビザでも交付、厚生省が新基準提示へ		HT0401201
19750830	中国朝	7段写真	32年ぶり感激の再会、韓国被爆者遺族会の盧会長と義兄の全さん、広島、終戦…離散つきぬ話		HT0900100
19750830	中国朝社	5段	徴用工遭難死、遺骨送還や補償を、韓国遺族会三菱に要請		HT0401201
19750902	中国朝社	7段写真	外国人の被爆者手帳、適法入国なら交付、厚生省緩和へ新判断、盧さんに第一号、「在韓者にも恩恵を」、広島で入院		HT0401201
19750903	中国朝社	4段	「感謝でいっぱい」、広島盧さんに被爆者手帳		HT0401201
19750909	中国朝社	2段	韓国人徴用工遺族会、遺骨の送還や墓参申し入れ、外務厚生両省に陳情		HT0401201
19750909	中国夕社	9段写真	韓国人徴用工の遭難死、盧遺族会会長、遺骨の送還切々と訴え、「人道的に補償を」、帰国前に最後の要請		HT0900100
19750916	中国朝1	1段	韓国人被爆者の救済を要請、韓国の被災者救護協会		HT0401201、HT0900200
19750916	中国朝社	2段	原爆手帳を再申請、韓国人被爆者、昨年不受理の鄭さん、広島市		HT0900500
19750919	中国朝社	1段	きょう盧さん帰国		HT0900200
19750919	中国朝社	1段	鄭さんに原爆手帳、観光ビザへの交付定着		HT0900500
19751024	中国朝社	5段	治療の道ない在韓被爆者、辛さん苦境を証言、孫振斗さんの退去裁判、福岡地裁		HT0900200
19751125	中国	7段写真	韓国被爆者を救おう、崔さんテーマの本が完成、「市民の会」広島支部、治療施設ない母国、タイトル「ヒロシマを持って帰りたい」、日本人の責任も問いかける		HT0900200
19751125	中国社	2段	韓国人被爆者、念願の日本で治療、「市民の会」近く招待		HT0900200
19760114	中国朝社	3段	韓国へ専門医を、在韓被爆者救援の会、政府に近く要請、広島		HT0900300
19760116	中国朝社	1段	在韓被爆者調査へ、広島県原水協の2人出発		HT0900200
19760118	中国朝社	3段	防府で被爆治療、韓国から兄妹来日		HT0900500
19760123	中国朝社	1段	韓国被爆者の現状調べ帰国、広島県原水協の代表		HT0900200
19760127	中国朝社	3段	活動方針を討議、県原水協		HT0900200
19760128	中国朝社	4段	原水禁活動者会議開く、熱海、非武装宣言めざす、運動方針、反原発で連帯強化	韓国被爆者との連帯を議論	HT0900200
19760201	中国朝社	3段	孫振斗さんが仮放免、今月半ばにも広島市へ		HT0900200
19760207	中国朝社	1段	被爆者手帳交付を申請、防府で治療の3韓国人		HT0900500

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19760214	中国朝社	2段	韓国被爆者3人に手帳、山口県、来日し治療中		HT0900500
19760221	中国朝社	1段	一足先に帰国、防府で入院治療の被爆韓国人金さん		HT0900500
19760318	中国朝社	4段	崔さんを招く募金呼びかけ、被爆治療を実現する会		HT0900200
19760324	中国朝社	2段	徴用工援護であす韓国へ、広島市の深川さん		HT0900200
19760402	中国朝社	4段	在韓被爆者、推定を大幅に上回る、核禁会議実態調査、一地域で倍近い数		HT0900200
19760406	中国朝社	3段写真	韓国人の目通した、`原爆告発、の本、韓国で初の出版		HT0900200
19760406	中国朝社	7段	遭難死した被爆朝鮮人徴用工、今夏壱岐（長崎）で遺骨を発掘、遺族らと相談、深川さん帰国		HT0900200
19760407	中国朝社	5段	健康管理手当支給を、在韓被爆者が初の申請、広島で治療の鄭さん		HT0900500
19760417	中国朝社	6段	厚生省、外国人被爆者にも救済の道、本国の証明あれば手当を支給へ、新見解広島市へ通知		HT0900500
19760424	中国朝社	7段写真	本国の所得証明提出、韓国人被爆者鄭七仙さん、手当申請書整う		HT0900500
19760427	中国朝社	6段	強制送還の執行停止、被爆韓国人孫振斗さん、「裁判の確定まで」、福岡地裁決定		HT0900200
19760512	中国朝社	4段	被爆朝鮮人徴用工、240人の遭難裏付け、長崎・壱岐の役場記録文書見つかる		HT0401101、HT0900300
19760521	中国朝社	4段	韓国原爆センター所長、広大へ研究留学、広島県が招く		HT0900300
19760524	中国朝社	7段	韓国被爆者診療センター、7月から増改築、核禁広島県民会議		HT0900300
19760528	中国朝社	5段	韓国人被爆者に初の手当支給、広島市、母国の証明書で決定、医療・福祉に救済の道、鄭七仙さん		HT0900500
19760528	中国朝社	3段	被爆韓国人孫振斗さん、再収容前提の診断書求める、福岡入管が主治医に		HT0900300
19760606	中国朝社	3段	在韓被爆者3人が来日、防府の病院で治療へ		HT0900500
19760608	中国朝社	4段	「韓国人被爆者」柱に、救援活動を強化、核禁広島会議運動方針		HT0900300
19760619	中国朝社	4段	証人捜しました5人、広島県被団協、被爆状況など公表		HT0900300
19760620	中国	8段写真	修学旅行生が韓国人慰霊碑に参拝、京都安祥寺中の212人、「同じ原爆の犠牲者・・・」、千羽ヅルささげめい福		HT0900300
19760622	中国朝社	5段	来月下旬遺骨収集へ、被爆韓国人徴用工の遭難、支援する会を結成、広島		HT0900300
19760622	中国夕1	6段	在日朝鮮人被爆者、生活と健康に不安、保護家庭が5割強、援護強化働きかけ、朝被協調査		HT0900300
19760625	中国夕社	4段写真	韓国の被爆者診療センター、増築へ募金呼びかけ、あと700万円必要、核禁広島県民会議中心、あす実行委発足		HT0900300
19760627	中国朝広	2段	韓国の被爆診療センター、増築へ実行委発足、広島、外国人被爆者の救援対策を充実、核禁県民会議が運動方針		HT0900300
19760630	中国朝社	3段	8月に遺骨発掘、遭難徴用工		HT0900300
19760703	中国22	7段写真	原爆裁判③、孫訴訟、国家的な補償求める、外国人被爆者にも権利	連載記事	HT0900300
19760721	中国朝社	2段	原水禁世界大会、朝被協が初参加、呼びかけ実る		HT0900300
19760723	中国朝社	3段	原水協大会にも出席へ、広島県朝被協		HT0900300
19760731	中国夕	4段	孫さん広島入り、原爆症治療の願いかなう		HT0900300
19760801	中国朝社	6段写真	あす原爆病院で検診、広島入りした孫振斗さん、「不安少しは解消」		HT0900300
19760803	中国夕1	6段写真	「手帳あれば・・・」重い表情、孫さん原爆病院で受診		HT0501400、HT0900300
19760804	中国朝2	7段写真	韓国人被爆者の救援活動を強化、核禁会議広島で全国集会		HT0401101

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19760806	中国朝1	4段	在米被爆者ら参加、原水協世界大会2日目、分散・分科会で討議		HT0900300
19760806	中国朝広	6段写真	静かに慰霊の集い、8・6前日の広島市内、悲しみ新たに過去帳奉納、動員学徒らの碑除幕も		HT0900300
19760806	中国朝広	9段	三木首相に望むヒロシマの声		HT0900300
19760808	中国朝社	1段	孫さん福岡へ帰る、原爆病院の診察終え		HT0900300
19760810	中国朝社	2段	ナズの韓国人徴用工追い、きょうから壱岐で発掘、原爆歌人の深川さんら		HT0900300
19760813	中国朝	1段	被爆朝鮮人との関係いぜん不明、壱岐徴用工調査終わる		HT0900300
19760813	中国社	5段	被爆証人捜し新たに5人		HT0900300
19760814	中国朝社	5段写真	壱岐の遭難朝鮮人発掘団、50人参列し慰霊祭		HT0900300
19760815	中国朝社	4段写真	壱岐で発掘の遺骨80数体、広島に寺院に仮安置		HT0900300
19760816	中国朝社	6段写真	被爆徴用工とは別の遺骨?、壱岐の発掘調査、詳しい調べ必要、深川さん、現地の証言まちまち、裏付け資料も皆無		HT0900300
19760817	中国朝広	2段	在韓被爆者の廬さん、手帳再交付を広島市に申請		HT0900300
19760820	中国夕社	6段写真	母国での医療訴え、外国人被爆者への手帳交付から1年、11人が入手治療、第1号廬さん「民間の善意に限界」		HT0900300
19760827	中国朝広	4段写真	同法が築いた高暮ダム訪ねる、韓国人被爆遺族会長の廬さん、強制労働の実態聞く、えん堤の殉職碑に合唱		HT0900300
19760831	中国朝社	1段	在韓被爆者の廬さんに再交付		HT0900300
19760930	中国夕1	5段	出国命令の無効訴えた孫振斗さん敗訴、「原爆症治療急がぬ」、福岡地裁判決		HT0501400、HT0900300
19761002	中国朝社	5段	朝鮮人被爆者の実態訴え、近く国連へ平和アピール、広島県朝被協		HT0900300
19761015	中国朝社	3段	孫さんが控訴、出国命令無効確認訴訟		HT0900300
19761026	中国朝社	3段	念願かない来日、韓国人被爆者崔さん長崎で入院		HT0900300
19761028	中国朝	4段写真	韓国の被爆者救おう、同窓会(旧羅南高女)で募金、下関、一主婦が提唱、新聞で実態知り援助10年、理解の輪広がる		HT0900300
19761028	中国朝社	6段写真	在日朝鮮人被爆者12人、原爆手帳を申請		HT0401201
19761104	中国夕社	2段	【善意】ヒロシマの心韓国で...		HT0900300
19761121	中国朝社	4段	「今度こそ手帳を」、在韓被爆者が交付申請、広島で入院		HT0401101、HT0900300
19761125	中国朝社	2段	「朝鮮人に最恵国待遇」、民生局長の発言で紛糾、広島、朝被協が取り消し要求		HT0900300
19761201	中国朝広	2段	「朝鮮人には最恵国待遇」、抗議で発言撤回、広島市民生局長		HT0900300
19761209	中国朝社	5段写真	やっと手帳交付、被爆韓国人林福順さん、保健手当も手続き、広島市		HT0401101
19761223	中国広	3段カ	朝鮮人被爆者13人に手帳、広島市が交付を通知		HT0401201
19761231	中国朝社	6段写真	崔さん念願かなう、長崎市被爆者手帳を交付		HT0401101、HT0900300
19770106	中国朝社	3段	林さんに保健手当、広島市が支給決定、外国人被爆者で初		HT0900300
19770202	中国朝社	2段	「厚生省局長発言は偏見」、朝鮮人被爆者取り消し要求、広島		HT0900300
19770202	中国朝社	2段	佐分利発言で説明、広島県朝被協側も了承		HT0900300
19770219	中国朝広	3段	「朝鮮人除外は不当」、広電の被爆公務死証明、朝被協県に抗議		HT0900300
19770311	中国朝社	5段	朝鮮人・韓国人被爆者、核意識を調査へ、広島で学者らが研究会、長崎も協力、広島「核」意識調査		HT0900300
19770423	中国朝社	3段	援護対策の強化要請へ、広島県朝被協が厚相		HT0401201
19770425	中国夕1	2段	朝鮮人被爆者の窮状訴えに状況、広島に李氏ら		HT0401201
19770426	中国朝社	1段	援護措置拡充厚相に要望、広島に朝鮮人被爆者協		HT0401201

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19770516	中国夕 1	7 段	「総連」が準備に着手、朝鮮人被爆者を実態調査、正当な救済要求へ、近く方針決定、実数や差別説明図る		HT0401201
19770604	中国朝社	4 段写真	韓国人犠牲者慰霊碑、皇后陛下のいとこ、李方子さんが参拝		HT0900300
19770607	中国夕社	8 段写真	韓国人原爆慰霊碑またいたずら、花輪ちぎられ無残、4 日前李方子さん供える		HT0900300
19770706	中国 1	8 段写真	いえぬ傷跡、被爆者の 32 年第 1 部①、被爆朝鮮人、二重の差別重く、襲う「生き残り」の苦痛	連載記事	HT0900300
19770708	中国	3 段	韓国人被爆者の 32 年、下旬から白書づくり、体験を記録健康調査も、居留民団県本部		HT0401201
19770725	中国朝 1	4 段写真	窮状訴え切々・・・、被爆者と懇談、広島入りの国際シンポ調査団		HT0401201
19770730	中国 1	8 段写真	生への闘い、被爆者の 32 年第 2 部①、強制連行、「償わずなぜ差別」、運命狂わされた朝鮮人	連載記事	HT0900300
19770802	中国朝 2	3 段	国連に調査要請、被爆朝鮮人実態を報告、国際シンポで広島県委員		HT0401201
19770803	中国	4 段カ写真	受刑被爆者に「手帳」、国際シンポに出席に韓国人		HT0401201
19770805	中国夕	2 段	放置された実態に光を、韓国人被爆者の霊慰める		HT0401201
19770806	中国朝	1 段	核禁も全国集会	韓国原爆被害者協会長が挨拶	HT0401201
19770807	中国	2 段	【広場】憎悪の念が死線を克服	読者投稿欄	HT0401201
19770807	中国	4 段写真	原爆病院やホーム見舞う、藤田長官	朝鮮人被爆者について陳情	HT0401201
19770821	中国	9 段写真	広島刑務所で被爆、韓国人と日本人医師、32 年ぶり紅茶で再会、大阪、風雪に耐えた苦境での約束		HT0900300
19770825	中国夕 1	6 段	在韓被爆者、韓国教会女性連から本社へ「実態報告書」、二世問題に悩む、専門の病院の建設訴える		HT0401201、HT0900400
19771012	中国夕 2	8 段写真	韓国人被爆者再治療で来日、ベン蓮玉さん 2 年半ぶり長崎へ、大牟田市民が支援、切々「祖国の実態悲惨」		HT0900300
19771201	中国朝広	4 段写真	さらに 10 人の原爆手帳申請、県朝鮮人連絡協		HT0900300
19771217	中国朝社	4 段	在韓被爆者調査へ、核禁会議が委員会設置、国連委に来春報告		HT0900300
19780305	中国朝社	5 段写真	朝鮮人被爆死にも遺族給与金を、あす国に申請書、「差別扱い、納得できぬ」、広島の老夫婦		HT0900300
19780306	中国朝社	3 段写真	広島の韓国人原爆慰霊碑、金駐日大使初めて参拝、原爆病院の患者も慰問		HT0900300
19780307	中国朝社	2 段	援護法適用へ申請書を提出、広島の朝鮮人被爆者遺族		HT0900300
19780330	中国夕 1	11 段	被爆者手帳訴訟の孫さん、最高裁交付認める、国籍超えて救済を、福岡県の上告を棄却		HT0401202、HT0900400
19780331	中国朝 1	8 段	韓国人被爆者、広がった救済の道、「手帳」訴訟孫さん勝訴の最高裁判決、国の消極姿勢転換迫る		HT0401202
19780401	中国夕 1	5 段写真	戦友の韓国人被爆者救え、長崎に招き入院治療、同部隊の生存者ら「手帳」交付にも奔走		HT0900300
19780402	中国朝 2	1 段	外国人被爆者特別法を要望、韓国原爆被害者援護協会		HT0401202
19780403	中国	5 段	国外被爆者へ国家的援護を		HT0401202
19780404	中国朝社	1 段	韓国人被爆者金さんも申請		HT0401202
19780404	中国朝社	3 段写真	被爆者手帳この喜び、申請から 7 年孫さんに交付		HT0401202
19780405	中国	1 段	密航被爆者の手帳交付に拍手	読者投稿欄	HT0401202
19780405	中国朝社	4 段	朝鮮人遺族に援護法を、老夫婦が再申請、広島		HT0401201
19780407	中国	10 段写真	孫さんの被爆者手帳訴訟、援護法制定へ突破口、国家補償性格付け、韓国人被爆者救済の門戸も拡大、政府迫られる姿勢転換	特集記事	HT0401202、HT0900400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19780414	中国	5段	【文化】被爆朝鮮人と国家の道義、孫振斗訴訟最高裁判決の意味、戦争遂行責任認める、政府に救済・補償の義務	執筆：久保田康史（弁護士）	HT0401202、HT0501400
19780420	中国	2段カ	孫振斗さんの在留認めよ		HT0401202
19780420	中国	5段写真	人生狂わせた被爆のケロイド、韓国婦人に手帳、広島市が8人目		HT0900400
19780420	中国朝2	3段カ	被爆者手帳交付の孫さん、治療終了まで在留認める？、衆院委で法相が示唆		HT0401202
19780426	中国朝社	2段	原爆手帳、厳さんに近く交付、10年ぶり再申請		HT0900400
19780502	中国朝2	2段	「朝鮮人被爆者も国連へ」、旅券発行求め署名運動開始		HT0900400
19780503	中国朝社	3段	厳粉連さんに原爆手帳交付、広島市		HT0900400
19780509	中国朝広	3段写真	【ひとみ】被爆者健康手帳の交付を受けて念願果たした厳粉連さん、今後の運動に勇気、医療センター実現めざす		HT0900400
19780518	中国朝社	4段	朝被協の李会長に手帳、広島市、国連行きは手続き難航		HT0900400
19780520	中国朝2	3段	朝鮮人被爆者も同行、法務省2人に再入国許可証、特別総会		HT0900400
19780802	中国朝	4段	ソウルで初の原爆写真展、百貨店会場、多くの市民		HT0501400
19780802	中国朝	2段	被爆者から要望を聞く会、朝被協代表にも意見発表の場を、県・広島市に申し入れ		HT0501400
19780806	中国朝広	4段写真	韓国人慰霊祭も、また225人の過去帳奉納		HT0900400
19780807	中国朝2	1段	朝鮮総連が被爆者対策、朝被協集会で決める		HT0501400、HT0900400
19780816	中国朝広	2段	女高生ら3人が在韓被爆者慰問、広島折鶴の会、18日出発		HT0501400
19780826	中国朝2	2段	被爆者実態調査、韓国政府すでに着手、訪韓の広島折鶴の会代表表明かす		HT0900400
19780904	中国朝	3段	【文化】『朝鮮人被爆者孫振斗の告発』、日本の侵略責任問う、「全国市民の会」が刊行、裁判経過資料で跡づけ		HT0501400
19780914	中国朝社	4段	生活苦・病気がち、朝鮮人被爆者大半が訴える、初の実態調査		HT0900400
19780915	中国朝社	2段	孫振斗さんが控訴取り下げ、退去令無効確認訴訟		HT0900400
19780920	中国朝1	10段写真	韓国人被爆者孫さん、在留を特別許可、原爆症治療合法に、法務省最高裁判決を考慮		HT0501400、HT0900400
19781013	中国朝広	6段写真	韓国女性に念願の手帳、手記が「被爆証人」、広島		HT0900400
19781017	中国朝社	7段	広島の朝鮮人被爆者、強い反核・反戦意識、初めて「核」アンケート、広島女子大小寺教授ら、平和利用にも反対、援護は日本人並みに		HT0900400
19781103	中国朝	4段写真	8ミリで韓国人被爆者の記録、あす公開、「ヒロシマ」の心問う、岩国の池さん		HT0900400
19781112	中国朝	3段写真	治療来日の韓国人女性、被爆者手帳を申請、広島		HT0501400
19781117	中国朝2	4段写真	朝鮮人被爆者調査、日本政府も本腰を、朝鮮総連議長広島で語る		HT0401201
19781206	中国朝社	8段写真	被爆二世の会韓国にも、23日ソウルで発足、若者らの呼びかけ実を結ぶ、健康調査など要求へ		HT0900400
19781222	中国夕1	7段	在韓被爆者「放置」浮き彫り、「市民の会」初の総合調査、病弱・深刻な生活、日本政府の援護求める		HT0900400
19790108	中国朝	5段写真	【文化】光におびえる被爆女性、仁川に朱明順さんを訪ねて	執筆：深川宗俊（歌人）	HT0900400
19790205	中国夕社	4段	朝鮮人被爆者の手記集出版へ、生活苦など生々しく、8・6までに、約50人から取材、朝被協		HT0900400
19790305	中国朝社	3段	「二世の会」の結成へ準備会、広島県内の朝鮮人被爆者		HT0900400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19790306	中国朝広	3段写真	【ひとみ】「朝鮮人被爆二世の会」の準備委員会代表になった白漢英さん、まず意識づくりを、民族問題考える場にも	人物紹介欄	HT0900400
19790320	中国朝2	3段	被爆朝鮮人の遺族給与金、支払い請求却下、厚生省		HT0501400
19790324	中国朝社	1段	特別在留中の韓国被爆者盗みで逮捕		HT0501400
19790430	中国朝社	4段	被爆二世協結成大会開く、在日朝鮮人		HT0501400
19790516	中国朝社	2段	広島で治療の在韓被爆者、金さんら2人健康手帳申請		HT0501400
19790605	中国朝社	6段	強制連行された朝鮮人、被爆実態調査へ、「人権を守る会」など広島・長崎で、総連も全面的協力、差別との重苦を克明に、広島県朝被協が体験記		HT0501400
19790614	中国朝社	4段	韓国の被爆者診療所へ、核禁会議が医師派遣、広島		HT0501400
19790622	中国朝2	3段	在韓被爆者、渡日治療や医師交流、政府救済策の検討急ぐ		HT0501400
19790622	中国夕1	2段	医師交流は努力、韓国人被爆者援助で厚相談		HT0501400
19790625	中国朝社	4段	韓国への原爆病院建設、被爆者の声尊重を、現地診療の河村病院長帰国		HT0501400
19790627	中国朝2	4段	韓国の被爆者に援護を、市民の会が署名運動、来月には実態調査		HT0501400
19790704	中国朝	2段	窃盗の韓国人被爆者に温情、福岡簡裁が猶予判決		HT0501400
19790704	中国朝2	5段	在韓被爆者、重症者日本で治療、救済策で日韓与党合意		HT0501400
19790717	中国	4段	被爆朝鮮人体験記の重み	読者投稿欄	HT0501400
19790717	中国夕1	8段写真	【ヒロシマあらかると】一近づく8・6一、出版パーティ、問いかけに心重く		HT0501400
19790721	中国朝	1段	強制連行一被爆の朝鮮人、実態調査を10月に延期、人権を守る会		HT0501400
19790805	中国	2段	人を差別する風潮をなくそう	読者投稿欄	HT0501400
19790805	中国朝	8段写真	【この人この本】「白いチョゴリの被爆者」の李実根氏、重い半生つづる、偏見と差別いまなお	新刊紹介	HT0501400
19790805	中国朝2	1段	韓国原爆被害者協副会長が手帳申請		HT0501400
19790806	中国朝広	4段写真	韓国人慰霊祭、143人加えた過去帳奉納、上平井中OB（東京）らも参加		HT0501400
19790807	中国朝2	4段	被爆者援護法、七人委結論待つ、厚相南米に医師派遣検討		HT0501400
19790815	中国朝広	3段写真	【ひとみ】今こそ本格援護を、韓国にも専門病院必要、被爆者健康手帳の交付を受けた郭貴勲さん	人物紹介欄	HT0501400
19790815	中国朝広	1段	厚生・外務両省に救援策促進を要望、来日の郭貴勲副会長		HT0501400
19790919	中国朝2	3段	在韓被爆者の治療、具体策を協議、張医政局長ら厚生省訪問		HT0501400
19791004	中国朝社	4段	治療中の韓国人被爆者、孫振斗また窃盗、福岡		HT0501400
19791026	中国15	7段	広島県読書感想文コンクール、中国新聞社賞、被害者から加害者への目覚め、「白いチョゴリの被爆者」を読んで〈広島県朝鮮人被爆者協議会編・労働旬報社刊〉		HT0501400
19791027	中国朝社	3段	朝鮮人被爆者の実態にメス、日朝合同来月現地調査		HT0501400
19791030	中国朝社	1段	被爆朝鮮人の実態探る、長崎で調査団発足		HT0501400
19791031	中国朝広	1段	広島で朝鮮人被爆者実態現地調査団		HT0501400
19791103	中国朝社	6段写真	朝鮮人被爆者の「二重苦。切々、広島、長崎、「強制連行を恨む」、差別にメス、現地調査始まる		HT0501400
19791107	中国朝社	6段写真	惨状生々しく訴え、広島で朝鮮人被爆者現地調査、徴用工の実態など追跡		HT0501400
19791108	中国朝広	4段写真	民族の苦しみ切々と、朝被協の李会長、広島商で平和講演		HT0501400
19791110	中国朝社	8段	朝鮮人被爆者の実態調査終わる、広島・長崎、差別・病気・貧困の窮状訴え、相次ぐ行政告発52人から聞き取り、強制連行の飯場確認、長崎		HT0501400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19791111	中国朝社	3段	朝鮮人含む潜在被爆者、国が調査すべき、広島市課長が、後退、発言、実態調査団との会見、舌足らずだった、市長室長陳謝		HT0501400
19791120	中国朝社	3段	被爆朝鮮人救済急げ、厚生省に実態調査団要請		HT0501400
19791122	中国朝	2段	被爆朝鮮人の救済策進めよ	読者投稿欄	HT0501400
19791125	中国	2段	朝鮮人被爆者、国は救済急げ	読者投稿欄	HT0501400
19791128	中国朝社	4段写真	朝鮮人被爆者と交流、尼崎の中学生グループ、文通で差別実態学ぶ、広島の李さん学校を訪問、「タネ実った」と涙		HT0501400
19791213	中国朝社	7段	孫振斗（韓国人被爆者）盗みで実刑、福岡簡裁、確定すれば強制送還も		HT0501400
19791222	中国朝広	6段写真	広島・長崎の実態報告書まとまる、朝鮮人被爆者一苦しみ浮き彫り、日本人並み援護を、生々しい証言をつづる		HT0501400
19800201	中国朝2	1段	韓国人被爆者治療を要望、韓国被害者協が厚相に		HT0500200
19800309	中国朝2	4段	在韓被爆者、原爆病院で治療、今月末第一陣、政府間レベルでは初		HT0500200
19800312	中国朝広	2段	被爆者手帳を申請、治療中の韓国2女性、広島		HT0500200
19800317	中国夕社	4段写真	卒業記念に千羽ヅル、東京の小学生韓国人被爆者に贈る		HT0500200
19800409	中国朝2	5段	朝鮮人被爆者の実態解明、12日初のシンポ、原爆広島総合研		HT0500200
19800413	中国	4段写真	朝鮮人問題シンポ、早急に実態調査を、援護の充実強く訴え		HT0500200
19800702	中国夕社	4段	孫被告懲役10月に減刑、強制送還の恐れ薄らぐ、福岡高裁		HT0500200
19800715	中国朝2	5段	朝鮮人被爆者、5日に初の全国集会、広島援護強化など訴え		HT0500200
19800729	中国1	8段写真	被爆者35年⑮第二部なぜ「援護法」か、外国人被災者に光を、法運用に差別・偏見、生活や治療に援助望む	連載記事	HT0500200
19800804	中国	3段	在韓被爆者の窮状を訴え、来日の郭氏「囲む会」で		HT0500200
19800805	中国夕社	3段写真	新たに123人を奉納、韓国人犠牲者の慰霊祭		HT0500200
19801025	中国朝2	3段	韓国で初の原爆展、核禁会議来月10日から10日間		HT0500200
19801027	中国4	6段	【社説】待たされた韓国在住被爆者	社説	HT0500200
19801102	中国朝1	3段	17日に第1陣10人、在韓被爆者広島で治療		HT0500200
19801108	中国朝2	3段	18日に原爆病院入院、在韓被爆者10人治療日程決まる		HT0500200
19801111	中国朝社	2段	韓国の被爆者診療へ出発		HT0500200
19801118	中国朝	7段写真	韓国人被爆者が来広10人原爆病院で入院治療		HT0500200
19801118	中国夕1	4段写真	来広の在韓被爆者10人、原爆病院に入院		HT0500200
19801119	中国朝社	4段写真	本格的な治療を期待、在韓被爆者原爆病院で早速問診		HT0500200
19801214	中国広	8段写真	【サンデーインタビュー】先月18日から広島原爆病院で治療を受けている在韓被爆者、落ち着き治療に専念、韓国にもぜひ原爆病院を		HT0500200
19801217	中国朝広	3段	県朝被協が座り込み、原爆慰霊碑前に20人、7人委意見書に抗議		HT0500200
19810203	中国夕	5段写真	広島で治療の在韓被爆者、軽症の3人が帰国		HT0500300
19810305	中国朝広	5段	残る4人も12日帰国、在韓被爆者治療長引き、広島		HT0500300
19810313	中国朝社	6段写真	広島で治療の在韓被爆者、「みなさんの親切に感謝」、最後の4人も帰国		HT0500300
19810403	中国	7段写真	異議申し立ても却下、被爆朝鮮人の弔慰金請求、厚生省再び「日本国籍ない」		HT0500300
19810514	中国朝2	5段写真	日本国籍ない遺族へ、援護法の適用を、朝鮮人被爆者協厚相に要請		HT0500300
19810522	中国朝	4段	届け朝鮮人被爆者の叫び、記録映画の製作決まる、証言基に苦難の道		HT0500300

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19810614	中国	3段	朝鮮人被爆者、長崎は1万3千人、市が初の調査で 解明		HT0500300
19810704	中国朝広	7段	体制の違い超え、南北から編集スタッフ、被爆朝鮮 人白書づくり		HT0500300
19810708	中国広	3段	朝鮮人被爆者の記録映画、平和記念公園でロケ		HT0500300
19810731	中国朝1	5段写真	被爆者の実態調査、北朝鮮でも着手、労働党書記中 四国学者訪朝団に表明、「広島・長崎」空白解明に期 待	執筆：林立雄記者	HT0500300
19810805	中国朝	2段	韓国政府も調査に積極的姿勢を	読者投稿欄	HT0500300
19810806	中国朝広	2段	[韓国人被爆者慰霊関係記事]		HT0500300
19810908	中国朝社	4段	放置朝鮮人被爆者の遺骨、ゆだ苑が収集供養へ、山 口		HT0500300
19810918	中国	2段	北朝鮮在住被爆者、病院調査では数人、社党訪朝団 詳細な把握を要請		HT0500300
19811031	中国朝社	7段	朝鮮人被爆者の記録映画、「世界の人へ」完成、来月 から試写会、苦難の歴史`証言、		HT0500300
19811105	中国朝社	2段	韓国の被爆者診療へ、ことしも医師派遣、核禁広島		HT0500300
19811105	中国朝社	9段写真	原爆告発2つの叫び、朝鮮人被爆者の記録映画試写会、 ヒロシマを主題に創作舞踊上演、東京、「本当の歴史 知って」、忘れまいあの惨劇		HT0500300
19811107	中国朝広	4段写真	にじむ二重の苦しみ、朝鮮人被爆者映画「世界の人へ」 広島でも試写会		HT0500300
19811110	中国朝社	2段	【ひとこと】朝鮮人被爆者の記録映画監督 盛善吉さ ん	人物紹介欄	HT0500300
19811111	中国読	2段	【広場】朝鮮被爆者見直す原点に	読者投稿欄	HT0500300
19811115	中国朝社	6段	台風で遭難広島沼隈の寺に眠る、韓国人徴用工の遺 骨を祖国へ、きょう返還運動の会結成、調査した深 川さん		HT0500300
19811118	中国	2段	事前調査団きょう派遣、在韓被爆者の渡日治療		HT0500300
19811118	中国朝広	3段	【ひとこと】広島市衛生局原爆対策部長	人物紹介欄	HT0500300
19811125	中国	5段	在韓被爆者、年間50人日本で治療、両政府合意来月 にも十数人来日		HT0500300
19811219	中国朝広	5段	在韓被爆者19人あす来日、政府間合意治療第1陣広 島受け入れ13人		HT0500300
19811221	中国	4段写真	韓国の被爆者13人広島入り、原爆病院で治療		HT0500300
19811221	中国5	6段	【社説】外国在住被爆者とヒロシマ	社説	HT0500300
19811221	中国夕	3段写真	在韓被爆者13人、原爆病院に入院、専門医師の診察 受ける		HT0500300
19811222	中国朝	5段写真	「完全に治して帰りたい」、在韓被爆者原爆病院入院 の13人		HT0500300
19811222	中国朝	7段写真	36年ぶり遺骨発掘、宇部放置の被爆朝鮮人2体		HT0500300
19811223	中国朝広	2段	【ひとこと】韓国原爆被害者協会会長	人物紹介欄	HT0500300
19811224	中国	3段	壱岐島で収集の遺骨、韓国返還の協力を、県へ原爆 被害者協会著		HT0500300
19811224	中国朝広	3段	韓国返還に協力を、県へ原爆被害者協会会長		HT0500300
19820206	中国朝社	3段写真	第一陣元気に帰国、広島で治療の在韓被爆者		HT0500400
19820318	中国朝社	3段写真	反核集会前に200人が参加、県朝鮮人被爆者集会		HT0500400
19820326	中国	2段	在韓被爆者に配慮が足りぬ	読者投稿欄	HT0500400
19820514	中国	4段	在韓被爆者の来日治療、3回目の今年は15人		HT0500400
19820515	中国朝広	3段	米国への出入国支援、県朝被協会長に招待状、NGO 軍縮委		HT0500400
19820518	中国朝	5段写真	在韓被爆者広島入り、10人治療へ健康手帳申請		HT0500400
19820519	中国朝	5段写真	広島での治療に感謝、韓国原爆被害者協辛会長ら市 長訪問		HT0500400
19820523	中国	6段	【社説】在韓被爆者に本格対策急げ	社説	HT0500400
19820616	中国	1段	2陣最後の1人帰国、渡日治療の在韓被爆者		HT0500400
19820716	中国	4段写真	未払い賃金の供託記録、法務局へ閲覧申請、三菱の 韓国人元徴用工ら		HT0500400
19820717	中国朝	7段写真	7人治療終え帰国、韓国人被爆者再発の不安は消えず		HT0500400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19820804	中国	3段	教科書問題で批判、県朝鮮人被爆者が集い、ヒロシマ		HT0500400
19820806	中国朝広	3段写真	かみしめる悲しみ、韓国人の遺族も献花や歌		HT0500400
19820901	中国	1段	入国ビザ遅れあす広島入り、治療に来日の在韓被爆者		HT0500400
19820903	中国	4段写真	在韓被爆者広島入り、11人きょう原爆病院入院		HT0500400
19820903	中国夕1	4段写真	「やっと治療に専念」、在韓被爆者原爆病院に入院		HT0500400
19820904	中国朝社	4段写真	「専門医治療で元気に」、在韓被爆者原爆病院に入院		HT0500400
19821012	中国	1段	在韓被爆者に国の補償必要	読者投稿欄	HT0500400
19821018	中国朝社	1段	在韓被爆者診療、医師ら5人出発		HT0500400
19821019	中国夕1	8段写真	韓国被爆者医師団派遣10回目迎え存廃の転機、民間救済役果たす、訪日診療実現で見直しへ		HT0500400
19821029	中国朝社	3段	窃盗で服役中の孫振斗、在留更新認められず		HT0500400
19821104	中国夕1	4段写真	心の治療にも感謝、広島原爆病院を退院、在韓被爆者14人が帰国		HT0500400
19821120	中国	3段写真	【話題のプラザ】韓国人被爆者に救済を、高校生が対策充実を訴え		HT0500400
19821214	中国朝広	4段写真	韓国の被爆者救おう、広島の医師ら募金活動へ		HT0500400
19830123	中国5	6段	【社説】強めよう在韓被爆者の救援	社説	HT0500500
19830203	中国朝広	3段写真	徴用韓国人の遺骨送還、早期実現の見通し、韓国側が予算措置約束、対策会の深川代表		HT0500500
19830216	中国朝社	3段写真	原爆手帳今度こそ、朝鮮人被爆者岩国の権さん、2証人見つけ出し3年ぶり再申請		HT0500500
19830406	中国朝広	4段	在韓被爆者、15人が広島入り、原爆病院で2ヵ月治療		HT0500500
19830406	中国朝広	2段	日韓の僧が被爆者供養、韓国から遺族ら8人、広島		HT0500500
19830427	中国朝広	5段写真	在韓被爆者治療始まる		HT0500500
19830510	中国朝	3段	【広場】在韓被爆者の救援金に感謝	読者投稿欄	HT0500500
19830602	中国朝広	1段	韓国人被爆者15人広島入り、原爆病院で2ヵ月治療		HT0500500
19830629	中国朝広	4段写真	韓国人被爆者15人原爆病院へ入院、2ヵ月の治療に熱い思い、内臓障害など訴え		HT0500500
19830701	中国朝広	2段	【ひとこと】広島原爆病院で入院治療を受けている韓国人被爆者	人物紹介欄	HT0500500
19830806	中国朝広	5段写真	オモニの詩朗読、過去帳に新たに13人、韓国人犠牲者慰霊祭		HT0500500
19830830	中国朝広	3段写真	「悪いところ治りました」、韓国人被爆者15人、渡日治療終え帰国		HT0500500
19831005	中国朝社	1段	在韓被爆者渡日治療、第7陣19人11日に来日、広島原爆病院には13人		HT0500500
19831010	中国朝広	2段	欧州反核の旅に出発、県朝被協李会長4カ国で市民と交流		HT0500500
19831013	中国朝社	2段写真	韓国人被爆者13人広島入り、原爆病院にきょう入院		HT0500500
19831014	中国朝広	2段	原爆慰霊碑に花束、治療渡日の在韓被爆者		HT0500500
19831015	中国朝広	4段写真	在韓被爆姉妹広島で再会、渡日治療の許鐘順・龍順さん		HT0500500
19831018	中国朝	1段	キリスト教徒ら2万が反核集会、西独広島の被爆者も		HT0500500
19831018	中国朝社	2段	韓国へ今年も医師団を派遣、核禁会議23日出発		HT0500500
19831020	中国朝	2段	「原爆許すまじ」響く、ボンで反核集会、李実根さん(広島)が危機訴え		HT0500500
19831023	中国朝社	5段	韓国でも被爆者治療無料化へ、金長官核禁会議医師団に語る、85年メド		HT0500500
19831029	中国朝社	2段	在韓被爆者治療、来年度の対象者を来月から現地調査		HT0500500
19831109	中国朝広	3段写真	核配備へ強い危機感、西独反核の旅、李さん帰国報告		HT0500500
19831122	中国朝広	7段写真	韓国の被爆者実態調査、日本の支援団体が出版、4年ぶり日の目、近く韓国・英語でも		HT0500500

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19831123	中国朝社	3段	一挙に100人受け入れ、在韓被爆者、渡日治療のワク広げる		HT0500500
19831213	中国広	3段写真	原爆慰霊碑の平和公園内設置、市長に要望書提出、市側近い所に候補地探す、県朝鮮人被爆者協		HT0500500
19831214	中国朝社	3段写真	「元気に帰国うれしい」、治療終え韓国人被爆者14人		HT0500500
19831221	中国夕社	4段	被爆治療孫さんの保証人辞意、牧師盗みなどに嫌気		HT0500500
19840108	中国	6段	平岡敬著、無援の海峡、韓国人差別を告発	新刊紹介	HT0500600
19840110	中国朝社	6段写真	在韓被爆者救援の河村病院長、全大統領が表彰へ、12年既に50人治療		HT0500600
19840128	中国朝社	3段	韓国人被爆者渡日治療、第8陣は20人、来月6日広島・長崎へ		HT0500600
19840207	中国朝社	5段写真	在韓被爆者広島入り、12人きょうから入院治療		HT0500600
19840207	中国朝広	1段	平和公園内へ移転申し入れ、韓国人原爆犠牲者慰霊碑建立委員会		HT0500600
19840208	中国朝社	3段写真	在韓被爆者の12人入院治療		HT0500600
19840209	中国朝広	2段	【ひとこと】広島原爆病院入院治療を受ける在韓被爆者	人物紹介欄	HT0500500
19840310	中国朝広	4段	韓国の被爆徴用工廬さん、広島で3度目の治療		HT0500600
19840330	中国朝広	2段	さらに12人広島へ、在韓被爆者の渡日治療		HT0500600
19840407	中国朝広	5段	在韓被爆者12人治療を終え帰国、広島		HT0500500
19840411	中国朝広	3段写真	健康手帳受け入院、広島入りの在韓被爆者12人		HT0500500
19840602	中国朝社	2段	在韓被爆者渡日治療、第10陣の12人、11日広島入り		HT0500600
19840603	中国	3段写真	森滝日記(146)第6部風化に抗して、密航被爆者、外国人に手帳交付の道開く		HT0500600
19840610	中国朝社	2段	在韓被爆者12人、原爆病院に入院治療を終え帰国		HT0500600
19840611	中国朝社	2段	被爆した韓国人徴用工、国が第2次調査へ、壱岐・対馬		HT0500600
19840612	中国朝社	5段写真	治療の11人広島入り、在韓被爆者きょう手帳交付		HT0500600
19840801	中国朝広	3段	在韓被爆者、日本で再治療を、あす医師ら支援委結成		HT0500600
19840801	中国朝広	2段	第11陣が14日来日、在韓被爆者の渡日治療		HT0500600
19840803	中国朝社	1段	在韓被爆者の来日治療支援、広島委を結成		HT0500600
19840804	中国5	6段	【社説】在韓被爆者の救援を急ごう	執筆：石井浩史	HT0500600
19840806	中国朝1	3段	長崎で被爆の朝鮮人3万人、市民グループが報告		HT0500600
19840807	中国朝2	1段	日本政府の対策を要望、ソウルで被爆者追悼式		HT0500600
19840815	中国朝社	3段写真	在韓被爆者12人広島入り、「やっと治療が受けられる」		HT0500600
19840816	中国朝社	3段写真	在韓被爆者12人、原爆病院に入院		HT0500600
19841012	中国朝社	1段	16日に広島入り、在韓被爆者10人		HT0500600
19841016	中国朝社	2段写真	在韓被爆者11人、治療終え帰国		HT0500600
19841017	中国朝2	2段	渡日治療拡大を、韓国被爆者協会長日本政府に要望書		HT0500600
19841029	中国朝社	3段	孫振斗を逮捕、覚せい剤所持		HT0500600
19841108	中国朝社	1段	来年も100人、在韓被爆者渡日治療		HT0500600
19841111	中国朝1	8段写真	空白の過去帳⑦第1部埋もれた被爆死を追う、国籍、生存者さえも不明、放置された朝鮮人犠牲者	連載記事	HT0500600
19841203	中国朝社	3段	北朝鮮へ来年代表団、長崎県被爆者手帳友の会、交流深め来日治療調査		HT0500600
19841212	中国朝社	4段写真	在韓被爆者2人広島入り、民間初の渡日治療		HT0500600
19841218	中国朝社	5段写真	在韓被爆者10人、渡日治療終え帰国		HT0500600
19850115	中国朝9	7段	それぞれの昭和史⑦その1歳月、医師河村虎太郎さん、在韓被爆者診療に情熱、加害者意識が実践の原点	連載記事	HT0500700
19850126	中国朝	3段	在韓被爆者、今年の渡日治療は60人		HT0500700
19850228	中国朝2	3段	在韓被爆者の入院費を補助、核禁会議が年間300万円		HT0500700
19850301	中国朝社	2段	韓国に原爆病院を、広島「考える集い」で訴え		HT0500700
19850315	中国夕	7段写真	【当世新女気質】韓国語学び心つなぐ、被爆者来日を支援	語り手：井上春子（主婦）	HT0500700

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19850316	中国朝社	1 段	韓国の被爆者 20 人が来日へ、広島・長崎で治療		HT0500700
19850403	中国朝広	4 段写真	韓国人慰霊碑に参拝、チョー・ヨンピルさんが来広		HT0500700
19850423	中国朝広	9 段写真	徴用工時代の親切忘れません、広島で治療を受けた韓国人被爆者徐さん、元上司捜し求め 40 年ぶりに再会		HT0500700
19850519	中国朝広	2 段	在日韓国女性の被爆体験、聞き書きでまとめ出版、創価学会の県女性平和委		HT0500700
19850522	中国朝	1 段	28 日に 18 人来日、在韓被爆者治療		HT0500700
19850528	中国朝社	2 段	在韓被爆者が治療終え帰国		HT0500700
19850529	中国朝社	1 段	10 人広島入り、渡日治療の在韓被爆者		HT0500700
19850530	中国朝	1 段写真	県庁往来 29 日 [辛泳洙会長のコメント所載]		HT0500700
19850604	中国朝社	1 段	新たに 2 人広島入り、在韓被爆者の治療		HT0500700
19850620	中国朝広	2 段	【ひとこと】主婦 柴田章子さん	人物紹介欄	HT0500700
19850720	中国朝社	1 段	韓国人被爆者 22 人治療で 26 日に来日、ことし最後の第 3 陣		HT0500700
19850727	中国朝社	1 段	在韓被爆者 8 人治療に広島入り		HT0500700
19850806	中国	1 段	被爆者援助を要請、韓国の人権擁護連盟		HT0500700
19850806	中国朝広	2 段写真	新たに 26 人、韓国人慰霊碑		HT0500700
19850807	中国朝 2	6 段写真	「朝鮮人被爆者に迷惑かけた」、首相政府責任を表明、遺骨送還へ調査約束、李・張氏ら 7 人の訴え聞く		HT0500700
19850820	中国朝広	5 段	被爆韓国人徴用工の遺骨、年内送還実現へ、来月から経費など折衝、外務・厚生省		HT0500700
19850921	中国朝社	2 段写真	今年最後の治療グループ、在韓被爆者 10 人帰国		HT0500700
19850927	中国朝社	2 段	渡日治療の継続を陳情、韓国原爆被害者協会会長		HT0500700
19851108	中国朝社	4 段	在韓被爆者の渡日治療、来年 75 人で合意		HT0500700
19851115	中国朝	2 段	在韓被爆者渡日治療、韓国側の意向打診中、衆院委で厚生省答弁		HT0500700
19851211	中国朝社	3 段	孫被告上告せず、服役後に国外退去か		HT0500700
19860131	中国朝社	5 段写真	在韓被爆者渡日治療、広島市が継続表明、訪日の議員に申し入れ		HT0500800
19860225	中国朝 5	6 段	【社説】強めよう韓国被爆者の救援	社説、執筆：石井浩史	HT0500800
19860228	中国朝社	2 段	ヒロシマで南北平和対話、朝鮮人被爆者らが来月 9 日にシンポ		HT0500800
19860319	中国朝社	4 段	韓国被爆者が 25 日来日、ことしの渡日治療第 1 陣		HT0500800
19860327	中国朝社	2 段	在韓被爆者の 12 人広島入り、原爆病院に入院		HT0500800
19860404	中国朝広	4 段	在韓被爆者の渡日治療、来年以降も継続を、支援団体国に要請へ		HT0500800
19860411	中国朝	5 段	被爆者関連法案、衆院委で審議入り		HT0500800
19860413	中国広	6 段写真	在韓被爆者渡日治療を続けて、50 人が出席、考える集い、旅費や調査費も日本側で負担を、韓国被爆者協会、辛会長に聞く		HT0500800
19860419	中国朝社	7 段写真	韓国原爆被害者協、在韓被爆者の救済を、日弁連に申立書、「放置は人権侵害」		HT0500800
19860523	中国朝社	3 段写真	在韓被爆者渡日治療、第 2 陣 12 人広島入り		HT0500800
19860607	中国朝広	6 段写真	ヒロシマの医師たち⑤、河村虎太郎さん、在韓被爆者招き治療、日韓政府合意継続を求める	連載記事	HT0500800
19860607	中国夕	4 段写真	ヒロシマの女たち (33)、韓国・朝鮮人被爆者①、戦争と差別を告発、不自由な体おし語り部	連載記事、執筆：木村雅子 (広島女性史研究会)	HT0500800
19860614	中国夕	4 段写真	ヒロシマの女たち (34)、韓国・朝鮮人被爆者①、誇りを持ち生きる、一日も早い祖国統一を	連載記事、執筆：木村雅子 (広島女性史研究会)	HT0500800
19860725	中国朝 1	8 段写真	36 万人の被爆者⑦被団協運動 30 年、第 1 部実態、手帳 41 年目の申請、遠いヒロシマ、2 日後入市「被爆」と思わず		HT0500800
19860729	中国夕 1	6 段写真	碑のある風景⑤、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、亀に託す故国への思い	連載記事	HT0500800

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19860801	中国朝	6段	在韓被爆者の渡日治療、韓国が打ち切り通告、11月末に期限切れ「医療体制整った」、荒木広島市長ら治療継続を要望		HT0500800
19860801	中国広	7段写真	渡日治療打ち切り、不安募らせる被爆者、支援団体援護の道を模索		HT0500800
19860802	中国朝5	6段	【社説】渡日被爆治療の道閉ざすな	社説	HT0500800
19860803	中国朝2	4段写真	渡日治療打ち切り、在韓被爆者を切り捨てるな、辛泳洙被害者協会長が会見		HT0500800
19860803	中国朝2	2段	日弁連の4人、7日に訪韓、在韓被爆者の実態調査		HT0500800
19860827	中国朝広	3段写真	被爆韓国人の碑完成、芸北町		HT0500800
19860920	中国朝広	2段	韓国人慰霊碑を平和公園の中に、県外から340人署名、京都在住の宋さん、広島市に提出		HT0500800
19860925	中国夕社	9段写真	広島出身のサッカーの木村選手、韓国老被爆者が激励、アジア大会、懐かしい思い出の街、8年後広島で再会誓う		HT0500800
19860926	中国朝社	3段写真	在韓被爆者渡日治療、9人が広島入り		HT0500800
19860927	中国社	7段写真	在韓被爆者、断たれる渡日治療の道①、届かぬ援護、手帳を生かせぬ本国、治療体制もまだ不十分	特集記事	HT0500800
19860928	中国社	7段写真	在韓被爆者、断たれる渡日治療の道②、支援の輪、活動強める民間団体、朝鮮支配の過ちを反省	特集記事	HT0500800
19861004	中国広	1段	韓国へ第13次被爆者診療団、12日から核禁会議派遣		HT0500800
19861015	中国朝広	2段	「もうひとつの・・・」、広島で完成試写会		HT0500800
19861024	中国朝社	4段	在韓被爆者、渡日治療継続を要請、日弁連が厚生・外務省に		HT0500800
19861114	中国朝1	5段	在韓被爆者の渡日治療、今月で打ち切り確実、厚生省課長帰国し語る		HT0500800
19861114	中国朝社	4段	在韓被爆者の渡日治療打ち切り、「新たなパイプ必要」、広島の民間支援組織、公費助成など望む		HT0500800
19861126	中国夕	6段写真	在韓被爆者の渡日治療、最後の一行9人帰国、広島		HT0500800
19861127	中国朝5	6段	【社説】対案を急げ在韓被爆者治療	社説	HT0500800
19861127	中国朝社	4段	在韓被爆者、渡日治療終え9人帰国、広島今後は民間で受け入れ		HT0500800
19861215	中国	10段写真	【視点地域を考える】在韓被爆者へ援護継続を、渡日治療制度の打ち切り、民間のパイプ太く、国・広島市の支え必要	特集記事、執筆：安東善博記者（報道部）	HT0500800
19861218	中国朝広	3段写真	朝鮮人、韓国人、被爆資料の改善を、誤った記述も、大阪の中学生らから原爆資料館へ要望書		HT0500800
19861226	中国朝広	4段写真	被爆の徴用韓国人遺骨、広島別院へ仮安置		HT0500800
19870228	中国朝広	4段写真	朝鮮・韓国人被爆者証言映画、もうひとつのヒロシマ―アリランのうた、12・14日に広島で初公開、制作者の朴さんの講演も		HT0500900
19870320	中国朝文	7段写真	【文化】被爆朝鮮・韓国人の真実描く、朴寿南さんの映画「もうひとつのヒロシマ」、国奪われ生き地獄、「ピカに三八度線はない」	特集記事	HT0500900
19870324	中国朝広	3段	被爆韓国・朝鮮人に理解を、教育研究協、来月から広島で連続講座		HT0500900
19870401	中国朝1	3段	在韓被爆者、韓国政府が国内治療、今月から予算1700万円を計上		HT0500900
19870519	中国朝社	4段	「なぜ朝鮮人が被爆したの」、原爆資料館に展示説明申し入れ、大阪の中学生		HT0500900
19870622	中国朝社	5段	在韓被爆者治療に尽力、河村虎太郎氏が死去		HT0500900
19870623	中国朝広	3段写真	河村医師を惜しむ関係者、在韓被爆者治療に尽力		HT0500900
19870716	中国朝社	6段	在韓被爆者、国内治療スタート、韓国政府予算措置、1278人に「登録カード」		HT0500900
19870724	中国朝社	2段	在韓被爆者の診療9月に医師団派遣、核禁会議		HT0500900
19870805	中国朝広	3段	被爆二世が交流会、広島、長崎、協韓国へ出発		HT0500900
19870805	中国夕社	4段写真	「平和公園に碑移設を」、韓国人被爆者の慰霊祭		HT0500900
19870806	中国朝広	2段写真	過去帳に新たに1人、韓国人の原爆犠牲者慰霊碑		HT0500900
19870807	中国朝外	2段	ソウルでも被爆者追悼、原爆病院建設など決議		HT0500900

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19870819	中国朝広	2段	定期交流続けたい、被爆二世訪韓団の岸本さんらが帰国		HT0500900
19870902	中国朝広	2段	【ひとこと】在韓被爆者	人物紹介欄	HT0500900
19870904	中国朝社	3段	被爆語り部団結しよう、2つの被団協も韓国・朝鮮系団体も、「交流の集い」下旬に発足		HT0500900
19870915	中国朝広	3段写真	韓国の被爆者を診療、核禁会議医師団が出発		HT0500900
19871028	中国朝社	5段	アジア侵略の歴史忘れまい、原爆資料館に加害者コーナー、広島市が方針、朝鮮人被爆の実態など、資料収集呼び掛け		HT0500900
19871104	中国広	5段写真	韓国・朝鮮人被爆者は今…、写真家の伊藤さん、苦悩ににじむ姿レンズで追う、平和記念館生活史添え60点展示		HT0500900
19871105	中国広	2段	【ひとこと】渡日治療中の在韓被爆者	人物紹介欄	HT0500900
19871107	中国夕	3段	「重い写真」に挑戦を、フリーカメラマンの伊藤さん		HT0500900
19871201	中国朝2	6段	韓国原爆被害者協会、日本に23億ドル補償要求、2万3000人分、厚生省対策費で算出		HT0500900
19880115	中国朝広	1段	韓国人慰霊碑平和公園内に、韓国総領事市長に要請		HT0501000
19880121	中国	2段	特例移設望む、韓国人慰霊碑	読者投稿欄	HT0501000
19880127	中国	2段	韓国人被爆者の碑、移設望む声に同感	読者投稿欄	HT0501000
19880312	中国朝	4段	在韓被爆者、援助協議再開へ、政府方針21日の外相会談議題に		HT0501000
19880314	中国5	5段	【社説】在韓被爆者援助に恒久策を	社説	HT0501000
19880321	中国朝社	3段	在韓被爆者に援護を、文化人ら東京でシンポ		HT0501000
19880325	中国朝2	4段	在韓被爆者の医療援助、人道的な見地で対応、衆院社労委、厚相が表明		HT0501000
19880511	中国朝社	2段	韓国人被爆者の証言、初のビデオ収録へ、広島平和文化センター		HT0501000
19880512	中国朝広	3段写真	被爆証言ビデオ、平和文化センター、外国人で初姜さん収録、「終戦の混乱同胞不安」		HT0501000
19880516	中国朝社	4段	在韓被爆者に援護を、市民会議20日旗揚げ、補償や治療再開を要求、東京で文化人ら		HT0501000
19880531	中国朝2	2段	被爆者実態調査へ、政府調査団が訪韓		HT0501000
19880601	中国朝2	2段	在韓被爆者と調査団が懇談		HT0501000
19880611	中国朝	5段	在韓被爆者の渡日治療、観光ビザで継続へ、広島委方針		HT0501000
19880615	中国朝広	3段	200万目標に緊急募金、在韓被爆者の支援団体		HT0501000
19880703	中国朝社	5段写真	治療へ2人広島入り、在韓被爆者、観光ビザで来日		HT0501000
19880713	中国夕社	7段写真	渡日治療の韓国人被爆者、病室で航空券など盗難、「帰国できぬ返して」、「好意で入院感謝してたのに」、広島		HT0501000
19880715	中国朝広	3段	来月韓国で交流、広島の被爆二世ら10人		HT0501000
19880719	中国朝社	3段	在韓被爆者の治療手助け、医療機器を寄贈、核禁会議が今秋に送付、230万円相当カンパで		HT0501000
19880720	中国夕	4段	朝鮮人被爆者記念館建設へ、長崎の市民団体が計画		HT0501000
19880724	中国	5段写真	大阪の高校生在韓被爆者の半生を劇化、広島で上演、モノローグと寸劇、主人公の玄さん「胸がいっぱい」		HT0501000
19880730	中国朝広	4段	本川橋畔の韓国人慰霊碑、平和公園に移設を、民団が市に要請		HT0501000
19880730	中国朝	3段写真	43年目の夏㊦韓国の被爆者たち、消えぬ傷跡、病苦とかさむ治療費、対日補償交渉も望み薄	連載記事	HT0501000
19880801	中国朝	3段写真	43年目の夏㊦韓国の被爆者たち、切実な願い、渡日治療より補償を、国内医療の充実も訴え	連載記事	HT0501000
19880802	中国朝	3段写真	43年目の夏㊦韓国の被爆者たち、広がる支援、渡航費援助へカンパ、実態調査にも取り組む	連載記事	HT0501000
19880806	中国5	6段	【社説】「ヒロシマの志」を貫くために	社説	HT0501000
19880806	中国朝広	4段	新たに20人、過去帳に追加、韓国人慰霊祭		HT0501000
19880807	中国朝広	5段写真	反戦創作舞踊を熱演、韓国李さん		HT0501000
19880810	中国朝社	3段	韓国から被爆調査団、国会議員ら医療など視察、きょう来広		HT0501000

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19880811	中国朝社	3段写真	被爆の惨状に驚き、韓国調査団広島入り「治療施設造りたい」		HT0501000
19880812	中国朝社	4段	「専門病院建設支援を」、韓国被爆者実態調査団、放影研なども視察		HT0501000
19880812	中国朝社	7段写真	愛児ら5人の名前過去帳に記入して、在韓被爆者の金さん広島市へ申請、「あかし刻みたい」		HT0501000
19880813	中国夕	1段	【私のTV評】渡日治療問題の対応一刻も早く	読者投稿欄	HT0501000
19880814	中国朝5	5段	【社説】転機生かせ在韓被爆者援護	社説	HT0501000
19880814	中国朝広	8段写真	【検証】韓国人原爆慰霊碑の移設、「平和公園なゼダメ・・・」、十数年来の訴え実らず、「新設認めぬ方針」、市は周辺地を検討	特集記事	HT0501000
19880818	中国朝1	7段	在韓被爆者の渡日治療、再開への旅費負担、外務省方針		HT0501000
19880826	中国朝1	3段	盧大統領11月来日へ、被爆者渡航費など協議		HT0501000
19880828	中国朝社	4段	IPPNW 韓国支部一行が来広、「在韓被爆者救済に全力」		HT0501000
19880910	中国朝広	2段	日韓の被爆2世が協力、パンフ作成決める、訪韓団報告		HT0501000
19880914	中国夕	5段写真	被爆死した李グウ公の秘話追う、あす中国放送「民族と海峡」、「自立の精神」に焦点、日韓不幸な時代浮き彫り		HT0501000
19880927	中国	2段	李殿下の説明、韓国慰霊碑に	読者投稿欄	HT0501000
19881018	中国21	3段写真	42年ぶり来広、被爆証人捜し、ソウル在住の呉さん、自宅付近再訪「手帳の手掛かりを・・・」		HT0501000
19881023	中国朝広	3段	訪韓医師団あす出発、陝川で被爆者400人診療		HT0501000
19881107	中国朝2	5段	在韓被爆者の治療援護、来年度から旅費など負担、政府方針		HT0501000
19881130	中国朝広	3段写真	外国人被爆者の実態知ろう、手記や目録づくり、ピカ資料研来年末に刊行		HT0501000
19881213	中国朝社	4段	日韓の被爆2世が親善組織、まず日本側来月末広島で結成		HT0501000
19890105	中国朝広	2段	韓国医学生を今年夏招待、被爆者問題で初交流、広大生ら「国内治療に役立てて」		HT0501100
19890123	中国朝2	4段	在韓被爆者渡日治療を再開へ、渡航費100人分復活		HT0501100
19890124	中国朝広	3段	在韓被爆者の渡日治療再開、「抜本解決ほど遠い」、一層の充実望む市民ら		HT0501100
19890129	中国朝社	3段	日韓被爆2世、連帯へ新組織、広島で結成総会		HT0501100
19890228	中国朝広	1段	韓国人原爆慰霊碑平和公園に移設を、熊野中生など市に要望		HT0501100
19890311	中国朝広	4段	在韓被爆者の渡日治療、「再開すれば協力」、広島		HT0501100
19890324	中国朝2	4段	韓国人被爆者来日治療問題、日韓外相協議の議題に、宇野氏前向き姿勢示す		HT0501100
19890330	中国朝社	2段	在韓被爆者の治療充実要望、厚生省に吹田市民の会		HT0501100
19890331	中国朝2	2段	在韓被爆者への援助、福祉面へ拡大を検討、外務省「市民の会」に回答		HT0501100
19890402	中国朝1	6段	日韓外相協議、「戦後処理」解決に全力、盧大統領の訪日成果期す		HT0501100
19890412	中国朝広	3段	韓国人原爆慰霊碑、碑文や建立の経緯知ろう、教師らが資料集づくり、夏に発刊、死者数の問題も紹介		HT0501100
19890503	中国朝広	3段	被爆者同士交流図ろう、語り部ら11人訪韓		HT0501100
19890512	中国朝広	4段	朝鮮人被爆者の証言、ビデオに初収録、平和文化センター		HT0501100
19890525	中国朝広	3段	5周年迎えあす講演会、在韓被爆者治療広島委		HT0501100
19890618	中国広	4段	在韓被爆者の声報告、中高生熱心に聞き入る、ヒロシマ語る会		HT0501100
19890623	中国夕社	3段	また盗み図る、被爆者手帳訴訟の孫		HT0501100
19890715	中国朝社	6段写真	北朝鮮に10人の被爆者、訪問の李会長が確認、広島朝鮮人被爆者協議会		HT0501100

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19890727	中国朝広	4段写真	韓国・朝鮮人被爆者問題、資料・文献を体系化し出版、教師有志とピカ資料研、慰霊碑めぐり動き詳細に		HT0501100
19890801	中国朝	2段	【広場】原爆犠牲者の扱い差別ない	読者投稿欄	HT0501100
19890803	中国朝	7段写真	ヒロシマ語り継ぐ女たち③、郭福順さん、口下手でも話さねば、人権の大切さとつとつと	連載記事	HT0501100
19890806	中国朝広	4段	3人を新たに記帳、韓国人慰霊碑		HT0501100
19890808	中国夕2	9段写真	初来日の在韓二世7人、被爆の実相にショック、日本並み援護要望、二世同士の連帯拡大へ		HT0501100
19890810	中国朝2	6段	在韓被爆者の医療費無料に、韓国被害者協会発表		HT0501100
19890815	中国朝2	5段	在韓被爆者の援護基金、日韓両国で協議、韓国マスコミ報道、韓国が対日被爆賠償要求、韓国紙報道、問題は決着済み、外務省筋交渉を否定		HT0501100
19890818	中国朝5	5段	【社説】在韓被爆者問題に決断の時	社説	HT0501100
19890822	中国朝2	6段写真	在韓被爆者の抜本援護を、韓国原爆被害者協会辛会長に聞く、無料治療に支援望む、実態調査、日本の責任で		HT0501100
19890901	中国朝2	8段	在韓被爆者の渡日治療費、要求を見合わせ、外務省韓国側意見を配慮？		HT0501100
19890906	中国朝社	5段	渡日治療求める手紙、広島県朝被協へ、北朝鮮の被爆者家族		HT0501100
19890907	中国朝2	4段	被爆者から意見聴取、参院社労委が現地調査、広島		HT0501100
19890908	中国朝広	4段	韓国人慰霊碑、平和公園外建立に強い反発、観光訪韓団が市長に報告		HT0501100
19890926	中国朝2	3段	「被爆者問題善処を」、崔外相中山外相に要請		HT0501100
19890929	中国朝	2段	在韓被爆者の治療へ医師団、2日に核禁会議		HT0501100
19891108	中国朝2	6段	渡日治療再開を断念、被爆者対策費韓国に送金、外務省、「送金は一步前進」、居留民団広島県本部		HT0501100
19891119	中国朝2	5段	在韓被爆者の医療費、来年以降も無料化、韓国政府方針示す		HT0501100
19891127	中国朝社	4段写真	渡日治療求め手紙7通届く、在朝被爆者から広島県朝被協会長に		HT0501100
19891209	中国朝2	2段	韓国人被爆者への補償等求める、盧大統領福田氏に		HT0501100
19891215	中国朝1	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所①、衝撃、無脳児を2度流産		HT0501100
19891217	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所②、もう一人の金氏、汚染も知らず働く		HT0501100
19891219	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所③、被曝線量「ゼロ」、失職恐れ過少申告		HT0501100
19891220	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所④、臨時職員の死、発がんめぐり論争		HT0501100
19891221	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所⑤、溝、強い韓電への不信		HT0501100
19891222	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所⑥、郭先生、被爆者の使命自覚		HT0501100
19891224	中国	8段写真	世界のヒバクシャ第13部、嘔き出した放射能不安、韓国の「核」発電所⑦、医師の目、地道な調査継続を		HT0501100
19900316	中国朝広	5段	日韓被爆者来月に交流、迎える会結成カンパを募る、広島		HT0501200
19900323	中国朝社	3段	在韓被爆者初のデモ、日本政府に賠償求める		HT0501200
19900413	中国朝1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ①、恨みの地、「二度と広島へは…」	連載記事、執筆：西本雅実記者（報道部）	HT0501200
19900414	中国朝1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ②、原爆手帳、母国ではほご同然		HT0501200
19900414	中国朝社	2段	韓国人被爆者代表長崎入り、あす広島訪問		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900415	中国朝社	7段	「韓国被爆者に日本は長い間迷惑をかけた」、長崎市長訪日の辛会長らに語る、十分な救済が必要		HT0501200
19900416	中国朝1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ③、祖国の壁、孤立「古里は広島」		HT0501200
19900416	中国朝社	4段写真	韓国被爆者慰霊訪日団、辛会長ら広島入り、「日本政府に援護訴える」		HT0501200
19900417	中国1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ④、実数は？、依然推計の域出ず		HT0501200
19900417	中国朝社	3段写真	45年度の手帳申請、被爆者訪日団の李さん		HT0501200
19900417	中国朝社	7段写真	来広の在韓被爆者「死んでも差別受けるのか・・・」、対岸の慰霊碑に号泣、公園に移設要望、交流や支援訴え		HT0501200
19900418	中国朝1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ⑤、孤立無援、「無策」にいらだつ		HT0501200
19900419	中国朝1	9段写真	世界のヒバクシャ第17部、届かぬ叫び、韓国のヒロシマ⑥、補償要求、解決へ膨らむ期待		HT0501200
19900419	中国朝社	6段	対岸の韓国人慰霊碑、「公園内移設に努力」、衆院外務委で中山外相、総連系と民団系調整つけば検討、広島市		HT0501200
19900420	中国朝社	7段写真	「在韓被爆者に申し訳ない」、外務省初めて謝罪、訪問団に表明援護基金創設も		HT0501200
19900421	中国	7段写真	「日本政府の誠意見守る」、韓国被爆者訪日団辛泳洙団長に聞く、丁重・・・冷たい対応、「基金創設」は評価、日本被団協と懇談、韓国被爆者訪日団、訪日団の2人に被爆者手帳交付		HT0501200
19900421	中国	3段	朝鮮人慰霊碑で朝被協会長「新設日本主導で」		HT0501200
19900422	中国朝広	7段写真	【検証】難航する韓国人原爆碑移設問題、碑の新設解決の糸口に、日本人主導に期待、民団総連理解示す、市も前向き姿勢	特集記事、執筆：石田信夫	HT0501200
19900424	中国朝広	5段写真	荒木広島市長に在韓被爆者問題について聞く、韓国原爆被害者協の一行と、会えなかったのは日時の制約のため		HT0501200
19900425	中国朝社	5段	韓国人慰霊碑、「平和公園内に移設を」、総領事27日に広島訪問		HT0501200
19900428	中国朝社	4段	韓国人慰霊碑、「8・6までに移設を」、下関総領事、広島市に要請		HT0501200
19900505	中国朝	2段	韓国人慰霊碑平和公園内に	読者投稿欄	HT0501200
19900509	中国朝1	3段	「日本は謝罪を」在韓被爆者厳しい注文		HT0501200
19900509	中国朝1	6段	盧大統領24日来日決まる、日韓過去の清算目指す、被爆者援護どう実現、韓国技術・経済協力も期待		HT0501200
19900512	中国朝2	7段	在韓被爆者援護基金新設へ、金額めぐり大詰め折衝、外務省、大蔵省、数十億円規模？、法的裏付けも問題、在韓被爆者に積極的対応を、竹下元首相、大統領訪日反対デモ、韓国の太平洋戦争遺族会、ソウル		HT0501200
19900515	中国朝社	4段	「移設市の判断に」、総連広島県委員長が表明		HT0501200
19900516	中国朝2	6段	原爆死没者調査、全体像解明へなお努力を、課題残る韓国・朝鮮人	解説記事、執筆：栃藪啓太記者	HT0501200
19900518	中国夕1	8段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、平和公園内に移設へ、広島市民団に回答		HT0501200
19900519	中国朝1	4段写真	8・6メド平和公園内に、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、広島市と民団一致		HT0501200
19900519	中国朝2	5段	「心の痛み」に鈍感だった、広島市「詰め」なお課題も	解説記事、執筆：石田信夫	HT0501200
19900519	中国朝社	8段写真	韓国人被爆者ら「責任果たせた」、慰霊碑の移設合意、平和の祈り後世へ、建立から20年・・・悲願実る		HT0501200
19900520	中国朝1	1段	【天風録】「韓国人原爆犠牲者慰霊碑問題」	コラム欄	HT0501200
19900520	中国朝2	3段	「21億円では不満」、在韓被爆者の援護基金、来日の辛会長が表明		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900523	中国朝社	4段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、折りづる100羽焼く、寄せ書きボードも		HT0501200
19900523	中国朝広	5段	アジア戦争犠牲者忘れまい、在韓被爆者ら招き広島で8・6集会		HT0501200
19900523	中国夕社	9段写真	韓国人慰霊碑の折りづる焼失、「卑劣だ」「恥ずかしい」、関係者ら怒りの声、放火の疑い強まる、現場検証		HT0501200
19900524	中国5	5段	【社説】心痛む「折りづる焼失事件」	社説	HT0501200
19900524	中国朝社	5段写真	折りづる焼失は1000羽、韓国人慰霊碑、思想的犯行薄い		HT0501200
19900524	中国朝広	5段写真	韓国人慰霊碑、焼け跡に新たな折りづる、修学旅行生が供える、関係者「いやがらせ残念」		HT0501200
19900525	中国朝1	8段	第1回首脳会談、在韓被爆者に40億円基金、首相表明半島全体に「おわび」		HT0501200
19900525	中国朝2	7段写真	在韓被爆者医療援助、決着へなお課題、「45年の放置」責任重く、要求額に開き、援助の継続を、韓国原爆被害者協徐副会長、ヒロシマの声、真の援助これから、評価の一方自戒の声も	解説記事、執筆：栃藪啓太記者	HT0501200
19900527	中国朝社	5段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、「移転決定に感謝」、盧大統領の特使が献花		HT0501200
19900527	中国朝広	1段	在韓被爆者との交流体験を報告、広島で「心に刻む会」		HT0501200
19900529	中国朝4	8段写真	在韓被爆者救援に「40億円政府基金」、ヒロシマ45年の空白埋める手だては…、共有する「痛み」独自の支援を、行政からのアプローチ、専門医の研修は有効、実相解明へ動態調査も、加害の歴史直視して、民間交流の方向は…、日韓に溝`心のケア、忘れずに、胸開き「同じ苦しみ」、語り合い伝える運動を		HT0501200
19900612	中国朝社	4段	在韓被爆者自殺凶る、ソウル	執筆：山本特派員	HT0501200
19900614	中国朝社	4段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、移設へ市民の支援を、広島有志きょう方策探る		HT0501200
19900615	中国3	3段	広島の韓国人原爆慰霊、「南北統一碑」を探る、学者ら参加移転懇談会		HT0501200
19900615	中国朝社	6段写真	市民の手で建立、「韓国」「朝鮮」統一の原爆慰霊碑、有志らの準備委発足へ		HT0501200
19900619	中国朝社	6段	「韓国・朝鮮人原爆慰霊碑」、移設ではほぼ一致、準備委新たな文章検討へ		HT0501200
19900621	中国朝広	5段写真	韓国の演舞集団サムルノリ、被爆地広島で8月に初公演、「同胞の慰霊に」		HT0501200
19900623	中国朝社	6段写真	広島の朝鮮人徴用工問題、遺族への補償要求、対策会の深川会長三菱本社へ質問状、韓国TV局が三菱広島取材、徴用工テーマ		HT0501200
19900624	中国朝社	3段	韓国・朝鮮人原爆犠牲者慰霊碑、新たな碑文3案に絞る、広島建立準備委が検討		HT0501200
19900627	中国朝社	6段	韓国人慰霊碑移設、碑文削除民団が同意、「表記」問題で調整へ		HT0501200
19900628	中国朝社	3段	韓国人慰霊碑移設、建立準備委に辞表、救援会世話人「表に日本人出過ぎ」		HT0501200
19900630	中国朝広	2段	「現状のままで慰霊碑移設を」、在韓被爆者救援団体		HT0501200
19900707	中国朝広	7段写真	【こんにちは】被爆朝鮮人徴用工の足跡を追った韓国のテレビマン、孔在成さん、企業の責任問う、「悲劇」を精力的に現地取材	人物紹介欄、執筆：佐田尾記者	HT0501200
19900707	中国朝広	5段写真	韓国人慰霊碑移設へ土壇場の調整、問題点と見通しを探る、碑文削除で激論、日本人主導の反発も、「朝鮮」表記なお折衝、8・6タイムリミット迫る		HT0501200
19900711	中国朝社	4段写真	韓国人慰霊碑、「碑文の削除反対」、建立当時の委員長広島市に陳情		HT0501200
19900713	中国朝広	2段	「聴衆参加を検討し返答」、平和公園シンポで市側		HT0501200
19900715	中国朝	3段	【広場】妥協できぬか慰霊碑の移設	読者投稿欄	HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900715	中国朝社	5段写真	抗議の自殺図った李さん、渡日治療で広島入り		HT0501200
19900716	中国朝広	8段写真	韓国人慰霊碑など討議、平和公園シンポに250人、碑文削除批判相次ぐ、加害の歴史学ぶ場も訴え		HT0501200
19900717	中国朝社	8段写真	韓国人原爆慰霊碑、8・6前の移設は困難、碑文の「加害」で調整、「碑文削り」に強い抵抗	執筆：石田信夫記者	HT0501200
19900717	中国朝社	2段	被爆者手帳の交付を申請、自殺図った李さん		HT0501200
19900719	中国朝2	2段	北朝鮮被爆者に援助、長崎市長社党訪朝団に伝達要請		HT0501200
19900719	中国朝広	2段	韓国人慰霊碑の移設、当事者間の意見尊重を、キリスト教連申し入れ		HT0501200
19900719	中国朝広	4段写真	在韓被爆者ら50人、証言ビデオ完成、広島平和文化センター		HT0501200
19900722	中国朝5	5段	【社説】「韓国人慰霊碑」のつまづき	社説	HT0501200
19900725	中国朝2	4段	在韓被爆者40億円基金、全額一括拠出を、被害者協幸会長が要望		HT0501200
19900725	中国朝社	5段	韓国人慰霊碑移設問題、3項目の基本見解、民団広島あす臨時地方委		HT0501200
19900725	中国朝社	3段	韓国で来月日弁連調査、三菱微用工問題		HT0501200
19900725	中国朝広	2段	韓国人慰霊碑、碑文削除反対、準備委に要望、平和公園シンポ実行委		HT0501200
19900726	中国朝社	3段写真	李さんに被爆者手帳、渡日治療中スピード交付		HT0501200
19900727	中国朝社	3段	韓国人慰霊碑移設問題、審議委に差し戻し、民団地方委で強い反対		HT0501200
19900727	中国朝広	3段	韓国人慰霊碑、「碑文削らず移設を」、大阪の中学生徒会資料館を訪れ要望		HT0501200
19900728	中国朝1	3段	外国人被爆者に言及、広島市が8・6平和宣言骨子		HT0501200
19900728	中国朝2	5段	北朝鮮被爆者支援を、8・6広島で民団首相に要請		HT0501200
19900729	中国朝1	8段写真	90素顔の平和都市ヒロシマ⑦、つまづいた統一碑、碑文問題で紛糾、8・6目前振り出しへ	連載記事	HT0501200
19900731	中国朝社	3段	韓国人慰霊碑、「まず仮移設を」、民団広島市に申し入れ、「統一碑への意思一致待つ」、建立準備委が会合		HT0501200
19900801	中国朝広	8段写真	慰霊碑移設で在日韓国人、「地位」や「歴史」幅広く論議、一世と二世の認識に差、碑文修正でも意見分かれる		HT0501200
19900801	中国朝広	2段	市民の立場で碑問題考える、「86人委」が発足		HT0501200
19900801	中国夕2	4段写真	【ひと立ち話】在韓被爆者の声聞きたい、浄土真宗の藤井さん	人物紹介欄	HT0501200
19900802	中国朝社	7段写真	「北朝鮮にも被爆者」、原水禁大会に初参加の姜さん明かす、少なくとも10人、公式見解を否定		HT0501200
19900803	中国朝社	8段写真	苦難の地再び、北朝鮮の姜さん18年ぶり広島入り、韓国被爆者と話し合いたい、被爆実態近く判明、「北」代表団長が明かす		HT0501200
19900803	中国朝広	3段写真	証言集「海峡を越えて」刊行へ、在韓被爆者27人苦難の歴史切々、「なぜ援護の手届かぬ」、「語る会」など聞き取り収録		HT0501200
19900804	中国朝広	2段	被爆者手帳、姜さんに再交付		HT0501200
19900804	中国夕1	5段	韓国人慰霊碑8・6前の移設、広島市正式に断念		HT0501200
19900805	中国朝2	5段	韓国人慰霊碑、「碑文で調整つかず」、広島市8・6移設を正式断念		HT0501200
19900805	中国朝2	3段	長崎市の平和宣言、外国人被爆者に初の「謝罪」表明		HT0501200
19900805	中国朝社	5段	三菱に補償要求へ、ソウルで総会、韓国人徴用工の遺族	執筆：福島共同特派員(ソウル)	HT0501200
19900805	中国朝広	3段	在日の足跡記す、被爆朝鮮人教師が出版、平和教育など18編	新刊紹介	HT0501200
19900806	中国朝社	5段	今年も「対岸」の慰霊祭、韓国人遺族ら200人参列、移設間に合わず		HT0501200
19900807	中国朝2	6段写真	在韓被爆者や二世対策を、被爆者代表首相に訴え		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900807	中国朝社	4段	「被爆者は心の交流を」、韓国の戦争被害訴え、広島で集会		HT0501200
19900807	中国朝社	2段	ソウルでは追悼式		HT0501200
19900810	中国朝社	2段	韓国人慰霊碑問題を取材、韓国日刊紙東京支社長崔氏が広島入り		HT0501200
19900812	中国朝社	3段	民団と総連トップ会談、韓国人原爆慰霊碑、「南北一つ」実現確認		HT0501200
19900814	中国朝社	5段	韓国人慰霊碑、「碑文削除やめて」、下関総領事広島市に要請		HT0501200
19900821	中国朝2	4段	金泳三氏「就航へ努力」	碑移設関係記事	HT0501200
19900825	中国朝広	3段	核禁県民会議の前田さん、韓国長官が表彰、在韓被爆者に薬品提供		HT0501200
19900827	中国夕2	5段写真	植民地支配の犠牲者追悼へ、広島の前より釜山入り、在韓被爆者と懇談		HT0501200
19900829	中国朝2	3段	外務省の概算要求、在韓被爆者基金新設へ、初年度は17億円		HT0501200
19900906	中国朝広	2段	在韓被爆者支援団体、訪日団の記録集出版、補償問題解説や手記収録		HT0501200
19900918	中国朝	6段写真	僧侶として「侵略」謝罪、浄土真宗安芸教区、韓国へ追悼法要の旅、和やかに被爆者交流も		HT0501200
19901005	中国朝広	4段	訪韓医師団9日から、核禁会議が被爆者診療		HT0501200
19901006	中国朝広	3段写真	自殺図った在韓被爆者李さん、渡日治療終え8日帰国、「今後の暮らしに不安」		HT0501200
19901007	中国朝広	5段写真	韓国追悼の旅を報告、平和願い念仏者の集い、浄土真宗安芸教区		HT0501200
19901007	中国朝広	3段	広島市に手帳申請、渡日治療の在韓3被爆者		HT0501200
19901011	中国朝社	6段写真	広島訪れ家族ら慰霊、韓国の女性被爆者8人		HT0501200
19901012	中国朝広	4段写真	再訪ヒロシマ、韓国被爆者ら旧宅へ、「家の下敷き光求め脱出」		HT0501200
19901012	中国夕社	7段写真	「金さん会えてよかった」、平山郁夫画伯、東京クラス会45年ぶり対面、学徒動員（旧制修道中）で被爆、韓国へ帰国消息絶える、日本の雑誌で同級生と確認		HT0501200
19901017	中国朝社	1段	ヒロシマ慰霊の旅、在韓被爆者5女性、帰国前に手帳取得		HT0501200
19901018	中国朝社	5段	在韓被爆者8人が帰国		HT0501200
19901018	中国朝広	6段写真	韓国人慰霊碑、早期移設申し入れ、広島市へ市民グループ		HT0501200
19901102	中国朝社	4段	対日賠償訴訟原告団広島入り、韓国人慰霊碑訪れる		HT0501200
19901102	中国朝広	4段写真	解決…なにも聞かされず。韓国の対日賠償団広島入り、夫戦死・弟被爆の李さん		HT0501200
19901106	中国朝社	4段写真	韓国人元マツダ徴用工日記を基に手記出版、家族との別れ・就労体験・被爆者介護、屈折した日々淡々と…、日常生活を知る貴重な歴史証言		HT0501200
19901122	中国朝2	5段	北朝鮮在住の被爆者、「北」政府が実態調査、労働党の金副部長言明		HT0501200
19901221	中国朝1	5段	在韓被爆者の援護実施へ、韓国政府初めて調査		HT0501200

『朝日新聞』掲載記事一覧

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19700702	朝日広	6段写真	基町相生通り25年の遺産・第二部、歴史の谷間で、被爆のかけ深まる一方、国籍に加わる差別	特集記事	HT0400600
19700806	朝日	2段	【声】救いを待つ韓国人被爆者	読者投稿欄	HT0400600
19700806	朝日社	3段	ようやく本格調査、朝鮮人被爆者の実態、総連・民団		HT0400600
19700811	朝日広	6段写真	韓国被爆者の実情を訴える、二十五年ぶり訪問の辛さん、眼中にない医師、大半は治療受けられぬ		HT0400600
19700818	朝日社	8段写真	残っていた貯金通帳、被爆朝鮮人百人の名義、広島、工場主の仏壇に、体験証明に貴重な証拠		HT0400600

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19701012	朝日広	6段写真	【ひろしま文化】悲惨な韓国の被爆者、「広島折鶴の会」会員に聞く		HT0400600
19701117	朝日広	3段	韓国に被爆二世の会、「広島折鶴の会」の慰問を機に、その名も「ビドルキ(はと)団」		HT0400600
19701221	朝日社	4段写真	「被爆、治療受けない」、密航韓国人訴え警察は疑問もつ		HT0400600
19701226	朝日	1段	密航被爆者救済は疑問、事実確認と順法精神忘れるな	読者投稿欄カ	HT0400600
19701231	朝日	2段	【声】韓国人被爆者の救援は当然	読者投稿欄	HT0400600
19710806	朝日社	7段写真	「韓国被爆者の苦しみ知って」、首相宛`直訴状、		HT0400700
19710806	朝日社	3段	韓国被爆者援助決める、核禁会議		HT0400700
19710807	朝日	1段	韓国被爆者が救援を訴える、核禁長崎全国大会		HT0400700
19710816	朝日広	2段	韓国被爆二世の会と縁組みを記念に旗、広島折鶴の会		HT0400700
19710920	朝日社	3段	第一陣ソウルへ、韓国で初の被爆者診療きょう日本から	執筆：猪狩特派員	HT0400700
19710923	朝日社	3段	助け訴える被爆者、26年目初めて診療、韓国派遣の日本医師団	執筆：猪狩特派員	HT0400700
19711009	朝日	1段	孫さんに原爆手帳を、被爆韓国人の願いかなえて	読者投稿欄カ	HT0400700
19711213	朝日広島	6段写真	くらし、`三畳。に寝たきり、仮設住宅に外国人被爆者を訪ねて、一人働く力もなく…		HT0400700
19720721	朝日社	8段写真	被爆韓国女性を治療に招く、「置寄りおかしい」、長崎で祖母失った医師	執筆：猪狩特派員	HT0400800
19720722	朝日	6段	【土曜特集】原爆27回忌への証言③、ここにも被爆者、朝鮮人、中国人、差別と生活苦の中で、日本軍国主義の犠牲	連載記事	HT0400800
19720729	朝日3	2段	広島原爆記念式へ韓国から被爆二世少女4人、あの苦しみ忘れまい、父母の体験もとに訴え	執筆：猪狩特派員	HT0400800
19720731	朝日社	4段写真	日本人並みの対策を、韓国被爆二世4人広島を訪れ訴え		HT0400800
19720802	朝日広	2段	朝鮮人被爆者問題も論点に、原水禁国民会議の大会		HT0400800
19720803	朝日2	2段	韓国に被爆者診療センター、核禁広島集会で宣言		HT0400800
19720806	朝日人	2段写真	被爆者手帳を早く交付して、病床から遠慮がちに、治療費かさむと訴える、韓国人の林さん、証明もらえず途方にくれる		HT0400800
19720806	朝日広	5段写真	手記読上げ献花、韓国人の被爆犠牲者慰霊祭、故国の被爆二世		HT0400800
19720822	朝日広	3段	被爆者補償要望へ、広島市の協力求める、韓国被爆者援護協会の辛会長		HT0400800
19720929	朝日広	2段写真	広大原医研留学、韓国被爆者の`心の灯。に…、鄭さんきょう帰国		HT0400800
19721003	朝日社	3段	手帳交付却下取消せ、韓国被爆者孫振斗さん福岡県相手に訴え		HT0400800
19721009	朝日3	5段	特別立法を考慮、外国人被爆者の救済、外相が約束		HT0400800
19721113	朝日	2段	韓国被爆者救済、日韓の医師スクラム、東京の医師訪問長期体制へ一歩		HT0400800
19730222	朝日	5段	玉本ルート? 摘発、釜山警察覚せい剤密造者逮捕、一味の中に密航の被爆女性、当時同情を集めて帰国		HT0400900
19730228	朝日	4段	被爆密航の孫に疑惑、覚せい剤密輸釜山ルート紹介か		HT0400900
19730327	朝日夕社	1段	韓国被爆者の金さん来日、治療に広島に向う		HT0400900
19730412	朝日社	5段	来日治療中の韓国婦人、被爆手帳を申請		HT0400900
19730424	朝日社	4段	韓国被爆者の救済を、大阪軍縮協、実態解明へ訪韓		HT0400900
19730520	朝日広	2段	原爆慰霊碑に参拝、北朝鮮の記者同盟一行、惨状伝える資料見て怒り		HT0400900
19730803	朝日	7段写真	73ヒロシマ第3部③、くたばれ「軍都」、自責、忘れ去られる朝鮮人、被爆者調査もされず	執筆：深川宗俊	HT0400900

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19730803	朝日広	3段	安らかに眠って、あす戦災供養塔へ、やっと安住の地を得る、朝鮮人被爆者李さんの遺骨		HT0400900
19730808	朝日広	5段	肉親らの死証言して、韓国の婦人ら28年ぶりに広島で訴え		HT0400900
19730811	朝日2	3段	韓国被爆者補償訴え、田中首相あてに要望書		HT0400900
19730813	朝日学芸	7段	日本と韓国「国籍」のはざままで、「内鮮結婚」「強制徴用」問われる人道的責任	執筆：藤崎康夫	HT0400900
19730826	朝日社	5段	やはり強制送還？、被爆者孫さん出所大村収容所へ		HT0400900
19731114	朝日広	4段	韓国から治療に来日、被爆婦人原田医師が招待		HT0400900
19731213	朝日広	2段	韓国被爆者が広島入り、河村胃腸病院に入院		HT0400900
19731222	朝日社	5段	どこへ消えた？246人、朝鮮人被爆者日韓で真相追		HT0400900
19740129	朝日夕社	7段	「密航ブローカーの手先」、孫振斗被告、被爆者手帳交付訴訟で準備書面、被告側（福岡県）きめつける、原告側は「でっちあげ」	コピー	HT0900500
19740130	朝日朝社	5段	4証言が孫さんを支持、被爆者手帳交付訴訟		HT0400900
19740130	朝日朝社	6段	孫さん支持の証言、福岡地裁被爆者手帳交付訴訟	コピー	HT0900500
19740130	朝日夕社	4段	外国人にも補償を、被爆者手帳訴訟、孫さん法廷で訴え	コピー	HT0900500
19740207	朝日社	4段写真	原爆ドームに心ない落書き、緑ペンキで「死を」、受難に絶句する関係者		HT0400900
19740216	朝日社	2段	孫さん裁判結審、判決は来月30日、「被爆治療で密入国」		HT0400900
19740330	朝日夕1	12段	外国人被爆者日本に医療責任、孫振斗さん勝訴福岡地裁、健康手帳交付せよ、密入国とは切り離せ	コピー	HT0401101
19740330	朝日夕1	8段	外国人被爆者日本に医療責任、孫振斗さん勝訴、福岡地裁、健康手帳交付せよ、密入国とは切り離せ、「当然の判決だ」、孫さん側会見、原告側の急ぐ事情など考慮、井野裁判長語る	コピー	HT0900500
19740330	朝日夕1	3段	問い直された「差別」の姿勢	解説記事	HT0900500
19740330	朝日夕1	7段	密入国被爆者孫さん勝訴、政府に医療責任、手帳交付却下は違法、福岡地裁、県（国）側は控訴の方針		HT0900500
19740330	朝日夕社	6段	在外被爆者の治療に光明、孫さん勝訴、真の解決まだ遠い、望まれる日韓政府交渉		HT0900500
19740330	朝日夕社	6段	孫さん勝訴、喜びの主収容所に、「被爆者に国境はなし」、みなさんの支援に感謝、孫さん語る	コピー	HT0900500
19740425	朝日広	6段	名簿がネガフィルムに！、戦争末期「三菱広島」の朝鮮人徴用工、ソウルの原爆被害者協会で保管、遺族判定に貴重資料、訪韓の深川さん一時持ち帰り予定、造船所で写す移民調査の広島大助手		HT0401101
19740428	朝日広	4段	「緊迫下集会は許可制」、被爆韓国人徴用工遺族会の結成に参加の深川さん帰る		HT0401101
19740618	朝日	1段	被爆の事実改めて争う、孫さん訴訟で福岡県側		HT0900500
19740723	朝日朝3	5段	韓国人被爆者にも手帳、「当然日本に治療責任」、美濃部知事指示、国の方針と対立		HT0401101
19740725	朝日広	7段写真	海外居住の韓国人被爆者証人さがし、実を結ぶ一市民の努力、広島市の豊永さん、東京都「原爆手帳交付の方針」の陰に、メモ頼り高松へ、支えた多くの理解・協力		HT0401101
19740725	朝日広	3段	広島市は慎重、東京都方針には評価		HT0401101
19740726	朝日3	7段写真	辛さんに被爆者手帳、厚生省「すでに日本構成員」		HT0401101
19740727	朝日広	4段	外国人への被爆者手帳、広島市も交付、法運用の幅を広げる		HT0401000
19740731	朝日広	4段写真	初めて申請受理、広島市外国人の被爆者手帳		HT0401101
19740803	朝日3	4段	三菱重、徴用中に被爆の韓国人、「救済には協力」		HT0401000
19740805	朝日朝8	6段写真	【文化】断絶と連続、30年目の戦後①、もう一つの広島・長崎、朝鮮人被爆を忘れた「平和」	連載記事	HT0401101
19740806	朝日広	7段写真	出版物にみる「ヒロシマ論」、広がり示す被爆体験、朝鮮人問題改めて追及		HT0401101

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19740806	朝日広	6段写真	広島市判断を保留、三韓国人原爆手帳の申請、同胞の霊とむらう、韓国人原爆犠牲者慰霊祭、手帳初交付の辛さんも参列、碑文を再検討、韓国人慰霊碑塗り消し事件		HT0401000
19740809	朝日広	4段	「今後、政府間交渉で解決を」、韓国人被爆者問題で三菱側		HT0401000
19740813	朝日朝	5段写真	日本の償い待つ韓国被爆者、条件つき救済不満ます一方	執筆：小田川興	HT0401101
19740825	朝日広	2段	【サンデーひろしま】積極性みられぬ行政	被爆者健康手帳交付申請却下について	HT0900500
19740827	朝日広	2段	観光ビザでの申請受理せず、外国人への被爆者手帳広島市長が方針		HT0401000
19741122	朝日社	8段写真	被爆韓国女性のビザ、外務省二ヵ月も放置、痛む体で心待ち、救援の会招くやっとなり来日治療へ		HT0401101
19741204	朝日社	5段	被爆者手帳、韓国人の申請受理、広島市同窓生の証明書添付		HT0401101
19750308	朝日社	5段	韓国人被爆者悲痛な遺言、ひつぎ日本大使館に、補償実らぬまま、訴え30年なお極貧の2万人、ソウル		HT0401201
19750308	朝日夕1	6段写真	ある韓国人被爆者の死、だまって死ぬのはイヤだ棺を日本大使館の前に置いてくれ、抗議の遺言残し	東京版	HT0401201
19750518	朝日広	6段写真	韓国人被爆者の救済訴え、原爆病院で治療受けた崔さん、日本離れ手帳も失効、抗議をこめて広島市に		HT0900100
19750618	朝日社	5段	広島市で治療の被爆韓国女性、崔さん帰国の途に		HT0900200
19750717	朝日夕1	9段	韓国人被爆者手帳請求訴訟、孫さん二審でも勝つ、被爆は国の責任、医療法人道上から適用、福岡高裁		HT0900100
19750717	朝日夕2	8段	治療制限、再び批判、被爆者訴訟孫さん勝訴、医療の門を拡大	解説記事	HT0900100
19750717	朝日夕社	8段	孫さん勝訴、声はずむ支援者たち、「主人公へ電話を」、新たな運動の始まり、期待通りの判決です、喜びの孫さん		HT0900100
19750728	朝日3	7段	わたしたちを「忘れるな」、被爆韓国人ら手記集、日本政府の償いを訴え		HT0401201
19750806	朝日朝2	2段	韓国人被爆者、悲惨な境遇下にいまなお三万人、援護協会声明		HT0401201
19750829	朝日社	3段	観光ビザの被爆韓国人、交付ほぼ確実		HT0401201
19750830	朝日広	4段	三菱広島造船所訪れ、感謝料などを要請、遭難の朝鮮人徴用工遺族会		HT0401201
19750903	朝日広	6段写真	「被爆手帳もらえうれしい」、ビザで来日中の廬さん		HT0401201
19750919	朝日広	1段	観光ビザで来日の鄭さんにも健康手帳交付、広島市		HT0401101
19750919	朝日広	3段	被爆者健康手帳受けた廬さんがきょう帰国		HT0401101
19751104	朝日夕社	7段	韓国人被爆者への補償、訴えまとも実らず、傷心の辛さん		HT0900200
19751105	朝日社	2段	六度目も訴え実らず、韓国被爆者補償、辛さん帰国		HT0900200
19760109	朝日広	4段	県原水禁、韓国に代表派遣、被爆者との交流第一弾		HT0900502
19760118	朝日社	3段	ソウルの被爆者治療へ、個人で2人招く、在日韓国人		HT0900500
19760127	朝日	1段	【ことば】韓国人被爆者		HT0900200
19760127	朝日社	1段	外人被爆者の救済を要求へ、原水禁広島県協議会		HT0900200
19760129	朝日広	3段	日常活動強化も全力、県原水禁の申し合わせ		HT0900200
19760201	朝日社	1段	孫さんやっとなり仮放免		HT0900200
19760224	朝日朝社	8段写真	ぬか喜び韓国原爆病院、海越えた寄贈計画空転五年、徳山市の民間団体、被爆者が「絶縁状」、「募金ずさん、もう待てぬ」、善意誤解され心外、山下会長		HT0900500
19760313	朝日	6段	【論壇】「救国宣言」は真摯な祈り、自由確立へ支援の輪広げよう	執筆：山口明子、キリスト教女性信者による救援活動を紹介	HT0401201
19760321	朝日社	4段	韓国の被爆者救済にスクラム、ソウル・防府の2医師、日本で診断帰国し治療		HT0900500

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19760405	朝日社	5段	韓国人被爆者、日韓の善意で手術、見えぬ左目が回復、きょう喜びの帰国		HT0401101、HT0900500
19760406	朝日	6段	玄界灘遭難の被爆朝鮮人、市民の手で遺骨収集、広島、遺族への補償なども運動		HT0900200
19760407	朝日	3段	被爆者の健康管理手当、韓国人女性が初申請		HT0900500
19760416	朝日	5段	65万人、在日韓国・朝鮮人(41)、32年目の手帳	連載記事	HT0900300
19760417	朝日社	4段	短期滞在でも支給へ、外人被爆者の健康管理手当、厚生省が前向き判断		HT0900500
19760711	朝日広	4段	共同で調査団を、朝被協と日本人討論会、李会長が提起		HT0900300
19760806	朝日広	4段写真	韓国人犠牲者の霊安かれ、遺族らで慰霊祭		HT0900300
19760806	朝日広	3段	苦難の足跡切々、原水禁大会で在日朝鮮人被爆者、同胞の悲劇例に		HT0900300
19760817	朝日広	3段	健康手帳、帰国で失効、再交付で申請、韓国の被爆者遺族会長		HT0900300
19761001	朝日社	4段	「強制送還」は正当、被爆者孫さんの請求棄却、福岡地裁		HT0900300
19761002	朝日広	3段	強制連行・被爆・31年放置、国連へ悲惨訴え、広島の朝鮮人被爆者		HT0900300
19761012	朝日	6段写真	ひろしま「31年」第五部被爆朝鮮人はいま…①、告発、民族的責任の自覚を	連載記事	HT0900500
19761000	朝日	6段写真	ひろしま「31年」第五部被爆朝鮮人はいま…②、異郷、植民地主義の犠牲に	連載記事	HT0900500
19761000	朝日	6段写真	ひろしま「31年」第五部被爆朝鮮人はいま…③、生きているスラム、じっと日陰に耐えて	連載記事	HT0900500
19761000	朝日	6段写真	ひろしま「31年」第五部被爆朝鮮人はいま…④、失対、命つなぐ大切な職場	連載記事	HT0900500
19761000	朝日	6段写真	ひろしま「31年」第五部被爆朝鮮人はいま…⑤、未知の被爆者、毎年百人も手帳申請	連載記事	HT0900500
19761015	朝日社	2段	孫さん控訴、強制送還無効確認訴訟		HT0401101、HT0900300
19761028	朝日広	4段写真	被爆朝鮮・韓国人健康手帳の交付、16人が一括申請、県連絡会議で世話		HT0900300
19761121	朝日広	3段写真	交付へ明るい見通し、ソウルの林さん、被爆者手帳を申請		HT0900300
19761209	朝日朝広	4段	被爆者手帳8年ぶり、韓国人の林さんポツリ「遅すぎた」		HT0401101
19761223	朝日広	4段	まず13人に交付、在日朝鮮人の被爆手帳		HT0401201
19770106	朝日広	2段	林さんに保健手当、短期滞在外国人被爆者に初支給		HT0900300
19770311	朝日広	5段	在日朝鮮・韓国人被爆者対象に、初の核意識調査、広島研究者ら、援護策探る		HT0900300
19770423	朝日社	3段	在日朝鮮人被爆者の代表、厚相と初の会見へ、援護強化など要請		HT0401201
19770728	朝日朝	4段	韓国にいる原爆被爆者、日本へ治療の手切望、29人の調査書届く		HT0401201
19770802	朝日	7段	被爆の実態訴えよう、数々の具体提案、国際シンポ分科会終わる		HT0401201
19770804	朝日広	7段写真	朝鮮人被爆者とりあげる、広島音楽サークル協、構成詩曲「無告の谷間から」製作、実在の夫人モデルに、差別との二重苦切々と、あす一部発表		HT0401201
19770806	朝日広	3段写真	紫煙にこもる怒り、韓国人被爆者の慰霊祭		HT0401201
19770807	朝日	3段	「むつかしい援護法」、藤田総務長官、被爆者代表と会う	朝鮮人被爆者について陳情	HT0401201
19770821	朝日朝社	6段写真	獄中で被爆の日韓思想犯、三十二年ぶりに再会、朝日新聞の著作紹介が縁「あんな時代ご免」		HT0900300
19770822	朝日	8段写真	獄中被爆「よくぞ生きて…」、再会に涙の日韓思想犯		HT0900300

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19771217	朝日広	6段	核禁県民会議、韓国被爆者実態にメス、来春国連へ報告、現地に調査団も派遣		HT0401201
19771231	朝日	5段	韓国在住の被爆者、極貧の中生存2万、日本の聖職者らが実情パンフ		HT0401201
19780126	朝日社	5段	連帯保証で融資獲得、広島県朝鮮人被爆者協議会、事業協組作りへ		HT0900300
19780305	朝日社	3段	在日朝鮮人の被爆者の遺族、援護法の適用を申請へ		HT0900300
19780330	朝日夕1	8段カ	外国人への被爆者手帳、最高裁も交付支持、孫さんの勝訴確定、「医療法に国家補償性」、厚生省迫られる本格対応		HT0401202
19780330	朝日夕社	8段写真	被爆者救済に国境なし、最高裁判決、破られた行政のカベ、厚生省再検討迫られる、退去強制令訴訟一審敗訴、強制送還の懸念も		HT0401202
19780331	朝日	4段	【社説】原爆被爆者対策を転換せよ	社説	HT0401202
19780331	朝日	10段	外人被爆者にも手帳、「孫さん訴訟」に最高裁判決、人道上適用を拡大、行政解釈をくつがえす、対応策練り直し、厚生省		HT0401202
19780331	朝日社	5段	やっと報われた、援護法も早く実現を、孫さん勝訴喜ぶ関係者、まだ残る強制送還関連訴訟、敗れば恩恵フイ		HT0401202
19780401	朝日	6段	援護法制定へはずみ、最高裁の被爆訴訟判決	執筆：岩垂弘（編集委員）、解説記事カ	HT0401202
19780403	朝日	1段	外国人被爆者特別法、韓国援護協会が要望		HT0401202
19780404	朝日	8段カ	韓国人被爆者のこと、救済責任解決済みとは何か	執筆：藤崎康夫（ルポライター）	HT0401202
19780405	朝日広	4段	〃親子証明、の書類提出、広島援護法申請の朝鮮人遺族		HT0401201
19780406	朝日	1段	全治こそ目的	読者投稿欄	HT0401202
19780406	朝日	1段	孫さん判決に法の権威みる	読者投稿欄	HT0401202
19780520	朝日朝社	3段	「政治目的」では初許可、原水禁運動、在日朝鮮人の再入国		HT0900400
19780730	朝日6	10段写真	被爆者援護高まるうねり、裏切られた年月、「補償」拒み続ける国、切実な立法実現の願い、妻の死に誓う、病をおし訴えを結集、置き去りの人々、実情さえも不明、責任問う外国人被爆者、苦闘の26年援護要求の歩み		HT0501400
19780915	朝日	4段	孫さん控訴取り下げ、法相に在留特別許可願出す、密入国の違法確定		HT0900400
19780920	朝日	6段写真	原爆症治療に密入国、孫氏の在留を特別許可、法務省最高裁判決など考慮、つらかった二年半、孫さんが感想		HT0501400
19780920	朝日	6段	孫さんの在留を許可、法務省、被爆治療「特例」で、密入国に初のケース		HT0900400
19781117	朝日広	4段写真	在日朝鮮人被爆者への責任は日本政府に、医療・生活面で補償を、朝鮮総連・韓議長談		HT0501400
19781222	朝日社	5段	続く病弱生活苦、在韓被爆者に初の総合調査、市民の会、医療対策などを訴え		HT0900400
19790205	朝日広	6段	戦争と民族差別問う教材に、広島朝鮮人被爆者協、今年中に手記編集		HT0900400
19790305	朝日3	6段写真	「二重苦」受け継ごう…、広島で発足、被爆朝鮮人二世の会		HT0900400
19790324	朝日社	4段	「被爆者手帳訴訟」の孫、営業所荒らし、福岡		HT0501400
19790430	朝日	4段写真	被爆体験継承しよう、朝鮮人二世の組織全国で初めて発足、広島で大会		HT0501400
19790501	朝日広	2段	朝鮮人にも戦傷病者戦没者遺族援護法を、「被爆者協」が厚相に訴え		HT0501400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19790510	朝日広	7段写真	「ヒロシマ」と「広島」⑩三十四年目の夏、告発、日本では苦労だけ、朝鮮人被爆約5万人か、初の手記集近く出版へ		HT0501400
19790516	朝日9	3段	在韓の被爆者が健康手帳交付を申請		HT0501400
19790522	朝日	4段	日本人より強い平和志向、広島在住朝鮮・韓国人被爆者、一小寺・広島女学院大教授が意識調査、「核実験全面禁止」、73%に対し75%		HT0501400
19790604	朝日広	6段写真	平和教育のあり方に一石、朝鮮人被爆者問題で李氏、日本の戦争責任指摘、全国シンポ終わる		HT0501400
19790704	朝日3	2段	韓国の被爆者治療、日本受け入れ、手帳交付など合意		HT0501400
19790704	朝日社	2段	被爆韓国人孫に猶予刑、窃盗事件、強制送還免れる		HT0501400
19790714	朝日社	4段	問われる「日本人」二つの被爆手記が刊行、被爆・差別・生活苦…、重い証言生々しく、広島の在日朝鮮人19人		HT0501400
19791004	朝日社	5段	温情判決を裏切り、被爆者の孫が盗み		HT0501400
19791103	朝日広	4段	放置の朝鮮人被爆者、日朝合同で調査、弁護士や総連局長、まず広島から		HT0501400
19791110	朝日3	3段	傷深い朝鮮人被爆者、日朝合同調査団52人の実態発表		HT0501400
19791111	朝日3	3段	朝鮮人被爆者対策で広島市、委任事務と否定的、追及され「十分研究」		HT0501400
19791222	朝日社	2段	朝鮮人の被爆死、広島で3・4万人、日韓合同調査団が報告書		HT0501400
19800127	朝日社	6段	朝鮮人被爆者らの実態、2年かけて調査、原爆問題広島総合研		HT0500200
19800222	朝日	3段	在韓被爆者の渡日実現へ、医師ら近く派遣、厚相答弁		HT0500200
19800409	朝日広	3段	韓国・朝鮮人被爆者の全体像、解明へ調査委、総合研究会		HT0500200
19800411	朝日広	8段写真	ヒロシマで知った差別と被爆の苦しみ、尼崎市の中学生卒業記念に文集、なぜ朝鮮人が…、鋭く平和への誓い		HT0500200
19800413	朝日	1段	被爆朝鮮・韓国人めぐりシンポ、広島		HT0500200
19800413	朝日	5段写真	広島でも被爆者対策懇、国への不満次々、「苦痛の35年だった」		HT0500200
19800413	朝日広	7段写真	被爆9人が基本懇に意見、10分間では言い尽くせぬ、韓国人というだけで		HT0500200
19800715	朝日	7段写真	惨禍の民⑩被爆者援護法答申を前に、朝鮮人被爆者、日本人並みの救済を、差別と迫害に耐えしので	連載記事	HT0500200
19800806	朝日東3	2段	在日朝鮮人被爆者、連絡協を結成		HT0500200
19801118	朝日	3段	在韓被爆者広島入り、政府間で初の治療		HT0500200
19801119	朝日広	3段	原爆病院へ入院、治療の在韓被爆者10人		HT0500200
19810403	朝日	6段	戦没者遺族援護法の適用、日本国籍ある人だけ、厚生省在日朝鮮人の異議却下		HT0500300
19810412	朝日	6段	原爆病院、韓国でも建設へ、被害者団体近く広島の施設見学		HT0500300
19810522	朝日	6段写真	朝鮮人被爆者の悲劇映画に、広島・長崎で「作る会」発足、三カ国語版で海外にも出品、平和の尊さ訴え	コピー	HT0401700
19810702	朝日	8段	欺瞞の歴史あえて問う、加害者としての日本正面に、映画になる「朝鮮人被爆者」	執筆：盛善吉（劇作家）	HT0500300
19810709	朝日広	4段写真	朝鮮人被爆者の怒りを映画に、慰霊碑前で撮影始まる		HT0500300
19810804	朝日広	5段	事実を映画に、5本もが製作中、世界の人へ、問い直してほしい、朝鮮人被爆者の苦しみを		HT0500300
19810812	朝日	5段	被爆朝鮮人記録映画、三菱重工長崎造船所が現場の撮影拒否		HT0500300

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19810816	朝日広	5段	北朝鮮被爆者の実態調査へ、36年の空白、へ挑む、学者訪朝団申し入れ、回国関係機関動く		HT0500300
19811028	朝日	4段	【ひと】朝鮮人被爆者の記録映画をつくる、盛善吉	人物紹介欄	HT0500300
19811107	朝日社	2段	十分な治療もせず放置、朝鮮人への差別に怒り、広島で記録映画試写		HT0500300
19811118	朝日	2段	来春も在韓被爆者治療、事前調査に医師ら派遣		HT0500300
19811125	朝日	4段	在韓被爆者、年間50人ずつ治療、日韓合意今年度から5年間		HT0500300
19811219	朝日社	5段	手記で認定の婦人も、韓国在住の被爆者19人、あすから来日治療		HT0500300
19811221	朝日広	3段	韓国の被爆者13人広島入り、二カ月めどに治療		HT0500300
19811222	朝日広	6段写真	広島入りに在韓被爆者13人に待望の「健康手帳」、さっそく入院し検査、全員「手当」支給受けて		HT0500300
19820206	朝日	2段	治療を終え4人帰国、韓国在住の被爆者		HT0500400
19820514	朝日広	7段	後遺症治療に相次いで来日、韓国在住の被爆者、17日に第3陣救済やと軌道		HT0500400
19820515	朝日広	4段	県朝被協に招待状、NGO委員長李会長ら2人を派遣		HT0500400
19820518	朝日	4段写真	在韓被爆者広島へ、待ちこがれた専門治療、「もっと大勢に」訴え		HT0500400
19820716	朝日	6段	在韓被爆者、徴用工賃金未払い供託、名簿閲覧を申請		HT0500400
19830203	朝日広	5段写真	両国政府間で解決のめど、韓国人徴用工の遺骨送還問題、訪韓深川氏に局長確約		HT0500500
19830913	朝日夕	4段	遺骨の確認できず、徴用・被爆の韓国人調査、壱岐・対馬		HT0500500
19831029	朝日	5段	来年度の在韓被爆者の治療、受け入れ倍増100人に		HT0500500
19831123	朝日広	2段	治療者100人決まる、韓国在住の被爆者		HT0500500
19831213	朝日社	4段	朝鮮人被爆者慰霊碑建立、実質平和公園内に、広島市批判の声に折れる		HT0500500
19840126	朝日	3段	後遺症、治療のない被爆の苦しみ		HT0500600
19840208	朝日広	6段	韓国被爆者が入院、第1陣12人原爆病院へ2か月間		HT0500600
19841212	朝日広	4段写真	「再渡日」にまず2人、在韓被爆者の民間治療		HT0500600
19850126	朝日	1段	被爆者の渡日治療枠を縮小、韓国政府		HT0500700
19850129	朝日広	3段	原爆の惨禍に息をのむ、韓国記者団、広島市へ		HT0500700
19850326	朝日広	5段写真	在韓被爆者、医師にかかれぬ働く重病の老人、予想超す深刻さ、調査団帰国涙の訴え聞き取り		HT0500700
19850411	朝日広	7段写真	爆心⑧第一部被爆死の空白、アイゴー、多くの朝鮮人は？、断片的な証言だれも戻らず	連載記事	HT0500700
19850423	朝日広	9段写真	40年ぶり再会、韓国の被爆徴用工が日本人上司と、「親切忘れられず」		HT0500700
19850529	朝日広	2段写真	10人が広島に、在韓被爆者第13陣、治療のため来日		HT0500700
19850711	朝日広	6段写真	85夏ヒロシマ⑤、日本での治療は1%、渡日できぬ重症者ほしい抜本的対策	連載記事	HT0500700
19850719	朝日社	7段写真	わたしと原爆④手記惨状から40年、青いトウガラシ、祖国隠し二重の苦悩、顔の傷跡に差別の痛み	連載記事	HT0500700
19850723	朝日広	2段	在韓被爆者第14陣、22人治療来日、26日に広島へは12人		HT0500700
19850806	朝日広	4段	「地球上の涙で核を流してしまいたい」、詩にオモニは泣く、韓国人慰霊祭		HT0500700
19850806	朝日広	6段	復興ヒロシマの礎石になった妹	執筆：崔成源（会社役員）	HT0500700
19851106	朝日5	4段	【論壇】在韓被爆者の渡日治療継続を	執筆：石川洋（世界宗教者平和会議日本委員会人権委員長）	HT0500700
19860418	朝日1	6段	在韓被爆者救済を、支援者ら日弁連に申し立てへ		HT0500800
19860617	朝日	6段	【ポイント】渡日制度の延長を、在韓2万人へ唯一の施策、被爆者治療、河村虎太郎さんに聞く	特集記事	HT0500800
19860716	朝日社	8段写真	在韓被爆者41年①、使えない手帳、体じゅうが悪うて、オモニ密航の13年	連載記事	HT0500800

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19860717	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年②、にいちゃんと妹、音信消え募る思い、死ぬほど会いたい	連載記事	HT0500800
19860719	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年③、6087人、生活苦から広島へ、「相当数」が帰らず	連載記事	HT0500800
19860720	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年④、白紙徴用、海に沈んだ帰国船、「遺骨に会わせて」	連載記事	HT0500800
19860721	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑤、恐可原爆、独房に消えた青春、憎しみ超え体験記	連載記事	HT0500800
19860722	朝日朝1	1段	【天声人語】「渡日治療打ち切り関係」	コラム	HT0500800
19860722	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑥、初めての背広、渡日治療かかった、働けぬ「寡黙の人」	連載記事	HT0500800
19860723	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑦、三つの地獄、朝鮮・ベトナム戦、必死にかけぬけた	連載記事	HT0500800
19860724	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑧、50人のヒロシマ、校長の体験を追い、思い知った悲惨さ	連載記事	HT0500800
19860725	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑨、平和のいしずえ、悩みつつ助け合い、二世の現状寸劇で	連載記事	HT0500800
19860725	朝日社	7段写真	在韓被爆者41年⑩、ひとすじの糸、5年目の渡日治療、存廃の瀬戸ぎわに	連載記事	HT0500800
19860801	朝日	4段	被爆者、渡日治療打ち切り、来月限り韓国日本に通告		HT0500800
19860812	朝日	3段	【手紙】戦争と平和、平和公園も民族を差別	読者投稿欄	HT0500800
19860812	朝日広	5段写真	在韓被爆者、渡日治療の継続を、証言の会、季刊誌でアピール		HT0500800
19860817	朝日	6段	渡日治療の在韓被爆者、厚相訪問に複雑、治療打ち切りが不安、韓国政府と継続へ協議、厚相会見、治療の延長を要請、韓国の人権団体		HT0500800
19861024	朝日	2段	韓国在住被爆者、渡日治療続けて、日弁連政府に提言		HT0500800
19861105	朝日	2段	渡日治療の問題で、韓国へ日弁連代表		HT0500800
19861118	朝日	6段	【ポイント】どうなる在韓被爆者の渡日治療、韓国は延長に消極的、背景に根深い対日不信	特集記事、執筆：清田治記者	HT0500800
19870116	朝日社	6段	韓国人慰霊碑建設求め、新成人から署名、広島		HT0500900
19870117	朝日広	2段	建立許可を市長に要望、韓国人慰霊碑で6団体		HT0500900
19870206	朝日	2段	渡日被爆者治療最後の患者帰国、韓国との合意切れ		HT0500900
19870623	朝日広	6段写真	河村虎太郎さん密葬、「遺志継ぐ」誓う会葬者、間際まで在韓被爆者案じ		HT0500900
19870712	朝日社	3段	韓国女性の被爆手記出版、人間を父母を青春を返せ、「加害国」日本問う		HT0500900
19870723	朝日4	4段	【論壇】忘れてはならぬ朝鮮人被爆者	執筆：岡田龍一（中学校教諭）	HT0500900
19870731	朝日広	7段写真	原爆資料館・朝鮮人被爆者のパネル展示、修学旅行にきた大阪の2中学校、僕らの指摘で記述改められた、「応徴士」は「強制徴用」に、館側資料の展示も約束		HT0500900
19880106	朝日	3段	【ひと】日本政府に23億ドルの補償を要求した韓国原爆被害者協会会長、辛泳洙さん	人物紹介欄	HT0501000
19880312	朝日	5段	在韓被爆者援助を再開、外相会談で表明へ		HT0501000
19880321	朝日	5段	「在韓被爆者」認識を、援護考えるシンポ開催、東京		HT0501000
19880406	朝日4	4段	【論壇】在韓被爆者に抜本的対策を	執筆：中島竜美（在韓被爆者問題市民会議発起人代表）	HT0501000
19880512	朝日社	5段写真	広島でみつめる「加害責任」、平和教育研究所、中国侵略の足跡ビデオで教材化、平和文化センター、韓国・朝鮮人の被爆証言も収録		HT0501000
19880619	朝日	2段	在韓被爆者の渡日治療再開、外務省が検討始める		HT0501000
19880724	朝日広	6段写真	韓国人被爆者の生涯を劇に、大阪府立松原高校、「心の叫び」見事描いた、病气そして差別「私も人間よね」		HT0501000

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19880806	朝日	3段	【ひと】原水禁世界大会に反核舞踊で参加したソウル大助教授、李愛珠さん	人物紹介欄、執筆：古西洋記者	HT0501000
19880806	朝日広	3段	韓国人犠牲者に200人がめい福		HT0501000
19880807	朝日	1段	在韓被爆者らソウルで追悼		HT0501000
19880810	朝日	5段	在韓被爆者に支援を	読者投稿欄	HT0501000
19880811	朝日広	3段	韓国被爆者実態調査団、初めて広島入り、国会議員・医師ら10人		HT0501000
19880812	朝日広	4段	被爆治療に支援を、韓国人調査団政府へ要望		HT0501000
19880903	朝日	4段	【手紙】戦争⑤、韓国人被爆碑は移すな	読者投稿欄	HT0501000
19880914	朝日社	1段	韓国人原爆慰霊碑、平和公園に移転を		HT0501000
19880929	朝日	5段	本気で在韓被爆者救え	読者投稿欄、執筆：松井義子	HT0501000
19881018	朝日広	4段写真	「私は被爆者」と訴え、ソウル在住の呉さん証人捜しに広島へ		HT0501000
19881020	朝日	3段	在韓被爆者支援訴え、広島オルガン奏者ら演奏会		HT0501000
19881023	朝日広	7段	遊び友達ゆきちゃんが覚えていた、ソウル在住被爆者呉さん、42年ぶり再会、手帳申請証言を約束、姉の同級生や近所の女性も名乗り		HT0501000
19881025	朝日広	3段	核禁県民会議、在韓被爆者へ医師団を派遣、きょうから診療や相談		HT0501000
19881130	朝日広	4段写真	原爆投下時に広島にいた、広島の市民研究グループ、外国人被爆者の資料づくり、来年刊行、留学生・捕虜ら中心に		HT0501000
19881213	朝日社	3段	日韓被爆二世、連帯へ交流会、準備進む		HT0501000
19890110	朝日7	8段写真	「昭和」とアジア③近隣諸国の目、「恨」を晴らせ、放置された被爆者ら、日韓の新世代には期待	執筆：小田川特派員(ソウル)	HT0501100
19890111	朝日2	2段	新天皇即位を機に「傷跡」清算を訴え、在韓被爆者		HT0501100
19890228	朝日広	5段	中学生12人、平和公園に移設要望、韓国人の被爆碑広島市に署名添え		HT0501100
19890402	朝日2	9段	日朝改善韓国を配慮、日韓外相定期協議緊密な連携を約束		HT0501100
19890503	朝日	3段	被爆の語り部ら韓国へ謝罪の旅		HT0501100
19890504	朝日広	7段	「日本政府なぜ薄情」、訪韓の「広島の語り部」たちが交流会開く、韓国被爆者切々と訴え		HT0501100
19890528	朝日広	2段写真	「在韓被爆者と交流深めよう」		HT0501100
19890531	朝日広	3段	89原爆第二部、語る44年目の証言者②、在韓被爆者の苦悩、日本人、で被害受けて、旅を終えて	連載記事	HT0501100
19890608	朝日広	3段	89原爆第二部、語る44年目の証言者⑦、若い人にどう継承、体験活動の壁浮き彫り、励ましながら	連載記事	HT0501100
19890618	朝日広	2段	日本の加害歴史知ってショック		HT0501100
19890715	朝日	3段	在朝被爆者も渡日治療希望、交流の在日代表に訴え		HT0501100
19890813	朝日	6段	【声】平和とともに差別のない国を、韓国被爆者の請求に回答を、韓国人慰霊碑公園に入れて	読者投稿欄(3名分)	HT0501100
19890815	朝日1	5段	在韓被爆者の補償要求、韓国日本と交渉進める、東亜日報報道		HT0501100
19890815	朝日3	8段写真	浮上した在韓被爆者補償問題、反核・反戦のテコに、盧大統領の来日が焦点、広がる民主化運動		HT0501100
19890907	朝日広	5段写真	「援護法の早期制定を」、参院社会労働委、現地調査で被爆者ら		HT0501100
19890927	朝日	1段	在韓被爆者へ「援助充実を」、日韓会談で崔外相		HT0501100
19891107	朝日	4段	核と文学、国際シンボから、日本人加害者論が浮上、「侵略戦争の終点が原爆」	執筆：岩垂弘記者	HT0501100
19891227	朝日社	1段	在韓被爆者二世に善意の奨学金渡す、広島・長崎の二世ら		HT0501100
19900314	朝日	1段	韓国被爆者が訪日団を計画、初の政府交渉も予定		HT0501200
19900323	朝日	5段	来日する韓国被爆者支えて		HT0501200
19900325	朝日	6段	韓国被爆者、広島で交流、慰霊団の15人、「三重苦」知って、来月16日に国際会議場		HT0501200
19900415	朝日3	1段	韓国人被爆者が長崎市長を訪問		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900416	朝日社	2段	日本人の被爆者とまとまって交流会、韓国人被爆者広島入り		HT0501200
19900417	朝日社	4段	「慰霊碑なぜ公園外」、韓国の被爆者一行怒る、平和公園		HT0501200
19900418	朝日3	8段写真	【時時刻刻】 怒り・悲しみの訪日、韓国人被爆者一行、「なぜ今なお差別・・・」、「戦後清算を」と訴え、日本被害者との交流集会に「救い、		HT0501200
19900420	朝日社	1段	韓国被爆者に外務省が謝罪		HT0501200
19900424	朝日3	5段写真	【ひと】 日本人被爆者との格差解消を求め来日した金日仙さん	人物紹介欄、執筆：大峯伸之記者	HT0501200
19900428	朝日社	1段	韓国総領事が移転申し入れ、広島韓国人慰霊碑		HT0501200
19900429	朝日	2段	【声】 広島市長には配慮が欠けた	読者投稿欄	HT0501200
19900501	朝日2	5段	日韓外相協議、要旨		HT0501200
19900515	朝日社	3段	公園内に「統一碑」を、原爆慰霊碑問題で朝鮮総連広島県本部		HT0501200
19900518	朝日3	8段	盧大統領訪日、「被爆者基金」検討へ、「三世問題」改善も確認、基金の充実訴え、在韓被爆者代表が再訪日		HT0501200
19900519	朝日	4段写真	韓国人慰霊碑移転へ、広島市約東8・6には公園内に		HT0501200
19900520	朝日2	2段	韓国被爆者救済、日本政府に要望		HT0501200
19900524	朝日3	8段写真	【時時刻刻】 韓国人原爆慰霊碑また放火、「差別の碑」傷深く、移設決定直後「なぜ」	特集記事	HT0501200
19900524	朝日社	1段	「具体的対策と謝罪を求める」、在韓被爆者問題で要望		HT0501200
19900524	朝日社	7段写真	広島、韓国人被爆慰霊碑に放火、大統領来日嫌がらせ？、折りづる3000羽焼く		HT0501200
19900524	朝日広	9段写真	韓国人被爆慰霊碑の放火事件、日本人として恥ずかしい、平和運動に衝撃		HT0501200
19900524	朝日広	3段	訪韓被爆者、心の痛み知って、26日に広島で報告集会		HT0501200
19900525	朝日社	8段写真	【時時刻刻】 韓国大統領来日、ソウル、韓国は評価と不満、「もう日本許しても・・・」、「すまないの言葉がない」	執筆：小田川・波佐場特派員	HT0501200
19900526	朝日広	7段写真	在韓被爆者援護、40億円は少なすぎる、首相表明に在日の人ら、カネだけで終わらぬ「北へも目を」と指摘		HT0501200
19900527	朝日	1段	【声】 歴史の無視は被爆者への罪	読者投稿欄	HT0501200
19900527	朝日	6段写真	戦後清算、期待と反発、韓国側「実質的救援を」	執筆：小田川特派員（ソウル）	HT0501200
19900527	朝日社	1段	大統領特使、広島で慰霊		HT0501200
19900527	朝日社	1段	広島県朝鮮人被爆者協議会支部役員、幸福守さん	盧大統領訪日についてのコメント	HT0501200
19900527	朝日広	5段	痛み分かちあわねば、韓国訪問の被爆者報告、実態知ってと訴え		HT0501200
19900602	朝日広	3段	募金37万円を託す、韓国人被爆者救援へ、修学旅行の大阪淡路中		HT0501200
19900612	朝日社	4段	日本の援助待ち切れぬ、在韓被爆者自殺図る、日本大使館正門前、父母も弟も亡くし	執筆：波佐場特派員	HT0501200
19900613	朝日広	4段写真	「在韓被爆者自殺図る」報に県内にもショック、政府は腰が重すぎる、「対策が遅い合意の支援額にも絶望」		HT0501200
19900613	朝日広	3段	韓国人慰霊碑に思う、あの親子は今どこに	読者投稿欄	HT0501200
19900619	朝日広	4段	建立準備委が発足、韓国人被爆慰霊碑移転		HT0501200
19900620	朝日3	8段写真	【時時刻刻】 韓国・朝鮮人の原爆犠牲者慰霊、実現なるか「南北統一碑」、広島市が働きかけ、「国名は」「移転か」対立解消を模索	執筆：大峯伸之（広島支局）	HT0501200
19900623	朝日社	7段写真	強制連行から帰国途中遭難、韓国の遺族が質問状、三菱重工の責任問う、「責任ない」と三菱重工、韓国のTV取材に答え		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900624	朝日社	2段	碑文の変更を準備委が合意、韓国人原爆碑		HT0501200
19900624	朝日広	7段写真	本願寺別院で遺骨撮影、強制連行の徴用工追跡キャンペーン、韓国のTVスタッフら		HT0501200
19900627	朝日広	2段	「平和公園」シンポに荒木市長は出席して、来月開催控え実行委が要請書		HT0501200
19900628	朝日広	4段	準備委委員が辞意、韓国・朝鮮人慰霊碑問題謝罪碑主張して、準備委員会に公開の質問状、市民4人名で		HT0501200
19900630	朝日広	2段	現状のまま移転を、韓国人被爆慰霊碑問題、市民団体市に要望		HT0501200
19900706	朝日広	6段写真	広島-長崎45年夏④、どうして日本人の手に任せるのか、慰霊碑移転巡り様々な思い交錯、南北統一碑の波紋	連載記事	HT0501200
19900709	朝日社	6段	日本で治療受けたい、北朝鮮被爆者9人から手紙、初めて生の声、広島		HT0501200
19900711	朝日広	6段写真	手加えず移設を、「南北統一碑」に反発、建立委員長が広島市に訴え、キリスト教関係者も		HT0501200
19900713	朝日広	2段	出席要請を広島市断る、15日の平和公園シンポ		HT0501200
19900715	朝日社	5段写真	自殺図った在韓被爆者李さん、後遺症治療へ広島着		HT0501200
19900716	朝日広	8段	韓国人被爆者慰霊碑、碑文削りに批判、平和公園シンポで続出、有志で独自委結成へ		HT0501200
19900717	朝日社	3段	抗議して自殺図った李さん、原爆手帳の交付申請		HT0501200
19900728	朝日3	5段	外国人被爆者への援護推進盛り込む、8・6広島市長の平和宣言骨子		HT0501200
19900729	朝日2	1段	支援の40億円一括現金で、来日中の在韓被爆者訴え		HT0501200
19900729	朝日広	1段	韓国人慰霊碑現状で移転を、記者会見で辛会長		HT0501200
19900803	朝日社	4段	強制連行…帰国時に沈没、韓国の遺族ら補償を要求へ		HT0501200
19900804	朝日広	2段	「朝鮮人も傷ついた」、北朝鮮代表団長柳海永さん		HT0501200
19900804	朝日広	6段写真	18年ぶりに原爆手帳も、北朝鮮の姜さん、苦しさ悲しみなお生々しく、北朝鮮から		HT0501200
19900804	朝日広	4段写真	徴用工の遺族会出席で渡韓、歌人深川宗俊さん		HT0501200
19900805	朝日社	5段	韓国人原爆犠牲者慰霊、「統一碑」持ち越し		HT0501200
19900805	朝日広	4段写真	子らが寄せた手紙まとめる、証言活動の李さん、在韓被爆者らの証言など収める	新刊紹介(2冊分)	HT0501200
19900807	朝日社	4段	強制連行先の広島で被爆、いやされぬ怒り語る、韓国人7人		HT0501200
19900807	朝日広	4段	日本に「謝罪」はないのでしょうか、前韓国キリスト教女性同盟議長李さん		HT0501200
19900807	朝日広	2段	来年はぜひ平和公園で、韓国人慰霊祭		HT0501200
19900810	朝日4	7段写真	原水爆禁止大会を顧みて、ソ連の核被害に衝撃、「援護法」制定に熱気、「加害責任」も追及へ	解説記事、執筆：岩垂弘、辰濃哲朗、石橋英昭記者	HT0501200
19900810	朝日社	9段写真	長崎原爆の日、「謝罪」宣言救済へ光、韓国・朝鮮人被爆者45年二重苦に耐え、こうだと思いがまま言葉に、「謝罪」の本島市長、被爆地域是正首相具体策示さず、長崎大会開く、原水協、原水禁の宣言も「加害責任」に言及、世界大会閉幕		HT0501200
19900810	朝日広	2段	慰霊碑問題を韓国記者取材		HT0501200
19900811	朝日2	3段	広島の慰霊碑南北統一問題、地元トップ会談、「努力」確認		HT0501200
19900815	朝日広	2段	被爆体験の証言活動を続ける在日朝鮮人被爆者連絡協議会会長の李実根さん、三菱重工広島造船所で徴用工係をしていた「三菱重工業韓国人被爆者沈没遺族会」会長盧長寿さん	8月15日に関するコメント記事	HT0501200
19900817	朝日	6段	【論壇】連行犠牲者慰霊碑建てて	読者投稿欄、執筆：申英愛(書画家)	HT0501200
19900916	朝日広	5段写真	「長崎に学べ」と集い、韓国・朝鮮人被爆者碑問題広島の市民団体		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19901011	朝日広	8段写真	在韓被爆者の女性10人来広、45年ぶりに念願果たす、貯金し爆死した肉親の霊前に		HT0501200
19901012	朝日広	6段写真	5人が原爆手帳を申請、ヒロシマ、在韓被爆者の女性		HT0501200
19901017	朝日広	4段写真	45年ぶり原爆手帳、広島市、在韓被爆女性5人に		HT0501200
19901018	朝日広	1段	思い出残し帰国、韓国人被爆者十人		HT0501200
19901018	朝日広	3段	韓国人の原爆犠牲者慰霊碑、経緯公表し方針を、市民団体公園内移設未解決で		HT0501200
19901102	朝日社	3段	「原爆慰霊碑を平等に」、韓国人遺族ら号泣訴え、広島		HT0501200
19901102	朝日広	4段	ヒロシマで戦争責任問う、太平洋犠牲者遺族会の一行、平和行政に疑問も		HT0501200

『毎日新聞』掲載記事一覧

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19700620	毎日	6段写真	原爆25年⑨、悲願のうねり15朝鮮人被爆者、`差別、日本人の責任、訪韓する折鶴の会の女高生	特集記事	HT0400600
19700805	毎日広	6段写真	はじめて開く韓国原爆者の慰霊祭、`差別の谷間、に泣く、医療も生活援護もない		HT0400600
19700811	毎日広	3段	国境越えスクラム、韓国人被爆者を囲む会		HT0400600
19701219	毎日広	6段	密入国の韓国被爆者を救おう、`守る会、近く発足、広島医師ら運動		HT0400600
19710804	毎日社	6段写真	「被爆韓国人も忘れないで」、「医療援助もない」、二十六年目来日の二人訴え		HT0400700
19710819	毎日広	4段	折鶴の会韓国へ、白バト会と姉妹縁組も、平和運動のあり方・進め方、「じっくり話して来ます」		HT0400700
19710825	毎日広	1段	被爆者治療団の入国を許可、韓国政府		HT0400700
19710921	毎日広	3段	十分診療頼みます、訪韓原爆医療団折ヅルかけて出発		HT0400700
19710929	毎日広	6段写真	忘れられていた海外の被爆者、苦しみの手記つぎつぎ、韓国鳩の会から、折鶴の会近くまとめて出版		HT0400700
19720601	毎日広	6段	被爆した韓国人生活実態にメス、日韓共同研究で、救済もなく`差別、に泣く		HT0400800
19720623	毎日広	5段写真	母国の被爆者を救いたい、「原爆症知識を身に」、韓国の保健所長が広島へ		HT0400800
19720717	毎日社	6段写真	朝鮮人被爆者を描く、「原爆の図」今年は「カラス」、丸木夫妻、五千人の死告発、黒基調に壮絶な絵筆で		HT0400800
19720727	毎日社	1段	韓国被爆者病院着工は来年三月		HT0400800
19720811	毎日夕5	6段写真	原爆神話の崩壊と原点からの再出発、朝鮮・中国・ベトナムの中のヒロシマ・ナガサキ	執筆：鎌田定夫	HT0400800
19730223	毎日	5段	原爆治療で密入国の女性、覚せい剤密輸団に、韓国で逮捕、救援運動の障害にならぬよう、広島の関係者		HT0400900
19730324	毎日社	5段	`医は仁術。海を越えて、韓国の被爆女性を招待、広島で入院治療、河村病院長		HT0400900
19730612	毎日社	7段	被爆の韓国婦人「見捨てないで」、破れぬか`法の壁、来日治療訴え、近く厚生省と話し合い		HT0400900
19730803	毎日	7段写真	原子雲に国境なし、日韓の被爆者スクラム、大阪で会合		HT0400900
19730822	毎日社	7段写真	`ケロイド行脚、資金盗まれる、`トラの子、22万円、東京の旅館、広島で被爆の韓国人		HT0400900
19731114	毎日広	5段写真	ケロイドの被爆韓国女性、治療へ広島入り、病院長が招く		HT0400900
19740206	毎日広	8段	知ってほしい、韓国人被爆者のことを・・・、苦しみを体験記に、子弟の女子中高生計画、広島		HT0400900
19740207	毎日社	5段写真	原爆ドームに落書き、慰霊碑も「日帝打倒」など		HT0400900
19740216	毎日社	1段	孫さん訴訟結審		HT0400900
19740304	毎日広	5段	行政に反応もなく、原爆ドーム落書き事件が残したもの、日本人被爆者からは怒り、大阪の朝鮮人数人の犯行？		HT0400900

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19740331	毎日朝社	4段写真	治療に密入国の孫さんへ、「被爆手帳交付せよ」、福岡地裁、被爆者の「居住」「国籍」制限せず、被爆者、韓国人は一万五千人も		HT0900500
19740405	毎日広	8段写真	韓国の被爆者診療センター、運営の見通しつく、次は設備充実、核禁会議医療装置など贈る		HT0401101
19740430	毎日社	8段写真	戦時中に未払い賃金、元朝鮮人徴用工ら三菱重工に請求へ		HT0401101
19740723	毎日朝社	6段	韓国人被爆者に「手帳」、東京都		HT0401101
19740726	毎日1面	5段	外国人の被爆者手帳、厚生省も交付認む		HT0401101
19740731	毎日広	5段写真	被爆手帳の申請を受理、広島で治療を願う金さん、決まれば広島で初のケース		HT0401101
19740802	毎日社	6段	被爆韓国人が三菱「告発、へ、「未払い賃金補償を」		HT0401101
19740803	毎日社	4段	被爆韓国人の「告発、交渉、「解決済み」と三菱側		HT0401101
19740804	毎日広	4段写真	「平和」を誓い合う、韓国被爆二世の会、広島折り鶴の会訪問		HT0401101
19740806	毎日広	3段	観光ビザで手帳申請、韓国人被爆者3人広島市に初のケース		HT0401101
19740817	毎日広	3段	「折鶴の会」が訪韓中止、被爆者との親善ファイに、大統領暗殺未遂事件		HT0401101
19740828	毎日広	5段	核禁会議が調査団、運営難の韓国被爆者診療センター、韓国政府にも協力要請		HT0401101
19740907	毎日広	5段	韓国被爆者の実態調査、慶尚南道診療センターに事務所を開設		HT0401101
19740907	毎日広	3段	深川さんが四たび訪韓、韓国政府に働きかけ、三菱重工業未払い賃金補償で		HT0401101
19741006	毎日広	2段	来春にも治療ビザで来日、韓国人被爆者の金さん帰国		HT0401101
19741123	毎日広	3段	原爆症の治療に来広、市民団体の招きで韓国から被爆婦人		HT0401101
19741204	毎日広	3段	手帳交付を申請、韓国人被爆者の崔さん		HT0401101
19741211	毎日広	5段	第4次訪韓医師団、きょう出発、現地で被爆者の診療に		HT0900100
19750717	毎日夕1	10段	孫さんに被爆手帳を、福岡高裁、一審判決を積極支持、医療法に国家補償面も、被爆事実も認める、早く手帳交付を、孫さん、上告は国の指示に従って、亀井知事		HT0900100
19750717	毎日夕社	10段写真	支援の拍手高々と、孫さん勝訴被爆治療へ道開く、実数さえつかめず、韓国の被爆者の実態、判決は一筋の光明だが		HT0900100
19750812	毎日広	8段写真	ヒロシマの明日、被爆から30年⑱、白いボタン、燃える子の胸で光っていた、今も忘れぬその色、朝被協発足の日、壇上母の涙	連載記事	HT0401201
19750830	毎日広	6段写真	企業責任で補償を、元朝鮮人徴用工の遺族会、三菱重工へ要求、44人慰謝料一億百万円、30年間も放置された、日韓条約で解決済み三菱		HT0401201
19760217	毎日広	4段	韓国の被爆者センター、増築へ募金運動		HT0900200
19760711	毎日広	8段写真	「日本人は無理解だ」、ヒロシマを考える講座、外国人被爆者訴え		HT0900300
19760802	毎日	5段	【編集者への手紙】被爆者に国境はない、韓国人慰霊碑にも平和の祈りを	読者投稿欄、執筆：南口繁信	HT0900300
19760804	毎日広	3段写真	被爆者手帳交付訴訟の孫さんが受診、広島原爆病院		HT0900300
19760806	毎日広	6段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊祭、詩「オムニ」(母)ささげる、「被爆者に国境なし」、大阪・枚方の詩人・詩川氏、「差別撤廃、訴えて		HT0900300
19760810	毎日広	3段	遺骨収集団が現地へ、壱岐島に眠る韓国人徴用工246人		HT0900300
19761001	毎日社	3段	原爆手帳勝訴の孫さん、「退去無効」は認めず、福岡地裁		HT0900300

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19761124	毎日社	3段	31年ぶりに手術、韓国人被爆者の崔さん、長崎		HT0900300
19770423	毎日社	2段	朝鮮人被爆者に全面適用を、援護法審議で申入れへ		HT0401201
19770725	毎日	6段写真	被爆者の実態切々と、国際シンポ、広島で面接調査		HT0401201
19770801	毎日	4段	朝鮮人被爆者数解明を		HT0401201
19770802	毎日	5段	救済へ訴え、は一つ、被爆問題国際シンポジウム、在日朝鮮・韓国人	コピー	HT0401201
19770806	毎日広	7段写真	同胞よ安らかに、韓国人原爆死没者慰霊祭、復権の誓い固く、鎮魂の詩に新たな涙も		HT0401201
19770810	毎日	1段カ	【読者の広場】原水禁大会への入国規制は遺憾	読者投稿欄	HT0401201
19780307	毎日	7段	原爆死に弔慰金を、在日朝鮮人遺族が申請、広島		HT0900300
19780331	毎日	7段カ	密入国でも被爆手帳を、「孫さん訴訟」で最高裁、「補償は国家の道義」、原爆医療法外国人も対象		HT0401202
19780401	毎日	5段	【社説】被爆者救済の行政姿勢正せ	社説	HT0401202
19780405	毎日広	5段	被爆死したオイの弔慰金、厚生省に再請求、孫さん夫妻		HT0401201
19780803	毎日	6段写真	韓国人被爆者の救済訴え、初の原爆写真展開く、ソウル	執筆：前田特派員（ソウル）	HT0501400
19780921	毎日	4段写真	被爆治療、孫さん特別在留許可、法務省不法入国初めて		HT0501400
19790205	毎日朝社	6段	朝鮮人の被爆体験、初の手記集発刊へ、広島、「悲惨な歴史明るみに」		HT0900400
19790305	毎日社	3段	「在日朝鮮人被爆二世の会」来月発足、広島		HT0900400
19790325	毎日社	3段	被爆者手帳訴訟の韓国人、孫を窃盗で逮捕、福岡		HT0501400
19790430	毎日	4段	「朝鮮人被爆二世に援護を」、広島で初の協議会発足		HT0501400
19790516	毎日広	6段写真	在韓被爆者に治療の手を、協会の善意2人が来広手帳、交付を申請		HT0501400
19790805	毎日広	3段	韓国被爆者協会の郭副会長、再び手帳交付を申請、慰霊祭出席で広島入り		HT0501400
19791005	毎日朝社	3段	被爆者手帳訴訟の孫振斗、また盗みで逮捕、強制送還か		HT0501400
19800222	毎日	5段	韓国人被爆者の国内治療、政府間ベースでも、来月第一陣厚相が明かす		HT0500200
19800726	毎日広	7段写真	ヒロシマ35年目の夏④、国際連帯、民族間の架け橋を、谷間に放置の朝鮮人被爆者・各被害者へ	連載記事	HT0500200
19800728	毎日	6段	朝鮮人被爆者慰霊碑、建立メドたたず、広島市「平和公園多すぎる」		HT0500200
19800731	毎日社	6段	海を越えてヒバクシャの手紙③差別	連載記事	HT0500200
19800806	毎日広	7段写真	碑に向かい「オモニ」、韓国被爆者慰霊祭も、朝鮮人被爆者苦難の歩み今後も、やっと全国組織できたが		HT0500200
19801118	毎日	4段	被爆韓国人広島入り、10人治療		HT0500200
19801119	毎日広	4段写真	念願の治療生活に、被爆韓国人まず精密検査、原爆病院		HT0500200
19810403	毎日	6段	被爆死の韓国人徴用工、弔慰金新制を却下、厚生省養父母に「受給権ない」、戦中日本人、にかベ		HT0500300
19810422	毎日	6段	抑圧と苦難の歴史映画に、朝鮮人被爆者、ベールの中の実相に光、広島長崎でロケ	コピー	HT0401700
19810522	毎日	6段	「世界の人へ」、近く広島でロケ、朝鮮人被爆者の記録映画		HT0500300
19810708	毎日広	7段写真	差別と痛み、二重苦の訴え「世界の人へ」、広島ロケ開始朝鮮人被爆者の映画		HT0500300
19810710	毎日	3段	朝鮮人や韓国人を対象に、被爆白書作成へ、広島		HT0500300
19810717	毎日広	2段	韓国から検査技師、核禁県民会議が招く		HT0500300
19811118	毎日	1段	韓国被爆者受け入れて調査団、厚生省きょう派遣		HT0500300
19811125	毎日	2段	在韓被爆者5年に250人日本へ、治療のため		HT0500300
19811221	毎日広	4段写真	ようやく広島入り、治療の韓国人被爆者13人		HT0500300
19811224	毎日広	4段写真	徴用工の遺骨送還を、被爆治療の韓国人代表、県に早期実現を要請		HT0500300
19820206	毎日広	3段	治療終えて第1陣が帰国、韓国在住の被爆者		HT0500400
19820318	毎日	1段	朝鮮人被爆者が広島で反核集会		HT0500400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19820514	毎日広	5段	第三陣広島へ10人、韓国在住の被爆者治療		HT0500400
19820518	毎日広	4段写真	第3陣10人広島入り、韓国在住被爆者が治療に		HT0500400
19820531	毎日	9段写真	韓国人被爆者救おう、「基金」設立申請へ、政財界人文化人ら、50億円で病院設立、ソウルに釜山に政治の壁越え民間運動		HT0500400
19820722	毎日	2段	窃盗の「孫」懲役10月、原爆症治療者、国外退去は免れる、福岡簡裁		HT0500400
19820730	毎日	8段	もうひとつのヒロシマ—朝鮮人被爆者の証言、朴寿南さんの本近く刊行、「その悲惨さを広く訴えたい」		HT0500400
19820804	毎日	2段	朝鮮人被爆者ノート、年内発行決める—ヒロシマで集会		HT0500400
19820806	毎日	5段写真	参列者の表情暗く、韓国人犠牲者の慰霊祭		HT0500400
19820828	毎日	3段	在韓被爆者11人が来広、ケロイドなどの治療へ		HT0500400
19820901	毎日広	2段	在韓被爆者の広島入り遅れる		HT0500400
19820930	毎日広	3段	在韓被爆者の検診へ、来月4日調査団が出発		HT0500400
19821008	毎日	3段	韓国へも治療団、核禁会議		HT0500400
19821112	毎日	3段	朝鮮人被爆者の慰霊碑、広島市が建立不許可		HT0500400
19821213	毎日朝	4段	韓国人被爆者・孫振斗の滞日不許可、「取り消し」求め提訴へ、支援者ら決定	コピー	HT0500400
19830426	毎日広	2段	在韓被爆者15人が広島入り		HT0500500
19830629	毎日広	5段写真	思わず叫んだ「これが平和」、在韓被爆者に手帳、入院治療始まる…		HT0500500
19830830	毎日広	4段写真	「よけ、なおった」、在韓被爆者ら15人帰国		HT0500500
19831005	毎日広	5段	13人が広島へ、11日に在韓被爆者		HT0500500
19831029	毎日広	4段	渡日治療100人に、韓国人被爆者		HT0500500
19831213	毎日広	3段	平和公園に慰霊碑を、朝鮮人被爆者協が要望		HT0500500
19840128	毎日広	2段	第8陣は20人に、韓国人被爆者の渡日治療		HT0500600
19840329	毎日広	5段	在韓被爆者治療は20人		HT0500600
19840602	毎日広	2段	11日に来日、在韓被爆者渡日治療第9陣		HT0500600
19840805	毎日1	8段写真	【サンデーレポート】〴〵置き去り、在韓被爆者、補償なく病、貧困の2万人	特集記事、執筆：広島支局：佐々田剛記者	HT0500600
19840908	毎日広	9段	天皇陛下のお言葉、ヒロシマの声を聞く		HT0500600
19840914	毎日広	5段写真	「朝鮮人被爆者問題」で講演、李さん来月ロスへ		HT0500600
19841019	毎日広	3段	「広島で世界被爆者集会を」一米から帰国の李さん会見		HT0500600
19841029	毎日	1段	孫、今度は覚せい剤所持で逮捕、韓国人被爆者		HT0500600
19841203	毎日	4段	【ひと】韓国被爆者運動のリーダー 辛泳洙	人物紹介欄	HT0500600
19841212	毎日広	5段写真	招請第一陣の女性2人来広、民間ベースの在韓被爆者治療		HT0500600
19850129	毎日広	4段	在韓被爆者の渡日治療、今年は大幅に削減、韓国からの連絡100人の予定が60人に、心配される先細り		HT0500700
19850316	毎日広	2段	広島入りは12人、在韓被爆者渡日治療第12陣		HT0500700
19850326	毎日広	2段	早急な援護が必要、在韓被爆者調査団が帰国報告		HT0500700
19850424	毎日広	9段写真	40年ぶり涙の再会、「伍長さん」しっかり握手、在韓被爆者徐さんと当時の班長・上野さん、親切が忘れられず、救援する市民の会やと捜しあてる		HT0500700
19850529	毎日広	1段	第二陣の10人が広島市入り		HT0500700
19850618	毎日広	4段写真	原爆40年⑤、逆行する流れ批判、韓国内に〴〵原爆病院、を、河村虎太郎氏	連載記事	HT0500700
19850703	毎日広	4段写真	原爆40年④、意識的に黙殺され、指紋押なつと表裏一体、李実根氏	連載記事	HT0500700
19850718	毎日社	7段写真	被爆40年③苦難を越えて、渡れぬ朝鮮海峡、せめて遺骨返して	連載記事	HT0500700
19850806	毎日	7段写真	【interview ここが知りたい】韓国被爆者救援12年なぜですか、戦争責任ざんげした教祖の遺志継ぐ、被爆者の高齢化活動急がねば…	語り手：力久隆積（宗教法善隣会教主）	HT0500700
19850806	毎日広	2段写真	在日韓国人被爆者の慰霊祭		HT0500700
19850807	毎日	1段	韓国・朝鮮人被爆者に謝罪、首相		HT0500700

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19851031	毎日 1	5 段	在韓被爆者の渡日治療、期限延長を求めず、韓国政府		HT0500700
19851106	毎日広	4 段写真	原爆 40 年 (62) カンパで患者呼ぶ、「政府ベースでは不十分」、井下春子さん	連載記事	HT0500700
19851106	毎日広	4 段	在韓被爆者の渡日治療、期限延長求め署名、支援のボランティアら		HT0500700
19851120	毎日広	4 段写真	原爆 40 年 (68) 専門医療に援助を、日本の加害責任自覚して、豊永恵三郎氏	連載記事	HT0500700
19860320	毎日広	2 段	在韓被爆者渡日治療、25 日から受け入れ、中区の広島原爆病院		HT0500800
19860414	毎日広	3 段写真	渡日治療の継続訴え、韓国の原爆被害者、南区で考える集い		HT0500800
19860503	毎日広	3 段	北朝鮮、原爆展の開催に意欲、訪朝の自民県議団要請、前向き姿勢示す		HT0500800
19860515	毎日 4	6 段	【ニュースきょうあす】在韓被爆者の渡日治療、「継続」へ議論活発化、日韓交流に大きな役割	解説記事、執筆：神田和則（広島支局）	HT0500800
19860709	毎日	7 段写真	アジア宗教者平和会議、問われた日本の責任、韓国人被爆者・サハリン中国東北部の残留韓国人、これらの人々と共に歴史を背負うのが宗教者のつとめ、中国を含め 22 カ国参加		HT0500800
19860801	毎日	2 段	在韓被爆者の渡日史料打ち切り、韓国政府が決定		HT0500800
19860813	毎日	7 段写真	【記者の目】在韓被爆者を取材して、滞日治療 11 月で期限切れ、救済求める叫びが耳に、「抱える悩みに国境はない」	特集記事、執筆：田中公明（長崎支局）	HT0500800
19860826	毎日 4	6 段	【ニュースきょうあす】新段階の在韓被爆者問題、渡日治療の打ち切り迫り、日弁連乗り出す	永守良孝（ソウル支局）	HT0500800
19860920	毎日広	2 段	25 日に来日広島で 10 人、在韓被爆者治療		HT0500800
19861003	毎日夕	5 段写真	強制連行そして被爆、同胞の苦闘映画に、在日朝鮮人女性作家喫茶店売って資金		HT0500800
19861106	毎日広	5 段	渡日治療、続けて、在韓被爆者派遣医師団に訴え		HT0500800
19861114	毎日	2 段	在韓被爆者の渡日治療、厚生省打ち切りへ、今月末限り韓国拒否で		HT0500800
19861218	毎日社	4 段	「韓国・朝鮮人の資料も」、ヒロシマを語る会、原爆資料館に申し入れ		HT0500800
19870310	毎日広	9 段写真	「もうひとつのヒロシマ」、12・14 日広島市でも上映、被爆した韓国・朝鮮人の生きた証言、`生き方、を問い直す		HT0500900
19870620	毎日広	8 段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、なぜ差別移転要求の動き高まる、日本人慰霊碑と同じく平和記念公園内に		HT0500900
19870622	毎日社	6 段写真	在韓被爆者救済に尽力、河村虎太郎氏が死去		HT0500900
19870623	毎日広	6 段写真	河村虎太郎医師の死、行き詰まりぎみの在韓被爆者救援に、関係者「大きな柱を失った」		HT0500900
19870625	毎日社	9 段写真	被爆の在韩国女性 3 人、苦闘半世紀の手記、人間を父母を青春を返せ、「ヒロシマへ」近く出版、「原爆」「戦争責任」問う		HT0500900
19870626	毎日社	6 段写真	渡日治療者の手記など掲載、広島委員会「被爆韓国人」を翻訳、発刊		HT0500900
19870629	毎日広	5 段写真	在韓被爆者治療に半生をささげた河村さんさようなら、告別式に 1500 人、チョゴリ姿も目立つ		HT0500900
19870804	毎日	1 段	在日被爆二世も参加、ソウルで平和の集い		HT0500900
19870804	毎日 14	7 段写真	被爆二世として生きる、反核・平和の世界へ、「大阪被爆二世の会」、大久保定さん、`虚弱傾向、の肉体を通し原体験の継承を、「戦争加害者」として`業、も忘れず	執筆：長谷邦彦（記者）	HT0500900
19870807	毎日社	5 段写真	在韓被爆女性・巖さん、この痛み子へ孫へ、渡日治療打ち切りでも		HT0500900
19870807	毎日社	1 段	日本の大使も出席し韓国で犠牲者追悼式		HT0500900

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19871104	毎日広	6段写真	原爆棄民の証言、広島平和記念館で始まる、伊藤孝司さんの写真展		HT0500900
19880401	毎日広	6段写真	玉砂利におびただしい落書き、広島の平和公園・韓国人原爆犠牲者慰霊碑の周囲、「平和」の言葉だが、関係者「他の方法で訴えて」		HT0501000
19880714	毎日広	4段	被爆者問題、日韓両国で取り組もう、広島など二世たち訪韓団結成、交流へ		HT0501000
19880718	毎日社	2段	在韓被爆者を支援、市民の会、署名集め、調査団派遣		HT0501000
19880721	毎日社	7段写真	海峡越えて平和トーク、広島の沼田さん、韓国の金さん、被爆者2人公開で		HT0501000
19880730	毎日広	1段	韓国人慰霊碑を平和記念公園へ、大韓民国居留民団県本部、広島市役所へ要望書		HT0501000
19880802	毎日広	5段	二重被爆、在日韓国人被爆者ら、悲惨な体験リアルに、証言ビデオ新たに50本、広島平和文化センター		HT0501000
19880806	毎日広	4段写真	詩川さん詩ささげる、韓国人犠牲者の碑前で、しめやかに慰霊祭		HT0501000
19880807	毎日社	1段	ソウルで韓国人被爆者の追悼式		HT0501000
19880811	毎日広	5段	韓国から被爆調査団、援護制度拡充求め、初の国会議員ら来広		HT0501000
19880812	毎日広	8段写真	被爆者治療センターに日本政府の資金援助を、広島入りしている韓国実態調査団、「渡日治療は再検討」、朴団長、国会提起の方針示唆		HT0501000
19880910	毎日広	3段	被爆二世の訪韓団、「実情の認識深めた」、広島市役所で帰国報告会		HT0501000
19881018	毎日広	9段写真	日本政府の姿勢に憤り、在韓被爆者3人広島へ、呉さん証人捜しも		HT0501000
19890118	毎日朝	4段	韓国被爆者協会、政府に謝罪と補償要求	1段当たり4行	HT0501100
19890129	毎日広	4段	日韓被爆二世交流親善委を結成、パンフレット作成や情報交換など		HT0501100
19890503	毎日広	4段	「韓国人被爆者と交流を」、語り部、11人が訪韓		HT0501100
19890512	毎日広	5段写真	初の朝鮮人被爆者証言、広島平和文化センターが収録		HT0501100
19890712	毎日広島	8段写真	【思いつき】韓国人原爆犠牲者慰霊碑、広島、来月資料集を発行、建立にまつわる諸説整備、難しい「実相」の伝達、ピカ資料研究所など	特集記事	HT0501100
19890801	毎日社	6段写真	被爆44年夏の報告⑤、徴用韓国人の軌跡、多くは治療と無援	連載記事	HT0501100
19890803	毎日社	2段	「日本人として申し訳ない」、本島長崎市長在韓被爆二世らに		HT0501100
19890806	毎日広	2段写真	平和への思い熱く、韓国人慰霊祭、在韓被爆二世も出席		HT0501100
19890810	毎日社	2段	在韓被爆者の治療費を無料化、韓国原爆被害者協会		HT0501100
19890815	毎日1	7段	在韓被爆者、韓国が23億ドル賠償要求、東亜日報報道「日本一部受け入れ」		HT0501100
19890905	毎日	8段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、建立のいきさつまとめ本に、不文削除の経過も、実相。伝える手掛かりに、碑の会		HT0501100
19890908	毎日4	6段	【ニュースきょうあす】終わらぬ戦後「賠償」、在韓被爆者めぐり韓国、日本に要求へ	執筆：河野通宏（広島支局）	HT0501100
19890912	毎日	3段写真	【人】在韓被爆者の賠償要求を支援する、姜文熙さん	人物紹介欄、執筆：河野通宏	HT0501100
19890927	毎日広	7段写真	【思いつき】在韓被爆者援護は、「もう待てないのです」、日韓両政府に強い怒り、辛韓国原爆被害者協会会長	特集記事、執筆：川路恵理子	HT0501100
19890930	毎日広	4段	在韓被爆者の治療へ、広島の3氏ら専門医師派遣、明後日到着		HT0501100

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19891101	毎日広	5段	在韓被爆者に多い筋・骨格疾患、渡韓医師団診療報告書、核禁会議派遣、全体の約半数占める、「外科領域へも留意必要」		HT0501100
19891109	毎日3	7段写真	在韓被爆者の医療補助、韓国赤十字に送金、今年度分の4200万円、「渡日治療」の再開見送り、外務省年内に		HT0501100
19900417	毎日広	7段写真	「慰霊碑公園の外に」、在韓被爆者慰霊祭で号泣		HT0501200
19900423	毎日2	4段	被爆者援護、サハリン残留者、課題はまだ残る		HT0501200
19900424	毎日社	6段写真	「祈りのツル」に放火、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、広島、数千羽灰に、「心踏みにじる」		HT0501200
19900428	毎日広	5段	李景朝鮮人被爆者協議会会長、「新たな慰霊碑建立を」、移設問題で解決策提案		HT0501200
19900519	毎日朝社	10段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、平和公園内移設認める、広島市`8・6、までに、朝鮮総連「日本人の手で統一碑を」		HT0501200
19900523	毎日広	2段	8月への一つのステップに、今月初め訪韓、在韓被爆者と交流、「心に刻む集会」、26日に報告集会		HT0501200
19900527	毎日広	4段写真	「痛み分かち合おう」、今月訪韓、日韓被爆者交流報告会		HT0501200
19900613	毎日社	3段	在韓被爆者自殺図る、家族犠牲に日本政府の責任問い	執筆：下川正晴特派員(ソウル)	HT0501200
19900619	毎日広	1段	碑文を変え移設する方向で検討、韓国朝鮮人原爆犠牲者の統一慰霊碑		HT0501200
19900623	毎日社	5段	「徴用工不明責任ない」、三菱重工広島、韓国MBCの取材に、社長に公開質問状も		HT0501200
19900630	毎日広	1段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑で要望、在韓被爆者支援4団体		HT0501200
19900710	毎日広	3段	「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」の移設問題、「現在の姿で公園内に」、建立時の委員長きょう陳情、広島市長に		HT0501200
19900716	毎日広	5段写真	韓国人慰霊碑問題を、平和公園シンポ約150人熱心に討論		HT0501200
19900719	毎日夕	4段	アジアからみた長崎の記録、韓国人被爆者らの怒り	新刊紹介	HT0501200
19900721	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ①、対岸、`移設、引き継がれず、広島市答申をタテに	連載記事	HT0501200
19900722	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ②、突然の決定、韓国大統領来日前に、市民の声より政情先行	連載記事	HT0501200
19900724	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ③、削除、消えた韓国人の文字、骨や肉削られる気持ち	連載記事	HT0501200
19900725	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ④、委員の声、意見には大きな隔たり、3回の委員会は激論?	連載記事	HT0501200
19900726	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ⑤、長崎の場合、設置場所納得のうえ、碑は市民に広く定着	連載記事	HT0501200
19900727	毎日広	8段写真	問いかけの碑、一九九〇夏ヒロシマ⑥、市民意識、建立経緯状況認識ごく一部、業者やした移設騒ぎも	連載記事	HT0501200
19900804	毎日広	9段写真	韓国人朝鮮人被爆者問題大きく動く、「真実の歴史見つめて」、被爆者協議会長李さん、子らの感想文出版、「苦難の道知って」、証言活動続ける朱さん、手記など集め出版、戦後の生活赤裸々に、在韓被爆者27人からの聞き取り調査が本に	新刊紹介(3冊分)	HT0501200
19900805	毎日社	7段写真	韓国人慰霊碑の移設断念、広島市碑文の調整つかず		HT0501200
19900805	毎日社	6段	長崎平和宣言、外国人被爆者に謝罪、「45年間放置責任は重い」、西暦`優先、も		HT0501200
19900805	毎日社	2段	三菱重工への補償要求決定、韓国人徴用工の遺族	執筆：下川正晴特派員(ソウル)	HT0501200
19900810	毎日4	6段	【ニュースきょうあす】連帯を目指す核被害者、原水禁世界大会が閉幕	執筆：滝川徹(社会部)	HT0501200
19901018	毎日広	2段	公園内移設で申し入れ、韓国人慰霊碑		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19901102	毎日社	3段	戦争のむごさ忘れられぬ、強制徴用損害賠償訴訟の原告団広島へ、原爆慰霊碑前で号泣		HT0501200

『読売新聞』掲載記事一覧

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19701221	読売広	2段	原爆症治療に密航、被爆韓国人に救済運動		HT0400600
19711128	読売社	3段	韓国の被爆者治療へ、広島へ医師留学、核禁会議が招く		HT0400700
19711226	読売社	6段	被爆韓国人に「お年玉」、ソウルに病院作ろう、広島・山口・島根ライオンズクラブ		HT0400700
19720618	読売広	3段	8月招待の韓国被爆二世、徐さんら4人、折鶴の会		HT0400800
19730223	読売朝	7段図	韓国ルートの全容をつかむ		HT0400900
19730717	読売広	3段	どこへ…被爆朝鮮人300人、蒸発事件教材に、平和教育研が現地調査		HT0400900
19730827	読売広	3段	文通を活発に、韓国の被爆者を慰問、折鶴の会女生徒帰る		HT0400900
19731114	読売広	4段写真	救援運動実って、韓国の被爆主婦、整形手術で来広		HT0400900
19731130	読売広	1段	28年ぶり傷痕手術、被爆韓国婦人		HT0400900
19740218	読売広	2段	韓国人被爆者調査など、折鶴の会活動方針決める		HT0400900
19740330	読売夕社	8段	被爆者手帳交付せよ、福岡地裁判決、密航の孫さん勝訴、「外国人にも適用」、原爆医療法長期滞在の必要ない、医療行政の壁破る	コピー	HT0900500
19740331	読売朝社	7段	密入国の被爆韓国人勝訴、福岡地裁、「事実あれば国籍問わず健康手帳わたせ」		HT0900500
19740723	読売広	5段	過去帳記入、韓国被爆者一族も、遺族の願い実って16人		HT0401101
19740726	読売社	7段写真	韓国人に被爆者手帳、厚生省来日治療の道開く		HT0401101
19740731	読売広	5段	市初めて受理、韓国人被爆者の手帳申請書、来日の金さん一週間以内に結論		HT0401101
19740803	読売広	3段	金さん入院、手帳申請の韓国人被爆者		HT0401101
19740805	読売広	7段写真	原点からの訴え④、被爆者援護法制定への願い、悲痛な叫び海峡のかなたから、在韓被爆者、健康手帳入手にやっと光明	連載記事	HT0401101
19740807	読売文化	7段	被爆韓国人の声、日本の専門医に治療を受けたい	執筆：藤崎康夫	HT0401101
19740828	読売広	3段	冷たい行政反省促す、河村病院長韓国人被爆者再び招待		HT0401101
19740905	読売広	2段	韓国人被爆者、実態調査を開始、核禁会議が主になり		HT0401101
19750617	読売広	4段写真	「多くの同胞に愛の手を」、韓国人被爆者崔さん、きょう喜びの退院、帰国		HT0900100
19750717	読売夕	8段	被爆者に国境なし、福岡高裁も一審支持、県の控訴しりぞける、孫さんの手帳交付訴訟	解説記事あり	HT0900100
19750829	読売広	5段	被爆者手帳の交付確実、観光ビザで来日中の韓国人、「実績作る」と厚生省		HT0401201
19760127	読売広	5段	県原水禁の51年度活動方針、韓国の被爆者救援強化など		HT0900200
19760414	読売広	5段写真	新たに4人申請、被爆者手帳、朝鮮人協が探す		HT0900200
19760417	読売社	3段	治療来日の韓国女性、被爆者「手当、交付へ、広島市		HT0900500
19760801	読売広	5段	孫さん広島入り、韓国人被爆者、念願の受診		HT0900300
19760805	読売広	1段	原水禁世界大会に参加せず、朝被協が決める		HT0900300
19760806	読売広	5段写真	オムニは星となった、チョゴリ姿まじえ、韓国人被爆者の慰霊祭		HT0900300
19760806	読売広	7段	胸打つ被爆の叫び、原水協世界大会、熱っぽく反核討議		HT0900300
19760810	読売広	3段	祖国への道遠かった…、被爆朝鮮人徴用工の遺骨、やっと発掘調査		HT0900300

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19760817	読売広	7段写真	韓国人被爆沈没遺族会の盧会長、健康手帳再交付を申請		HT0900300
19761001	読売社	3段	孫さん「強制送還」正当、福岡地裁判決、原爆症治療で密入国		HT0900300
19761002	読売広	2段	核兵器廃絶や援護、朝被協国連事務総長へ要請文		HT0900300
19770329	読売広	3段	3人の手帳交付申請、朝鮮人被爆者協新たな潜在者みつける		HT0401201
19770329	読売広	5段	朝鮮韓国人被爆者の核意識を調査、広島女大教授らの「研究会」、約千人に面接		HT0401201
19770423	読売広	4段	被爆者の援護要請、朝被協、国初めて陳情団		HT0401201
19770801	読売	3段	朝鮮人被爆者数早急に再検討、第一分科会		HT0401201
19780128	読売広	6段	30日韓国へ調査団、核禁県民会議		HT0900300
19780405	読売広	5段	補足資料添え再申請、被爆朝鮮人の遺族年金		HT0401201
19780503	読売広	4段写真	韓国人被爆者厳さんに11年目やっと原爆手帳		HT0900400
19780920	読売3	4段写真	原爆治療のため密入国、孫さんの在留許可、法務省が特例		HT0501400
19790324	読売社	3段	密入国勝訴の孫、窃盗で逮捕		HT0501400
19790430	読売広	5段写真	「平和めざし全力」、朝鮮人被爆二世協結成、行政のあり方問う		HT0501400
19790516	読売広	4段	原爆手帳交付を申請、在韓被爆者さらに2人		HT0501400
19791110	読売広	6段	二重苦浮き彫り、朝鮮人被爆者調査・中間報告、ひどい差別・厳しい労働		HT0501400
19800413	読売	2段	被爆朝鮮人・韓国人シンポジウム開く		HT0500200
19801115	読売	3段	韓国被爆者10人、日本で治療17日来日		HT0500200
19801119	読売社	4段写真	韓国人被爆者10人、手帳交付診察始まる		HT0500200
19810403	読売	5段写真	軍需工場被爆死の朝鮮人兄弟、遺族年金再び却下、厚生省通知		HT0500300
19810522	読売	6段写真	朝鮮人被爆者の生きざま映画に、広島・長崎の2団体、差別との二重苦…、製作費2千万円募金を開始	コピー	HT0401700
19810707	読売広	5段	在朝被爆者の実情は…、17日北朝鮮を訪問、中四国の大学部長ら、政府幹部と意見交換		HT0500300
19810708	読売広	4段写真	記録映画の撮影始まる、朝鮮人被爆者		HT0500300
19810731	読売	6段	北朝鮮の被爆者調査、学者訪朝団労働党と合意、36年の空白埋める		HT0500300
19810806	読売広	2段	韓国人犠牲者の慰霊祭		HT0500300
19811030	読売朝	2段	朝鮮人被爆の映画、「世界の人へ」、4日から試写会開始		HT0500300
19811118	読売	2段	在韓被爆者109人、渡日へ事前調査、専門医らきょう訪韓		HT0500300
19811127	読売広	2段	来月中に来日、在韓被爆者十数人		HT0500300
19811219	読売広	3段	在韓被爆者、手帳交付の道開いた功労者、李さん治療に来広		HT0500300
19811221	読売広	6段写真	まず13人が広島入り、第2回目の在韓被爆者治療		HT0500300
19811222	読売広	5段写真	広島入りの在韓被爆者、原爆病院に入院		HT0500300
19811224	読売広	6段	韓国人徴用工の遺骨、祖国送還受け入れ、韓国被爆者協		HT0500300
19820205	読売広	1段	きょう4人帰国、入院在韓被爆者		HT0500400
19820206	読売広	6段写真	「原爆病院は親切でした」、入院在韓被爆者の4人帰国		HT0500400
19820319	読売	3段	韓国被爆女性無念の帰国、費用が…治療打ち切る、原爆病院		HT0500400
19820518	読売広	5段写真	在韓被爆者10人広島入り、原爆病院に入院、韓国内での治療訴え		HT0500400
19820519	読売広	4段写真	在韓被爆者治療始まる、原爆病院		HT0500400
19820615	読売	2段	林さんきょう帰国、在韓被爆者治療の第2陣		HT0500400
19820804	読売広	1段	二度と出さな朝鮮人被爆者、広島で集い		HT0500400
19820825	読売	4段	在韓被爆者11人31日に広島入り		HT0500400
19820903	読売広	3段写真	この顔のやけど跡、治療が夢でした、在韓被爆者広島入り		HT0500400

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19820930	読売	3段	5日からソウルで事前調査、韓国人被爆者の渡日治療		HT0500400
19821013	読売広	5段	76人が来日治療、韓国人被爆者来春から		HT0500400
19830128	読売広	2段	三菱徴用の被爆韓工員、援護へ話し合い、研究会代表きょう渡韓		HT0500500
19830203	読売広	4段写真	日韓外交ルートで遺骨返還見通し、徴用工問題深川氏成果語る		HT0500500
19830427	読売広	3段	不安な15人入院、在韓被爆者ら広島入り		HT0500500
19830526	読売広	2段	朝鮮人被爆者テーマ、「ひろしまの冬」上演、28日公会堂で劇団「世代」		HT0500500
19830621	読売広	2段	在韓被爆者の第6陣、広島で15人が治療		HT0500500
19830629	読売広	5段写真	「心の痛みも和らげて」、在韓被爆者15人が入院		HT0500500
19830827	読売広	2段	在韓被爆者問題を発行、市民の会、歴史実態など紹介		HT0500500
19830830	読売広	4段	在韓被爆者渡日治療終え帰国		HT0500500
19830902	読売	2段	在韓被爆者79%が病氣、「救援する会」調査		HT0500500
19830906	読売広	4段写真	西独で朝鮮人被爆者を語る、李会長ボンなど9都市歴訪		HT0500500
19831005	読売広	4段	在韓被爆者の渡日治療、第7陣は男女13人、11日に広島入り		HT0500500
19831010	読売広	5段写真	侵略、被爆、差別伝える、李さん欧州語り部の旅へ		HT0500500
19831013	読売広	4段	在韓被爆者の渡日治療、13人きょう手帳交付		HT0500500
19831014	読売広	3段	期待と不安13人、在韓被爆者治療第7陣が入院		HT0500500
19831018	読売広	2段	在韓被爆者診療、23日から医師団派遣		HT0500500
19831029	読売広	4段	在韓被爆者の事前調査、3回目は100人健診、来月大邱市で		HT0500500
19831109	読売広	4段	「反核、西独民衆と連帯」、李朝鮮被爆者協会会長が帰国		HT0500500
19831123	読売広	4段	「在韓」来春から100人、平均年齢は58.5歳		HT0500500
19831213	読売広	2段	朝鮮人被爆者慰霊碑建立へ、広島への平和大通に		HT0500500
19840128	読売広	2段	在韓被爆者12人広島に、6日渡日治療		HT0500600
19840207	読売広	1段	今年第一陣12人が来広、在韓被爆者の治療		HT0500600
19840410	読売広	2段写真	在韓被爆者の広島治療、12人まず手帳申請		HT0500500
19840914	読売広島	4段	朝鮮人被爆者の実情知って、李協議会長来月ロスで講演		HT0500600
19841017	読売広	3段	日本で2か月間治療、在韓被爆者10人が来広		HT0500600
19841212	読売広	4段写真	治療に再入院、在韓被爆者委2人を招く		HT0500600
19841218	読売広	4段写真	「親切ありがとう」、韓国の被爆者11人帰る		HT0500600
19850126	読売広	2段	在韓被爆者来日治療、今年広島は36人、3・5・7月		HT0500700
19850302	読売広	4段写真	韓国被爆者に援助を、広島での初の考える集い		HT0500700
19850318	読売広	4段	26日に20人が来日、在韓被爆者治療		HT0500700
19850404	読売広	2段	渡日治療を年200人に、韓国委被爆者		HT0500700
19850423	読売広	6段写真	共に被爆やさしかった元上司、徐さん40年ぶり再会、救援の会捜し出す、来日治療の病院で		HT0500700
19850516	読売広	1段	韓国徴用工被爆、きょう「考える集い」		HT0500700
19850516	読売広	5段	日本人とは違った立場から、李さん北海道へ反核行脚、来月加害者としての視点訴え		HT0500700
19850522	読売広	1段	渡日治療13陣、18人、23日に、在韓被爆者		HT0500700
19850523	読売広	5段写真	韓国人女性17人の体験記、二重の苦しみ越えしぶとく生きた…、創価学会青年部が出版、2年がかり聞き書き		HT0500700
19850523	読売広	5段写真	被爆の証人名乗り出て、米在住の韓国人が訴え		HT0500700
19850529	読売広	1段	第13陣18人が来日、在韓被爆者治療		HT0500700
19850604	読売広	6段写真	忘却の海峡①在韓被爆者40年の軌跡、〃日本少年、襲った閃光、失意の帰国いま娘の障害に不安	連載記事	HT0500700
19850605	読売広	7段写真	忘却の海峡②在韓被爆者40年の軌跡、新妻と別れ徴用工、鉄条網の寮、1人1畳	連載記事	HT0500700
19850606	読売広	6段写真	忘却の海峡③在韓被爆者40年の軌跡、〃幼妻、一家を直撃、帰国後も辛酸をなめる	連載記事	HT0500700

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19850607	読売広	6段写真	忘却の海峡④在韓被爆者40年の軌跡、右半身焼けただれ、帰国・子育ていま妻亡く	連載記事	HT0500700
19850608	読売広	7段写真	忘却の海峡⑤在韓被爆者40年の軌跡、身重の体で娘を守る、帰国後も夫の治療費に苦勞	連載記事	HT0500700
19850806	読売広	2段	新たに26人書き加えて、韓国人犠牲者慰霊祭		HT0500700
19851014	読売広	2段	韓国・大邱市で被爆状況調査、21日から27日まで		HT0500700
19851108	読売広	2段	75人受け入れ、在韓被爆者、来年の渡日治療		HT0500700
19860319	読売広	2段	12人受け入れ、今年度初の在韓被爆者渡日治療		HT0500800
19860412	読売広	1段	「渡日治療継続働きかけを」、韓国原爆被害者協		HT0500800
19860801	読売	3段	韓国人被爆者の渡日治療、今年限り打ち切り？		HT0500800
19860805	読売朝	2段写真	韓国人慰霊碑、由来の石碑きょう除幕		HT0500800
19860920	読売広	1段	25日に第4陣10人、在韓被爆者渡日治療		HT0500800
19860926	読売広	2段	最後？に第4陣9人、在韓被爆者治療で広島入り		HT0500800
19860927	読売広	3段	口々に打ち切りの不安、在韓被爆者2か月の治療入り		HT0500800
19861015	読売広	5段	「もうひとつのヒロシマ」試写会、韓国人被爆者その生きざま、連行・あの日・戦後、鋭い問いかけ、演出の朴さん20年来の悲願		HT0500800
19861127	読売広	5段写真	在韓被爆者、最後の患者が帰国、原爆病院、李さんから「国内治療に不安」、広島・長崎で349人入院		HT0500800
19861218	読売広	4段写真	朝鮮・韓国人の被爆者の資料、もっと正しく伝えて、大阪の児童ら訴え		HT0500800
19861226	読売広	4段	遺骨広島別院へ安置、沼隈から韓国人被爆者の86体		HT0500800
19870301	読売広	5段写真	見て！反核の叫び、朝鮮・韓国人被爆者、14人の証言集める、もうひとつのヒロシマ、アリアンのうた、12・14日		HT0500900
19870306	読売家庭	3段写真	韓国・朝鮮人たちの被爆体験を映画化、8日に大阪で上映会		HT0500900
19870519	読売	3段写真	朝鮮人被爆者の姿を正しく、大阪の修学旅行生、原爆資料館に訴え		HT0500900
19870629	読売広	3段写真	悲しみあふれる…告別式、故河村さん		HT0500900
19870731	読売社	7段写真	ヒロシマは語りつがれているか④、在韓被爆者救え、行動する医学生	連載記事	HT0500900
19870806	読売	3段	韓国人犠牲者慰霊碑に祈る		HT0500900
19870810	読売広	6段写真	過去忘れ心の交流、日台韓ユースキャンプスタート、予定外の韓国人慰霊碑に参拝		HT0500900
19870821	読売広	9段写真	被爆二世の悩み不安語り合い、成果上げた訪韓団、差別偏見打破へ運動再開も		HT0500900
19870822	読売広	5段写真	子供らに教える「加害者ヒロシマ」、尾長小の野田教諭らが6年生に試み、朝鮮・韓国人被爆者の悲劇理解できたよ		HT0500900
19871104	読売広	5段写真	鄭さんも感慨深げに…、原爆棄民写真展始まる		HT0500900
19880114	読売夕	6段	【アップダウン】在韓被爆者を訪ね再び	人物紹介欄	HT0501000
19880328	読売広	7段	在韓被爆者に援助を、婦人部長ら広島市に訴え		HT0501000
19880522	読売広	5段	在韓被爆者を訪問、7月日韓医学生が初の合宿		HT0501000
19880705	読売広	3段	韓国人被爆者2人、渡日委が招く、手帳交付を申請		HT0501000
19880713	読売広	5段	被爆2世が訪韓団		HT0501000
19880714	読売広	4段写真	近く帰国の航空券入った「バック返して」、途方に暮れる被爆韓国人		HT0501000
19880730	読売広	1段	韓国人慰霊碑平和公園内に、民団地本、広島市に要望		HT0501000
19880806	読売広	2段写真	悲しみ新た、祖国統一…、韓国人原爆犠牲者慰霊祭		HT0501000
19880811	読売広	4段写真	韓国から被爆調査団、「渡日治療者の話聞きたい」		HT0501000
19880812	読売広	5段写真	韓国に被爆者病院、朴団長「日本の援助がほしい」		HT0501000
19880903	読売	8段写真	慶尚南道同行ルポ、埋もれた被爆者、救援市民の会、韓国で実態調査、「何もできない」両手親指失った諸さん、推定2万人つかめぬ実数、病苦と貧困悩み深く、援助より補償を、届かぬ重症患者の声	特集記事	HT0501000

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19880906	読売広	6段写真	埋もれていた被爆者①韓国調査に同行して、田畑手 放し治療費	執筆：中村一郎記者	HT0501000
19880907	読売広	5段写真	埋もれていた被爆者②韓国調査に同行して、どんど ん死んで・・・		HT0501000
19880908	読売広	5段写真	埋もれていた被爆者③韓国調査に同行して、田畑だ けでも補償		HT0501000
19880909	読売広	5段写真	埋もれていた被爆者④韓国調査に同行して、調査も なかった		HT0501000
19880910	読売広	6段写真	埋もれていた被爆者⑤韓国調査に同行して、日本人 花嫁もいた		HT0501000
19880911	読売広	5段写真	埋もれていた被爆者⑥韓国調査に同行して、「反核」 へ日韓協力		HT0501000
19880916	読売広	6段写真	在韓被爆者を救援しよう、チャリティーコンサート、 来月14日広島女学院、日山かおるさんら「祈り」な ど7曲		HT0501000
19881018	読売広	3段写真	「被爆の証人捜して」、韓国から呉福善さん		HT0501000
19881023	読売広	4段	土肥氏ら6人24日に訪韓、核禁会議が医師団を派遣		HT0501000
19881104	読売広	6段写真	「在韓被爆者問題を考える」出版、医師の訴えや生活 援護などの課題も		HT0501000
19890228	読売広	1段	公園内移転を広島市へ要望、韓国人犠牲者慰霊碑		HT0501100
19890426	読売広	4段	在韓被爆者と初交流に意欲		HT0501100
19890508	読売広	7段写真	心痛む韓国人被爆者の叫び、薬も飲めず病院にも行 けず・・・、援助のないまま高齢化進む、「ヒロシマを 語る会」が交流報告		HT0501100
19890527	読売広	5段写真	朝鮮人被爆者の証言撮影、反戦反差別を訴え、ビデ オで初めて「みじめな日はイヤ」		HT0501100
19890619	読売社	4段	在韓被爆者、渡日治療を再開、3年ぶり今年度は100 人		HT0501100
19890622	読売広	6段写真	在韓被爆者の渡日治療再開方針、「国の補償が先決」、 県内支援団体が訴え		HT0501100
19890806	読売広	8段写真	被爆2世も初参列、韓国人原爆犠牲者慰霊祭、合唱 でめい福祈る、韓国人らの被爆資料集出版、慰霊碑 建立経緯など収録		HT0501100
19890810	読売	6段	在韓被爆者に無料治療宣言、韓国被害者協会	執筆：平野特派員（ソ ウル）	HT0501100
19890916	読売広	6段写真	在韓被爆者は今①、高齢化深刻時間がない、日韓両 政府をマスコミ追及	特集記事、執筆：中村 一郎記者	HT0501100
19890917	読売広	4段写真	在韓被爆者は今②、被害者協会の辛会長に聞く、み じめな境遇、世界に証言	特集記事	HT0501100
19890926	読売2	4段	日韓外相会談始まる、韓国人被爆者賠償が焦点？		HT0501100
19891002	読売広	2段	被爆者治療にきょう6氏訪韓		HT0501100
19891208	読売朝2	2段	【ニューススポット】日韓協力委ソウル会議		HT0501100
19900311	読売	5段	【ホッとたいむ】在韓被爆者問題書き続けるしか・・・	コラム、執筆：中村一 郎記者	HT0501200
19900406	読売広	2段写真	韓国人犠牲者碑移して、熊野中生徒「平和公園に」		HT0501200
19900413	読売広	3段	広島長崎で犠牲者慰霊の旅、韓国の被爆者団体きよ う来日		HT0501200
19900415	読売社	2段	「在韓被爆者に政府は謝罪を」、慰霊団が要望		HT0501200
19900418	読売広	4段	「日本人と同じ扱いを」、韓国被爆者一行14人補償、 援護訴え離広		HT0501200
19900421	読売広	4段写真	「南北統一し平和公園内に」、原爆慰霊碑問題で在日 朝鮮人連絡協		HT0501200
19900428	読売広	1段	韓国総領事が移設申し入れ、原爆犠牲者慰霊碑		HT0501200
19900519	読売社	4段写真	韓国人原爆碑移設へ、「人道的見地」平和公園に、広 島市意向		HT0501200
19900519	読売広	8段写真	韓国人原爆犠牲者慰霊碑移設、実った悲願さらに市 の対応は・・・、総連`統一碑、建立を主張		HT0501200
19900520	読売社	2段	在韓被爆者補償、韓国協会の会長記者会見で訴え		HT0501200

年月日	社名・掲載面	扱い	見出し	備考	目録番号
19900523	読売広	5段	26日に報告集会、被爆者交流の訪韓実行委		HT0501200
19900524	読売広	8段写真	放火されても折りヅルは絶えず、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、修学旅行生が次々供養、「ひどい」「許せません」		HT0501200
19900526	読売広	6段	在韓被爆者の救済へ第一歩、40億円抛出、徐（被害者協）副会長一応の評価		HT0501200
19900527	読売広	5段写真	在韓被爆者の苦しみ切々と、訪韓団が交流報告集会、スライドなど使い		HT0501200
19900527	読売広	4段写真	盧大統領の好意喜ぶ、特使来広で民団県本部	慰霊碑に献花	HT0501200
19900530	読売広	8段写真	【取材現場から】碑文の修正か統一碑新設か、移転決まった「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」、南北情勢からんで曲折?、「人道的立場」で広島市の役割に期待	特集記事、執筆：坂上晃一記者（広島支局）	HT0501200
19900612	読売社	3段	在韓被爆者自殺図る、ソウルの日本大使館前、ピラマキ農薬飲む		HT0501200
19900619	読売広	2段	碑文など修正統一して移設、韓国・朝鮮人慰霊碑		HT0501200
19900623	読売広	4段	三菱重工に質問状、韓国人被爆者の沈没遺族会		HT0501200
19900628	読売広	1段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、移設問題で質問状		HT0501200
19900630	読売広	2段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、「現状のまま移設を」、4団体が要望書		HT0501200
19900710	読売広	5段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑、「8月移設は難しい」		HT0501200
19900711	読売広	5段写真	「碑移設現状のままで」、広島市に陳情、建立当時の張委員長		HT0501200
19900716	読売広	6段写真	新しい碑文に批判相次ぐ、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、「徴用事実消される」、シンポ		HT0501200
19900725	読売広	3段	慰霊碑の現状、移設など要求、平和公園のシンポ		HT0501200
19900731	読売社	2段	「在韓被爆者義務として補償すべき」、本島長崎市長		HT0501200
19900731	読売社	5段写真	広島の韓国人原爆慰霊碑、8・6式典までの移設ムリ、「碑文書き換え」反発多く		HT0501200
19900805	読売社	3段	外国人被爆者に謝罪、長崎市長9日の宣言で		HT0501200
19900805	読売社	2段	三菱重工に補償など要求、広島で徴用被爆韓国人遺族		HT0501200
19900805	読売広	6段写真	韓国人慰霊碑移設一から見直し、きょう例年通り慰霊祭、市の代表出席せず		HT0501200
19900823	読売広	4段写真	「原爆と差別」一冊に、修学旅行生の感想文出版、李実根さん		HT0501200
19900831	読売広	7段写真	在韓被爆者は語る、証言集「海峡を越えて」		HT0501200
19900916	読売広	2段	韓国人原爆犠牲者慰霊碑移設考える、岡牧師が講演		HT0501200
19901008	読売広	3段写真	在韓被爆者3人が来広、手帳の交付申請		HT0501200
19901009	読売広	3段写真	「一生忘れません・・・」、在韓被爆者治療終え、李さんが帰国		HT0501200
19901014	読売広	6段写真	在韓被爆者から惨状聞く、平和学習の熊野中1年193人、記念館で交流		HT0501200
19901017	読売広	5段写真	5人に念願の手帳、在韓被爆女性涙止まらず		HT0501200
19901018	読売広	6段写真	再会そして惜別、在韓被爆女性が帰国		HT0501200
19901018	読売広	3段	市の責任を問う、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、市民グループ		HT0501200
19901102	読売広	4段写真	慰霊碑に韓国人参拝、強制徴用で賠償訴訟の遺族ら、碑放置を厳しく批判		HT0501200
19901112	読売広	7段写真	「朝鮮人徴用工の手記」翻訳出版、鄭さん著／広島の下井さん245ページに、被爆の惨状、帰国の苦勞、複雑な心境つづる		HT0501200

本報告書は、財団法人三菱財団人文科学研究助成により作成した。

被爆地広島の復興過程における新聞人と報道に関する調査研究

平成 21 年 3 月 31 日印刷

平成 21 年 3 月 31 日発行

編集人 広島大学文書館

発行人 〒 739 - 8524

東広島市鏡山 1 - 1 - 1

広島大学文書館

印刷所 中本総合印刷株式会社

広島市南区大州 5 - 1 - 1

